



334

206



始



2646

354-25

勤實

王記



水

戶

烈

士

傳

傳



有天



正地



氣

明治癸卯夏日

公爵三條公美題



弁言

德川幕府之季、內憂外患並逼、而其禍害於國家、有實不可測者焉。於是乎、水戶藩志士、慷慨以首唱尊攘之大義、鼓舞天下之志氣、與列藩人士、東西呼應、將大有所爲也。幕府甚忌憚之、抑遏擠排、不一而足。志士公憤莫敢止、欲遂其志、夙業未半、崎嶇間關、或投囹圄、或就刑戮、或潛匿殞身者、比比皆然。然而其風節凜然、言行卓犖、不啻聳動一世、遺風餘烈之所及、能令世人有所觀感興起、竟啓明治維新之盛運。其功績不亦偉乎。而星霜遷移、事蹟殆將湮滅、間有稗史野乘錄之者、惜哉多鹵莽杜撰、不可悉信。是以人或不詳殉難之本旨、輒懷疑訝、牽強附會、以議其行爲者、亦不爲鮮矣。吾流芳會有所憂于茲、乃就舊記秘錄、蒐搜遺聞逸說、洪纖罔遺、

且檢討查覈、正誤闕疑、務期得真相、以採其本末終始、鑿々足徵者、命曰勤王實記水戸烈士傳、嗚呼斯書不啻闡幽顯微之意、亦使後人知忠孝節義之可重、與所以維新中興之不偶然、其於維持名教、不爲無小補也、大正改元八月本會付之剞劂、因弁其由于卷首、

編者識

凡例

- 一本編ハ明治維新前水戸藩人ノ王事ニ勤勞シ國家ニ報効シテ其勳績最モ顯ハレ靖國神社ニ合祀セラレ且贈位ノ恩典ニ浴シ芳ヲ千載ニ流セル諸士ノ事蹟ヲ編輯シタルモノニシテ之ヲ勤王實記水戸烈士傳ト名ク諸士カ性命ヲ犠牲ニ供シ奮迅シタル志業ハ咸修攘ノ勅旨ニ遵ヒ内憂ヲ排除シ外患を防遏シ國權ヲ伸暢スル精忠ニ出テタルモノナルニ由リ本編ノ緒言中ニ勅文叅旨朝命ヲ記シ以テ其精神ノ基ク所ヲ明カニセリ
- 一諸士ノ傳多ク死事錄及諸家ノ記錄ニ依準スルモノ之ヲ精査シ其誤謬ニ係ルモノハ訂正シ疑團ニ屬スルモノハ闕如セリ而シテ各種ノ文書故老ノ說話モ亦確實ナルモノハ之ヲ引用敷衍セリ
- 一諸士ノ名ハ實名ヲ舉グ實名不明ナルモノハ通稱ヲ録ス
- 一各傳中他ノ人名ニ係ルモノハ氏及實名又ハ氏及通稱ヲ記シ實

名ノ下ニ通稱通稱ノ下ニ實名ヲ附記シ括弧ヲ加ヘ之ヲ明カニ
スルモ其一方ノ不明ナルモノハ他ノ一方ニ從ヒ附記括弧ヲ用
キズ而シテ他ノ人名ノ再記以上ニ係ル時ハ氏ノミ書スルヲ以
テ例トシ再三再四氏及實名又ハ通稱ヲ掲記スル繁ヲ避ク加之
各傳中某卿某侯ト書シ或ハ官氏名若クハ氏官ヲ書シ或ハ諡號
雅號ヲ書スルモノアリ多クハ引用書ノ原文ニ由ルヲ以テ一定
セス

一本編ハ上下二編ニ分チ其上編ハ安政ノ事變櫻田又ハ坂下ノ舉
ニ關シ身ヲ致セル安島信立金子教孝高橋愛諸高島胤正等三十
二名ノ傳ヲ掲載シ下編ハ元治ノ事變ニ處シ身ヲ敦賀ニ殞セル
武田正生田丸直允藤田信大久保信弘等四十四名ノ傳ヲ登載セ
リ其遺漏ニ屬スルモノハ他日續編ヲ作り以テ更ニ補輯セント
ス

一本編ニ記載セル諸士ノ上書尺牘文章詩歌等或ハ會得シ易カラ
ザルモノアルモ原文ニ從ヒ敢テ修飾ヲ加ヘズ
一本會ハ酒泉直川瀨教文田丸稅稔武田猛高橋諸隨金子訥諸氏ノ
首唱ニ成立シ此ノ上下二編ヲ編輯セルモノニシテ川瀨氏立案
起稿シ高橋氏校正補輯シ會員皆力ヲ協ハセ功ヲ竣フニ至レル
ナリ

流 芳 會

本編ノ引用書目及說話左ノ如シ

- | | | | |
|---------|---------|----------|---------------|
| 一孝明天皇記 | 一死事錄 | 一鶴飼氏書類 | 一勝野氏書類 |
| 一源流總貫 | 一國難日記 | 一櫻氏書類 | 一櫻田十八士自首狀并懷中書 |
| 一國難日札 | 一國難日札附錄 | 一大久保日記 | 一海後宗親筆記 |
| 一寒綠遺篋 | 一昨夢記事 | 一永田重三筆記 | 一佐藤寬筆記 |
| 一唱義見聞錄 | 一近衛家書類 | 一黑澤覺藏覺書 | 一赤直喜葉原記 |
| 一尙忠公記 | 一岩倉公實記 | 一坂下七士懷中書 | 一安政記事 |
| 一島津家書類 | 一池田家書類 | 一常野戰爭法略 | 一筑波戰爭記 |
| 一藤原東湖 | 一心の跡 | 一浮浪追討記 | 一藤井家記錄 |
| 一橋本左内全集 | 一安島氏書類 | 一富小路任節筆記 | 一明治前記 |
| 一武田氏書類 | 一金子氏書類 | 一青水遺篋 | 一坂場釣叟手記 |
| 一高橋氏書類 | 一遠近橋 | 一義舉錄 | 一京師見聞書 |
| 一籌海論 | 一關氏書類 | 一櫻田騷動記 | 一尊攘私記 |
| 一櫻田始末 | 一丁雜錄 | 一戊辰始末 | 一史料年錄 |
| 一遣問集 | 一回願錄 | 一水戸藩末史料 | 一述堂叢書抄 |

- 一 水戸野史
- 一 水戸見聞實記
- 一 筑波山始末
- 一 筑波勢檄文
- 一 筑波勢建議
- 一 西郷隆盛手記
- 一 渡井量藏手記
- 一 實歷史傳
- 一 大橋清逸事狀
- 一 幕末見聞錄
- 一 靖乱記
- 一 松原神社碑文
- 一 殉難錄稿
- 一 開國始末
- 一 開國五十年史
- 一 國光
- 一 やまと新聞
- 一 東京日々新聞
- 一 國民新聞
- 一 高崎五六野村昇實關遠原忠愛海後宗親増子誠佐藤寬齋藤俊薄井龍之長谷川清關恕板橋常裕福島住一外故老說話

勤王實記 水戸烈士傳

上編 目次

- 卷一 緒言
- 卷二 安島信立傳
- 卷三 茅野泰傳
- 卷四 鶴飼知信傳 鶴飼知明傳
- 卷五 櫻真金傳 齋藤叢傳 勝野正道傳
- 卷六 金子教孝傳
- 卷七 高橋愛諸傳 高橋諸德傳

川崎健幹傳 山崎恭禮傳

卷八 關遠傳 齋藤一德傳

- 卷九 稻田正辰傳 佐野光明傳 黑澤勝算傳 大關増美傳 廣岡政則傳 山口正傳 森岡直長傳 岡部忠吉傳 鯉淵珍陳傳 杉山當人傳 蓮田正實傳 森山政德傳 廣木有良傳
- 卷十 平山繁義傳 小田朝儀傳 川邊元善傳 黑澤保高傳 高島胤正傳

勤王實記 水戸烈士傳上編 卷一

流芳會編纂

緒言

弘化嘉永の際より外舶渡來通商貿易を要請する頻繁なり幕府治に居て亂を忘れ敢て遠大の策を講せず苟安姑息に流れ怯懦因循に陥り國際の法理に準據して之を措置する能はず漫然其要求に應せんとするの傾向あり孝明天皇深く國體を虧損せん事を軫念し屢國權伸張外侮防遏の勅旨を傳ふ幕府依違して之を遵奉せず安政五年戊午正月儒者又は老中を上京せしめ諸摺紳を利誘し開港通商の勅許を乞ふ朝議斷乎として之を許さず四月幕府勅諭にして權力ある井伊掃部頭直弼を擧げて大老職に任じ時局に當らしむ是の時外人の要求日に月に迫り其威嚇も亦甚し直弼畏怖して國體を顧みず外侮を察せず對等の權能を論するなく六月十九日獨擅に彼我利害を異にする屈辱的條約を

訂結して些も深謀遠慮のあるあらず物議洵々海内の人士之を憤慨せざるはなし二十四日松平越前守慶永直弼の邸に赴き勅旨に背き條約を結びたる事を難詰し併せて豫て内勅ある大將軍繼嗣の事に論及す斯の日一橋刑部卿慶喜柳營に詣り直弼を責むるに條約訂結の違勅なる事を以てす直弼唯恐入ると云ふのみ己の下刻(午前十一時)尾張中納言慶恕水戸前中納言齊昭水戸中納言慶篤共に營に登り將に大將軍家正に面し條約訂結の甚だ勅旨に反れる意見を陳せんとす權臣之を懼れ大將軍病ありと稱し之を拒む因て直弼に會せんとす避けて出でず屢之を促し申牌(午後四時)に至り直弼及老中間部下總守詮勝等謁見す慶恕齊昭等痛く其違勅の行爲を責む直弼曰く閣老京都に上りて分疏陳謝せんと慶恕特に大將軍の繼嗣に賢且長の

一橋を擧ぐべき事を告ぐその翌日直弼紀伊宰相慶福を迎へて大將軍の嗣となし名を家茂と改む尋て條約訂結の事を朝廷に奏す皇上其勅允を経ざるを以て赫怒し之を責め且三家大老の一人を召す斯の勅命柳營に達せるは七月四日なり是の時大將軍家定薨す直弼喪を秘し獨政事を專行し誣ひて曰く齊昭既に一橋をして宗家を襲がしめんと欲し慶恕慶永に謀り急登城をなせるなり其罪輕からずと之を羅織し六日拂曉幕使を發し慶恕齊昭慶永等を幽禁し慶篤慶喜の登營を停め一として勅を奉するなし八月八日皇上特に修攘の勅詔を幕府及水戸慶篤に賜ふ其勅文共に同じ先般墨夷假條約無餘儀次第にて於神奈川調印使節へ被相渡候儀又委細間部下總守上京可被及言上趣に候得共先達勅答諸大名衆議被聞食度被仰出候證も無之誠に皇國重大の儀調印の後言上大樹公叡慮御伺の御趣意不立勅答の御次第に相背き輕卒の取計ひ大樹公賢明の處有司心得如何と御不審に被思召右様の次第にては蠻夷の儀姑く指置方

今御國內の治亂如何と大に被惱叡慮候何卒公武御實情を被盡御合體永久安全の様にと偏に被思召候三家或は大老上京被仰出候處水戸尾張兩家慎中の趣被聞食猶又其餘宗室の向にも同様御沙汰の由被聞食及候右は何等の罪狀に候哉難計候得共柳營羽翼の面々當今外夷追々入津不容易時節既に人心の歸向にも可相拘傍被惱宸襟候兼て三家以下諸大名衆議被聞食度被仰出候は全く永世安全公武の御合體にて被爲安叡慮候様被思食候儀外思計りの事には無之内憂有之候ては殊更被惱宸襟候彼是國家の大事に候間大老閣老其他三家三卿家門列藩外様譜代共一同群議評定有之誠忠の心を以て得と相正し國內治平公武御合體彌長久の様徳川家扶助有之内を整へ外夷の侮を不受理にと被思食候早々可致商議勅詔候事
午八月八日
近衛左大臣 忠熙
鷹司右大臣 輔熙
一條内大臣 忠喬

三條前内大臣實萬
二條大納言 齊政
近衛大納言 忠房

御趣意被相心得候様向々へ傳達可有之被仰出候以上
是に於て慶篤勅旨を遵奉し直ちに之を列藩に廻達せんとす直弼既に家定の喪を發し更に幼主家茂を擁して政務を司り肯て反省する所あらざるのみならず百方策を設けて其廻達を阻遏す水戸の士民慷慨悲憤南上して勅詔廻達主冤洗雪を謀るもの數千人列藩の人士有志の處士も亦勅旨を發揮せんとして京都に集り衷心を堂上に表し斡旋するもの多く摺紳侯伯の力を竭すもの尠なからず直弼甚だ之を嫉み誣ゆるに幕府の不利を圖るを以てし事を捏造して人に嫁し摺紳侯伯士庶を讒害するのみならず條約も大老の知らざる間に老中以下之を訂結したる如く奏上し其責任を遣れ傲然として政刑の權を己の掌上に把握し以て内外の事を專行し世人をして幕府あるを知り朝廷あるを知らざらしめ西は詮勝を京師に遣り東は躬自ら僚屬を指嗾し勅意を奉行し外寇を防遏せんとするものは諸大夫藩士處士の別なく囚へて獄に繋ぎ幕吏も亦己

別紙御沙汰之趣尋常の御事に候得ば御斟酌の御次第も被爲在候得共何分蠻夷の事件にて於關東も大改革の御時節に候得ば萬一此上公武御隔心箇間敷儀有之ても甚以被惱叡慮候間格別の儀を以て無御隔意被仰進候間此段不惡御聞取に相成候様被遊度御沙汰之事
今度被仰進候趣三家始相心得候様別段水戸中納言へ被仰下候此段爲御心得申入候事
八月八日
特に慶篤に命したる別勅左の如し
別紙勅詔の趣被仰進候右は國家の大事は勿論徳川家を御扶助の思召に候間會議有之御安全の様可有勘考旨出格の思召を以て被仰出候間猶同列の方々並三卿家門の衆以上隠居に至る迄列藩一同にも

諸大夫藩士處士の別なく囚へて獄に繋ぎ幕吏も亦己

の意見に同うせざるものは皆之を貶黜し又諸侯伯を幽閉し三公諸藩紳をして落飾辭官に至らしめ累を親王に迫し其最なるものは嘗て皇上の英邁勇武を畏ると同時に又之を嫌忌し國學者をして承久の故事を調査せしめ時機を見皇位を動かさんと此の密計を企て、憚らず而して外人の要求するものは一も抗し得ずして彼の跳梁を制する能はず其因捕せる志士は之を嚴刑峻罰に處し加之參政安藤對馬守信睦を願使して傳奏の一人官大納言に過ぎざる廣橋光成の一書牘を慶篤に示し之を朝命と言傲し曩に賜ふ所の勅詔を幕府に返納すべき旨府命を下し威嚇脅迫之を己に收奪し天下の正義を勦絶せんことを謀る是等の所爲は外列強を怖れ卑屈に事を處するに由り内之を非議するもの、壓抑に全力を注ぎ其專横悻悻極りあるなく竟に國家を辱しめ人道に乖離し國體を汚損する甚しく大義名分殆ど地に墜つるに至り實に規矩準繩を以て律すべからざるなり苟くも君國に忠愛なるものは斯の大患一日も黙過し己む能はざるの秋にして縦合性

命を犠牲に供するも矯激に涉ることあるも義之か慮正を講せざるを得ず水戸鹿兒島の志士密かに相議して曰く井伊大老は大愆此の如し大愆を江戸に殫し義旗を畿甸に翻し以て大義を唱へ名分を明かにし勅旨を發揚せんと其畫策を定め萬延元年庚申の三月之を決行して櫻田の擧となり是と同時に東西の兵士を大坂に集合し大義を唱導し以て怯懦卑屈外人に俯伏する迷夢を警醒し尊攘の實効を奏し天下を一匡せんとを期したるに此の主たる目的の一事は障礙を來たし遂行に至らず而して直弼の死後幕府顧る所あり復勅詔返納の事を聲言せざるも老中に進みたる信睦勅詔を度外視し直弼再生の如く威柄を遠邇に振ひ正義を鉗制し日に月に内憂を醸し外侮を受け國體を汚損すると枚擧に遑あらず志士又櫻田の遺蹟を履み文久二年壬戌の正月之を執行して坂下の擧となれり此の數年の間心志を一にし時と處を異にし難に殉したるもの尠ならずとす如上記載の次第は安島信立高島胤正等三十二名が尊攘の實行を謀り唱義勤王以て國事

に盡瘁したる概要にして其精神は外に猫柔内に虎威を以てする大害を排擠し天裁に由りて皇國遠大の計畫を樹立し内外重要な事を處理するは一に天朝の大權に依らんことを庶幾するに在り爲に一般人士の忠肝義膽を誘致興起したるもの甚だ偉なり壬戌の三月皇上侍臣をして國事軫念の要旨を筆記せしめられたる一節に「水府浪士井伊掃部頭を刺すことあり其所爲亂暴に似たりと雖其所懷中の狀書を見て其意を察すれば深く外夷の跋扈を憤怒し幕府の失職を死を以て諫るに在り」又一節に「安藤對馬守浪士の爲に刺さる是等皆掃部頭を刺せしと同意の者にして如是輩は死を見る歸するが如く實に勇豪の士なり」と宣はせ給ふ誰か悚然感涙に堪へんや諸士其難に殉したる後に至り幕政も亦稍釐正する所あり慶喜慶永も廟議に參畫し大將軍家茂始て旨を慶篤に傳へ修攘の勅詔を列藩に廻達せしめ三年癸亥の春大將軍躬ら諸侯伯を率ゐて朝覲し親しく鎔港の叡旨を奉ず因て朝となく野となく内憂外患を慮り惴々彼に屈從するの失態

を漸次に挽回し外侮の防遏國權の伸張に身を致し皇威炳として維揚るものは畿甸に義旗を擧げたと同然諸士の精神天下に貫徹したるものにて王政一新も亦此に胚胎したるものと云ふべきなり明治の昭代に至り諸士の動績顯然として著はれ皆靖國神社に合祀せられ位階追贈の榮典を蒙れり爰に諸士の傳を作るるものは特に之を左に附記し以て諸士が國事に處したる當時の事歴を昭亮にす

附録

死事録の序文に曰く

嘉永六年癸丑六月米國其上官を遣し兵艦數隻を帥ひ浦賀に至り通信貿易を要請す勢頗る強梁昇平已に久しく邊備廢弛するを以て幕府狼狽殆んと措く所を知らず是より先に藩主權中納言齊昭深く皇威漸く衰へ外患方に萌すを慨し乃ち尊王攘夷の義を明かにし幕府を輔翼し以て武衛を奮はんと欲す而して其邊備に於ける夙に長策を講じ屢建言する所

あり幕府稍之を嫌忌し遂に命じて國を世子慶篤に傳へしめ退て江戸の別邸に居る是に至り老中阿部正弘(伊勢守)來て措置の事宜を問ふ齊昭十條五事を舉げ以て之に答ふ幕府之を用ゐる能はずと雖も而も其親藩且老成重望あるを以て頗るこれに依頼す七月命じて防海機務を參決せしむ齊昭以爲らく武備を整へ邊防を嚴にし以て外夷の覬覦を絶は國是を定め人心を一にするに在りと因て其策を陳す幕議違依決せず齊昭心自安せず屢情を陳し罷んと請ふ許さず

安政元年甲寅三月有司遂に米人と横濱に會議し長崎下田箱館三港を開くを許す齊昭因て固く任を解かんと請ふ四月幕府諭すに事あれば即ち當に府に詣るべきを以て是に於て邊禁大に弛む已にして魯佛諸國亦相踵き來て通信を乞ふ七月幕府齊昭に命じ軍制改革の事を掌らしむ

二年乙卯八月又命じて軍政を聽かしむ齊昭乃ち洋制を參酌し以て適要の法を定んと請ふ其規畫する

所頗る重大幕府從ふ能はず

四年丁巳七月二十三日命じて其職を罷む二十四日遂に米人に許し城に登り將軍に謁せしむ二十五日齊昭慶篤と使を老中に遣し米人を措置するの事を論す後屢書を與へ馭戎の事宜を議す皆答へず十二月有司又洋人と會し假に條約を結び更に江戸大坂等凡そ七港を開く時朝廷深く外患を慮り神祇に祈誓し將に斷然之を勦絶せんとす而して幕議毎に之と背戾す是に於て天下議論紛然大に起る二十九日勘定奉行川路聖謨(左衛門尉)永井尙忠(玄蕃頭)幕府の命を以て來り外國通商を許すの事を告ぐ齊昭答へず是其朝命を聽かず恣に之を許すを以てなり五年戊午正月老中堀田正睦(備中守)京師に入り公卿に開説するに開港の便宜を以てし漸く天闕に迫り以て勅許を得るを謀る朝廷聽さず三月正睦に勅して更に三藩以下諸侯の意見を奏上せしむ幕府乃ち朝旨を列藩に傳ふ齊昭謂く馭戎事宜前已に建言する所あり今復陳するを煩さず請ふ宜しく先づ京

坂江戸の警備を嚴にし以て宸憂を紓ふすべしと有司其論建する所幕議と異なるを以て諭して論旨を改めしむ齊昭謂ふ今日の事天下の爲なり廟議亦豈此に外ならんや苟も天下の爲ならば請ふ其旨を承け之を論せんと竟に報あらず時天下議論益喧騰し攘夷を主とする者皆朝廷に倚り頼て以て幕議を沮めんとす四月井伊直弼(掃部頭)を以て大老とす六月將軍家定病篤し子なし其嗣を議す或は謂ふ紀伊藩主慶福を迎へんと或は謂は一橋慶喜を立んと紛議決せず因て之を朝に奏す慶喜は齊昭の子年長し且時望あり故に議者多く之を推す齊昭聞て之を憂へ書を草し極めて其不可を論し以て答案に擬す十九日勅して其族人賢且長する者を擇て嗣となさしむ時諸夷累りに條約調印を要請す幕府勢に迫り將に之を許さんとす齊昭之を憂へ二十一日書を大老老中に與へて曰く天裁を仰かす恣に盟約を許す祖宗以來朝廷を尊崇する所以の義に非ず萬一宸怒に觸る即ち違勅の罪追る所なし果して然らば則ち何

を以て紀綱を維持し天下を鎮制せん是實に安危存亡の判する所請ふ速に事由を奏し勅裁を聽き後に之を處分せられんことを又曰く假使已を得ず盟約を許すも外人の近畿に出入し及びミニストルを置邪蘇教院を建る並皆之を禁せんと事行はれず幕府遂に諸夷と盟約し二十二日之を天下に播告す二十四日早朝尾張藩主慶恕來り謂て曰く時事此に至る是權臣政を専らにし吾が宗家をして不忠不義に陥らしむるなり身親藩に列す豈獸を坐視すべけんやと齊昭曰く余固より之を言ふも益なきを知る然れども天下の爲に一たび將軍に見え面り意見を陳じ以て吾分を盡さんのみと之を慶恕慶篤と俱に府に詣る會松平慶永一橋慶喜亦至る乃ち大老老中を召し將に言ふ所あらんとす之を遅つ良久し老中間部詮勝(下總守)出で曰く大老職務至劇趨謁する能はず某請ふ命を聞くを得んと慶恕等責むるに天裁を仰がす恣に外國と盟約するを以てす詮勝唯々辨する所なし因て托して將軍に見ゆるを求む慶恕慶永更

に鈴勝を別室に招き嗣子を定むるを議す曰く今天下の人望皆一橋に歸す朝意亦此に在宜しく速に之を立て以て人心を收攬すべしと詮勝曰く請ふ大老と之を議せんと乃ち退く日且暮る大目附出で曰く將軍病り諸公を見る能はず且告て曰く大老老中皆已に罷ると大事已に去る皆憤志して出づ時殿中既に燭を點す六月二十五日直弼遂に慶福を迎へ立て世子とす名を家茂と更む是より前五月二十七日幕府各國と盟約を結ぶを奏す皇上大に震怒し直に勅し三藩大老を召す七月四日命江戸に至る是日家定薨す秘して喪を發せず初め幕府直弼を擧て大老とし其勳藩權力に藉り以て天下を壓制せんとす直弼既に威權を専らにし恣に外國と盟約し復た朝旨を取らず且其已に異なる者を嫉み以爲齊昭言用ゐられざるを以て竊に怨望を懷き一橋をして宗家を嗣しめんと謀り陰に慶恕等を促し幕府に迫り又搢紳を煽動し朝旨を激揚し以て幕府に利あらざるを謀る其罪大なりと五日命を矯け齊昭慶恕及び慶永慶

喜等を幽禁す是月皇上齋戒膳を御せざる七日天神地祇を拜し以て外患を弭むるを祈る八日幕府奏して曰く嚮に勅して三藩及び大老を召す然れども齊昭等皆罪あるを以て前已に禁錮す故に朝命を傳ふるを得ず大老亦内外事務鞅掌を以て輒ち發する能はず因て問部詮勝をして代て朝に造らしむ請ふ宜しく之に諮詢すべしと二十八日幕府目附野々山兼寛(鉦藏)及び尾張國老竹腰正富(兵部少輔)紀伊國老水野忠央(土佐守)等に命じ日々本藩邸に出入し其動靜を視察せしむ又支藩松平頼胤等をして藩政に與らしむ直弼齊昭を忌む尤も甚しく八月朔將に兵士を遣し齊昭を擁して之を他藩邸に徙さんとす事漏聞す舉邸憤激死を決して之を待つ直弼其或は禍變を激せんことを懼れ議竟に止む八月朝廷勅を幕府に下し外夷を拒絶せしめ又別勅を慶篤に賜ひ諸藩と協議共に幕府を輔翼せしむ初め齊昭を幽せらるゝや一藩悲憤皆死を誓ひ冤を雪かんと欲す勅書の下るに及び皆奮て謂ふ時至れり以て志を天下

に信ふべしと争て慶篤に勧め速に勅旨を遵奉せしむ直弼大に之を忌惡し百方阻抑朝旨を廢格せんとす是に於て國中騷然相議して以爲らく幕府朝意に違反し舊典を破壊し暴戻已に極る此時に方り朝廷の頼る所修攘の責獨吾藩にあり若し君冤を洗雪し朝旨を奉戴せず則ち臣子の義安くにか在と九月士民等群起して江戸に赴き及び小金八幡等の驛に集る者一千餘人皆死を誓ひ雪冤奉勅の義を論ず或は自殺して以て衆を勵ます者あるに至る幕府益之を惡む齊昭父子之を憂へ懇に士民に諭し國に歸り命を待たしむ是月幕府問部詮勝を京師に遣し朝廷を却迫し搢紳を鉗制し當時輦轂の下に在て攘夷を主とする者前後皆之を索捕し遂に我京邸留守居鶴飼知信父子を收へ江戸に檻送し竟に大獄を起す十二月朔家茂大將軍となる六年己未四月幕府我執政安島信立及茅根泰を召し之を囚ふ士民之を聞き禍の齊昭に及ぶを憂へ走て藩邸に至る者前後相踵く八月廿七日老中命を傳へ齊昭を水戸城に幽す有司亦

多く罪を得禁錮せらるる是に於て士民愛憎志の達せざるを憤り皆齊昭に従て國に歸る是の日幕府信立等を誣るに朝廷を煽惑し幕府を危ふするを謀るを以てし知信父子を併せ皆之を殺す十二月幕府參政安藤信睦(對馬守)を藩邸に遣し命を傳へ勅書を還納せしむ是より先に幕府勅書の本藩に在を嫌忌し將に追奪せんと謀る所司代酒井忠義(若狹守)をして傳奏廣橋大納言光成に迫り命を請はしむ光成因て書を忠義に付す信睦之を示す偽て朝旨と稱し速に勅書を幕府に納れしむ事水戸に達す正義の士皆憤激して謂ふ聖上深く天下を憂へ特に別勅を本藩に下す是實に天下安危の係る所本藩譬ひ其責を竭す能はざるも豈故なくして之を奉還すべけんや萬一朝廷其命を忽かせにするを怒り而て之を追收せは宜しく詳らかに事情を陳し其罪を謝し謹て之を闕下に納るべしと有司乃ち其情を具陳し少しく期を延べんと請ふ信睦聽かず督責益嚴なり且謂ふ朝命を輕忽にす恐らくは主公を累はさんと有司辭窮

し乃ち更に議して曰く幕命嚴急拒くべからず若し
一に名義を執り之に抵抗せば必ず國家の禍を重ね
ん是洵に人臣の爲すに忍びざる所今姑く恭順命に
従ひ而て後に時宜を計り機會を察し異日勅旨のあ
る所を奉體せば亦以て罪を免るべしと衆議多く之
に従ふ前執政大場景淑等固く前議を執り謂ふ返勅
の命其矯誣に出るや必せり今理義を辨せず幕命に
脅迫せられ之を奉還せば尊王の道を誤り佐幕の義
を失ひ姑息淪胥して何ぞ後圖をなすに違あらんと
議論遂に大に分る少壯銳氣の士黨を樹て相争ふに
至る有司遂に返勅の義を主とす時勅書藏して水戸
祖廟に在將に之を江戸に致さんとす少壯の輩之を
聞き出て城南長岡驛に屯し勅書を途に奪ひ以て事
を擧げんと謀る國中騷然たり是より先に金子教孝
高橋愛諸奉勅の議を主張するを以て罪を得家に屏
居す夙に幕吏の專横を見て蓄憤已に久し直弼大獄
を起すに及び天下の志士皆之を憤怒するを察し乃
ち密に鹿兒島藩士岩下方平(佐次衛門)等と謀を通

じ井伊氏を殪し機に乗じ以て義を近畿に倡へんと
す返勅の命出るに及び乃ち急に策を決し將に期を
定め事を舉んとす時衆長岡に集る者數百人齊昭之
を憂へ有志に命じ之を鎮撫す衆敢て命を奉せず
萬延元年庚申二月藩遂に兵を出し之を驅逐す衆皆
之を避け或は南郡に走り或は鹿兒島藩邸に投ず而
て教孝等と事を議する者十餘人皆江戸に赴く是月
教孝愛諸と共に潜に國を去り愛諸直ちに京畿に赴
く教孝先づ江戸に至り其同志を會し井伊氏を撃つ
策を授け乃ち直弼の罪條を擧げ及び老中に呈する
の書を作り各之を懷ろにす三月三日衆大雪に乗じ
直弼を櫻田門外に要撃し竟に之を斬殺す教孝乃ち
急に馳て京畿に赴く衆或は老中脇坂安宅(中務大
輔)の官邸に至り或は越中守細川氏の邸に投じ各
書を出し事由を訴へ罪を乞ふ幕府乃ち其徒を各藩
邸に囚ふ教孝愛諸僅に京畿に達す事已に大に敗れ
或は執はれ或は死す八月齊昭薨す幕府尋て還勅の
命を罷む是より先六月皇上密使を遣はし齊昭に詔

し王に勤めしむ略に謂ふ方今幕府主幼に陪臣權を
擅にし外夷隙に乗ず國家危急坐視するに忍びず今
汝に委するに閩外の責を以て汝宜しく其衷を罄
し奸臣を除き驕虜を殲し以て宇内の穢政を一洗す
べしと道路梗阻に會ひ詔使未だ發せず是月又勅す
宜しく速に前詔を奉じ同心同徳の師を率ひ幕府詐
僞の罪を正し併せて諸藩を簡ひ以て攘夷の策を施
すべしと詔使僅に水戸に至る則ち齊昭已に薨す朝
旨竟に行はれず文久二年壬戌正月十五日平山繁義
等老中安藤信睦を坂下門外に要撃す克たす皆從兵
と闘死す是年幕府朝旨を奉し一橋慶喜松平慶永等
を登庸し國政を輔翼し本藩に命じ曩に賜ふ所の勅
使を奏行せしむ是に於て戊午より壬戌に至る凡そ
五年間國中士民事に死する者皆恤典を賜ひ其後を
録し喪を郷里に歸さしむ
橋本綱紀京都より江戸有志に贈りたる書面(安政五
年の春)に曰く
過日は東坊城太閤(鷹司)に恐れ賄賂を取り剩へ乍

恐今度關東の申如く不_レ被_レ成時は承久の亂後鳥
羽帝の事可_レ恐_レ杯申候處主上大に御笑叱其は間違
なり彼は武家に歸したる權を御所へ御取返の御趣
向今度は皇國の御一大事故皇國人心の所歸にて處
置致候積(當時正論家の眼目此の一語に盡居申候
列侯の所存御尋も此邊の見込に御座候)依て相考
候へば彼は内地にて公武の争此度は皇夷の争に候
必ず承久の事無_レ之間安心可_レ申其にても其事を行
候は_レ其時は不足_レ畏と御垂諭被_レ遊候由此御一
語の御德音實に鳳鳴龍吟爲_レ我神州一增_レ光候事萬
々吾儕一命位は實に不足_レ惜と奉_レ存候
水戸侯(老卿齊昭)より鷹司大閤に贈りたる直書(安
政五年正月)に曰く
前略
此度老中始上京仕候由何儀に御座候哉若し哉夷狄
の儀に付候事にも可有_レ御座候哉と推察仕候處夷
狄の儀に付ては先年より打拂を不_レ被_レ爲_レ止候得
は無_レ此上御上策と奉_レ存候故追々打拂の論下官

にて認候儀にて天下一統に存居候處只今にては登城をも被_レ申付_レ懇切の譯に相成候上は又無_レ謂打拂と申事にも相成兼可_レ申候得ば何分只今より御内備御手厚く御整相成り彼より兵端相開き候節大和魂を振起防禦に聊差支無_レ之様相成候方と下官は奉_レ存候_レ叡慮の程は勿論難_レ奉_レ測殿下御始_レ尊意も如何と奉_レ存候得共下官の存意は如_レ右御座候得は全く御内内此段申上候

鹿兒島侯(島津齊彬)堀田閣老に宛たる建議(安政四年十二月)に曰く

今度亞米利加官吏登城被_レ仰付_レ云々御國家の御大事のみにて卒忽に所存等難_レ申上_レ事に御座候得共戰爭に及び御勝利被_レ爲_レ在候ても御國家の御損亡莫大の御事と奉_レ存候間申立候簡條の内實に御差支の廉は格別其外の儀は速に御差許相成候方當時の御良策かと奉_レ存候_レ左候て異人都市へ被_レ差置_レ商道十分に御開きに相成候上は諸外國へも通船等被_レ仰付_レ五大洲御隨意に御制馭相成申候様御處置

當然の御事と奉_レ存候右に付外夷入込候様成行き候得ば人心を固結致候儀專要にて第一には西丸建儲の御事と奉_レ存候乍_レ恐是まで世子不被_レ爲_レ在人心不安奉_レ存候折柄故少も早く御養君治定被_レ仰出_レ候は、上下一同人心安堵仕皇國の御鎮護も彌根源に相成可_レ申勿論御血筋御近き御方當然の御事には御座候得共斯る御時節に御座候へば少しも御年増の御方天下人心の固にも可_レ相成_レ然ば一橋殿御事御器量御年輩旁人望に御叶ひ可_レ被_レ成奉_レ存候間第一に此儀被_レ仰出_レ度尤も御臺様御入與被_レ爲_レ在候御事故偏に御出生可_レ奉_レ待_レ上_レ儀當然に御座候得共當時の形勢にては一日も早く御養君不被_レ仰出_レ候ては難_レ相濟_レ御時節と奉_レ存候且又御軍制十分被_レ仰出_レ諸大名へも奢侈の風俗を一洗仕武備十分に手當仕候様嚴敷被_レ仰出_レ度候無_レ左候ては兎角人心弛み勝に相成外夷の蔑如よりも人心苟安姑息に陥り候儀嚴密に被_レ仰付_レ且建儲の御事も被_レ仰出_レ候はば上は被_レ奉_レ安_レ叡慮_レ下は諸

候以下萬民の心を御固め被_レ遊候御儀征夷の御當務と奉_レ存候云々(下略)

鹿兒島侯右の建議を添へ近衛左府に捧げたる直書(安政五年正月)に曰く

乍恐奉_レ言上_レ候然ば西丸御養君の儀此節存意の通老中へ申立仕候右は閣老更代の度毎に所置變化仕候儀根本不_レ堅故に御座候此節異人申立旁勤考仕候處此上萬々の儀御座候節人心動亂仕候ては天下の御爲可_レ恐事と奉_レ存候間人望旁_レ橋を御養君被_レ仰出_レ候様申立候事に御座候尤紀州田安御近親に御座候得共中々競らべ候人物にては無_レ之と奉_レ存候勿論私計にも無_レ之尾州を始め御家門國持有志のもの過半同意の事にて追々申立候様子に承知仕候右に付誠に恐入候得共國家の御爲少しも早く御養君被_レ爲_レ在_レ可_レ然旨内勅被_レ仰出_レ候御事は相叶間敷哉尤も閣老の内堀田松平伊賀守久世三人は越前守より申立能々承知の由には御座候得共萬々

一田安紀州兩公の方に相成候得ば有志の面々望を失ひ候は必定と奉_レ存候得ば天下の御爲別して奉_レ掛念_レ候間何卒賢慮を以て根本を御堅の相成候様奉_レ願上_レ候尤も三條様へも御節奉_レ申上_レ候間何分宜敷奉_レ願上_レ候且又御臺様にも兼て申上置御承知御座候得共猶又此節申上候事に御座候

孝明天皇紀第八十三卷に曰く

二十八日(安政五年六月)幕府亞墨利加國と條約を締結事情切迫天裁を請に暇あらざりし狀を奏す上時勢の此に至るは聖徳の及ばざるなりと深く其專斷を歎かせ給ひ關白藤原尙忠(九條)等を召して讓國の密勅を賜ふ尙忠等固く此宸念を止め奉り奏議して三家大老の一人を京師に徵す

九條卿に下せる宸翰に曰く

(御名)情ら考ふるに元來帝位を踏む事容易ならずる事既に古書に見え唐土に於ては子孫に限らず譬へば下民たりと雖も賢才を拔んで繼體と爲す既に

堯帝は舜を以て帝王となす(舜元農民)然に日本に於ては子孫相續正流にして他流を用ゐず神武帝より皇統連綿之事誠に他國に例なく日本に限る事偏へに天照大神の仁慮言語に盡し難く尊崇盡期なき事(御名)に於ても愚昧短才の質乍ら其血脈は違はざるを以て恐み恐みも天日嗣を繼ぐ事恐縮少ならず既に先帝登遐の節繼體の儀固辭申す筈の處只々愁傷少ならず節心氣惑亂前後を辨へず踐祚其後退々大禮も相濟み此上は愚昧の質ながらも精力を盡し成る可き丈け精勤神宮御始皇祖に對し奉り聖跡を穢さず治國候存意の處元來愚力に及ばざるの儀歎息の至の處去る嘉永七年炎上後諸國變事數度彼是萬民不安の事は皆(御名)薄徳の然らしむる處と悲痛無_レ限猶更謹慎治國候所存ながら前文の如く暗昧の質微力に及び難き事然る處異船毎々渡來の上剩へ墨夷使節著船應接和親通商を乞ひ表には親睦の情を述べ實は後年併呑の志顯はれぬ條約の旨閣老を以て申聞の條々實に容易ならざる事

に候間先頃愚考を認め廻覽せしめ候事其後も晝夜勘考候處此度の一條如何體申候共免し難し實以神州の瑕瑾其上邪法傳染等も測り難く仲々許す間敷事に候若し許さるに於ては戰爭に及ぶべく然る時は治世數年人氣怠慢武備整はず敵し難き旨誠に絶體絶命の期と實に痛心候事然に(御名)存候は武士の名目にて假令ひ治世續き候とて敵し難き旨申候ては實に征夷の官職紛失歎け敷事に候然に當時政務は關東に委任の事強て申候ても公武間柄に拘り候事は亦容易ならざる事と存候所詮條約許容の儀は如何致候共神州の瑕瑾天下危亡の基(御名)に於ては何國迄も許容難_レ致候然るに昨日武傳披露の書狀披見候に誠に以て存外の次第實に悲痛など申居候位の事にて無_レ之言語に盡し難き次第に候此上は考へ候了簡も無_レ之候前文の如き次第の上如_レ斯至大至重の事追々増長苦心候此の一大事の折柄愚昧(御名)愁るに帝位に居り治世候事所詮微力に及ばざる事亦此儘帝位に居り聖跡を穢し候も

實に恐懼候間誠に以て歎け敷事に候共英明の人に帝位を譲り度候差當祐宮有_レ之候得共天下の安危に拘る一重大事の時節に幼年の者に譲り候事本意なき事依_レ之伏見有栖川二親王の中へ譲り度存候此段各存意承り度候事(御名)如_レ斯の時節安逸の望にては決して無_レ之實々前文の如き次第愚昧の質進も帝位に居り萬機の政務を聽き治國候事力に及ばず其上夷一件の儀申儘聞候ては天神地祇皇祖に對し奉り申譯なく且所詮存念申立候共右の次第實以身體茲に極り手足置く所を知らざるの至何卒是非帝位を他人に譲り度決心候猶早々關東へ可_レ有_レ通達_レ事
寒縁遣管補に曰く
安政五年六月二十九日老公より鷹司殿下へ御書案
皇上御讓位風説の件
別啓外夷之事に付頃日主上深く被_レ惱_レ叙慮_レ不_レ被_レ安_レ皇位_レ被_レ思食_レ候歎に傳承仕候處御憂慮の程は奉_レ恐察_レ候得共萬一右様にては神廟の御依頼如

何可_レ被_レ爲_レ在候哉即今被_レ爲_レ富_レ春秋_レ候儀故何分被_レ慰_レ宸襟_レ永黎庶を御愛育被_レ遊候様仕度不_レ堪_レ懇祈_レ候此段宜御合被_レ下度奉_レ至願_レ候恐惶謹言
近衛卿に下せる宸翰に曰く(安政五年八月五日幕府行政の近狀叙慮に副はざるを以て重て讓國の勅諭あり近衛左大臣藤原忠熙鷹司右大臣藤原輔經等力めて之を止め奉り竟に勅書を幕府及水戸藩に降し朝旨の在る所を論し内外の治安を謀らしむと云)
(上略)(御名)讓國の事如何様にも可_レ止所存無色々勘考候ても此邊にて一先右所存弘大に成隱居候方矢張禍亂の治便宜と存候(中略)
何分にも讓位の處何れ此度は申出心得に候得共先内々御尋申入候(中略)就_レ右ても讓國には彌増候間最早三人へも御相談無_レ之早々關白入來の上申込太閤へも申込候半と短策起り候間宜希入候(中略)扱讓國の事を達て申聞候半と存候何分にも其時の模様次第何れ強意に申了簡に候事(下略)

八月五日

尙忠公記二條に曰く

八月五日被_レ召_二御前_一左の御書取の御趣意書拜見被_二仰下_一畏承候(下略)

御趣意書

蠻夷一件にては(御名)愚存春來申述候通にて假條約の儀に相成候ては實以神國の瑕瑾奉_レ對_二神宮始皇祖_一無_レ申譯_二儀關東申開の通和親候ては害遅く又拒めば害速と承知候得共何れに致ても天下の大忠於_二和親_一ては皇國の大體を失ひ尤忠増長に相成候事顯然の時は公武共に禍に相成候はん哉と存候京都計の爲を存候にては無_レ之差當德川家の爲不_レ宜と存無_レ隔心返答候處去六月廿一日迄一事の往返も無_レ之只々無_レ據次第にて條約調印爲_レ濟候由届棄同様に申越候事如何の處置に候哉嚴重に申せば違勅實意にて申せば不信の至には無_レ之哉依_レ之右模様及_二尋問_一度評議の上三家の輩又は大老上京の事申遣し候得ば三家は押込て不_レ爲_レ致_二上京_一大

老も差支申立延引の旨申越加之朝廷の議論不同心の事を乍_レ承知七月七日魯西も墨夷の振合にて條約取極候由同十四日英吉も同斷追々佛蘭も同斷の旨届棄に申越候右の次第を捨置候て朝威相立候事哉何如に當時政務委_二任于_一關東之時乍も天下國家の存亡に拘る大患を其儘に致置候ては如_二前文_一奉_レ對_二神宮已下_一如何可_レ有_レ之哉只公武間柄に拘る事計配慮者柔弱薄志の人の事平常の時と違ひ如此國家の一大事關東の時節何事も聞濟候ては却て如何可_レ有_レ之哉仍各所意相尋一應は不審の儀申遣度候就ては去六月廿八日愚存書差出候親王中へ讓位の儀度々被_二差止_一得共先文の通關東の所置にては爲_二國家_一萬民に申遣候所存一事も不_二相立_一儀は實全(御名)薄徳の故に候間再三申乍_二如何_一是非々々衆評の上右兩條關東へ通達可_レ有_レ之様存候近々間部下總守使に上京の由乍是も延引の由故何卒右兩條總州上京迄に早々急度可_レ遣_二申入_一候事

衆人の中短慮の沙汰候様申述も可_レ有_レ之哉乍夫は國に忠薄き輩實に如_二前文_一難_二捨置_一事と存候間不_レ願_二衆慮_一申述候事

近衛卿に下せる宸翰(安政五年十一月九日)に曰く

鳥渡私存念極内々申試候宜御勘考希入候別之事にても無_レ之實に段々差縫れ内部の所置暴計心痛候何卒薩州杯へ密々仕損無様被_レ成候而姦賊退治は成間敷哉段々堂上へ手を掛候様成候ては誠に々々朝威廢れ歎_レ敷大に混亂候間何卒御勘考願入候

十一月九日

京師見聞書に曰く

京師の志士は九條關白の家臣島田左兵衛尉及長野主膳の爲めに註誤せられ關東に與みし叡旨に悖れる所業少なからざるを憤り正義の公卿に勸めて關白を罷めしめんとす諸大臣之を容れ九條卿に忠告し九月四日(安政五年)辭して關白を罷められ近衛卿内覽す幕吏大に驚き種々の事を捏造し大老井作掃部頭は書を上り水戸家の事を誣奏せり(中略)老

緒言

中間部下總守西上して大津驛に至る長野主膳馳せ至り密に京師の事情を告ぐ下總守書を掃部頭に贈れり其要に曰く水老の謹慎を免し越前に大老を命ずべき等の勅旨を下さるへしと云只一方の暴言のみ上聞に達し主上逆鱗あらせらるゝは實に悲歎千萬なり某事天下分け目の奉公と存し一命を懸け盡力せんと欲す固より天下には替へ難きを以て水老謹慎を免し登營を命せらるれば殿中に於て召捕か殺すの外は之れ無きものと決心せり然とも後又考ふるには大老免除の事京師より命せらるれば水戸へ内通あるべく何を申出るやも計り難し其時に至らば勅命と申すもの、謹慎中の身分にて天下の政事に口を出し其身を顧みずとの旨を以て駒込邸なる水戸家來残らず追出し公儀より護衛せしむるの取計ひは如何ぞや水老を切腹一橋を水戸又紀州に押込然るべく某着京せば敵は残らず取調べ一人づゝ取詰其罪顯然たるに於ては押込隠居等の取計も之れあるべく乃ち九條關白の存意を承り之を爲す

べし主上には固より妨げあることなく實に善道に在らせらるれど惡謀の片言のみ上聞に達するを以て逆鱗あらせらるゝも已むを得ざるなりと乃ち此書の説く所は全く主膳の詭言を輕信するに因れりと雖ども下總守志の決する所は已に前の如く激烈なるを以て行の暴戻に陥るも亦勢の然らしむる所ならん十七日京に入り妙満寺に館し頗る護衛を嚴にし病と稱し出でず京都町奉行小笠原長門守をして諸志士追討せしむ十八日鶴飼吉左衛門同く子幸吉を捕ふるを始とし小林民部權大輔字喜田一蕙同子松庵池内大學金田伊織等數人を捕ふ是より先き梅田源次郎頼三樹三郎等は既に獄に繋かれ梁川星巖は先ちて死せしを以て其妻紅蘭を鞠問す成就院忍向西郷吉之助有村俊齋平野二郎等皆逃れ去る江戸に於ては飯泉喜内日下部伊三次藤森恭助等を捕へ勝野豊作は踪蹤を逸せり水戸の士民變を聞き南上し小梅及駒込の水戸邸に集まり又松戸小金二驛等に屯集するもの數千人若し君家變あらば皆死を

以て之に當らんとするの勢にして氣焰赫々江戸を動搖せり掃部頭大に懼れ兵を彥根に召したり十月佛國と條約を結ぶ是より先き締盟せし米英等を並せ之を五國條約といふ伏見奉行内藤豊後守鷹司大閤邸に至り説て曰く關東に於て鷹司近衛兩家の九條關白に迫るを憎み遠島に處するの議あり早く之が謀をなすに若かざるなりと鷹司大閤及子右大臣大に驚き遽かに引退し近衛左大臣も亦之を聞て内覽を辭せり京師爲めに震動す下總守飛報を幕府に送れり其要に曰く鷹司殿父子は重犯人なり其家臣小林民部金田伊織の鞠問終結を待ち右父子を遠島に處するときは其餘の堂上皆口を噤すべく近衛殿内覽を辭し九條殿復職せば事靜謐に至るべし

閨老間部詮勝の奏聞(安政五年九月二十四日)に曰く水戸老卿先年自領の寺塔を破壊し並梵鐘をも取上可レ申手段有レ之候處右寺院の中には綸命勅額等頂戴仕候向も有レ之將似輕公命候御所行且佛敵にも相當り旁以て不_二容易_一儀に付御指留の上御答

被_二仰付_一候を遺恨に被_レ存其後一橋殿を西九へ立御自分思召立被_レ成候惡計を可_二仕遂_一の御所存より引續き内謀の企も有_レ之候間水戸老卿隱居と申儀にも相及候處温恭院様御代と相成亞墨利加入津より殊の外六ヶ敷相成再登城等も被_二仰出_一候而軍學御積學の趣を以て伊勢守内々被_二申込_一御政事向等御口出に相成候處元來夷人と御内通有_レ之候事故只々表向立派の御申事にて直に戰爭の方_レ可_レ然の趣に被_レ仰候へ共愈の處に至候ては御和談の趣被_レ仰又忽戰爭の御論に相成候と申様にて更に御取極無_レ之自然夷人の方は深入に相成條約取結と相成候時儀に至り候は全水戸老卿の謀策に無_二相違_一是等の次第段々と分明に至り候事故登城御口出の儀御斷に相成候間堀田備中守松平伊賀守等へ種々御謀策有_レ之御身方に被_レ成候て備中守上京の上禁裡御不承知の場及び候儀實以恐入無_二勿體_一御儀に候且は今般上京の上追追承及候處水戸老卿手先公卿方にも手を入れ候哉にて不_二容易_一一條と

相成申候且温恭院様薨御の儀も甚以疑敷殊に當上様御儀紀州に御住居の砌兩三度も御危急の儀有_レ之哉にて御養子後も兩三度御危急の事有_レ之哉に候(下略)

同上(安政五年十月)に曰く

當六月十七日英佛軍艦も追々押寄せ候趣に付ては條約調印御定不_レ置候ては忽ち戰爭に及候段米國官吏より申立候其節掃部頭遮て不承知申張警へ幾萬軍艦一時に押寄せ候に及候共被_レ對_二京師_一被_二仰上_一様も無_レ之條約調印致候事は決して御義理合御尊敬の場も相はづれ不_レ可_レ然旨押張申述然る處同十九日掃部頭病にて無_レ據登城不_レ仕其隙を窺ひ堀田松平より海防掛井上信濃岩瀨肥後へ申付け調印爲_レ致候云々

岩倉公實記に曰く

安政五年十一月十日上宸筆の勅書を九條尙忠に賜り米國假條約の勅允し難き旨を曉諭し給ふ

蠻夷の一條段々回_二愚意_一候如何體に存候ても承知

難成儀に候何國迄も申張候了簡に候且間部儀は色々と手段相構候儀故決して其れに泥み候ては大變に候且年限を定めて引戻に成候様之説も候へ共於御名は不同意に候假令一日か兩三日に致せ許容候へば關東承知可相成候左候ては奉對神宮以下皇祖如何可有之哉既に去六月奉幣使宣下且御名願意も相違猶以恐多無申譯之至不容易と存候間假令一日か半日たりとも承知難成候何分下田條約に引戻無之ては何共承知不致候且又神奈川へ取替の沙汰有之右も情ら考候には江戸邊に段々入込候は如何可有之哉一と通他所の事故不構と聞え候へ共是逆も矢張日本國中の事故何共危き至に候併左様十分にも難參哉故に神奈川許容に相成り宜敷次第なれば許容候ても可然何卒嚴重之沙汰無之ては亂雜に成り易き者故此邊急度申付可然存候同くは精々十分の處へ引戻にて幾返も申張度候此等輔佐之儀偏に勘考有之度存候事

尙忠勅書を拜寫し之を酒井忠義に授けて間部詮勝と商議せしむ詮勝乃ち答議を上る其文に云く
 (上略)外夷の情態倨傲不遜杯と事々敷申觸候者有之妄言虚説漸々天聰を汚候哉の趣も申聞候へ共悉遂吟味候ては重罪に當り候中には不容易方々も可有之方今外患内憂一時に差起り候ては實に國家存亡の一大事に付大方の儀は心得違の儀迄にて爲相濟度寛仁御大度の思召に有之候得共斯迄言上仕候ても猶關東之御所置實に國家の御爲と不被思召分邪謀言上の次第正邪御會得不爲在候哉左候ては國內治平公武御合體の厚き叡慮も却て御趣意に觸れ猶更可被惱震襟候儀と實以奉恐入候儀に付嚴重吟味仕明白に入叡聞候様可仕既に京關共此節追々吟味仕是等之次第も追々速に申上候様可仕候(下略)
 尙忠之を御覽に供す上大原重徳を召させられて之を示し給ふ重徳奏して曰く詮勝若し命を奉せずして天位を動かさんことを謀るも朕は皇帝の天職を

盡すのみと勅諭あらせられて決して叡慮を變し給はざらんことを願ふ然るときは天下動王を唱ふるもの奮然臂を擧げて四方に起り不臣の徒を排斥し内治を釐革し外患を攘除するの計を立て遂に叡旨貫徹の期を見るに至る可しと上之を善とし給ふ同上に曰く

安政六年三月二十六日九條尙忠内旨を承け酒井忠義を其邸に引見して鷹司政通等(近衛忠熙鷹司輔熙三條實萬)落飾の期を稽緩せしめんを曉諭す忠義曰く掃部頭の訓諭あり御所に於て大閤殿以下落飾の願意を御聽許なきときは忠義自分に太閤殿以下の邸に出頭して直に遠島に處するの臺命を傳達せざるを得ず故に落飾の期を稽緩せしむるは却て御所より御不仁の御仕向けとなるの理にあらざるかと思慮す翌日忠義更に答議を上る其文に云く
 (上略)鷹司殿御父子近衛左府殿三條前内府落飾御猶豫の儀に付御沙汰の趣奉畏候(中略)此上御遅延の御座候て關東より品々申來候様相成候ては輕

重の差等にも相拘可申其上折角心得違の廉を以て夫々辭官落飾等被相願改心被致候所詮も無之不得已私夫々へ罷出屹度相達可申事に相成候は御所向御政權も難相立却て御不憐愍の筋に相當可申と誠に致心痛候(下略)
 米國水師提督ペルリと海軍卿外務卿の往復文左の如し

提督ペルリマデイラ寄港の際一八五二年十二月十四日海軍省に送りたる書面に曰く
 合衆國出發以來拙官は日本行の結果如何に付一層考慮するの餘裕を得申候かゝる不思議なる政府をして實行し得べき協商を早速になさしめ得べきや否やに付ては尙胸中幾分の疑念も有之候得共問題たる大目的の達し得らるべきことは竊かに自信罷在候豫備的且實行し易き手段としては我が捕鯨船其他の船舶の避難及供給の爲に一港又は數港を直ちに獲得するの要有之候而して若し日本政府が本土にて之を我が國に與ふことを拒み從て兵

力に依るの外之を占領するを得ざる時は艦隊は日本の南部にて良港を有し且つ薪水食料等を得るの便宜ある一二の島嶼に根據地を設くること第一に望ましく且必要と存候琉球島と稱する島嶼は數百年前日本の征服を受けて其屬國なりと稱せられ候も清國は其實際管轄權を争ひ居申候我が戰艦の碇泊地及諸國商艦の安全地として該島嶼の主なる港灣を占領するは道德法の最も正格なる規則上正當なる方法なるのみならず又必要に基く法則上正當なるものと相感じ申候而して土民の狀態に及ばすべき改良の結果より之を見れば此の議論は一層力ありと存候文明に伴へる害惡を土民に及ぼすにせよ海上權に付我が大敵たる英國が東方に有する占領地と其防備ある港灣の著々たる増加とを見るときは我が國にても亦敏速の舉に出づるの必要を覺り申候世界の地圖を緋けば英國は既に東印度及支那海に於て殊に支那海に關して最も重要な地點を占め居り候は明かに候幸にも此の不當なる

政府は日本及其他太平洋上の多くの島嶼に指を染不申而して此島嶼中には合衆國の爲最も大切となるべき商業路に當るものも有之候故一刻も早く多數の避難港を獲得するの活手段を採るべきものと存候以上當官は此の蕪雜にして略儀なる書信を以て世界を通じて非常の注意を促せる問題に付卑見を陳述致候而して當官は本省が拙案を承認せらるべきことを信じ申候

外務卿エドワード、エヴェレットが承認を與へたる答書の一節に曰く

十二月十四日付貴簡海軍卿より當省に移牒を受け當官より之を大統領に提出致候大統領は便宜なる一又は數ヶの避難港を得度願ふに貴官の率ゆる遠征隊の安全の爲必要ならんとの貴見に同意を表せられ候貴官にして若し兵力に訴ふるの外日本諸島に之を得る能はざる場合には他地に之を求むること必要と存候大統領は貴説の如く琉球に於て此目的を達し得べしとの意見に有之候該島は其位置能

く弊が目的に適合し而して其土民の友愛にして平和なる性質は以て必ず貴官の來島を歓迎すべきことと存候大統領は貴官が其任務たる事業を重視せらるゝことを満足に被思召候而して貴官任務の成效は主として貴官の謹慎と手腕とに依るものと存候此事たる大に文明世界の注意を惹き可申而して大統領は貴官の採らるゝ手段は貴官の智慧を顯はすのみならず又國家に名譽を與ふるものと深く信念相成居候

井伊直弼と題する記事(東京日々新聞一一六九二號)に曰く

上略條約調印の事は拙者の病中堀田松平が海防掛岩瀬井上等に向てなさしめしなりとて自己の責任を追れ以て一橋世子派を構陷せむとするの素地をなせしもの也

直弼の就職は一橋世子派を壓倒せむが爲め也故に慶喜卿の父烈公を忌むこと蛇蝎の如し安政五年九月二十四日彼の使命を受けたる間部詮勝は始めて

參内し上京の旨趣を奏聞し外國調印のことを分疏して曰く

水戸老卿先年自領の寺塔を破壊し(以下略全文前に在り)これ即條約調印の事は水戸烈公が米使に内通せるがため餘儀なくこゝに至りしと評するもの也殊にその毒殺を誣奏するに至つては讒構も亦極めりと謂ふべし云々

國光第七號に曰く

嘉永安政の交内憂外患一時に迫り其國家多難の際に當り先帝陛下より近衛忠熙公へ賜はりし宸翰百四十餘通を拜覽せられしに是皆當時の國事に關する御染筆にして近衛公へ御諮詢のものならざるはなし特に國勢の日に非なるを憤らせられ勅旨の伸ひざるを慨かせ給ひ祖宗の神靈に對せられ萬衆の慰安を計らせらるゝには御位を讓らせ給ふに若かずと迄に思召させられたる程御切迫の事情も在らせられたり是は朕が身は如何に成行くも厭ふ所に無之只祖宗の國家を不汚萬民の安康を得ば毫も

恨とする所なし杯の御文言も拜見せられ又此文中
島津家に係るもの凡五十餘通に及び或は島津家よ
り献上品あるに由り御満悦に思召さるゝ旨を記し
あり或は幕吏の暴恣を最早忍ぶべきにあらず宜し
く島津家をして逆賊を誅伐せしめん事は遺算なき
様望むとの御大事を記させられたるものありて一
々近代歴史上には無上大切の史料なるを以て市來
四郎寺師宗徳近衛家に請ひ東京に携歸り悉く謄寫
を了へ重要なる一史料に充てらるゝ見込なりと云
櫻田十八士自首狀に曰く

謹で脇坂侯執事に上言し奉り候執事啓明に在らせ
られ天下の御政道邪なく御取計ひ遊ばされ候儀と
存じ奉り候間草莽の我々共申上候は恐入候得共存
詰候儀伏藏なく別紙に相認め高覽に入れ奉り候追
々御大老井伊掃部頭殿所業を洞察仕候處權威を恣
に致し我意に叶はざる忠誠厚き人々をば親藩初公
卿衆大小旗本に限らず讒誣致し退隱幽閉等仰出さ
れ候様取計ひ中に就き外虜の儀に付ては虚喝の猛

勢に恐怖し神州の大きを醸し容易ならざる事共指
許し御國體を穢し恐れ乍ら叡慮を惱し奉り勅意に
も違背し奉るのみならず御讓位の儀を企て候段奸
曲の至り天下の大罪人と申べく存奉り候右罪狀の
儀は委細別紙に認め候故御熟覽御賢慮の程奉祈
候借石様の奸賊御座候ては此上將軍家の御政道を
亂し夷狄の爲に制せられ禍害をなし候儀眼前に之
あり實に天下の安危にも拘り候儀と存じ奉り候故
此度天誅に代り候心得にて斬戮仕り候事に候毛頭
公邊へ御敵對申上候には之なく且全く我々共忠憤
の餘り天下の御爲と存じ詰候ての事に候間嚴刑の
御處置遊ばされ候共御恨み申上ず候依ては元主人
家譴責を蒙り候様の儀は之なき様願ひ奉り候將又
此上は天下の御政事正道に御復し忠邪御辨別遊ば
され殊更夷狄の御取扱に至り候ては祖宗の明訓御
斟酌在せられ華夷内外の辨を御勘考遊ばされ御國
威を損し申さぬ様御談判の程渴望し奉り候此段罪
萬死を顧みず申上奉り候

別紙

皇國千萬世天日嗣連綿照臨し給ひて伊勢の神宮も
上古に替らせ給はず神道を尊び勇武を尙ひ自然の
遺風餘烈なれば古より遠略を展へ給ひ且夷狄の禍
これあり候へば精々退攘し給ひし事古史に著しく
今更稱揚し奉るに及ばず武將の世となりても弘安
の蒙古を塵にし文祿の朝鮮を征する事共神州の武
威を海外に輝し候儀人口に膾炙する所なれば是又
贅言を待たず東照宮に至り給ひては尊王攘夷の御盛
志深く在らせられ候は申上るに及ばず勃興の御盛
時なれば其初諸蠻夷來航通商等をも許し置れ給ひ
しかとも諸蠻夷も畏服し覬覦の念を達する事能は
ず然る處東照宮終に其深害あることを洞觀し給ひ
て洋教の禁を嚴にし給ふ大猷公に至り益邪教を驅
斥して三眼の明を四海に輝し給ふ事誠に千古の英
見卓識にて後嗣の遵奉し給ふ可き所なり借近時に
至り候ては夷狄に狡計黠略のもの多く出て萬國へ
通信貿易し遂に小を併せ弱を制し次第に境域廣大

に相成候勢に乗じ屢神州をも覬覦するに至る去り
ながら打拂の令之ある時は格別の事は仕出す事も
成し得ずして打過す天保十三年打拂の令を停め仁
恤せられしより頻りに來航し跋扈の態を顯はすに
至る中に就き嘉永癸丑墨夷浦賀へ入港威暴を示し
難題を申掛け候以來征夷府の御處置方古今時勢の
變革も之あり一概に御國威を振張遊ばされ難き儀
は治世の風習尤も之有る可き事に候得共申迄も之
なく夷狄貪婪元より歴事なく殊に狡謀詭計を挾は
さみ覬覦の念を逞しく致し候故詰り耶蘇の術中に
陥り神州の泰否にも拘り候重大の事に候處華夷の
辨和戰の議始終著眼の大基本廟議一定の上諸制度
御變革之なくては時勢に於て相叶はざる筈に候得
共近來諸蠻夷御振推察仕候ては憚りながら一定
の廟算如何之有る可くや去る卯年迄は追々内備嚴
正の御達も之有り邊海の守衛仰付られ候大名に至
りては多年防禦の爲に國力を費し忠勤を勵し候處
測らずも去る己年和親交易御取結の上恐多くも征

夷將軍の御居城へ夷賊共登城仰付られ剩へ饗應尊敬を盡され候有様春秋城下の盟を成すの比較に非ず神州古來未曾有の御失體にて實に冠履倒置の御處置と申べく驚歎の至りに候縱令御國政の儀は關東へ御任せ相成居候とて斯る重大の事件第一勅許も在らせられず候儀を全く掛りの有司數輩の了簡を以て五ヶ國に條約差許し將軍家御印章の御書翰迄も差遣はされ候始末何程偷安の末俗戰爭に及び候儀を恐怖致候とて天下後世へ對し大義名分と申も之あり武門の列に連り二百年の恩澤に浴し居候ては悲泣の至りに堪へず況んや徳川家譜代恩顧の士東照宮の神靈へ對し奉り沈黙傍觀致し居候儀廉耻之なくと申す可く決して相濟ざる事なり借陳る迄も之なく天下の聞見する處に候得共前件夷狄交易の儀如何にも勅許申請度所存にて去る午年春堀田備中守上京致し賄賂金錢を以て關白殿下を誑惑致し勿體なくも龍眼を暗まし奉る可くと陰謀秘計一方ならず候處今上帝聰明絶倫千載不世出の聖上

に渡らせられ皇國開闢以來尊嚴の國體淳厚の風俗今上の御代に及び夷狄の爲に消却汚穢致され候ては第一伊勢神宮を始御代々の神靈へ對させられ帝王の任濟せられず尤戰を好ませられ候には之なく國體を失はず萬民安堵に遊ばされ度との叡慮より賢くも一七日の内供御を御絶ち遊ばされ石清水へ御祈誓籠させられ關東より如何様申立られ候共一切御許容遊ばされ難く萬一非常の節は縱令萬里の波濤を越え孤島の中に終り候共御憾は在らせられず候得共泉涌寺を御離れ遊ばされ候儀忍ばせられ難きとの御事風かに拜承仕候吁嗟海内の人民誰か感激悲泣せざらんや此時に當りて神州の命派實に累卵より危き事なりしが百官群臣忠憤切迫の餘り八十八人の堂上方禁中へ馳せ集り萬死の力を盡し其外有志の大小名勤王の至忠を献せしゆへ三公を始彌増感憤遊ばされ三港其外近畿及び數ヶ所の開港並に夷狄永住邪教寺取立等の儀は一圓御許容遊ばされ難き趣勅命を以て御下知在らせられ猶又内

地く心の居り合如何に付大小名の赤心も知し召し度尤衆議奏聞の上叡慮決せられ難く候は伊勢大神宮へ神慮伺ひ奉るべくとの御儀にて三月二十八日議奏傳奏衆より堀田備中守へ御返答書差下され俄かに下向仰出され候趣の處夷狄へ内條約の儀は既に差許され候事故諸大名の赤心有體に叡聞に達し候様には相成らず之に依て表向天下へ意見建白の達は之有候得共蔭より某を以て専ら西洋の事態を強大に主張し交易を指許すは一時の權宜據なく萬一關東の趣意に違ひ候ては家の爲に相成らずと吉凶禍福を以て遊説致し猶又御三家方へは建議の文意認め直し候様内諭之有る由に候得共水戸前中納言殿には關東輔弼の名將に之有り尊王攘夷の御論始終一致の御方故御廟筭伺書と云一冊當今の急務より將來の大害迄丁寧誠實に建白致され尾張中納言殿にも内諭に泥まず京師の御趣意に基き御處置之なく候ては相濟まずと申立られ候由實に有難き事と謂ふべし其後彌勅許の有無に拘らず關東の

御決斷を以て假條約指許しに相成候趣に付御三家にては尾張殿水戸殿御三卿にては田安殿一橋殿御家門にては越前殿忠誠無二の御方一同登城に相成り將軍家御對顔願はれ候處御所勞にて御逢之なく依て元老井伊掃部頭初御呼出し勅命遵奉之なく假條約指許しに相成候ては將軍家違勅の罪御遁れ遊ばされ間敷候東照宮以來御代々様へ御對し遊ばされ候ても如何之有るへきや各方の了簡も承り度旨一同御演述に相成候處目前にては掃部頭初畏服致候由に候得共執頭の威權を以て不日に條約指許し恐多くも將軍家を御不忠御不幸に陥れ奉り徳川家の稱號を千百歳の後迄も穢し奉り候のみならず將軍家御大病人事をも御辨へ之なき砌に乗じ無實の罪を羅織し御親戚の方々を禁錮し奉り其他正義の大名松平土佐守始兩三人御威光を以て無體に隱居致させ候所業惡むにも餘りありと申すべく且又御幼君の時節を幸として御三家方の權威を推ん爲連枝又は家老にて本家主家をも押領掌握せんとの奸

曲の巧み之ある松平讃岐守水野土佐守竹腰兵部少輔等徒黨に引入れ種々奸計を運らし且我意に隨ひ申さるる正議の士をば貶斥致し東照宮以來の美章良法追日破壊に及び候事長大息の至りに候其後八月に至り叙憤の餘三家大老の内上京致し候様重き勅書御下げに罷成候處御請にも差支へ尾水兩家の儀は不束の儀之あり慎申付掃部頭儀は御用多にて上京相成り難く且先輩堀田備中守等取扱今更致方も之なく依て嚴重申付候旨議奏衆迄申立て已が逆意を逃れ申すべくと相巧み間部下總守を上京致させ専ら恩威を以て押付候所存にて賄賂を用ひ九條殿下を徒黨に引入れ内藤豊後守に命じ御讓位をも遊はされ候様要し奉り候得共三公方賢明の御方ましまし聖主を輔佐し奉り候に付朝威確乎として御撓み遊ばされず之に依て無實の御罪を申觸し鷹司殿近衛殿三條殿等落飾御慎み遊ばされ候様取計ひ其他諸大夫初何一つ罪科之なき者をも召捕ひ關東へ差下し夫々非道の處置致し専ら虎狼の猛威を以

て天下を屏息せしめ畿内の開港並に邪教寺取建等本條約差許し且は青蓮院宮様御英邁を忌み奉り御失徳之有る様申觸し御寺務取放し幽閉し奉り候所業恐れながら玉體にも迫り奉る可きの意顯然にて北條足利の暴横に均しく共に天を戴かざるの國賊と謂ふ可し嗚呼此儘に打過なば赫々たる神州一兩年を出でず内地の奸民邪教に靡き彼が勢焰を助け皇國の奸賊平身低頭して彼が正朔を奉すること掌上に視が如し苟も人心之ある者は實に痛哭長大息に堪へざる事ならずや然りと雖も東照宮の德澤未だ地に墜ちず御三家御一門には尾張殿水戸殿一橋殿越前殿阿波家因幡家の如き徳川家輔佐の良將も之あり外諸侯にも薩州仙臺福岡佐賀長州土佐宇和島柳川等天下の爲め忠憤の念日夜怠らざる有名の諸侯少なからず候得ば内は則御家門方將軍家を輔佐し奉り専ら内政を治め外は則有名の諸侯一意忠力を盡し武備を整なば神州の耻辱を一洗して叡慮を安し奉り候事天地に誓て疑ひあることなし依

て當今の事態の概略を記して天下の公論折衷を待ち左袒して天下を興起せんと欲するなり周の衰る婦人すら恤緯せずして國家の亡るを憂へしにまして二千年餘の天恩を戴き二百年來東照宮の恩澤に沐浴する者誰か報効の念なからんや草莽の小臣痛憤切齒の餘り寢食を安んぜず日夜恨を吞て時勢を憂へしが彼が罪惡日を追て増長せば豈曾徳川家の罪人のみならん實に神州の逆賊なり天地神人同憤の時に乘じ天下諸藩の有志と合力同心して天下の奸賊を誅伐し神罰を蒙らしむるものなり

櫻田十八士懷中書に曰く

墨夷浦賀へ入港以來征夷府の御處置縱令時勢の變革之有り隨て御制度も變革なくては相成がたき事情之あり候とは申ながら當路の有志専ら右を口實として一時儉安畏戰の情より虛喝の勢焰に恐怖致し貿易和親登城拜禮をも差許し條約を取替し踏繪を廢し邪教寺を建てミニストルを永住致させ候事神州古來の武威を穢し國體を辱かしめ祖宗の明訓

に戻り候のみならず第一勅許も之なき儀を指許され候段天朝を蔑如し奉り候儀に之あり重々相濟ざる事にて追々大老井伊掃部頭所業を洞察致し候に將軍家御幼年の砌に乗じ自己の權威を振はん爲公論正議を忌み憚り候て天朝公邊の御爲筋を深く存込候方々御親藩を始公家衆大小名旗本に限らず讒誣致し退隱或は禁錮等仰付られ候様取計ひ候儀夷狄跋扈容易ならざる砌と申し内憂外患日を逐て益迫り候時勢に付恐多くも一方ならず宸襟を惱まされ國內治平公武合體彌長久の基を立てさせられ外夷の侮を受ざる様遊ばされ度との叡慮に在せられ公邊の爲勅書御下げ遊ばされ候かに同上奉り候處違背仕り猶更諸大名始正議の人々を召捕へ無實に羅織し嚴重の處置致され甚敷に至り候ては三公落飾粟田口親王をも幽閉し奉り勿體なくも天子御讓位の事まで讓し奉り候件々奸曲至らざる所なし豈天下の巨賊にあらずや右罪科の儀は委細別紙に認候通りに候かゝる暴横の國賊其儘差置候は益公

邊の政體を亂し夷賊の大害を醸し成し候儀眼前にて實に天下の安危存亡に拘はり候事故痛憤難_ニ黙止_ニ京師へも奏聞に及び今般天誅に代り候心得にて斬戮せしめ候申迄は之なく何卒此上は聖明の勅意に基き公邊の御政事正道に復し尊王攘夷正義明道萬民をして富嶽の安に處せしめ給はんことを希ふのみ聊殉國報恩の微忠を表し伏て天地神明の照覽を仰ぐ所なり

坂下七士懷中書に曰く

申年三月赤心報國の輩御大老井伊掃部頭殿を斬殺に及び候事毛頭幕府に對し奉りて異心を挟み候儀にこれなく掃部頭殿は執政以來自己の權威をのみ振ひ天朝を蔑如し奉り只管に夷狄を恐怖いたし候心情より慷慨忠直の義士を惡み一己の威力を示さんが爲に専ら奸謀を相廻し候躰實に神州の罪人に御座候處右の奸臣を斬り候は、自然幕府に於て御悔心も出來させられ向後天朝を尊び夷狄を惡み國家の安危人心の向背に御心付させらる事もこれ有

べくと存込身命を投うち候て斬殺に及び候處其後一向御悔心の御模様も相見え申さず愈暴政の筋にのみ成行候事幕府の御役人一同の罪には候得共畢竟は御老中安藤對馬守殿第一の罪魁と申すべく候對馬守殿井伊家執政の時より同腹にて暴政の手傳を致され掃部頭殿死去後も絶て悔悟の心これなきのみならず其奸謀讒計は掃部頭殿より超過し候様の事件多くこれあり兼て酒井若狹守殿と申合せ堂上方に正志の御方これあり候へば種々无實の罪を羅織して天朝をも同腹小人のみに致さん事を相謀り萬一盡忠報國の志激しく手に餘り候族これあり候節は夷狄の力をかり押へ取るべくとの心底顯然にて誠に神州の賊とも申べく此儘打過候ては叡慮を惱し奉り候事は申に及ばず幕府に於ても御失體の御政事のみ成行き千古までも汚名を受させられ候様相成事鏡にかけて見るが如く容易ならざる御儀と存じ奉り候此上當時御模様の如く因循姑息の御政事のみにて一年送りに過せられ候は、近年

の内に天下は夷狄亂臣の物と相成候事必然の勢に御座候故旁以て片時も寢食を安じ難く右は全く對馬守殿奸謀邪計を専らに致され候所より差起り候儀に付臣子の至情黙止し難く此度微臣共申合對馬守殿を斬殺申候對馬守殿の罪狀は一々枚舉に堪へず候へ共今其一端を舉て申候皇妹御縁組の儀も表向は天朝より下し置れ候様に取繕ひ公武御合體の姿を示し候へ共實は奸謀威力を以て奪奉り候も同様の筋に御座候へば此度必定皇妹を樞機として外夷交易御免の勅詔推て申下し候手段にこれあるべく其義若も相叶はざる節は竊に天子の御讓位を讓し候心底にて既に和學者へ申付廢帝の古例を調へさせ候始末將軍家を不忠に陥れ萬世の後惡逆の御名を流し候様取計ひ候所行北條足利にも相超候逆謀は我々共切齒痛憤の至り申べく様もこれなく候外夷取扱の義は對馬守殿彌增慇懃丁寧を加へ何事も彼等申處に隨ひ日本沿海測量の儀盡く指許し皇國の形勢委敷彼等へ相教へ近頃は品川御殿山を彼

等に貸遣し江戸第一の要地を外夷共に渡し候類は彼等々導き我國を取しめ候に同然の儀にこれあり其上外夷應接の後には毎に指向にて密談數刻に及び骨肉同様に親敷致し候て國中忠義勇憤のもの共を以て却て仇敵の如く忌み嫌ひ候段國賊と申すも餘り有る事故に對馬守殿長く執政致され候は、遂には天朝を廢し幕府を倒し自分封爵を外夷より請候儀は明白の事にて言語同斷不届の所業と申すべく候既に先達てシイポルトと申醜夷に對し日本の政務に携はりくれ候様相頼み候風説もこれあり候間對馬守殿存命にも候は、數年を出ずして我國神聖の道を廢し耶蘇の邪教を奉じて君臣父子の大倫を忘れ利慾を尊び候筋のみに陥り外夷同様禽獸の群と相成候事疑ひなし微臣共痛哭流涕大息の餘り餘義なく奸邪の小人を斬戮せしめ上は天朝幕府を安じ奉り下は國中の萬民共夷狄と成果候ところの禍を防ぎ候義に御座候毛頭公邊へ對し奉り異心を存し候儀にはこれなく候間伏て願くは此後の處井伊

安藤二好の遺轍を御改革遊され外夷を掃攘し叡慮を慰め給ひ萬民の困窮を御救ひ遊され候て東照宮以來の御主意に基き眞實に征夷大將軍の御職任を御勤め遊され候様仕度若も只今の儘にて弊政御改めこれなく候はゞ天下大小名幕府を見放し候て自分自分の國のみ相固め候様に成行候は必定の事に御座候外夷の御扱さへ御手に餘り候折柄如何御處置遊され候哉當時日本國中の人心市童走卒迄も夷狄を惡み申さるもの一人もこれなく候間萬一夷狄誅戮を名として旗を擧げ候大名これあり候はゞ大半其方に心靡き候事疑ひこれなく實に危急の時節と存じ奉り候且皇國の俗は君臣上下の大義を辨じ忠孝節義を守り候御風習に御座候へ共今日幕府の御處置を見受け候はゞ忠臣義士の輩一人も身命を投うち候者これある間敷幕府は孤立の御勢に御成果遊さるべく候夫故此度御改心の有無は幕府の興廢に相拘はり候事に御座候故何卒此度御勤考遊され傲慢無禮の外夷共を疏斥し神州の御國體も

幕府の御威光も相立ち大小の士民迄も一心合體仕候て尊王攘夷の大典を正し君臣上下の義を明にし天下と死生を俱に致し候様御處置希度は即臣等身命を投うち奸邪を誅戮し幕府要路の諸有司に懇願愁訴する處の微忠に御座候謹言

富小路任節筆記に曰く

一京師の儀は延元以來總て室町武營推立の儘に被任畢竟西秦の世楚懷王同様の取扱にて別して應仁以後縉紳の亡遁も不尠猶更御衰微の極に相成候處總見院殿始て被安宸襟候より引續き豊國公も殊に被慰叡心候事共に聊御安心の御姿に相成候へ共中古以前の朝廷に被較候ては畢竟里内裡御假り住居の儘にて御在位に相成恐入候事に候然る處於東照宮御方殊更尊王の御儀御手厚被爲在候御繼職の征夷府退々御手厚の御仕向にて天日赫々御時節に相成誠に難有御事に御坐候乍去關東陪臣の向には兎角自己の主家のみに着眼被致やすく動もすれば輕蔑々間敷筋も無之と

は難申候處其先代義公様御儀は別段卓識の御事にて修史の大擧を以て尊王の大義御顯しに相成依之霸府出頭の有司は勿論内外諸藩迄も彌以て臣服の本意不取失様萬世不易の大道赫著相成候實に千古の御大業に御座候右に就ては其御家柄御代々御繼嗣の御方先公御遺慮に被準據候内別て前中納言烈公様には尊王攘夷の御賢策御手厚く依之内外諸藩畏縮の儀は今更申迄も無御座候然る處朝廷御振合の荒増は九條關白殿下御儀從來先年鷹司殿御在職の砌より於御内心御確執の御儀多端有之候處近年御在職に就ては關白内覽共御掌任の御心得の處其砌關白は九條家に被屬於内覽は近衛家に御授け相成候て殊に鷹司家諸大夫小林筑前守儀近衛家へ參上内覽振御相傳の御師範相勤候處於九條殿深く御立腹の最初に相成折柄井伊氏は其家系元九條家より被分脈候振に相親み候由にて當今右の宗室に相立居候に付ては其新參の家來長野義言と申者を以て間諜に上京爲致

毎月金五拾兩宛遣捨の金子相渡し官家内外爲相探候て九條殿家來島田左近と申者と入魂の目論を以て終に九條殿下に取入申候其比外夷條約一條に付堀田備中守上京の砌引續き間部上京迄の内内の儀は總て右義言より掃部頭へ密々申入候に準じ依之九條の存寄通りの處置に相成り三公落飾は勿論小林筑前守杯も無實過當の重罪に陥れ其外僉議の事は全く島田左近長野義言兩人の術中に陥り候申迄も無之九條殿掃部頭兩人の奸曲とは乍申天地神祇の冥祐の程無覺束程に被存候事に候然る處右は其方烈公様より内外堂上向御取繕相成一橋刑部卿様征夷府御繼職の御密謀に致徒黨候者の様申成し候に付ては京攝徘徊の旅人分僧無此上尤東國筋總房野陸の人體は總て滯留不差許に成行候へ共詰る處於九條殿自己の家祿千石は加増且つ關白の役料五百石等掃部頭より被取計候新規の潤澤に溺惑被致其外賄賂不

違_二枚擧_一候實に切齒の事に御座候且つ於_二宮中_一准
 后方は九條殿より推立の御事故妃嬪迄も九條殿へ
 佞媚の了簡のみに相成於_二堂上向_一も廣橋殿柳原殿
 千種殿大原殿今城殿富小路殿杯五六輩の者へは所
 司代若狹守より内外の潤澤を以て宮中隱密の吟味
 方に相成右邊奸黨相結居候て内外相防き申居候且
 つ一昨年九條殿へ歎訴の堂上向八十六人へは聊つ
 の潤澤を以て鉗口爲_レ致更に二万兩餘の分配金
 を以て摺紳一統征夷府に不_二相悖_一様の手段何れも
 九條殿掃部頭と申合候て取計致し京都の處即今内
 外冥朦の御時節に相成歎ヶ敷事に候然る處當春三
 月掃部頭伏戮の後は九條殿並若狹守の畏縮不_二一
 方_一候て格別嚴重の防禦爲_レ致更に及_二當夏_一候ては
 京都五里四方の間は小前百姓迄も親類一宿の者に
 ても指許し不_二申且つ於_二宮門_一は井伊愛丸松平時
 之介若狹守三人へ申付其方御家來に似寄候者は用
 事の次第は不_二相構_一召捕爲_レ申嚴重處置申付候趣
 に候然る處當秋前申述候五六輩の堂上向九條殿の

下知を以て血判禁口の上嚴重内々の御手詔製作致
 し若狹守へ相渡し候に付武家を以て柳營へ被_二差
 遣_一候是は於_二主上_一は全く御存知無_レ之候儀にて右
 等の者共偽作の事柄何等の取計被_レ致候事哉一切
 相分り兼候尤是迄より九條殿若狹守始其筋堂上向
 等の讒詐にては先將軍御薨逝は烈公様より一橋へ
 御繼職御密謀にて御毒害被_レ爲_レ成候儀にて外夷來
 船の事も烈公様より外夷へ御密使御誘引故の儀故
 今更詮方無_レ之候事の由に申成し此二ヶ條を以て
 烈公様へ無實の罪狀致_二羅織_一候て自今儉安畏戰の
 内情押隠し候様の取計重々可_レ怪事に候其上井伊
 氏は掃部頭病死の體に致し候儀は勿論愛麻呂へ意
 外の少將拜任申付更に内外諸藩反覆の程相恐れ候
 哉一旦有_二栖川宮_一へ御約定に相成有_レ之候和様御方
 當將軍様へ御入輿の儀申立粗御治定に相成候由に
 候是等の儀は於_二主上_一は決して思召に相違致候得共
 今更彼是御申出し被_レ遊候節は又々前々同様の多
 亂出來候に付無_レ據御承知に相成可_レ世哉の由に候

是等は總て即今於_二征夷府_一當今出頭有司の取扱に
 て若狹守を以て九條殿下の下知相待及_二取計_一候儀
 詰る處一言にても御聞届けに無_レ之節は速かに逆
 罰相加へ可_レ申勢冠履倒置の御時勢愁歎の外致方
 無_レ之事共に御座候尤先年來皇居御修復向の危略
 誠に恐入候事共多端に御座候得共逐一申述候も餘
 りの儀に付荒増當今の時勢のみ書取申置候段猶御
 斟酌御不審の廉々具に口上を以て可_二申述_一候段分
 て可_レ然御内洩奉_レ願候以上

申十一月

幕府勅書返納を水戸中納言に命じたる時示したる
 廣橋光成の尺牘(安政六年己未十二月)に曰く
 昨年八月八日水戸中納言へ被_レ下候勅諭御書付并
 添書共速に返納有_レ之様水戸中納言へ可_レ被_二相達_一
 此段申入候事

光成

酒井若狹守殿

勅書回達を水戸中納言に命じたる幕府の達書(文久

二年壬戌十二月十七日)に曰く
 先年御渡の勅諭其御諸家へ御觸示可_レ被_二成_一の處井
 伊故掃部頭等不都合の取計致置候に付此度御承奉
 相成候様被_二仰出_一候就ては源烈殿遺志被_レ爲_レ繼御
 精勵被_レ爲_レ在候様被_二仰出_一候

野村鼎實說話に曰く

安政五年戊午の春老中堀田備中守が上京して只管
 外交條約の勅許を請ひたるに朝議確として動かす
 備中守東を顧れば米使が幕府に對し條約の印信を
 促すこと星火より急なるに西を望めば叡慮金石よ
 りも堅くして申請したる目的一も達する能はず進
 退維谷まる折柄禁裡付武家都築駿河守彦根藩り長
 野主膳と事を謀り九條殿に入説する事を勤む因て
 主膳の手蔓にて先づ其臣島田左近に利を以て結託
 し九條殿に謁し巧言以て條約の勅許なき時は時事
 益困難となり公武の間も確壁を來たし公卿方の不
 利となるは必然に有_レ之此の場合外交の事を關東
 へ御任せになれば一舉兩得公武の折合もよくなり

殿下御初公卿方の御爲になるとの説を進め九條殿聽て同意を表し傳奏をして外交の事は幕府へ御委任云々の勅文を草せしむるに至り備中守も志を得たりしが朝廷にて議論起り中山大納言正親町三條大納言を初七卿の上書せる要旨は今の幕府は勅に應せずして上を誣罔すること著し倘し外交の事を關東に任せらるゝ時は天照大神以來赫赫たる神國の國威を墜すに至らん皇祖に對し恐懼に堪へず三家を初諸大名の意見を問はるゝ事肝要なりと云ふに在り堂上八十八人も同然の趣旨を奏す爲に主膳の策も敗れ九條殿の意見も行はれず備中守失望して東歸す是より先皇上には宸筆を染めて宣命を作らせられ大納言徳大寺公純に命じ之を齎らして伊勢神宮に奉らせ大納言中山忠能を石清水神社に權中納言正親町三條實愛を加茂下上神社に遣はして外寇掃攘と國家安寧とを祈らせしめ玉ひ此間は玉體自ら清涼殿の東庭に下御して遙かに神宮を拜して又賢所を拜させらるゝ事一夜も怠らせ玉ふこ

となしと云ふ其御言葉の中に二千五百年の國體朕が世に至り之を辱むる事あらば何の面目ありて祖宗の靈に對せんやと遊ばされ左の御製ありと拜承せり大御心の程恐多き事なり
 皆人の心のかぎり盡してや
 後こそふかめ伊勢の神風
 朝な夕な民安かれと思ふ身の

心にかゝる異國の船

又六年己未の冬勅詔返納の幕命ありたる内幕を聞きたるに井伊大老が老中と額を鳩め水戸にある勅詔を奪はん事を謀り京都所司代酒井若狹守をして傳奏の大納言廣橋光成に密議し返納の命を乞はしめたるに廣橋は九條關白及二三の同意者と密議し互に他言を禁じ宸意を矯めて廣橋より酒井宛の書面を交付したる事にて人の知れる通り其文は「昨年八月八日水戸中納言へ被下候勅詔御書付并添書共速に返納有之様云々酒井若狹守殿光成」とあり固より皇上には少しも御存知なき事なれば廣橋も

官名は書き得ざりしならん然るに參政安藤對馬守が小石川邸に來り中納言の君に幕命を傳ふる時は己の懷中物より夫の書牘を出して之を示し是は朝命であります前年御家へ御下けの勅詔は公邊へ御返納可し有之と云ひ了り之を卷き更に又之を展し京都の人の筆蹟は關東人の筆蹟と違ひます御覽あれとの談話を交へ再び之を卷き又懷にして去れりと云藩の有司其他の人があの書牘を眞の朝命と誤信し返勅論に傾きたるもの多かりし後尙各種の微憑を綜合するに愈以て宸意を矯め發したる事判然し安藤が朝命と偽りたる事にて文久二年壬戌十二月幕府より勅詔回達の達書にも先年御渡の勅詔其御諸家へ御觸示可被成の處井伊故掃部頭等不都合の取計云々とあるを以て益明々瞭々となれり

福島住一説話に曰く

安政中外國處置に關する事を説かん先に米國使節ハルリスとの折衝は堀田備中守の擔任する所なり

續言

三七

しが堀田が繼嗣問題に坐して罷免せられ之に次て太田備後守が再び老中となるや其嘗て外國の事に通曉せるを以て外國御用取扱を命せらる斯くて彼のハルリスの去りて後數月にして英國支那艦八隻は水師提督キーパーの指揮にて使節ロルドエルジンを乗せて浦賀に來る浦賀奉行は急使を以て其旨を幕府に報告する所あり浦賀奉行戸田伊豆守伊澤美作守等出で、英艦の來意を問へば曰く和親の爲め國書を齎らし來る我等登城の上親しく之を奉呈せんと欲す云々(中略)明日の正午十二時までに決答を與ふべし若し時間を誤らば我等艦隊は直に品川に入らんのみと奉行等終に之れに従ふ右使節と約束の結果伊澤美作守は夜の十時に太田備後守の役邸に來り協議を凝らし急使もて書面にて井伊大老に伺ひ出たるに大老は明日登城評議の上にてせんと答ふ斯くては明日正午までに與ふべき回答の期を誤るに至らん依て太田の家臣たる余(住一)は太田の書を携へて大老の邸に到り公用人宇津木六

之丞に面會して取次を乞ふ大老は親しく余を引いて面談せられ太田への傳言を命せられたり其要は英使節との應對は一切備後守に委任すといふに在りき此際大老の舉止を見るに頗る狼狽の色あり聲を打慄はし苦心の體にて將軍の代理として外國人と應對する如きは最も之を嫌はれ國書受領の如き亦太田に一任すと明言されたり大老は平日水戸老公に應接するを嫌はれたる程の小膽なる人と聞しか外國人に對しては尙更之を嫌はれたるが如く此夜の言動の如き一見して小膽なる人物に見受けられたり間部下總守が京に出づる途次京師よりは刻々に急を報し來れるを以て間部が京に入るに先つて非常手段を斷行するに一決し太田備後守は間部の手足として飯塚策助(老探偵)日向幸八郎(掛川舊臣にて一旦追放せし者)二名を急派し又京師方面にては橋本仙太(當時御所の内情に通せる者)長瀬幸助(三井家に關係ありし者)を犬に使ひ彦根の長野主膳九條家の島田左近の兩人謀略を連らし以

て有名なる戊午の大獄をば起すに至れり(中略)此獄は井伊大老が水戸を如何に處分せんとしたるかの點に在り今日まで史上に隠れたる一大秘密の存する所也朝廷より水戸家に下されたる別勅は水戸老公の首謀にて君側に手入(其頃の通語にて今ならば秘密運動)を爲しその結果終に彼の勅諭降下を見るに至りたるものにて君側の公卿等固より罪あるも其根本は水戸老公に在り若し今にして其根本に向つて大斧鉞を下して之を打碎かすんば其禍の及ぶ所恐るべきものあらん大義親を滅すとか今は徳川家の爲めに水戸老公に死を賜ふて將來の禍根を絶つの外なしと是實に井伊大老の考案なりし也大老は斯の考案に就て御用部屋に老中の秘密評議をぞ開かる是れ實に當時の重大案件にして大老より見れば外國問題の如きは之に比しては一小事件に過ぎざりし也左ればこそ彼の國書授受の如きは備後守以下に一任して顧みざりし位也大老の此提議に對する各老中の態度は如何井伊大老が御用

部屋に秘密評議を開きて諮問せる彼の水戸老公に死を賜ふといふ重大案件は如何に評議せられしか間部下總守(鯖江)は今日の根本政策は此外にあるべしと思はれず英斷ありて然る可きかと賛同の意を表し松平和泉守(西尾)久世大和守(關宿)脇坂中務太輔(龍野)内藤紀伊守(村上)等は沈黙して言ふ所あらず獨り太田備後守は肅然襟を正くして云へけるは本件の如きは御諮問あらせらるゝまでもなく斷然御見合せ相成り他に穩便の御處分こそ望ましけれとて諫争の態度にて縷々意見を開陳したるが其要は左の如し

今御三家の一なる水戸老公に死を賜ふ如きは徳川家ありて以來の重大事件にしてよし將軍の權力を以てすればとて少なくとも御三家の他の二家は申すに及ばず御三卿御家門にも御評議なくては叶ふまじく又一方朝廷に對しても御伺出をも要すべく加之水戸老公に死を賜はるからには水戸老公の持論に賛同しつゝある薩長土宇和島等の諸侯も何

とか處分を要することゝならん若し斯る嚴重の御處置ありたらんには如何なる反動の起り來るあらんか内亂の生せんことは必然ならん若し一旦内亂の起ることあらば英佛魯の諸外國は其機に乗じて如何なる大謀を廻らして我が國に押寄せ來らんも測り知るべからず是國家存亡の分るゝ所也今日の御諮問は之れにて御見合せ相成他に穩便の御處置ありて然るべし云々

大要右の旨意にて太田備後守は死を以て井伊大老の提案に反對したれば其日の評議は一塵白けて他に何等の存寄を申述ぶるものもなく止みぬ其翌日備後守は御役御免の御沙汰を蒙るに至れり又次に内旨といふ名義にて慎みを命せられたりこは英國に對する外交取扱ひは備後守の專斷に依るとて也此一事の如き井伊大老の朝令暮改の一端を見るに足る前述御用部屋に於ける秘密評議は備後守が自家の公用人牧田定右衛門に洩らせしを余(福島氏)は牧田より極内密に當日の事を聽得たる者に

て世には餘り洩れざる安政史上の一大秘密也(中略)是に由りて觀れば水戸老公に死を賜はんとせし大老の提案は如何なる評議改にてか國永蟄居に變更されたるを知るべし舊主人の事にて申すも如何はしきことなれど水戸老公を九死の中に救ひたるは太田備後守が死を以て争ひたるの力與りて功ありと信す

櫻田騷動記に曰く

井伊掃部頭殿御届之直書

一今朝五ツ時過登城掛け外櫻田松平大隅守門前より上杉彈正大弼辻番之間にて狼籍者鐵炮を打懸凡二十人餘拔連駕籠を目懸け切込候に付供方之者防戦致し狼籍者一人討留其餘は手疵深手等爲負候に付悉く逃走り候拙者儀も捕押方指揮致候處怪我致候に付一と先致歸宅候尤供方を始即死手負之者別紙之通りに御座候以上

三月三日

即死手負人之書上げ

深疵	日下部三郎右衛門	手疵	片桐權之丞
即死	川野忠左衛門	手疵	河村 軍太
手疵	櫻井伊三郎	手疵	小海原秀之丞
即死	柏原徳之丞	即死	加田九郎太
手疵	永田太郎太	手疵	草薙鐵五郎
手疵	松井定之丞	手疵	萩原吉次郎
薄手	越名源八郎	薄手	三枝 甚藏
薄手	渡邊 東太	薄手	水谷 求馬
薄手	草履取吉田多助	手疵	陸尺勝五郎
手疵	陸尺 彌右衛門	總人數合	十九人
高七百石	刀番當日供頭	杉原重之進	

右之者掃部頭殿供頭にて騎馬跡乗也亂防之砌第一番に屋敷へ逃歸り直様押込置候由にて木股清左衛門と申國家老到着之上咎め筋如何様に相成候哉後評を待

夏目外記

右之者非番にて主人登城玄關迄見送り未門前に詠居候處重之進欠付候に付直様飛出候て場所へ駈付

候處最早主人掃部頭殿變死被有之候に付乗物へ抱入殿御安體にて一と先御歸宅に相成候間御供之面々相揃候様大聲を上げ觸廻り候に付散亂致し候供方處々より相集り候得共陸尺間に合兼供方之侍昇入候處内藤殿之陸尺當日主人病氣届致し登城休日にて陸尺部屋へ参り合手傳候由

玄關番手疵不詳 鷲切助太郎

右之者直に場所へ驅付働拔群にて夏目鷲坂兩人並に草履取多助彦根藩家老出府之上別段稱美有之由世上之沙汰にて實説未相分風聞を記す

閏三月五日朝井伊掃部頭殿家來木股清左衛門より御老中脇坂中務大輔殿へ差出候伺書

一當三月三日登城懸け掃部頭義櫻田御門程近にて浪人體之者共に被殺害候折節雪降咫尺不辨と者乍申供方之拒防不行届之仕合僅計の浪人假令如何の狼籍に及候共即時に壓捕勿論之儀に候處不_レ及其儀_ニ纒一兩人討留其餘は逃去候當家耻辱誠に以奉恐入候其上前文御届掃部頭名面にて奉

申上候段不吟味千萬是亦奉恐入候私詰合候は右様の義は仕間敷奉存候右不調法御咎め奉候候且思召有之御役御免被仰付今度之始末世間一統存罷在種々之取沙汰候上は當家御取潰しの儀者必定と家中一同覺悟仕居候乍去先祖直政直孝之武功を被思召其儘御立置被下候は此後國持外様之諸侯方此度之儀に紛敷異變万一有之節者家名御取潰に有之候は其節依怙之御沙汰と可稱哉若亦當家之振合を以家名被立候は御政事之批判世上に甚敷候而者是又奉恐入候儀に御座候依之掃部頭不覺悟の始末も家中總而奉恐入居候間御政路の御沙汰奉願上度此段先祖之忠節を被思召聊たり共家名御立被下候は難有仕合に奉存候左候は家中之者共領地の百性に至迄當家不覺悟に依て無餘儀御政事通家名御取潰被仰付候趣篤と申聞心得違無之様及利解御指圖を相待閑靜に退散可仕覺悟に御座候此段奉申上候以上

閏三月五日 木股清左衛門
脇坂中務大輔様

幕末見聞録に曰く

水戸浪人安藤對馬守を坂下御門前に於て襲撃せし件

文久二年壬戌正月十五日浪人體之者七八人安藤對馬守殿登城掛坂下御門手前にて狼藉もの鐵砲打掛け拔身を以て左右より取掛り候次第右之書附右安藤對馬守より届書左之通

一今朝登城掛け坂下御門御番所手前狼藉者鐵砲打掛け七八人拔身を以て左右より駕籠へ切掛候に付供之者防戦いたし候狼藉者六人打留其餘之者逃去り申候拙者儀も捕押等指揮致怪我致候坂下御門御番所手當致候得共出血も有之候に付一先歸宅致候供方者手負之者有之候間相糺追て御届申達候

正月十五日

安藤對馬守

文久二年正月下野人河野顯三越後人川本杜太郎水戸人平山兵介小田彦三郎黒澤五郎高島總次郎川邊

佐次衛門等老中安藤對馬守を坂下門外に要撃す對馬守傷を負て走り免る河野等或は鬪死し或は屠腹す既に井伊掃部頭死し又對馬守負傷せしより幕府の勢焰も頗る熾し方向改まる所あり三月近衛鷹司兩家の謹慎を解き四月青蓮院宮謹慎を解かる五月尾張前大納言一橋刑部卿松平春岳其他の謹慎を免し尾張以下登營將軍に謁す即ち春岳をして政務に參與せしむ五月大原左衛門督東に下り將軍に入朝を傳ふ島津和泉之を衛る其歸路薩州の士英國人を生麥に斬る是月脇坂淡路守を以て老中となし老中内藤紀伊守を罷め六月老中久世大和守を罷む朝廷にては九條關白を罷め鷹司近衛二家を復飾せしめ近衛左大臣を以て關白となす九條前關白落飾す閏八月井伊掃部頭に命して其臣長野主膳を死刑に處せしむ九月三條前内大臣に右大臣を贈り水戸前中納言に従二位大納言を贈る十月勅使三條中納言姉小路少將攘夷の詔を齎らして東に下る十一月二十日井伊掃部頭(直憲)以下の封土を削り及び責罰を

加ふ

井伊掃部頭

其方父掃部頭重き御役相勤御幼君御輔佐に付ては萬事御委任被遊候處奉對京都被惱宸襟候様の取計致し公武御合體方にも指響き天下人心不居合の基を開き賞罰黜陟共我意に任せ賄賂私謁の儀不尠上の御明德を汚し不慮の死を遂候に至り候處奉欺上聽候段追々達御聽重々不届に被思召候に付急度可被仰付處死後の儀にも有之出格の御宥免を以て其方高の内拾萬石被召上之

間部下總守

其方儀勤役中外夷取扱の儀に付ては奉對朝廷不正の取計有之重き方々へ不相當の仕向致し右は故井伊掃部頭の意を受候とは乍申重大の事件輕易に心得公武の御一和を失ひ天下人心不居合を開候段追々達御聽御役柄をも不相辨次第不束の至に付急度可被仰付處格別の思召を以て先

達て村替被仰付候一万石被召上隠居被仰付急度慎可罷在候

安藤麟之介

其方父對馬守勤役中不正の筋有之先達て御咎被仰付候處猶追々達御聞故井伊掃部頭横死の節奉欺上聽候儀御後暗き取計御政道も不相立次第且京都より被仰進候儀も有之處因循遲緩の取計致し朝廷を不重掃部頭死後も其意を受け非義を行ひ外國人應接の節不分明の事共有之趣相聞其上重き御役儀乍相勤賄賂に汚れ家事不取締の段不埒に被思召候依之其方高の内二万石被召上對馬守永蟄居被仰付候

右の外堀田見山酒井修理大夫を蟄居せしめ藥師寺靜山の隠居料七百石を削り松平謙跋守蟄居松平伯耆守溜間詰を免し松平和泉守一万石舊地戻隠居小笠原長門守隠居脇坂水謹慎久貝遠江守二千石召上指控水野左京大夫淺野伊賀守松本出雲守大久保越中守駒井山城守黒川備中守石谷長門守岡部土佐

守池田播磨守指控伊藤長壽院與醫を免する等責罰各々差あり

開國五十年史條約改正の項に曰く

維新改革の後既に四年我邦も著しき發達進歩を見たるを以て夫の安政年間に幕府が締結せる屈辱的條約を改正すべきは正に國家の威嚴を維持せんが爲に必要なるを證するに至れり爾來時に或は内治緊急事件のため或は韓國問題等の爲に屢阻害せられしと雖此條約改正問題は恰も英國に於ける愛蘭自治問題の如くに我政治上の一大難關たりしなり民心之が爲に幾回か動搖し内閣は之が爲に數次更迭し或は元老内閣と爲り或は人才内閣と爲りしと雖曾て此問題を解決處理すること能はざりき抑も曩に幕府が締結したる通商航海條約に於ては開港場に居留地を設け治外法權の制を定めたり今其條約中頗る我に不利なりし箇條を擧げなば概ね左の如し

一通商居留のため横濱神戸大坂長崎新潟函館の六

港並に東京を開放すること

二治外法權即ち日本法廷は外人を審判するを得ざるの制を許容すること

三輸入税は最低額なるべきこと

以上の如き條件は永久保留すべきものにあらざることを認めたる諸國は其條約に於て明治五年以降相互締盟國の承認を経て條約の改正を爲すを得べき一箇條を附加したりき而して其期に至りしと雖條約諸國は孰れも改正の準備をなさず要は日本が對等なる條件の下に基督教主義列國の間に位するの適否如何と云ふにありき明治四年岩倉大使一行の歐米に赴きしは列國と天皇の一吏員たる將軍との間に締結せられたる不正不法の條約を改正せんとの目的に出でしものなりしが不幸にして其素懷は破れたり而して我政府は國家の法律習慣未だ完備せざるが爲に條約改正の保障たらしむべきものなきを認めたり然るに又一方に於ては締約十八箇國が聯合商議を約したるに彼等は商議の根本とな

すべき共通問題を得るに困しみ遂に某々國は低額輸入税を主張し又某々國は日本法律の治下に其國民を置くを快とせずと云ふにありき然るに獨り米國は別箇に條約を締結せんことを諾し而して爭議の箇條は讓歩せしと雖猶ほ其新條約は各條約國との改正條約總へて成立せし後同時に實行せんことを要求せしが爲に談判途に調はず斯の如くして條約改正の業は依然として寸効を擧ぐるること能はざりき

今茲に條約改正に對する彼我要求の梗概を叙述する亦必ずしも徒爾なりとせず抑も我邦は列國より多大の國威を損傷せられ爲に其生得權を奪取せられたることを主張して今や其生得權なる法稅兩權を恢復せんことを要求し自己の領内に外人の法廷を有し又自から稅率を定むることを掣肘せらるゝは獨立文明國の體面を毀損するものなるを主張し若し列國か此二點に於て讓歩せんには我は之に換ふるに全國を開放して外人の旅行商業に自由なら

しめんと欲せり然るに列國は日本が全國を開放すとも商業上何等の大利益を生せざるべきが故に其殆ど無用なるを抗言し又領事裁判の撤去に反對したり固より日本法官の伎倆と品性とに充分の信用を置けども歐洲法官の有するが如き習慣と地位とに缺くる所あるを唱へ加ふるに日本の現法律は歐洲人の見地よりすれば不完全にして日本法官の無經驗なるが爲に或は法の錯用を爲すなきやを恐れたり蓋し列國は南米諸共和國に移住せる自國民が其所在地の法律に服従せることを忘却したりしなり

爾來我國に於ける條約改正の歴史は明治二十七年に至るまで實に失望と煩悶とを以て充たされたるものにして同年始めて英國ローズベリー内閣の卓見なるあり挺然能く本問題解決の主動者と爲り遂に四十年間我邦が蒙りたる損害屈辱は幸に一掃せらるゝに至れり

銅像と名教と題する記事(國民新聞六二五七號)に曰

銅像は面貌ある國民的教科書也其人の功徳はこれによりて永遠に語られ且つ記念せらるクロンウエルの銅像を建てよそは英人の事なり湯武の銅像を建てよそは支那人の事也我國に在りては或は自由の名に於て或は聖賢の名に於て弑逆廢立の人を寛假せず是故に思想界の汎濫統一なき今日と雖も未だ嘗て馬子義時の徒の銅像を建つる者を聞かざる也然れども其史蹟未だ二人者の如く顯明ならず猶晦蒙に附せられつゝある者に在ては好事の徒往々奇異の辨を試み或は種々の私情に牽絆せられてこれが銅像を建て世人をして其功徳を紀念せしめんとするありこれ實に世人を謬するのみならず一國の名教を害はむとする者也井伊直弼の銅像の如きは即ちこれにあらずや直弼が爲めに開國の功をいふもの彼が嘉永六年八月幕府の諮問に答へたる二回の存寄書を以て金科玉條となす島田氏の「開國始末」中村氏の「井伊大老と開港」共にこれを引用

せり然れども彼れの所謂開國と稱する者は海盜的標掠主義にして畢竟洋人を畏怖するの餘に出で其の眞意は「寛永度の如く兎角彼を寄せ付ざる處良策と被存候」といへる一語に盡きたり世間豈斯の如き開港論者あらんや中村氏の著特に其一語を省略せられたるもの甚た氏が立論の苦を察せずんばあらざる也然も彼が開國議に付て寸毫の貢獻なかりし事は諸氏既にこれを詳論せり予は更に進で彼が朝廷に對せし所業を指摘して銅像の價値を論せむとす島田氏は曰く「違勅の二字は齊昭の上書に見へ梅田頼等處士の文書に見へて要するに直弼と反對の位置に立ちたる政敵が使用したる言語に過ぎざる也」と中村氏は曰く「違勅の事實なし唯奏聞の手續を踏む能はるのみ」と違勅の二字果して政敵の使用したりし言語に過ぎざる乎彼に果して違勅の事實なかりし乎請ふまつ繼承問題よりいはず安政五年三月二十二日先帝は傳奏議奏等を堀田正睦の官舎に遣はし幕府西城の事は英傑年長人望の

三件を以て撰定すべきの内勅を傳へしめ給へり此内勅中三件の文字は長野義言が島田龍章と結托して九條關白を動かし鷹司太閤の參朝せざるに乘じ私に「オニギヤカ」といふに改められたりと雖も傳奏は猶聖意の年長の人に在ることを附箋したりき然るに直弼の出て大老となるや一意自家の權勢を張るに專にして更に此の聖意を顧みることなく紀伊公子慶福を迎せり中村氏は曰く「是日(六月廿二日)紀伊侯を將軍の嗣子と定むるの勅允達せしかば二十五日を以て公表するに決し云々」と予輩は未だ慶福立儲の勅允なるものを見ざるを遺憾とする者也

つぎに條約調印問題に移らむ海警の報一たび起てより先帝軫念し給ふや久し屢々勅を幕府に下して國威保全の策を諮問せらる聖意一に國民と休戚を共にし給はむとするに在り其一端は數度の勅諭に現はれたり「今度は皇國の御一重大事故皇國人心の所歸して處置候積」とも仰せられた堀田正睦が

條約調印勅許のことを奏請するや「家康以來の良法變革のことは闔國人心の歸嚮に關す故に宜く猶三家以下諸大名へも被下台命一再應衆議之上可有言上」と勅せられた水戸家へ勅せられし内勅には「右は國家の大事は勿論徳川家を御扶助の思召に候間云々」とあり天意至公徳川氏の舊臣たるもの今日常に其優渥なるを感泣すべきのみならず公議輿論を採用あらせ給ふ立憲國體の基因は實に先帝の時に胚胎せると稱するも不可なき也且つや當時の賢侯名相いづれも攘夷の一點に固着せるものにあらず故に輿望の歸する慶喜を立て、衆議開港の已むを得ざるに在る所以を伏奏せば素より英明に坐し、天聰を挽回すること蓋し難きにあらざりし也然るを直弼は衆議の所在を奏聞せず擅に調印を斷行しこれを奏聞するに當てや屆乘同様に宿次奉書を以てせり先帝赫として宸怒あらせ給ふ「然るに昨日武傳披露の書狀披見候に誠に以存外の次第(中略)如此至大至重の事追々増長苦心候此の

一大事の折柄愚昧(御名)怒ひに帝位に居り聖跡を穢し候も實に恐懼候間誠に以歎か敷事に候得共英明の人に帝位を譲り度差當祐宮有之候得共天下の安危に拘る一重大事の時節に幼少の者に譲り候事本意なき事依之伏見有栖川二親王の中へ譲り度云々(全文前に在り)との宸翰を下し給ふに至れり文中祐宮とあるは畏くも今上天皇御幼時の御稱號也天下危急の時幼帝を立つるの不利なるを思召し御父子の御親情を忍ばせてこれを年長者たる二親王家に譲り給はむとするの聖意と自家權勢の爲めに大奥の婦女及び群小の徒と迎合して幼主を立てむとせし直弼の心事とを對照せば其間實に天淵も管らざるなり九條關白はこの宸翰を拜して恐懼措く所を知らず奏議して調印の事情を問はせ給ふべく三家大老の内一人を召させ給ふことなれり中村氏は直弼の爲めに辨して曰く「幕府には尾水越三家處分の議あり將軍薨去の事あり是際間部閣老は缺くべか

らざる幕閣の一人なれば容易に江戸の地を離れ難き事情あり是に於てか大老は關東の事情を關白に辨疏し且反對派の動靜も探らしめむが爲めに義言を京に遣はしぬ」と長野義言彼何者ぞ彼は直弼の一客臣にあらずや彼をして如斯重要なる使命に當らしむるは朝廷を侮辱せるもの也知るべし直弼に事情奏陳の誠意なるもの始めよりあることなく其義言を遣はせしは全く堂上志士を羅織せむが爲めなりしを且つそれ直弼が幽屏せし尾水越三家の如きは先帝の特に依頼し給ふ所にして召して以て大事を諮問せられむとせしものにあらずや是に於てか八月五日再度讓位の御趣意書とはなれり「去る六月廿一日迄一事の往復も無之只々無據次第にて條約調印爲濟候由届棄同様に申越候事如何の處置に候哉嚴重に申せば違勅實意にて申せば不信の至りには無之哉依之右模様及尋問一度評議の上三家の輩又は大老上京の事申遣はし候得ば三家は押込て不爲致上京大老も差支申立延引

の旨申越(中略)所存一事も不立儀は實全(御名)薄徳の故に候間云々(全文前に在り)違勅の文字は齊昭の上書を待つ迄もなく政敵の使用を待つ迄もなく先帝自から宣ひし天語にあらずや中村氏は曰く「大老は主上が能く其朝廷尊崇の誠意を酌ませられ決して已れに對して悪しき感情を有し給はざることを信せり」と直弼果してかく信せしならむにはこれ聖天子を木偶視せるものなり而して氏は又曰く「さればこそ假條約調印の後世論囂々として違勅の非難ありし際井伊の心事は朕好く之を知れりとの内勅ありけるなれ」と而して其内勅なる者は八月十八日を以て長野義言が宇津木六之亟に致せる書狀に「彦根は其心得にて可有之義候もかねて其心得はよく承知也との御内勅難有仕合に奉存候」とあるに過ぎず八月五日にかゝる御趣意書を下されし先帝がかゝる内勅を下さるゝの理あらんや義言の姦謀誰れか其肉を咀て甘心せざるものぞ九月十七日間部詮勝上洛志士を捕へ兇

焰堂上に迫らむとするや先帝は宸翰を近衛左府に與へて鳥渡私存念極内々申試候宜御勘考希入候別の事に而も無之候實に段々差縫れ内部の所置暴計心痛候何卒薩州杯へ密々仕損無様被成候而姦賊退治は成間敷や段々堂上へ手を掛候様成而は誠に々々朝威廢し歎か敷大に混亂候間何卒御勘考願入候と宣へり單に違勅の語のみならず姦賊退治の語は宸翰の中に拜せるゝに至れり果然彼は野獸的本性を現はして廟堂の上に咆哮し先帝の肱股たる皇族措紳を落飾幽屏せしめ先帝旨を傳へて其期を稽緩せむことを望ませらるゝや彼の命を受けたる酒井忠義は陛下若し關東の願意を御聽許なき時は忠義其邸に就てこれを海島に移さんのみと恟恟するに至れりこれをしも姦賊といはずしてはた何とかいはずや而して島田氏中村氏等は此際詮勝が調印の勅許を得たりといふも孝明天皇紀によるに詮勝はた々天朝を欺罔して一時を彌縫したるに過ぎず決

して勅許を得しにあらすまた勅許せらるべき筈なし井伊家の歴史は先天的不臣の痕蹟を留むる者也祖龍家康が井伊氏をこゝに封するや其名は禁裡守衛といふと雖も其實は天子の番人となせし也故に京畿一朝事あれば乘輿を彦根に移すべく其所には玉座の間を設け大津には早舟を懸せられありしにあらすやさればこそ天災地變ある毎に井伊氏駕を奪はむとする風説は幾度か京縉の心胸を寒ふせしなれ其偶々帝室より恩賚ありしを以て朝廷依頼の渥きによるものなりといふものありと雖も諺に恐き狗にはまづ餌を與へよといふの語あるを知らざるべからず直弼は國學者なるを以て勤王の心に厚かりしなといふものありと雖も國學者や歌讀必ずしも勤王の人にあらず幕閣の爲めに廢帝の故事を詮鑿せしを以て暗殺せられし埒次郎は國學者にあらずや今上江戸城に入らせ給ふに及び「この上の、世の中いかに、なりやせん、君が千代田を、人に取られて、」との歌を詠じて禁錮せられし井上文雄は

歌讀にあらずや予は如何にしても直弼及び其左右に勤王の人ありしを認むる能はざる也再び言はむ銅像は面貌ある國民的教科書也今上の勅語に曰く「克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして教育の淵源も亦此に存す」と聖旨炳として日星の如し克く忠なる人克く孝なる人とは違勅姦賊果して直弼如き徒をいふ乎偷盜にも三分の理ありといふ馬子も義時も彼自身よりいはしめば相當の理窟はあるべししかも馬子義時の銅像建設せらる時我國の名教は如何せんとするや若しまた姦賊直弼の銅像を建て天下の大戒を百世に標せむとするなりといはば予はた何をか云はむや

勤王水戸烈士傳上編 卷二 實記

贈正四位安島信立傳

安島信立字は思誠通稱は彌次郎改て帶刀と稱す初名は忠誨後信立と更め峨興と號す水戸藩士戸田三右衛門忠之の第二子にして戸田銀次郎(後忠大夫)忠敬の弟なり文政十二年己丑の秋藩主哀公病篤くして繼嗣未だ定まらず哀公の介弟(敬三郎)現に礪川邸にあり當路の權臣其英明を忌憚し竊かに謀て清水齊彊(幕府の三卿)を迎へ嗣とせんとす議論沸騰人心安からず信立同志と共に死を誓ひ江戸に抵り權臣に陳して曰く介弟現に存す豈之を捨て他に求むるの理あらんやと至誠外に顯はれ權臣の密計爲に沮む適ま哀公薨す遺書あり乃ち大事是に基きて決し介弟封を襲く即ち烈公なり時に信立年僅かに十八天保七年丙申九月安島彦之允信順に養はれ出でて其家を繼き小普請組

ニ列シ祿百五十石を食み十年亡亥正月小十人組となり七月郡奉行見習に遷る是の冬信立世子輔導及職制規を烈公に建議して曰く

乍^レ恐奉^ニ申上^候來春御歸國被^レ遊御政事御直に御下知被^レ爲^レ在候儀經界學校の御大業に付而は殊更に御優待申上候儀御座候扱第一に申上候儀世子御國の本と申候得ば乍^レ恐鶴千代磨様御教導是より御大切は無^レ之儀と奉^レ存候恐多き事申上候様に御座候得共御中興精々御丹精被^レ遊折角御成功に罷成候而も萬々一も鶴千代磨様に思召被^レ爲^レ違候事被^レ爲^レ在候は御中興も忽衰弊に趣候道理に御座候得は御事業之萬世に及候も又御一世にして止候も偏に今日之御教導有^レ之御事に而邦家興廢之御基に御座候間實に御大事と奉^レ存候然ば第一に御

侍讀之人物學識君臣之大體を辨候忠良端正之者を御撰被遊次には左右之御近臣皆忠誠質直之者を御撰に罷成御輔翼申上候儀當今之御急務に御座候賈生治安之策に皆選天下之端士孝悌博聞有道術者以衛翼之使與太子居所出入故太子乃生而見正事聞正言一行正道左右前後皆正人也夫習與正人居之不能無正猶生長於齊不能不齊言也實に確言と奉存候間此語は深く御賢慮被爲入候儀は御天授に而邦家之御大事無此上儀に御座候處御物心も被爲付段々御思慮も御定り被遊候處に被爲在乍恐下々之情を以て申上候得ば敏才非常之者は萬事論り早く格別に相見候得共又夫丈に物欲にも移り易く少く教導を失候得ば却而本性を賊ひ放蕩無頼に陷候者多く御座候又性質尋常に而格別にも無之者は又夫丈物欲も薄く教導を得候得ば質直之正士に罷成候儀下々之通情に御座候故に質に勝候性質之者は教諭も致易く才

に勝候者は又教諭も夫丈大切と申形に御座候右様とは御次第も違ひ候得ば譬へ申上候は恐入候得共一體御明敏之義は御天授に被爲在候は何卒其御天授を幾重にも寛大に御ゆつたりと御引申上候様仕度義と奉存候一體御非常に被爲在候而も御思慮も未定御教導に寄りて何れへも御動被遊候と申御氣味も可有御座哉と奉存候只今御思慮之不定内御侍讀左右へ御目鑑を以て相當之人物御撰被遊御輔翼申上候儀實に專一之御急務と奉存候扱又御近直御膝元何れ之無御指別奉勤仕候様被仰出候儀は乍恐格別之尊慮と奉存候返す返すも邦家之大本に被爲在他日の興廢は偏に今日の御教導に被爲在候御事と奉存候間深く御賢慮被遊候こと此段不敬の義迄奉申上候一申上にも不及義に御座候得共乍恐御政事之御先務と申候而は賢才を舉而御委任被遊候より御先務は無御座儀と奉存候此儀は御初政より御配慮被遊候義に而非常之御黜陟被爲在人才追

々要路へ御任被遊候御事には御座候へ共其大體を以而申上候得ば君は執政大夫を撰執政大夫は又諸之奉行を撰諸奉行は又夫々之小吏を撰候事に而執政大夫に得其人候得ば下諸之小官賤吏に至迄自然と協其職は道理に御座候間君人之御任執政大夫に其人を御舉被遊候より肝要は無御座儀に御座候得共皆世祿に相成居家筋を以而夫々御任被遊候御制度に御座候而は兎而も第一之執政大夫へ得其人候事は不相成賢才御撰舉之實に叶候儀は御六ヶ敷事と奉存候然者是非役祿之御制度御立被遊縦ひば平士之家より物頭職へは無異義御撰舉に罷成り又物頭より參政執政へも無異議御任被遊人物に寄候而は平士之家よりも段々參政執政の立場へも御拔擢に相成候様に無御座候而は人才を御自由に御撰舉は不相協儀と奉存候且又人物によりては何れへも御拔擢に相成候儀に御座候得は人々心得も違文武も自然勉強仕候様罷成候間從而人才も出來候儀奉存候尤御英斷

を以て追々非常之御拔擢も被爲在候儀には御座候得共進退に従ひ有職之時は祿を賜辭職仕候得ば又本祿に復候様に無之候而は御祿に限りある御事に候得ば遂には非常の御撰舉被爲在候共第一其俸祿に御指支出來候道理と奉存候左候得は役祿之制度は實に賢才を舉の良策と奉存候間始終御賢慮被爲在候様其制度之御立方は如何様にも御良法可有御座儀と奉存候乍併當今之御先務を以て申上候得ば右役祿等之義は全く終始之御處置と申儀に而指當り來奉御歸國被遊萬事御直之御下知被爲在候儀甚大切之御機會と奉存候得ば非常之御英斷を以而上執政より初め大に御黜陟被遊上下各協其職候様御處置被爲在候儀第一之御專務と奉存候君臣同體上下一心と申様に一致不仕候而は御中興一體に御行届には決而不相成儀に御座候上下一致仕居萬事御手を下し被遊候儀に御座候は縦ひ天下之大事に御座候とも何之難き事の可有之哉と奉存候左候得ば政府之

儀は勿論其外御政事に携り候職分之儀は縦ひ才氣有之者に御座候而も毫末も趣を異に仕候もの又は少も不正を懷候者は速に御除被遊才氣は乏候共專御盛意を繼ぎ正路に一致仕候者を御撰被遊候様仕度儀と奉存候一方正路に候而も又一方は不正と申形に而區々に相成居上下一體に一致不仕儀乍恐當今之事情に而御中興之大病と奉存候間深く御賢慮之上御英斷奉祈念候儀御座候扱又此度之御處置非常之御英斷被爲在乍恐君人雷霆之御怒上下耳目を改候儀に而退奸邪舉賢能之御機會千載之一時と奉存候間於此時人才非常之御拔擢被爲在候儀爲邦家祈念此事に奉存候則同體一心之御處置返す返すも當今之御先務と奉存候間頻而御賢慮被爲在候様此段奉申上候

存候得ば第一學頭之職分へ御任被遊候人物甚肝要之御事と奉存候扱又古今學派朋黨を以て天下國家を害候儀世之戒と仕候處小人朋黨之説に至候而は論にも不及儀に候得共學派朋黨之説起候得ば小人之邪説も亦從而行はれ候儀諸侯朱子學開齋派杯申説を唱る中黨派を立候儀兼而承り及候事に有之第一は宋の代各有名之士學派を以て天下の大害を成候儀後世之戒に御座候得は兼而御賢慮被爲在候御事と奉存候得共乍恐萬一一旦之人情時勢を以て御處置被遊候儀に御座候はば後世大害之端を御開被遊候御事にも至候儀と奉存候間深く御遠慮被爲在專一に黨派之端を御絶被遊候儀御大切と奉存候萬事初に正道を以て處候而も猶不正に傾候儀自然之道理に御座候へば況や初に不正を以て處候は遂に不正に陷候儀勿論に御座候間一統法則と仕候學頭之大任萬一初に失其人候得ば第一大切之御主意も不立様罷成可申且學派黨派之端總而後世之利害は此職今日之當否に定

候儀と奉存候間實に御大事に御座候且又學校之儀は四方賢不肖となく耳目を拭御風化を仰居候儀に御座候得は事々皆天下法を取事にて萬一御失徳之儀御座候は一國一事之儀に無之惣而天下後世へ御示被遊候事に罷成候間廣く關係仕候儀は得と御賢慮被遊候而御處置に罷成候様仕度乍恐任心得此段奉申上候右體に職外之儀を申上候様恐入候得共心得候儀を不申上罷在候も却而不忠之至と奉存候間恐多き事迄申上候儀且來年御歸國之御下知は水國御中興之成否を定め扱又水國御中興之成否は偏に天下之興廢に拘候事に而御歸國社實に御大事と奉存候間不願憚申上候事に御座候甚不忠之儀を申上候様に候得共當今天下之事勢天時人事を以て考るに實に内外之憂と可申古語に所謂有可憂之勢無可憂之形名治平無事其實有不可測之憂杯申儀則當今天下之勢と奉存候責而は諸侯之盛衰に御座候得共困窮之至極は一體之姿に而其賢愚從而政事之理不理大概皆推而相

知候儀有之縦ひ偶々有爲之賢御座候共諸侯は諸侯之任に而其一國之事に止り天下に關係仕候儀に無御座況や天下之憂を任候に於而は勿論之儀に御座候第一と申は幕府之御政務には御座候得共幕府之御事は則天下之事勢に御座候得は別に申上に不及儀然は當今其憂に任候者は誰に可有御座哉乍恐三藩之御家に被爲在候得ば幕府之御責にも被爲代天下を御自任被遊候儀第一天朝への御忠勤則東照宮三藩を御立置被遊候深遠之神慮且は威義兩公之御遺意に而實に無御遊御事に奉存候此義は元來尊慮に被爲在候儀に而申上候事に無御座候得共御相續以來最早十年にも被爲及候義に而此度之御歸國は御中興之成否を決し惣而一國一州之御事に無御座神州天下之御爲と奉存候へば尙深く尊慮を被廻候而萬御下知被遊候様にと恐多き事迄不願憚奉申上候

十一年庚子正月信立勘定奉行を命せられ八月小姓頭取となり鷹掛りを兼務す時に烈公水戸城に在り勵精

藩治を圖る信立側近に勤仕し命を奉して諸般の事に力を竭し祁寒酷暑も亦懈ることなし十四年癸卯の春山陵修營の事を建言す其略に曰く

御相續以來中興の御大業追々御施設在らせられ經界學校とも此上の模通り至極御大切に候へ共最早御成功も同様の御事にて僅に十三ヶ年間斯迄御政績を成させられ候儀實に天下之御表則古今に恥ざる事と存し奉り候倍申上候は僭犯の至りに候へ共此上伏して企望仕候は山陵修營の御大義に御座候天朝の御衰微は時勢の變易にて已むを得ざる歎に候得共開關以來皇統の今日に至る迄連綿無窮上下君臣の分天地と共に變替なき御事は宇内萬國の絶て無き所にして獨神州の四海に冠たる所に候然ば御國體に於ても太祖神武帝より以來歷代の山陵時々追遠の御祭祀も絶えず益厚く御尊崇在せられへき筈に御座候然るに曾て御祭祀の絶候のみに之れ無く或は山林となり或は田野となり荒廢に任せられたるは如何なる御事に之あるべくや下民匹夫

の賤も祖先の墳墓荒廢仕り候ては一日も寢食を安んせざる儀況や一天の君萬民の父母たる至尊の御陵斯く迄荒廢に及び候御事申すも忍びざる所にして實に臣子の罪を免れざる儀第一幕府の御大責之に過すと存奉り候處朝家の御事は一概に武家歴世の忌諱する所に候へ共乍ら恐御三家の親き幕府に代らせられ候は申上る迄も之れ無くまして三位の重に在らせられ候へば修營の御大業御家に於て御擔任遊はされ候儀當然の御事と存し奉り候在昔義公の御時楠の墓を御弔祭萬世不朽に表せられ候は御深意在せられ候御事にて山陵の儀も續て天朝へ御上言大義を御達し遊はされべく御端緒に候處其内御逝去終に御大志空しく罷成候由兼々傳承仕り誠に天下の不幸千載の遺憾と存し奉り候然らば則ち義公の御遺志御附託の効も亦自ら今日に在せられ候御事と存し奉り候乍ら去素より一朝夕の以て奏せられべき御大業に之れ無きは勿論に候を敢て今日を期して口口仕り候次第は他にあらず萬世永

く泰平の御世に候は、後の君子を待と申事も御座候へ共世の治亂は天の陰晴あるが如くにて戰爭亂離の世に當り候ては明君賢士も目下の多難に違あらず又後世其時を得大義によりて奮起仕り候者有之ある共今尙荒廢に屬し所在の詳らかならざるあり敵百歳を経候は愈荒廢を極め如何とも考據に由なく相成候は必然の儀と杞憂に堪へざるが爲めに御座候さて施行の御順序に至り候ては淺見愚臣輩の容易に議すべき事に之れ無く候へ共幕府にも近來御改正の砌に候間願くは幕府の御高義に相成候様御處置之あり度存し奉り候尤も御着手の當否に由り事の成敗に拘り候間篤と御賢慮の上衆議をも盡させられ然るべく縦令時々祭祀を奉すること相成らず候とも今にして萬世天地と共に變易の憂之なき様基は立て置れ度左候は、後世又時を得候儀も之あるべく歎尙願くは責て皇太祖の御陵のみは速に追遠尊祖の誠を御盡し遊ばされ候様仕り度臣子の大願此事に存し奉り候誠に此の如くなれば上

は天朝祖宗への御忠節次は義公への御孝義下は千歳義士の憤を御慰め遊ばされ匹夫匹婦も自ら天朝は天下の君萬民の父母たるを仰き尊崇すべく翼戴すべくの義を辨し候事にて尊王の御大忠實に此御一舉に外ならずと存し奉り候仙洞御諡號御建議に付ては四方有志の徒は勿論京師に於ては眞に御高義を仰き奉り候趣就ても天朝御尊崇の儀は天下の頼て望む所に之れ有り益御擔任之れ無く候ては協はざる御事と存し奉り候萬々踰越僭犯の罪恐多く候へ共當今の御大義にして忽かせすへからざる御責負と存し奉り候間申上奉り候謹白

三月烈公江戸に赴き四月日光山の祖廟に詣り六月復水戸に下る信立皆之に扈從す既にして烈公士林に土著を獎勵せんとして諮る所あり信立第一著に之を實行せんと東海岸に近き久慈郡石名坂村に移往することを圖り其内願をなしたる文に曰く

乍ら恐土著之儀に付過日御筆御下け破却之寺地其他地勢宜敷所見分仕候様被仰付一尙又追々尊慮之

趣も奉_レ伺候に付御直に申上候は恐入候へ共全く御物語に申上候心得に而書付奉_三申上_二候東御郡扱下石名坂村に天神山と唱候山御座候處石山を拜領被_三仰付_二久慈水木之海防を御任せに罷成候得は難_レ有仕合奉_レ存候尤小祿之身分自力も無之義に候へは近郷之郷士並禰宜山伏等其外獵師様之者附屬に被_三仰付_二右山の中段又山下へ山を後に住居罷在り久慈水木へは僅に半里餘に候へは便利も宜敷右山より常に海上遠沖を望み候へは洋中之模様も居ながら相分り且又同所之儀は小澤郷より坂上郷へ越候境目に而自ら一つの切所に相成居候得者外夷之外非常之義御座候而も時に取り事に寄候而は乍_二微身_一御要害萬分之一助とも可_二相成_一歎奉_レ存候右山之義は石名坂宿之北後に而松生茂り坂戸邊より見へ候眞弓山等北連山之東之尾崎に而山下の宿は奥州海道に相成居西南は小澤郷北は坂上郷之邊海上は久慈之川口を眼下に臨み夫より南方村松磯崎等海岸より鹿島浦北は北濱筋之海上を一目に遠望

仕候(尤右は先年經界之節に登り覺居候義に而今一應見分不_レ仕候而は確と仕候義は申上兼候)御城下へは少々隔候へ共僅五里餘に御座候間冬之日に而も馬上一時半には御城へ着到可_二罷成_一候ケ様申上候義全く景色等を好み候には無_二御座_一地勢面白く存候故奉_レ願候儀に御座候乍_二併知行之儀は大森大橋丹奈邊に而被_三下置_二候様是者隣村之儀は大へは百姓を手付候にも便利宜敷自由なから石名坂之義は蠶土地貧村に御座候間少々分地に拜領は不_レ得_レ已候得共右海防を被_三仰付_二候儀に候は_レ私を營み候に無_二御座_一候間右隣村に而被_三下置_二候様仕度奉_レ存候若又左様にも無_レ之御城下近所坂戸見川邊寺跡等へ土着仕候義御城下へ之都合は宜敷候へ共第一百姓等人氣も不_レ宜小身に而は勿論全く一分之經營而已に陥り只土着と申名目郷宅一條之妾に罷成尊慮は難_レ有奉_レ存候へ共私儀は乍_二恐本意とも不_レ奉_レ存右様之御儀に御座候へは矢張御城下に御奉公罷在知行所の百姓共を馴_レ候方却而可

然同しくは御免奉_レ願候追々尊慮奉_レ伺候通御手初に御近習より被_三仰付_二候との御事御尤に被_レ爲_レ在候所とても進而罷出候者有_二御座_一間敷候得は乍_二恐尊慮を空_レ仕候儀遺憾に奉_レ存候間前件申上候通海防を御任せ被_レ遊石名坂山へ土着被_三仰付_二候儀に御座候は、一人に而土着之魁可_レ仕奉_レ存候扱其に付奉_三申上_二候彌右様被_三仰付_二候得は本意至極に奉_レ存候所若し時有りて者神州之爲に天地之御患も被_レ爲_レ在北海之御内願被_レ爲_レ協候儀も御座候は、其節は又乍_レ不_レ及北方之魁被_三仰付_二候様此儀は今日に誓而奉_レ願置候事に御座候其外右に付而は内願之節も御座候へ共是は不_レ奉_三申上_二候右は前にも申上置候通全く御物語に仕候儀には御座候處御事情に寄候而は乍_二恐御賢慮被_三下置_二候様仕度謹而奉_三申上_二候恐懼再拜

守)等三支封幕命を以て後見となり政事を攝行す抑も烈公夙に外寇を憂へ兵法を練習し大砲を鑄造し邊防を圖りて海岸各地に砲壘を築き又家臣をして洋學を講究せしめ内は以て衰弊を振起し外は以て威武を奮揚し異日國家非常の用に供せんとすること實に著明なりしに幕府之を疑つて異心を包藏するものとなし藩内の僧侶其他異議を抱くの徒其機に乗して上野寛永寺等の僧徒と謀を通し讒構誣罔する者あり遂に此の奇禍を蒙るに至れり時に執政戸田(忠敬)側用人藤田彪(虎之介)後誠之進)等要路に在るもの禁錮或は擯斥せられ獨執政結城朝道(貞壽)威柄を弄し黨を結んで事を處し政事一變藩内大に亂る信立憂憤に堪へず同志と共に主冤洗雪藩治回復を圖り日夜周旋す幾はくもなく結城其職を罷めらるゝも黨與依然要路に在りて權を擅にす十一月幕府烈公の幽閉を解く而して政事に預かるを許さず信立書を烈公に呈して曰く不_二取敢_一謹而奉_三申上_二候御國動搖之義に追々御懇之御直書御下けに罷成其内勢州より備後守へ申聞

候趣も有之内患之儀も御一洗に可相成御釣合に奉候處尙又彌右衛門罷登候に付旁内外の御事情近々に一變可仕と伺默居候儀に御座候所一位様薨去の趣奉伺恐懼罷在候へ共右御發し前是非御慎御解にも可相成哉と奉存居候處何の御沙汰も無御座一統失望仕候事に御座候乍併御日合無之御發しに罷成候儀に而公邊の儀は不得已御事と奉存候所内患御除の儀は是非御發前に處置可仕と大場の盡力を祈居候事に御座候得共是又何等の御沙汰も無御座結退役には相成候へ共元より國賊を以て憤り居候處に候得は殊之外寛容之御沙汰に相心得中々納得不仕勢に御座候是迄之儘に罷在候へは御一變の上如何様の御沙汰にも可及と申儀を相合却而持合候釣合に御座候處一旦退役と迄被仰出候程に而右様の御沙汰に及候儀畢竟結枝葉之者江水要路に罷在候故漸くケ様の御次第と申事に相心得却而憤起仕候形に御座候夫も白友加平石内等一同御除にも罷成候へは宜敷

候へ共結一人而已に而右の者共は何れも無事に罷在候ゆへ都而之儀皆彼等の爲に被破大場の盡力も不届而已ならず矢張其毒に被濁候歟も難計杯申事に陥り御中陰中とは乍申此姿に罷在候而者一日は一日の害に罷成結の徒も必死の色に相見候間此上如何様の害生申間敷に無御座候御懷内右の姿に相成居候而は幕府へも如何様に歎手を延し是迄にも罷成候御模様も又々元へ返り候様之義も難計と奉存候氣味に而向々人物に寄候而は頗る危き勢に相見候且又幕府御模様之義も武吉兩士の一條に而御程合相分候氣味に相成此程は縦合大勢罷登候而も御爲には相成候共御害には不相成様相心得候者不少壯年血氣の者には前に申上候様の勢に御座候間甚結の一條に憤激仕り結さへケ様の御次第に而相止み枝葉の者無事に居候様に而は逆も一變の儀難計候に付一命を捨て國賊を打候意氣組已に口外仕候者も有之事に御座候追々幕府の御模様御懷内御事情も心得罷在候者は勘辨

も仕り始終之御大事を仕候事に候へ共右申上候壯年の者共に至候而は何程申論候而も事に顯れ候義無御座候而は中々承引不仕是迄此の御模様此の御事情と申意味に而申論置候義に御座候處書記府中有志の者は追々御除に相成結の徒は益確乎の勢に相見候間追々の處皆空の論姿に陥り只今大抵の儀を申聞候而は最早腹へ入兼候釣合に御座候尤秘密之儀を相泄し申合め候は、鎮り可申哉に候へ共左候へは大切之儀忽世上へ流布仕り其爲めに害を生候儀目前に御座候間是者容易に申聞る事も不相成扱又ケ様と申譯も無之鎮り居候事而已申候而は最早承知不仕姿に御座候萬一只今相發候事にも罷成候而は血氣に乘し如何様なる無分別激怒を振候歟も難計甚心配仕候扱右に付候而は是非指當り安堵仕候様の儀事に顯れ御處置無御座候而は逆も治り難く奉存候夫に者結徒を御一洗に相成候より外は有御座間敷乍併不殘有志に御入替と申儀必定御六ヶ敷奉存候へは調役頭

取の立場へ江水に而慥なる人物一人つゝも御入に罷成候は、人心も安堵可仕奉存候矢野原田儀は以前書記府に罷在御盛の節相勤候者に而人も許し置候者に御座候間外々の者入候より入易き氣味も可有御座一體に不怪釣合と奉存候右兩人江水へ御入にも相成候へは外平書記の儀は大抵平常の人物御入に而も可然若又兩人の儀御六ヶ敷儀に候へは右に准し候爲め頼みと存込候程の人物は御入に相成様仕度又々夫共御六ヶ敷と申事に相成候而は縦合白友の徒不殘一洗罷成候而も人心治兼候儀指見に御座候右の兩人御入にも罷成候へは縦合白友石平而已御除き加内等御居置に相成候而も宜敷奉存候折角ケ程迄の御模様にも相成儀に而事を破候事に至候而は殘念而已ならず矢張國家の御大事にも至り勿論御連枝様御立場も不被被濟御儀に陥り候間乍恐石の事情得と御深慮被遊興津大場兩人へなり如何様にも力を盡處置仕候様御内意に仕度奉存候國家の御大事に候へは御中陰

中に御座候而も不_レ得_レ已儀に候得共時勢左様にも不_レ相成儀仍而は少將様御遠慮御解御用事被_レ仰出候御時節に罷成候は、江水即日日被_レ仰出罷成候様左も無_レ御座又々遲滯仕候而は必定危き事情に御座候間右の處乍_レ恐得と御深慮被_レ爲_レ在候様仕度奉_レ存候ケ様申上候而は鎖細之儀を争乙甲に取締申上候様御疑惑之程も難_レ計奉_レ存候へ共毛頭左様の儀に無_レ御座己に五郎藏義も下り以來心を御政事の儀は一圓御携不_レ被_レ遊都而御遠慮被_レ爲_レ在候儀も奉_レ伺居ケ様之儀心得も無_レ之申上候様奉_レ勞_レ御配慮の儀恐懼至極に奉_レ存候へ共國家の御大事に難_レ替忘_レ多罪密々乍_レ恐奉_レ申上候誠惶再拜

別紙副

成丈御秘密を避候へ共左様計にも罷成兼候儀其表御程合は難_レ計奉_レ存候處一身之儀は毛頭不_レ願儀に御座候間興津大場へなり御下けに罷成候様仕度左候は、決斷之一助にも可_レ罷成哉と奉_レ存候

更に烈公に對し藩政に干與すべき命を傳ふ四月信立纔かに赦を得て私宅に蟄居す十一月幕府の内命により免されて小普請組となり又小十人組となる時に結城黨の權勢稍衰るも政教未だ復せず信立舊に依て幹旋甚だ勉む六年癸丑二月信立小納戸役となり原田及三浦忠昌(贊男)と共に礪川邸に勤仕す尋て小姓頭となる弘化甲辰の難ありし後志士再び擢用せられて君側に侍するもの之を嚆矢とし藩政漸く復す會ま米國水師提督軍艦を率ゐて浦賀に來り兵威を示し強迫以て通商貿易を要求す幕府狼狽其措置を失し物議四方に起る幕議七月を以て烈公を起し邊防の機事を預り聞かしむ信立奮然として力を外國關係の事に盡す屢烈公の諮詢を蒙り思慮を盡し對策したるもの少なからず安政二年乙卯五月目附となり九月小姓頭列側用人見習に轉ず三年丙辰正月資格を進めて用人上席に班し側用人となる四年丁巳の夏賊あり成務天皇の山陵を發く信立憤激し其賊に嚴罰を加へ並に山陵を修理せんことを切望し烈公順公に建議す其書に曰く

十一月十七日晝發す小場幾平使命五郎藏より申付淺利へ達し淺より新平新より清衛門云々之事二年乙巳三月信立小普請觸頭に左遷せらるる時に結城の黨益跋扈して烈公多年勵精施設する銃砲製造其他の事業を壊敗するもの甚だ多し信立益力を致し雪冤復政の策を講す巨室松平頼讓(將監)憂憤を同うし馳せて南上し江戸赤坂邸に在る和歌山侯(紀伊大納言治寶)に就き主冤を洗雪し政事を挽回せんことを懇訴す有司其愁訴を以て信立等の教唆に出づるものとし三年丙午正月會澤安(恒藏)原田成祐(兵介)金子教孝(孫二郎)等八名と共に職祿を褫はれ水戸仲町の廢舎に幽禁せらるる先手同心頭歩卒を率ゐて嚴に之を警戒し内外通問を禁し其抑壓する所最も慘酷なり烈公其鬱悒疾を爲すを慮り躬親ら良藥を調劑し獨按摩の圖を調製し密に高橋愛諸(多一郎)に命して之を信立等九名に分與す信立感泣拜戴して隨時藥を服し又圖に做ひ身體を運動し攝養すると四年嘉永二年己酉三月幕府始て烈公の冤枉を察知し三支封の後見を解き

賊成務帝の山陵を發くの由羽倉より川路へ贈りし書有_レ之候處世の亂たらん時には不_レ知かゝる泰平の御世ケ様の大逆を犯候者出來候義實に不堪_レ痛憤_レ驚入候事に而其責の歸する處を申候へは第一幕府に於て被_レ爲_レ濟間敷三藩の御立場に被_レ爲_レ入候而は是非共御建白無_レ之而不_レ被_レ爲_レ協御筋合と被_レ存候處天朝へ關係いたし候儀は何事に不_レ寄有司者尤忌む處殊更大難以來五年今に至る如_レ此の姿右様の義御建白にも相成候は、又如何なる變狀を生ずるも難_レ計營左様の憂無_レ之にもいたせ幕府へ直に御建白に相成候而は只々忌諱に觸る而已必ず無益に屬し可_レ申候いづれの道事の成る所專一に候へば方今の時勢不_レ得_レ已御意味を以而御内輪より密に殿下迄被_レ仰上_レ京師より御起しに相成候様被_レ遊候外有_レ之間敷と被_レ存候外々と違殿下迄被_レ仰上_レ候義に候へはいか様にも御慎密に可_レ相成候候間漏洩の御憂も無_レ之逐一叡聞にも達可_レ申歟外寇を御憂慮石清水へ御祈禱和氣護王の御贈號等追

々の御盛事に而奉_レ想像候に乍_レ恐御英明に被_レ爲_レ渡右の御一事叙聞に達座は、必定御感發可_レ被_レ爲_レ在奉_レ存候天朝より不_レ可_レ止御至誠を以て御悲歎重く幕府へ御沙汰に被_レ爲_レ及候は、祖先の墳墓荒廢無告如_レ此と申義貴賤に不_レ寄人情の不_レ忍所まして萬乗の尊ヶ様の御有様と申候而は流石幕府にも御感動可_レ被_レ爲_レ在譬左なきにもいたせ京師より重く御沙汰御悲歎に被_レ爲_レ及候は、外々の御事と違是非何と歎御處置無_レ之而不_レ協御義理合に可_レ相成候幕府に而彌御建議に相成候段に至り候得は御都合に寄又何と歎御建白御補助の被_レ遊方も可_レ被_レ爲_レ在被_レ存候今更古に復し難き勿論に候得は分而守戸を置候迄に無_レ之とも責而は嚴に耕牧樵採を禁し時々御掃除をも辨候者夫々に出來歲時何と歎御祭の印計も之あれば如何なる無知無心者に而も山陵の山陵たる事を存知候様に致度候將又神武帝陵の儀は兼而老公御建議も被_レ爲_レ在候第一大祖の御事に而格別の義に候得は是は別段御沙

汰に被_レ爲_レ及いか様にも古制にならひ御修理を加へ守戸をも置候而禮典の儘に重く歲時の時に御祭も有_レ之様いたし度候乍_レ恐當今之御英明に殿下の賢良なる三藩には老公に而被_レ爲_レ入幸ひ殿下へ御親縁有_レ之處此時に當りヶ様の御大事出來候儀實に偶然ならず千歳の一機會と被_レ存候へば何卒老公御聽に達しいか様にも御賢慮被_レ爲_レ在候様致し度奉_レ存候此事御成就にも相成候得ば天朝に被_レ爲_レ於候而は列聖の尊靈を被_レ遊御慰御祖先への御近孝此上も被_レ爲_レ在問敷幕府に被_レ爲_レ於候而は累朝の廢典を被_レ遊御興起前代に無_レ之尊崇之御高義と被_レ存候得ば天朝へ御對被_レ遊候而も又幕府へ御對被_レ遊候而も實に無_レ此上至大の御忠節に可_レ被_レ爲_レ在萬々不堪大願奉_レ存候

七月信立學校奉行を兼務し大に學政を擴張す數月ならずして資政を馬廻頭上座に進む業に既に幕府軍艦製造の事を烈公に委任し之を創む信立命を承けて其工事を董するに外患日に迫り内憂日に加はるを以て

之か邊備を慮り心力を致す然れとも創初業皆經驗に乏しく完全なる成蹟を見る能はず是の歲十二月に至り一隻の艦成る之を朝日丸と云ふ幕府信立に時服白銀を賜ひ其勞を慰す五年戊午正月公武協和の事に關し烈公の意を承け京都の藩邸留主居役鶴飼知信(吉左衛門)に贈りたる書に曰く

當今の時勢に至候而は公武の御合萬々一御己れ己れに相成候様に而は勿論天下の爲不_レ可_レ然叙慮御尤の儀は公邊に而も御用に相成候様被_レ遊度又公邊無_レ御據御事柄は乍_レ恐少々叙慮をも御曲に罷成兎に角御雙方御和談の上に無_レ之而は夷狄の儀は先づ指置内地の治り方も始終いかと此程之處別而老公御配慮被_レ遊候實は大閣殿下へ御直にも被_レ仰上度思召候へ共叙慮云々の儀等指付け御申上も御内様如何との御遠慮も被_レ爲_レ在御内々御沙汰の趣も御座候間右の御意味柄何と歎大閣殿下御聽に達御舍にも相成候様御扱に致度候しかし勿論御内々の義に付其段は御舍に相成様にと存候以上

是より先き幕府烈公をして軍政の意見を述べしむるも其規畫する所を用ゐる能はず竟に其職務を解き假りに江戸大坂外五港の互市場を開き閣老堀田正睦(備中守)京都に上り通商條約の勅允を請ふ朝議斷じて許さず諸侯の衆議を徵せらる堀田斯の朝命を齎し四月二十日江戸に下る此に於て井伊直弼(掃部頭)大老職に昇り幕府の政事を専らにし内に威福を弄し權勞を張り朝旨を蔑如して之を奉せず外は外人の恫喝に畏怖し事を處して屈辱を顧みる能はざるなり信立夙に尊攘の道を講ずるを以て憂憤に堪へず竊かに金子茅根泰(伊豫之介)其他の志士と議して曰く幕府の朝命を蔑にするものは姦凶あるに由る姦凶を除き幕政を匡さざるべからずと鶴飼に意志を通し諸大夫諸藩士に謀ることあり時に信立屢福井侯(松平越前守慶永)の諮詢を蒙り意見を陳述し同く除姦の策を遂げんとす大老愈勅旨に背き六月十九日を以て米國に對し我が國權を失墜せる外交條約を訂結す是が爲に物議甚だ沸騰して止まず二十四日福井侯は井伊の邸

に赴き烈公及名古屋侯(徳川中納言慶恕)一橋卿(徳川刑部卿慶喜)等は柳營に至り痛く之を駁撃す大老陽はに畏服して陰かに嫌悪し其急登城は一橋卿をして將軍家を襲かしむる計策に出でたるなりと之を誣罔し七月二日大將軍(家定)疾病の爲人事不省となり四日薨するも秘して喪を發せず獨政事を專斷し六日黎明幕使を遣はし烈公を駒籠別墅に幽閉し名古屋侯福井侯等を罪し又松平頼胤等三支封をして水戸藩の政事に干渉せしむ藩士中嘗て禍心を包藏し此の機に乗して三支封及幕吏の力に藉り藩政顛覆の詭計を施すものあり時事岌々乎として危殆なりしか信立之を看破し大に警戒を加ふるを以て詭計頗に敗れて藩政肯て變動せず是の月信立擢てられて執政となり祿を増加し役祿を併せ八百石となる信立常に烈公順公父子の間に立ち能く意志を疎通し大場景淑(一眞齋後主膳正)武田正生耕雲齋後伊賀守等と共に拮据盡瘁し主冤洗雪を圖る時に順公帶刀の二字を賜ふ因て通稱を改め帶刀と稱す八月朝廷修攘の勅諭を幕府及順

公に下し特に順公をして之を列藩に廻示し大將軍を輔翼し以て外寇掃攘を謀らしむ順公敬畏之を奉じ大老多方策を設け之を防遏す爲に一藩の議論喧沸し士民憤激して總州小金驛に至り又江戸に登り勅旨奉行及主冤洗雪を圖るもの數千人有司鎮制するも肯かず信立其言の急激に渉るを誡め其意の嘉尙すべきものは之を探りて斡旋す是の時慷慨國を憂へ勅旨を奉行せんとするもの期せずして京都に集り幕吏の行爲を非難し將に爲す事あらんとするに際し閣老問部詮勝(下總守)大老の意を承け上京し東西謀を通し力を尊攘に致すものは諸大夫藩士處士を問はず其廿餘名を逮捕す鶴飼も其一人なり加之大老主上の英邁神武を畏れ又之を忌憚する甚しく機に臨み皇位を動かさんと現に塙次郎をして承久の故事を調査せしめ内藤豊後守をして之が實行の豫謀を爲さしめたり信立豫て計畫する所の策を擴充し志士と共に死力を合せ姦凶を驅除し勅旨を發揚せんとする日あり會ま蜚語流布す信立特に烈公の内意を受け人を京師に遣り措紳を

鼓動すること多しと幕吏之を敷衍して順公に告ぐ爲に執政を罷められ大寄合頭に外轉す信立依然身を國事に致すこと益割切なり六月己未の春大老益勢焰を張り朝廷に迫りて三公以下諸措紳をして落飾辭官に至らしめ青蓮院宮尊融親王を幽閉し志士の逮捕を續行す四月二十六日信立も亦茅根等と幕府の評定所に召喚せらる其家を出つるに臨み家人に謂て曰く大老の處置必ず吾に嚴刑を加へん吾再び歸るべからずと因て鏡面に對し自ら肖像を寫し之を子孫に遺したり寺社奉行松平宗秀(伯耆守)町奉行池田頼方(播磨守)石谷穆清(因幡守)大目付久貝因幡守等列席詰問す其要は信立陰かに幕府の機事を京師に漏聞し且諸措紳に勅諭下賜の事を申請し又嘗て烈公の内意を受け一橋刑部卿を幕府の儲嗣に擧ぐるの計策を爲せりと云ふに在り其烈公を疑ふの事甚た誣罔に出るもの多きを以て信立儼として屈せず是の日九鬼精隆(長門守)の邸に幽せられ後屢鞠問を受くると雖應答凝滯なく辨明すること首尾一貫幕吏竟に之を壓伏すること能

はず八月二十七日信立評定所に於て自刃を宣告せられ傳馬街獄舎に護送となり泰然自若として死に就く年四十八其宣告文左の如し

水戸殿家來 安島帶刀

右之者儀御館より一橋家御相續有之候當刑部卿殿御養君に被_レ仰出_二西丸へ御直し可_レ被_レ爲_レ有哉との儀兼々風聞等承知に及び候處近年専ら右世評等有_レ之此の上自然天運に被_レ協右の通り御治定に相成らば無_二此上_一恐悅之御儀と一藩難_レ有儀に存居右風聞之趣折にふれ前中納言殿へ入_二御聽_一候處右様の儀申唱るもの有_レ之候ても程能申消し猥に口外致候間敷寄々藩内之者も心得違無_レ之様申聞可_レ置旨無_レ急度_二御沙汰有_レ之處右申上候節御氣色御不興と申にも無_レ之右は紀伊殿も被_レ爲_レ在候御儀に付右様之御沙汰有_レ之候得共自然世評の通相成候は、御滿悅可_二思召_一と普通の人情を以て御意内を推量り兼て口外をもいたす間敷旨被_レ命候趣申立なから假令外用向申遣候文通端書に候とも同

家來在京役鶴飼吉左衛門並同人伴鶴飼幸吉へ右世評の趣大慶同意の旨等書加へ申遣し同藩茅根伊豫之介より同様の儀に付猶勘辨可致旨右吉左衛門父子へ申遣候趣追て伊豫之介より噂に及ひ候をも其儘にいたし置き去午七月中元御家來當時松平薩摩守家來日下部伊三次上京の砌市中酒店に於て及出會候は饒別迄の事と申立候得共既に同人士京の上吉左衛門父子申合不_三容易_二儀堂上方へ入説致し傳奏衆より同人へ勅諭御誕に相成次第に至る上は全饒別迄との申分紛敷其上去午九月十八日鶴飼父子より此もの宛の書狀二通並日下部伊三次宛此もの迄指出候書狀都合三通の文意にても是迄専ら彼もの共と同意相働候明證相見一體御養君の御儀御大切の御儀にてたとひ御主君御内命有_レ之候ても御諫言をも可_レ申職掌の處却て御内意を推察致候様鶴飼父子へ文通に及ひ候處猶右の者京地にて種々奸計を廻らし公武御確執にも可_レ及場合に至候段對_三公儀_二不_レ憚儀右始末不届に付切腹申

付 親族故舊其屍を收め水戸酒門原塋域に葬る信立人と爲り寛裕忠直其兄忠大夫の風あり昨夢記事唱義聞見録に信立を評せるものあり性行の一斑を知るに足れり

昨夢記事に曰く安政四年八月十七日安島西儲之事に付越藩石原甚十郎方に參り中根雪江を招き談話の末同人曰く此安島は兩田と稱する戸田の弟にて藤田誠之進歴死の後代りて側用人となり前殿の帷幄の寵臣なり誠之進とは様變りて英發の風は乏しけれと忠實無雙にして温厚鄭重なる人なりき唱義聞見録に曰く帶刀牢屋敷に於て切腹被_三申付_二候節幕府目付始檢視之役人立合介錯之人等嚴重なり勿論中古以來自分に屠腹と申事は無_レ之扇子代三寶に載せ夫を戴く相圖に首を落す例なり此日帶刀其席に臨み介錯人に向て曰く聊か申度儀有_レ之候得共二三日来口中氣にて言舌通し兼候間水を一杯飲度旨申に因て檢視より水を與候處帶刀一口二

口呑み終り外之儀にも無_レ之今般御預相成候中殊之外丁寧に取扱被_レ吳千萬辱次第此段御預り申候諸候へ厚く禮を申述候旨は役人へ被_三申通_二被_レ下度且又介錯之御役御苦勞に存候宜敷相頼申とて首を延したり此時檢視の役人初其從容死に就たる容子を見て暗涙を流さぬものなかりしとぞ（此は牢屋同心より大山某なるもの承りたる話）又曰く宣光一夜山國喜八郎を尋たり偶帶刀は宿直なれとも暇を見合せ來れり頗る寡黙沈着の人なり予想像するに其從容死に就候は其人となりによりて見れば可_レ怪に非_レと思へり

萬延元年庚申九月藩命あり二十口の月俸を家族に賜ふ文久二年壬戌十一月幕府朝旨を傳へ墓碑を立つるを許し後を録せしむ十二月長男信義（七郎太郎）家を繼き祿を受く明治二十二年五月二日朝旨に由り信立靖國神社に合祀せられ二十四年四月八日朝廷更に信立の舊勳を録し正四位を贈らる信立平生好んで歌を詠す因中詠する所の歌十數首を左に摘記す

三田の候の霞か關の邸に押こめられてありけるか、事のわかち身のなるはても、遠からしと思ひたとらるゝころ、情けある人よりひそやかに、松の煙なす石筆てふもの興へられて、思ひ出るまにまに、書きつらねしかは、よしあしは更にもいはし、事のわひためさへあることかは、後の世に見ん人あらは、この心して思ひさとりてよ、

題しらす
一聲の、ことつてもかな、ほとゝきす、思ふ雲路に、ゆきかよひして、
我が君に、見えて、うれしき、よひくの、夢をうつゝに、なすよしもかな、
寐ぬる夜の、心もしらて、鐘の音の、夢路の關と、なりにけるかな、
故郷を思ひて
いかばかり露おもるらむ、母子くさ、さらてもたはむ、五月雨のころ、

立出し、門は葎に、とちぬとも、軒端の松の、常葉にもかな、

玉はこの、道さへ見えぬ、夏草の、しけみか中に、撫し子の花、

ふり捨て、出にし後は、撫し子に、如何なる露の、置き恵むらん、

述懐

しひて吹、あらしの風の、はげしきに、何にたまるべき、草の上の露、

國を憂へ、世をなげき來し、真心は、あめ地人に、あに愧めやも、

我か思ひ、はれね霞の、關ならば、世にためしなき、名をも留めよ、

今更に、何をかいはん、いはすとも、我か真心は、知る人を知る、

誰かため、ねきことそとは、玉くしけ、二荒の山の、神やしるらむ、

人々のいと情ふかく何くれともものしければ

窓ちかく、うつして植し、菊の花、深き心の、色そ見えける、

あはれにも、人の情の、ふかきかな、酬ふよもなき、淺まし身を、

色紅葉に寄する

惜まれて、散る櫻花、ちりて後、色そふ紅葉、我が身ともかな、

八月二十三日心のうちに思ひつゝけゝる

武藏野の、露とはかなく、消えぬとも、世に語りつく、人もこそあれ、

玉の緒の、絶ゆともよしや、吾君の、かけの護りと、ならんと思へは、

勤王 水戸烈士傳上編 卷三 實記

贈正四位茅根泰傳

茅根泰字は伯陽伊豫之介と稱し寒綠と號す初名は爲宣後泰と改む其先は細川氏より出つ世々常陸久慈郡茅根村に居り因て氏となす伊左衛門爲道に至り水戸威公に仕へ武幹を以て稱せらる水戸三左の一人なり奥番頭となり祿三百石を食む其孫宗親別に一家を起す即ち泰六世の祖なり父伊左衛門爲敏増子氏を娶り早く死す泰其遺腹の子なり叔父爲敬家を繼ぎ泰を養む嗣となす泰幼より遊戲を喜はす母授くるに句讀を以てするに誦讀倦ます長して益學を好み風度端凝厚重にして大志あり會澤恒藏(安)藤田虎之介(後誠之進彪)等之を奇とし毎に謂ふ後吾輩の志を成す者は必ず此の子なりと引いて忘年の友となす是に由り學業大に進み屢其篤學を賞せらる天保十三年壬寅四月

床几隊戦士となり烈公に勤仕す十四年癸卯七月弘道館舎長に擧げられ勸學の資とし毎歳白銀五錠を賜はる弘化元年甲辰五月烈公畫語に當り譴を幕府に獲て致仕し順公幼にして封を襲き松平讃岐守(頼胤)松平大學頭(頼繩)等の支藩主後見となり執政の戸田銀次郎(後忠大夫忠敏)側用人の藤田(虎之介)等要路の士禁錮又は貶斥せられ獨結城寅壽(朝道)黨を結んで政事を顛らにし時事日に非なるを以て泰竊かに以爲らく進んで力を國家に致すこと能はずんは若かす退いて人材を教育し以て他日の用に供せんにはと乃ち意見を陳し職を辭して子弟を教授す其學敬神愛國に本つき尊王報國の大義を明にするに在り時に年二十二なり烈公聞きて其志を嘉みし親ら「默而識之學而不厭誨人不倦」の十二字を書して之を賜ふ泰益感奮

し教育を以て已か任となす生徒日に多く隣近諸藩より來り就いて業を問ふものも少なからず烈公の冤枉水解するに及び結城罪を獲て巨室松平采女(頼功)の采地長倉の砦に監禁せられ其黨も亦黜斥する所となり藩治舊に復す泰再び擧げられて床几隊戦士となる嘉永六年癸丑六月米國使艦浦賀に來り互市を求むる甚た急にして其舉動頗る陸梁なり泰之を聞いて憤慨に堪へず是の月二十日時事に關する數千言の意見を述へ戸田に贈る這是烈公に建白し之を幕議に上せられんことを望みたるなり其文に曰く

外國御處置方之儀祖宗にて深遠之思召被爲在
一之蘭人而已交易御濟し其他横文字之國一切御近付
不_レ被遊_レ追々嚴重之御處置被爲在候故外國之者
共も神州之威武に恐れ長崎を望て股栗し日本人に
三眼ありと迄申候由其後に至り御扱振も色々變革
御望之所文政中打拂之御達にて天下之正氣も盛に
相成乍_レ恐御尤之御處置とは存候然るに天保中打
拂御止以來追々異舶渡來暴横の振舞無人の地に入

るか如くにて扱々不堪切齒存候別而此度渡來異舶之儀に付而は實に神州之大恥辱無_レ此上_一征夷之御名目にも御拘り被_レ遊候様奉_レ存候間御懐合も不_レ奉_レ存事情にも相違仕候半奉_レ存候へ共此期に至り難_レ默止_一一二愚見之趣左に相認執事迄申上置候

一此度異舶より指出候願書御受取之儀如何御懐合に候や九日に右願書御受取に相成候由之處其節も上陸之人數等此方より御沙汰之數に倍し候趣猶又早速歸帆可_レ仕之處二三日休息仕候段申出候て其後金川沖迄も乗込砲臺之前迄參り致_レ測量_一或は不時に大砲空放等致候仕末輕蔑侮慢之至言語道斷に御座候彼願書浦賀にて御受取之儀祖宗之御規格に相違仕り御國體に缺け候様奉_レ存候尤右は打拂御止後之御處置不_レ得_レ已御儀にも可_レ有_レ御座_一候處近海へ乗込候ての我儘を其儘に見濟銃丸の一つたに打懸け不_レ申候は如何之御儀に可_レ有_レ御座_一候や扱々解せ兼候事に御座候右様之譯柄にては又々御

返書伺ひに罷出候節も矢張同斷之御處置に可_レ有_レ之詰る處無人鳥等表向御濟しには無_レ之候共先年薩へ琉球之儀被_レ仰出_一候節之如く内證御見濟と申様に相成候半苦心千萬奉_レ存候此度之一條愚夫愚婦に至る迄も致_レ憤懣_一候趣に候へは此機御外し無_レ之只今之中廟算御一定にて再應參り候共願筋御掛合向は勿論其外御手當迄細大之儀御手落無_レ之様御調に相成り居り此度輕侮之心を陰に碎き候様無_レ之ては此先如何之大變に相成候やも難_レ計奉_レ存候幕府之御懐合如何可_レ有_レ御座_一候や不_レ奉_レ存候へ共此度老公へ御相談と申に至候ては實に體を得候事にて三藩御立置之御旨意にも御叶被_レ遊候様奉_レ存候處閣老中にも色々異論有_レ之歟にも相聞御勘定に石川杯就_レ中姑息之趣御目付中にも戸川中務杯頗る臆病神付候由其處へ例之後宮本丹丸等合併に相成候は、如何之失禮相成候も不_レ相知_一候へは是非老公にて神算を被_レ爲_レ連伊勢守等へ嚴しく被_レ仰遣_一異論之族は外轉被_レ仰付_一其上にて異舶

取扱方改めて御達しと申様に無_レ之候ては再神州之恥辱と可_レ相成_一候段安心不_レ仕過憂仕候一此度之異舶一覽致候者共彼製造之巧なるに氣を吞れ中にも蘭學者杯別して恐れ候やに相聞連も彼と合戦は難_レ叶候へは大銃大艦出來候上ならては決戦相成兼候段申候由是等之論庸人共之耳に入り安_レ以て之外に存候第一此處より破り候て人心を引起申度奉_レ存候此論も一寸承り候ては尤之様に御座候へ共只今の姿和とも戦とも決し不_レ申居_一大銃大艦可也に揃候儀は勿論有_レ之間敷只今より直に製造に取掛候ても此人情にては銃艦は漸々出來候共未だ練練届き申さぬ間届き候上之事と申様相成り最早是にて打拂候て宜敷と中期は決て有_レ之間敷存候只只神州之恥辱と申處に目當を立打拂に決し候は、人心振ひ起候間艦も銃も追々出來可_レ申縦右出來不_レ申内にては此度如き恥辱は取申間敷奉_レ存候へは人々死地に陥り必至之力を盡し候様致候儀急務中之急務と奉_レ存候

追々立論者彼軍制杯を色々申並へ合戦難相成候段申候處當今之時處位により彼之態度を考へ新に軍制を組立候は勿論宜候へ共戦艦揃候上ならては打拂出來兼候と申候ては遂に和の策に落入申候且此方に一人の死傷も無之全勝を得候處を以て論し候ては此後艦銃揃候上にも左様計は安心不仕候

一彼願筋如何之振合か不奉存候へ共定て去年中風説御座候石炭置場等之儀に可有御坐都下書生之論杯には内地にて借候方可然或は無人島七島杯借候義は此方に格別之關係無之杯申候族も有之候由是は論する迄も無御座候處是又庸人の腸へは染みやすく以之外に御座候一たび彼か望に任せ候は又々如何様之儀申出候も難計且アメリカに許せはイキリスもフランスも願出候様相成候は必定之儀に候へは一切御許し無之様仕度存候無人島に至候ては萬一彼か巢窟と相成候は無此上大患と奉存候

蘭人へ長崎にて扇島之地御貸し置最初彼か内訴之功有之故之儀にて候處無謂夷狄に一寸一尺たり共土地を貸し候杯申儀者決て有間敷事に御座候

一此度房相御備向諸手騷擾之氣色は申迄も無之戰と決し候には是迄之通りにては如何と奉存候扱四家之戎兵臨時増入敷之儀費用莫大に可有之一度二度之事は届きも可申候へ共度々之事には是も續き申問敷奉存候此度會津杯は八日に國元へ飛脚到着直に九日より繰出し三日計之中に三備之兵上下千人餘もくり出し何れも晝夜兼行にて相詰候由其早く繰出し候段は感心に候へ共國中は申に不及道中之騷擾不一方詰り内地之疲弊と相成可申候晝夜兼行も奇兵には用候へ共永き道中如是にては兵家之禁忌を犯し先へ參候ての働き安心不仕且夷船之出沒は定時無之候へは只々奔命に疲れ候而已にて第一之不策と奉存候是等之處今之中より御料簡有之逸を以て勞を待

の御仕向け有之様仕度それには房相之地へ大諸侯御封し御任せにて防禦被仰付候か又は御旗本之中土着被仰付右へ農兵を交へ防禦敷之中に御決しに相成候は、格別無用之費も薄く相成り實用に適候奉存候尤右築城備向等出來候迄は勿論只今迄之通り御指置可然歟

土兵を以て防候と客兵を以て防候との利害得失古今議論も多き事にて委細御洞察被爲在候儀と奉存候猶又此儀に付ては愚考之趣相認候も御座候問追々入御覽可申候

一此度本牧邊より高繩邊迄之御備向俄に細川等大諸侯へ被仰付候由一時之權宜御尤には候へ共此邊は誠之御膝元之儀にて候へは以後は御旗本へ被仰付可然場所々々へ陣屋御取立年限を定め更番に被仰付其上にて事六ヶ敷節諸侯へ加勢被仰付候は、體を得候様奉存候諸侯は國々之持場も有之候事に候へは御旗本を被指置是へ而已被仰付候ては不歸服之族も可有之候間其

廉を御立被遊諸人悦服して力を盡し候御仕向け肝要と奉存候

一大艦之儀勿論此度こそ御濟しに不相成候ては叶申問敷候船艦製造御濟し候上は海國之諸大名參勤之節も直に品川へ乗入候様被仰付扱又諸大名江戸屋敷暮し方入用之品も大半は國元より運候様相成候は、萬一之節江戸中之騷擾も格別薄く可有之且は奸商之權を抑へ候一助とも相成可申奉存候猶又公邊之御船を始め諸藩之船をも浦賀沖等へ掛置候は、一箇之海城出來兩岸之砲臺より遙に實用に適候様奉存候西洋諸國之湊には皆々左様之事と被察候

荷舟之外大艦御制禁は祖宗之思召故御許し御六ヶ敷由に追々承知仕候へ共此度外國之書浦賀にて御受取も祖宗之御制度とは違候へは勿論防禦之利器故御濟し候儀は却て祖宗之思召にも御叶被遊候様奉存候
一夷狄之患も追々世上にて目覺候様には御座候へ

其未本渡に神州之大患と存候者は少く又は我身に懸らぬ事と傍觀致候者も有之或は時勢を觀望して白くとも黒くとも申切らず或は又我勤役中無事に濟し度と申處より姑息之料簡に相成候者多く御座候故眞之雄斷出不申候事と奉存候併最早夷狄之患も迫り幕府より老公へ御相談と申非常之御場合に至り候へは此度は非常之御決斷にて天下へ大號令出され神州之人たらん者一致に相成候て防ぎ候外無之奉存候只々浦賀邊之御備筋へ而已御取掛りにては此上之處何共安心不仕候扱右大號令之大意は

異船渡來之節取計之儀文政丑年中打拂之御議定に候所格別之御思召を以天保寅年中打拂御止め薪水等相與へ御仁恤之御旨意萬國迄も貫き候様被仰出候處右以來は諸州國之船共追々浦賀表へも罷越し彼是橫行之仕末不一方折角之御仁恵を難有とは不奉存却て右に付悔慢之致方言語道斷に候此度アメリカ船渡來願出候間右書

面は御取受到に相成候處其後内海へ乘込測量等致候段可惡之甚敷に候且彼か所欲は無厭候へは此儘被指置候て此上如何之振舞有之やも難計候條願筋等は一切御許無之此後又々渡來御返書被仰出候節彼か從否により彌文政度之御達に御復しアメリカ而已ならず其餘之國々之船たり共一切打拂之様可被仰出候間面々只今より其覺悟可被致候右に付ては公邊にても非常之御儉約被仰出猶又海岸付諸大名三年之間參勤御免被遊且先達而被仰付候西丸御普請に付て之上食一圓に御免被遊候條一同難有奉存其費を以武備之心掛專一に致し船艦大砲は不及申其土地相應之防禦筋相心掛昔より外國之侮を受さる神國之威稜を辱め不申様にとの台慮を身に體し聊無懈怠可被相勵候猶又御目付へ被仰付不時巡察之上勤惰之御沙汰屹と可被仰付候條其旨相心得可申候と申如くに被仰出當年歸國之大名は直に居付來

る巳年參府來年歸國之大名は來る午年之參府之振に御定め相成候は莫大之御仁政にて防禦も行届可申扱其中台慮を不奉怠惰之族は嚴重御處置有之候は跡々之患も有之の間敷と奉存候尤隔年之參勤は御制度之大眼目に候へは破格之御料簡も餘程御六ヶ敷奉存候是又不得已候は是迄之通りにて在府之日を百日とも致候は格別費も省け可申扱

一右大號令被仰出扱幕府にても非常之御儉約にて無用之費用御省き軍國之用に御向け被遊候様仕度奉存候幕府御入用逆何々が無益に可有之や勿論不存事に候へ共奥向之費は夥敷事之様に承知仕候次には諸寺院御普請或は御法事御祈禱等にて被下之金銀等第一之冗費と奉存候是等之處より御省略被爲在候は巨砲も巨砲も隨分御間に合可申奉存候兎角海防々々と申候ても何事も御先例御先例と申平日通りにて又其上に海防御備と申候ては國用も有限事にて逆も御六ヶ敷奉存

候昔北條時宗か蒙古と取合之節も京都之大番を止無用之費を省き候故軍國之用も足り諸國之兵共も整候事と相見へ申候へは此度も此處より御手始めにて如前文諸藩へも御達有之候は内外一致して備も嚴密に相成り何時に異船寄せ來候ても凜然として其場所々々切りに防禦行届可申と奉存候

右件々其大略にて其餘之事は時宜人情によりての御仕向け方可有之本より其人に存し候事故豫め難定奉存候扱近時滿清にてイキリスとの戰に初の中は支へ候へ共南京へ追られ揚子江へ夷船に乗込れ候て俄に和親之策に出候様相見へ申候江戸の地は彼之南京之比に非ざる重地に候へは今より是等之處も御洞察之上小敗嗣等に更に頼着無之様仕度此段勿論老公にて閣老始へ御力被爲添候外有之間敷奉存候前文之儀諸侯御定論も有之事にて淺學不才之我々兎角申に不及事に候へ共夷狄之跳梁を坐視するに不忍大意相認執事迄建言

仕候若し老公迄御建白之御一助にも相成候は幸甚無此上二奉存候以上

六月二十日

茅根 泰再拜頓首

蓬軒戸田君執事

又曰此度浦賀御備向之中下曾根金三郎事へロトン備とか何とか申候銃陣備へ居候所不殘胡服胡言相用候由に相聞へ申候實否如何に御座候哉萬一實事に候は、扱々國體を辱め候儀に御座候右様之見識にては、逆も異船防禦は安心不仕候、兎角蘭學之弊彼か長を取而已に無之、都て彼か風を慕ひ候様相成候儀往々國家之大害を引出候半と過憂仕候是等之處も何と歎御料簡有之候様仕度奉存候

戸田能く之を觀泰の深遠なる志識を稱し其書を烈公の閱覽に供す七月烈公幕命により邊防の機務に參畫す泰感奮力を外患防遏の事に致す安政元年甲寅の春米國使艦又浦賀に來るあり府下警戒す因て床机隊戰士及大砲隊戰士を江戸磯川邸に徴して守衛に充つ泰も亦之に與る幾はくもなく泰遊倅より擢んでられ小

十人粗となり弘道館訓導を兼務し月俸を賜はる泰水戸に下り益心を教育に注ぎ陶冶具さに成る尋て泰郡奉行見習に遷り二年乙卯十二月郡奉行に班し奥右筆頭取となり磯川邸に勤仕す是より先き十月二日江戸に大震あり戸田藤田其災に死す戸田藤田嘗て共に國事を擔當して人心を總攬す爲に水戸の士民之を首領とし名いはすして兩田と呼へり結城兩田の震死を開き必ず時勢の變するを察し直ちに企圖する所あり金圓を警吏に與へ啗はしむるに利を以てし密書を托して其子結城伊之介及谷田部藤七郎(通倫)に送致し藩政顛覆の秘策を授く谷田部等の計畫する所も亦其指喉と大同小異なるを以て忽ち之に應じ大嶺庄左衛門(定興)加藤木左内衛門(忠恕)横山兵藏大森金八郎根本新八郎(政養)及醫師十河祐元外數名に謀り先つ烈公に後暗き(謀反の隱語)所爲ありと事を捏造して誣言し之を世に流布して人心を誑惑し横山大森根本は君側に勤務しあるを以て屢順公を別室(別室は後に人呼んで離間の間と云ふ)に迎へ老公(烈公を指す)

に反心のあるあり相親み共に大害を速くなかれと巧に諷する體をなし君侯父子を離間するのみならず其捏造したる事を眞實の如くに筆記し之を高松藩人瀧川内膳等に依囑し密訴として幕府の内儀に提出し且同文の書を上野凌雲院に捧け結城赦免の斡旋を請へり加之十河の調劑する毒藥を順公の坐右に致し侍女をして之を食物に混し武田耕雲齋(後伊賀守正生)等十數名に分賜し横死せしめんことを謀るに至り時事危殆に迫る泰之を偵知し時を移さず順公に面して諄々其詭策あることを白する頗る切なり順公大に悟り之を烈公及文明夫人に告知す時に烈順二公鞠吏に命し之を糺治する所あり三年丙辰四月皆其罪に伏して刑罰を蒙る各差あり尋て泰命を受け學校の事務を管す弘道館は天保の年間創設に係り爾後藩政亂れて學政も亦壞る是に於て泰學令一篇を草して之を呈し且時弊を挙げ之を矯正する意見を陳述す順公之を嘉納し尙衆議を折衷し學則を裁定して文武の振興を圖り碩學たる會澤を擧げ學事を掌理せしむ爲に教育制度

備はるものは泰與りて力あり四年丁巳の冬泰小姓頭取に晋み順公に侍讀し又奥右筆頭取を兼ね秘書内帑の事を掌り祿百五十石を給はる是の時に當り幕府烈公を嫌忌し其機務に參畫するを罷め而して假りに江戸大坂其他の五港を開港場となし之か勅允を請ふ許されす五年戊午四月井伊掃部頭(直弼)大老に晋み幕府の政を司る米國の使艦益條約訂結を要求し威迫交も至る大老恐怖して對抗の策を立る能はず朝旨を蔑如し六月十九日擅に我が國權を失墜せる外交條約を結び之を非議するものを嫉む甚しく烈公の如き其最たるものなり七月四日大將軍(家定)薨したるに其喪を秘し六日の曉俄かに幕命を發して烈公を駒籠別墅に幽屏し名古屋侯及諸侯伯を罪し正議を壓制す泰憤慨措く所なく安島帶刀(信立)金子孫二郎(教孝)高橋多一郎(愛諸)關鐵之介(遠)等と正議を伸張し主冤を洗雪せんと日夜周旋す八月八日皇上修攘の勅諭を幕府及順公に賜ひ特に別勅を下し順公をして勅諭を諸侯伯に廻達し衆議を協へ以て外寇掃攘の事を圖らし

む順公敬畏之を遵奉し直ちに答書を捧ぐ其草按は泰をして之を作らしむ泰之を奉し建言して曰く朝廷寛仁幕府専横の罪を問はず尙之を扶持し以て將軍の職を盡さしめんとす宜く速かに勅旨を奉し列藩に協議して天下の大計を定めざるへからずと順公容れて之を幕府に告ぐ大老頗る之を忌み百方拒んで勅旨を壅塞す泰嘗て京都に在る鶴飼吉左衛門(知信)及其子幸吉(知明)等と互に消息を通し事情を報し東西の意見を有志の搢紳に告げ以て勅旨奉行の事を謀る時に列藩の士林各地の處士期せずして京都に集り國事を議するもの亦多し而して井伊大老老中間部下總守(詮勝)をして西上せしめ勅旨奉行に従事する鷹司卿の臣小林民部權大輔(良典)鶴飼父子等の士庶二十餘名を逮捕し百計以て公卿侯伯を讒害するのみならず其謀る所は將に朝廷に迫り承久の故事を醸さんとするに至る泰安島金子高橋其他の志士愈憤激し共に死力を出して大老を排除し勅旨を發揮せんと相謀り泰又嘗て此の意見を福井侯(松平慶永)に陳啓せる屢なり

六年己未の春大老朝廷の大臣を窘蹙し青蓮院宮尊融親王を幽閉し四月二十六日に至り命を下して泰安島及大竹儀兵衛(安直)を辰の口評定所に召喚す泰自ら必死を分とし五言古詩二篇を賦し子熊太郎(謙)に附與し父母の靈位に訣別を告げて出づ福井藩の橋本左内(綱紀)外數十名も亦逮捕せらる

安政己未四月二十六日、以幕府之命、與安島大夫及大竹儀兵衛、抵評定所受審、此行禍殆不測、將出得詩二篇、乃把筆一揮、留以與兒熊太郎、他日成立其有以知余之志也、時屬天明、曉雲慘澹、杜鵑悲鳴、如訴冤然、

長鯨橫海驕、妖氛蔽日昏、奈何春秋義、舉世付空論、簧言入左腹、羅織付宗藩、顛辨既無地、痛哭聲每吞、忽值紫泥詔、遠傳自天關、我公感且奮、禍福寧遑論、修攘翼幕府、正將答至尊、皇天未悔禍、逮捕驚禁垣、況此螻蟻微、壘粉亦何怨、嗟予真不肖、學術無淵源、壯歲得虛名、要地浴殊恩、感遇不自揣、欲撐狂瀾翻、報効無涓埃、踈漏忽禍根、今日

逢窮鞠、豈復望平反、丹心猶如火、誓欲雪君冤、生前所未報、竊期椒山言、楊椒山臨刑詩曰、天王自聖明、制度高千古、生前未報恩、留作忠魂補、嗟予生不辰、夙懷小同悲、鄭玄之孫小同遺腹子也、願復與教誨、一仰萱堂慈、丁難服未除、歸葬遂無期、義父在故山、罪戾或相隨、忠孝兩虧兮、不覺血淚垂、萬死固其分、報恩更付誰、兒乎纔五歲、遙望成立時、日月易蹉跎、須擇友與師、慎勿效爺愚、頑鈍失機宜、勿懲爺遺禍、懦弱易操持、涵泳道義中、險夷須以之、望汝月兩次、拜跪誦此詩、

寺社奉行松平伯耆守(宗秀)町奉行池田播摩守(賴方)石谷因幡守(穆清)等列席鞠問するに鶴飼吉左衛門と互に通牒して搢紳に結ひ外人取扱に關する幕政を非難し其書牘を宮家公家に提供し烈公の意を受け一橋刑部卿を西城に納れ宗統を襲かしめんことを謀り加之勅書別勅降下の事に關し東西籌策を運らしたることを以てす泰慨然として幕府か烈公を疑ひ其之を誣罔するの甚しきことを辨する言語事理兩つながら明

晰一の疑滞あることなし松平池田等反覆問訊すと雖竟に之を屈すること能はず故に家に歸りて後命を待たしむ而して大慙驅除の密策は竟に偵知せらる、ことなく一の訊問なかりしと云ふ一日泰第一回の受審の顛末を録して鞠訊筆記と題し後昆に傳ふ其序に曰く

玉鋒の道さへわかぬ、世となりしにや、言驗く異國の船たえまなく來り、千早振神の御國の、御威稜さへ、廢しなんとする時にしあれば、九重の御殿にも、おほ御體をやすんし玉はす、襲の牖の民草までも、をしくおもはぬものこそなかりけれ、まいてさす、竹の舎人壯みくさのつかさの末につらなりしもの、いかて等閑に過行へき、されはわか前の中納言の君、既くも四十年の先より、このことをはかり知玉ひ、ふかく御心を惱まして、幕府へも種々のこと聞へあけさせられ、一たびは禍事にあひ玉ひけれと、あまた年經て冤罪はれさせ玉ひ、嘉永の末よりは、幕府の政にもあつからせ玉ひ、なにくれ

と計せ玉ひて、兎に角に、夷を征そくてふつかさのみ名をし辱しめず、東照すとはつみおやのみ心に背かせ玉はせしと、の玉ひしは、けに灼然おもひ奉らぬものそなかりける、しかるに難波江のよしあしさへわきかぬる、世のならひにや、またはおのかさかしらもて、聖の意は計りかぬる類にや、君には異き御心おはするなと聞えあけし人のありけん、こそ秋、尾張の中納言慶恕卿、越前中將慶永朝臣もろともに、幕府より罪かうふり玉ひ、中納言の君にも大城に登り玉ふこと止り玉ふへきよし、仰せことありて、十あまり五歳のうちに、再ひかゝるまかことにあひ玉ひしことなれば、百の司はさならなり、國內の賤の男賤の女までも、みなうれひかなしみ、いかにもして君のなきつみ、晴させ玉はむことをいのれと、そのしるしもなく、心をいためし折しも、朝廷より詔を賜りければ、中納言の君にも、深くかしこみ玉ひ、幕府をたすけ、天皇の御心をやすんし奉らんと、をたけひして、速

に老中の人々をめし、その事をなんはからせ玉ひけるに、五月蠅なす輩いかにいひいつはり申けん、君の真心は露はかりもとほり玉はさるのみならず、萬乗の君の詔、一片も行はるゝことなきは、いかに口惜きことならずや、しかのみならず、都にも東にも、とりことなり、或は大名にめしあつけられ、或は囚屋に繋かるゝもの、その數をしらす、みなそれその司におほせてその罪をたつね糺されしに、その事なほもひろこり、疑ますますかゝりて、今年卯月の末の六日の日、泰も安島の信立ぬし、大竹安直もろともに、評定所なるところにめされたゝさるゝことありければ、とてもえかへらぬことゝ、人々にも別を告げ出立しに、はからすも信立ぬしのみ留めおかれ、泰と安直とはわか家に歸りて後の命をまつことを得たりき、かくて一日二日すきぬるうちに、はや五月雨さへ降出し、たれこめてこしかたを考るに、再呼出されんには、いかなることになりゆかんもはかり難けれ

は、そのたつねたゝされしことのゆえよしを、吾後の世にもしらせはやと、筆をとりそむるになんありける、そもも數ならぬ身のあつき恵をうけまいらせ、ひたふるに君のみ爲と思ひつゝ、卒爾のことよりして、そゝろにまかことを得し、臣等か身は濱のまさこ、ちまたのちり、土の窟にうつもり、刃の氷とゝもにきえ、とほきありその島守となりて枿果つることゝ、いとふへきならねと、わか君の疑をうけ玉ふこと、かくまで深ければ、又いかなるまかわさに逢ひ玉はむもはかり難く、ねてもさめても、この事のみそ心いたくいきとほろしかりける、しかはあれとわか君、元よりすかすかしく、曇りなきみ心にて、幕府を助け奉りて朝廷のひるの守夜の守とならまくほりし玉ひしことは、天津神國つ神もしろしめすへければ、その冤の晴させ玉はむこと、たとひわか見るところにてえかなはすとも、後の世にいたりて、御徳光の輝きまさんことますますいちしろかるへきことに

なん、
泰再び訊問を受けて後遂に竹中圖書頭邸に幽禁せらるゝこと數月八月二十七日泰評定所に於て斬罪の宣告を受け傳馬街獄舎に於て處刑せらるる年三十六泰刑に臨み天を仰き再拜して刃を受く忠憤の氣勃々として顔色に見はれ獄吏皆戰慄すと云ふ其宣告文に曰く
右之者儀外夷御取扱の儀に付前中納言殿思召之趣御認有之候御直書を京詰同藩鶴飼吉左衛門並鶴飼幸吉等へ相達候儀は其時の御内命を請け取計の儀に候はても右は於公邊近年厚き御世話も被爲在當今第一の御政事にて尤御憚可有之儀を堂上方へ被仰遣候は如何に有之候哉其心付も無之却て前中納言殿思召の趣貫通可爲致と右體御世話有之候重事を不憚此者存意の次第をも相認右吉左衛門幸吉へ指遣候故右を烏丸下長者町芳兵衛借家儒醫池内大學を以て青蓮院宮三條内府殿へ指出又は御養君の儀刑部卿殿に可被爲立

路傍の浮説承り其段前中納言殿へ申上候右様にも相成間敷旨被_レ仰聞御喜色の御様子に有_レ之候連天運に被_レ爲_レ叶候様此上精力を盡し候ても御不興の儀は有_レ之間敷との御意内を推察假令へ主家の爲筋に候ても輕輩の身分を不_レ憚御養君の儀は紀伊殿又は一橋殿兩公の内にて異論兩説に候得共自然一橋殿には賢明の長君故御治定に相成候は_レ天下の御爲且水府の爲にも可_レ相成候間厚く勘辨可_レ致様前中納言殿御直命に紛敷を幸吉へ及_レ内狀候故同人父子に於ては右をも御内命の儀と心得品を奸計を廻し人心惑亂爲_レ致既に公武御確執にも可_レ及場合に至り候始末不届に付死罪申付る親戚故舊私かに遺骸を小塚原回向院域内に厝_レ幕府泰の罪に坐し男熊太郎を流刑に處す歲十五に滿たるを以て未だ發せず文久二年壬戌十一月幕府朝旨を傳へ歸葬及後を録することを許す因て熊太郎家を繼き祿を受け屍を收めて水戸常磐原に歸葬す熊太郎歿し原田明善の次子明遠嗣となり明遠死し小松崎吉郎

の次子伊豫次郎後を承く泰學術深遠詩文を善くし著はす所投筆餘録息距備考及詩文集若干卷あり藤田嘗て泰の所長を評して「天資忠懇聞見該博器度正大善與人共加之以冠準岳飛之趣則千載難_レ得」と云へり文學博士重野安釋か撰ぶ所の墓上の文左の如し自水戸藩倡尊攘其士大夫觸_レ法憲羅吏議以殞身非命者項背相望世概以慷慨激烈目之而不知有温厚周密老實而材幹如茅根君者也君諱泰字伯陽稱伊豫之介別號寒綠其先細川氏世居常陸久慈郡茅根村因爲_レ氏至伊左衛門諱爲道仕水戸威公以_レ武幹稱所謂水戸三左之一也爲_レ與番頭食_レ三百石其孫諱宗親爲_レ進物番別立門戶於君先考爲_レ高祖先考諱爲敏沒時君未生故弟爲_レ敬承後而以君爲_レ其嗣生母增子氏賢教子有方君幼不喜嬉戲母氏授以_レ書誦讀不倦及長風度端凝有大志會澤憩齋藤田東湖諸氏皆奇之曰後二十年成_レ吾輩志者必此生也引爲_レ忘年友於是學識大進烈公屢賞其篤學天保壬寅擢爲_レ床几廻明年爲_レ弘道

館舎長又明年烈公獲_レ譴幕府憩齋東湖等相繼貶黜獨結城朝道以_レ國老用事君見時事日非陳意見辭職以_レ謂不能進而致力當退育人材以供_レ他日之用乃下_レ帷教授來受業者日衆名聲聞_レ四方烈公嘉之親書默而識之學而不厭誨人不倦之語以_レ賜時君年僅二十二及_レ公冤雪復_レ床几廻尋以_レ遊倅爲_レ小十人組兼_レ弘道館訓導累進馬廻郡奉行班補_レ與右筆頭取祇役江戸烈公之再聽_レ國政結城朝道獲_レ罪禁錮密與_レ其黨謀伺_レ釁者日久會_レ江戸地大震國老戶田忠敬及東湖死災朝道等乃煽_レ動君側欲_レ以_レ離間烈公父子外間亦有_レ助之者勢甚危君深憂之左右周旋諷規并施諄諄弗遺餘力順公大感悟決意誅_レ朝道黨與皆伏_レ罪人心始安尋兼_レ管學政初烈公創_レ學校制度未備適值_レ國變學政隨壞順公述_レ父志復以_レ會澤憩齋爲_レ總教君草_レ學令一篇以_レ進於是折衷衆議學制大定轉_レ小姓頭取管_レ秘書內帑事又兼_レ與右筆頭取加_レ賜祿百五十石侍_レ讀順公歲戊午烈公再獲_レ譴幽_レ于_レ別邸當時幕府不_レ奉朝

旨擅與_レ外國盟約於是尊攘之說益喧騰君以_レ爲事已至此非尋常論說所能奪乃與_レ國老安島信立等議將_レ結列藩志士以_レ有所_レ匡正會_レ天子詔幕府攘夷又賜_レ密勅於_レ水戸藩令_レ輔將軍協諸侯以_レ處_レ內外事君建言曰朝廷寬仁不問_レ幕府罪猶欲_レ使盡其_レ職宜_レ速奉_レ勅旨定_レ天下大計順公乃告_レ之幕府有_レ司深疾之遣_レ吏京師悉捕_レ異議者下_レ獄召_レ君及信立等對_レ于_レ評定所君執義不屈後推_レ訊再次遂誣_レ罪當斬實安政六年己未八月二十七日也年三十六是日幕府遣_レ烈公_レ錮_レ于_レ國國人騷然亡何公亦薨遂有_レ筑波山那珂港之舉向者戶田藤田之死使_レ君不在則群小得_レ計是非顛倒一國流血不必待_レ筑波山那珂港當有_レ筑波那珂之舉使_レ君尚在則能_レ裁抑_レ少年輩不必_レ至_レ相攻闔_レ蓋君之於_レ學本_レ忠孝而重_レ實踐性又醇粹貌儼而色溫事_レ母至孝未_レ曾_レ一日欠_レ定省其於_レ義父母亦如此母沒哀毀過_レ禮將_レ行_レ三年喪以_レ國事毀_レ不_レ果日事少定吾當_レ追_レ行之國人皆服_レ君行_レ義諮焉以_レ決事賴焉以_レ爲

重、此憩齋東湖之所、以托後事於君、而中道逢殃、君之不幸即一藩之不幸也、所著投筆餘錄、息距備考、詩文若干卷、其自錄受審顛末者曰、翰訊筆記、皆藏于家、娶小原氏生一男一女、男謙初稱熊太郎、女適某氏、君之赴評定所、自分必死、賦古詩二篇與熊太郎、熊太郎時年五歲、坐處流未發、越五年、幕府傳朝命、釋君罪、錄其後、藩乃令熊太郎嗣家、君受刑江戶、權厝城西小塚原、至是奉喪歸葬水戶城西常磐原、後二十年、門人長谷川清等謀建碑墓、上持狀來乞銘、不能辭、乃集其與兒詩中之語、每句換一字以爲銘、曰、

嗟君(原作吾)生不辰、罪戾輒(原作或)相隨、學術有(原作無)淵源、險夷常(原作當)以之、皇天既(原作未)悔禍、歸葬遂有(原作無)期、丹心長(原作尙)如火、拜跪觀(原作誦)此詩、

明治二十二年五月二日朝旨に由り泰靖國神社に合祀せられ二十四年十二月十七日朝廷更に泰の舊勳を録し正四位を贈らる泰著はす所の詩文若干篇を左に鈔

録す

諸葛武侯

高臥南陽養此軀、欲回頽日淨寰區、壯懷不爲三分業、忠憤扶持六尺孤、何必功名比管樂、却觀輜略出孫吳、縱令一夜將星落、猶走姦雄狼顧奴、

源准后

姦雄跋扈勢縱橫、皇室陵遲神器輕、幸因君有正名史、大義長兼日月明、

本多中書

憶昔國家草創際、東西馳騁立高勳、凜然報國盡忠志、不啻執才汗馬勤、隻手挽回君子轡、孤兵抑絕豐公軍、豈唯功業垂當日、芳烈雄風萬古薰、

菅相公

特起稍分外戚權、寬平聖主中興年、孤忠只欲皇綱立、防計寧論性命全、貝錦織來心管地、衣冠空去闕廷邊、冤魂縱使埋西海、凜凜精誠照簡編、

讀宋史

虜兵十萬飲河水、誰說金陵巴蜀雄、何事九州無具

眼、人家輸與一萊公、

讀岳忠武集

淵源抱負見平生、左氏春秋孫子兵、唾手燕雲吞北虜、誓心天地復東京、獨非奸槍鋤忠義、無奈辱王忍、父兄開卷讀來風雨夜、至今猶覺恨難平、

書弘道館記後

國家之於文武、豈可偏廢乎、而文武之用亦在其立志何如耳、苟志之不立乎、文則記誦詞掌、武則弄鎗試劍、方其平居無事、則儼然士丈夫也、一旦有事禍福利害難陳於前、其不茫乎失措、視然忘義者幾希、此士之所當深恥而有國者之所宜致思也、恭惟我太公夙有憂於此、襲封之初、屢下命戒飾、其再就國也、遂大營學校於外郭、講學之寮、演武之場、井然肅然具列其中、凡刑賞黜陟一出於學、又親撰此記、勒石以立館側、使闔國士民知所向矣、上焉論神聖經綸之大、下焉述祖宗德澤之深、其所以嚴國體正名分、敬神以明大道、崇儒以紓異端、一本忠孝不岐文武者、綱張目舉炳如日星、可謂英見卓識

贈正四位茅泰根傳

復出千古矣、士之立志以謀報國、其舍此而何從也、苟能一意遵奉、無有懈怠、則亡論、出仕居家、臨禍福、

際利害、處之裕如、不失爲忠臣孝子、猶水之千屈萬折、竟歸東海也、而教化之效未泯、公中蜚語、遽隱別邸、今公幼冲襲封、政出多門、一國洵洵不知所爲、犬馬之誠、竊恐太公盛意或荒矣、今茲辛亥五月朔、今公始下親奎、反覆曉諭、大意以館記爲標準、使士大夫竭忠孝、勵文武者、爲其第一義、實太公營菟裘之八年也、於是乎、繼述之美德昭然暴白於一國、而古人所謂數世之仁亦可庶幾矣、臣子聞此命者、當何如也、臣嘗拜誦記文、謄寫一本、以藏家塾、教導子弟、區區微忠、欲推弘盛意之萬一也、今聞此命、喜而不寐、乃謹書其由於卷末、嗚呼、東藩濟濟之士、深體二公之盛意、忠孝仁義修於其身、乃武乃文、發爲事業、豈不美乎、不然、尸位素餐、相率爲大倉之鼠而已、國家所倚賴、果何在也、其可不思哉、其可不勤哉、是月五日、臣泰謹識、

祭東湖先生文

我聞自古國運興隆，奇傑英豪，前後繼降，而其將衰，先碎蘭芷，哲人之萎，遺恨萬重，嗚呼先生，國士無雙，過庭有訓，學力其充，文非鉛槧，武豈劍種，海壑其量，水蘗其胸，德比溫國，才侔坡翁，國統昔危，卜筮告凶，一意決策，盡瘁鞠躬，妖狐屏跡，新曦曠囂，夙受特知，魚水遭逢，出入風議，言聽計從，恨明主澤，僅止常東，況命不遇，天降翰調，君子道消，菟裘營宮，十歲閑廢，耳屬垣牆，梅村竹隈，雨室風窓，著書自怡，寧論窮通，忽會海警，甘泉望烽，廟堂肝食，遽決蔽壅，腰刀奉訓，神龍現蹤，風雨再契，展驥奮庸，斧鑿無痕，橐籥有功，旋乾轉坤，尊王詰戎，況其相業，養正發蒙，勤感天性，和氣沖融，慘哉震乎，勢傾山峰，縱令大星，忽隕於空，豈圖雙劍，共埋於豐，齊失管鮑，漢亡葛龐，嗟不慈遺，却養蠶蜂，土氣蒸肅，虜勢橫縱，龍口寂寞，無復時宗，目前偷安，誰圖始終，口談自治，實眩蠻兒，蹈像令廢，三眼且費，我恐戰艦，復作客艘，民力有限，谿壑無窮，虜或未至，寇賊內訌，君而有知，怒髮上衝，其悟幾先，上訴蒼穹，不然天意，何其夢夢。

我知英靈，為貫日虹，嘗和文山詞鋒，甚雄，字挾風霜，正氣滿腔，云作義鬼，誓護帝邦，遙聞天語，悼惜誠忠，自非至誠，豈動宸聰，嗟我何人，叨辱陶鑄，恩踰骨肉，化頑治龔，恍然一夢，又值孟冬，風疑嗽咳，月認清容，想像論罷，笑對玉缸，緬懷往事，零涕漣漣，豈啻私情，實為我公，雖非鵬舉，聊擬祭同，神其彷彿，來饗此鐘。

和東湖先生袖門歌以贈敬卿橋君

日夕追隨袖門園，論心何厭懸河喧，雙袖亭亭高丈餘，門之所以為袖門，不用淮海勞錫貢，常觀勁姿立，門垣白葩皎潔黃顛垂，主人愛汝且開樽，生稟南國溫厚氣，落花和醬香氣繁，才當秋霜肅殺時，碩果足供烈士魂，枝幹剝以為刀柄，剛健殊耐戰數番，綠芽摘來和鮮肉，恰似波間錦鱗翻，回首世上幾多木，異葩珍果何其蕃，誰識此栢其四長，花實葉枝以為四長，嬌容不敢媚王孫，高節未入前賢詠，寂然獨涉幾寒暄，譬如天子不知名，孤忠且作國屏藩，所蘊於中其可愛，外容嚴然不可捫，層冰積雪容易支，綠葉

伴松長不諼，主人愛汝不尋常，培養由來在本根，主人忠義填骨髓，挽回頹瀾復舊痕，君不見管家之梅蘇氏竹，流芳千載為人尊，期汝亦幸得所託，長共主人令名存。

勤王 實記 水戸烈士傳上編 卷四

贈從四位鵜飼知信傳

鵜飼知信字は子熊吉左右衛門と稱し拙齋と號す新之衛門真教の第二子尾張中島村に生る幼より好んで武技を演し弓槍の術を善くす同宗水戸藩士鵜飼幸吉知益の養子となり天保四年癸巳七月家督を繼ぎ俸稟を受け小十人組に列し京都の水戸藩邸留主居役手添となる時に烈公の二姉左大臣鷹司政通右大臣二條齊信の夫人となり京都の第に移る知信命を受け其二第に伺候して内儀に勤仕す尋て馬廻組に班し留主居役に進む弘化元年甲辰五月烈公薨語に中り罪を幕府に獲て俄かに致仕し礫川邸を去り駒籠別邸に幽居す當路の戸田忠敵(銀次郎後忠大夫) 藤田彪(虎之介後誠之進) 等貶黜せられ結城朝道(貞壽)黨を結び政柄を執り藩政大に亂る知信痛く之を憂へ請願書を參議橋本

贈從四位鵜飼知信傳

九一

實麗に呈す其要旨は烈公の冤を雪ぎ再び政事に預り幕府を輔翼せしめんことを謀るに在り礫川邸の有司之を嫉み知信を江戸に召喚し譴責を加へ三年丙午五月を以て職を奪ひ水戸に下せり知信曾て洛西華嚴寺の齋宗法師と親み善し知信京都を發し東下するに方り法師硯一枚に國歌を添へて贈る其返歌に曰く
忘れしな、君か心の、底深き、硯の海の、朽ちはつるとも、

嘉永六年癸丑の春藩政恢復するに迫り知信復職して再び京都の藩邸に移る其西上するに臨み烈公内意を諭して曰く攝泉の海岸京畿に接近すれども邊備のあることなし緩急事あらば恐らくは禁闕を驚擾せん吾嘗て之を憂へ幕府に建言することあるも聽かれず汝京畿に在りて搢紳に密邇す能く吾が意を體し圖る所

あれと知信感銘し之を服膺して祇役す此の歳外艦渡
來の事あり知信常に王室を尊ひ外患を攘ふの念慮止
むことなく奮つて其策を講し力を致す安政元年甲寅
四月皇居炎上す知信烈公の命を受け鷹司卿（政通前
の左大臣後關白）に内謁し皇居の東南及西南の二隅
に缺凹あるを補足し直角となすの設計あらん事を請
ふ議輒ち行はる是の歳烈公親ら華欄の良材を以て琵琶
一面を製し京都に送り又知信をして鷹司卿に執奏
を請はしめ之を内獻す烈公其琵琶の胴裏に獻琵琶表
を刻せり

今茲甲寅之夏、皇宮罹災駐蹕於外、亡幾鄂虜航
海泊攝之浪華浦、淹留旬餘畿内騷然、臣齊昭仰想
行宮狹隘無以慰宸衷、俯慨醜虜猖獗未、能伸
皇威、屢陳鄙見於征夷府、而才疎論迂未審、用捨
如何也、齊昭頃獲華欄材長三尺許、手製琵琶一
面、竊謂方行宮之災、雅樂寶器得無屬鳥有邪、
乃因關白政通公獻之行宮、豈敢望補寶器之
闕乎、萬機之暇或命侍臣、彈還城之樂、歌太平

之頌、洋々乎盈耳、乃以紓宸憂、外以鎮狄邪、
此器有榮焉、臣竊爲天下祝之、

尋て鷹司卿知信を召し進獻の琵琶敬感斜ならず嘉納
あらせらるの命あり知信又烈公の意を承け和泉河内
の諸寺に抵り楠氏の遺蹟を繹ね舊記遺聞を探討搜索
し之を謄寫して烈公に呈す知信又嘗て山陵の荒廢す
るを歎き平塚瓢齋（京師市尹付屬）と俱に心を竭して
其所在を考索すること多年後瓢齋が著す所の山陵考
一冊を烈公に呈す二年乙卯十月鷹司卿知信を召して
曰く徳川齊昭の精忠既に寂聞に達す其造る所の太刀
を玉體保護の劔とせらるゝの寂慮あり因て速かに之
を内獻すべしと知信備さに其命を傳ふ烈公旨を奉し
庭園に鍛冶場を設け躬親ら鍛鍊す劔成るに及び知信
烈公の意を受け之を鷹司卿に捧げ進獻を請ひ又嘉納
せらる（曩に參議橋本實麗是の命を傳ふ烈公固辭す
此に至て再命ありたるなり）十二月知信資格を大番
組に列し勝手掛りを兼務す烈公知信が深く意を尊擡
に注げるを賞し絹本に「尊擡」の二字を大書し之を下

附し又自作の刀一口（八雲鍛と呼ぶもの）を賜ふ五年
戊午正月老中堀田正睦（備中守）西上して互市條約の
勅許を乞ふ行はれず而して堀田は一策を按し長野義
言（彦根藩の臣）島田龍章（九條卿の臣）を介し關白九
條卿 尙忠に謁し巧言以て外事の處置は幕府に委任
するを可とするの議を進め其心を動かすに至る知信
之を憂へ近衛（忠愍）鷹司（輔熙）三條（實萬）三卿に詣
り具陳して曰く一たび外交の事を關東に任せば國威
を失墜し皇權復興の期あるべからずと時に八十八
卿重大なる外事を幕府に委すべからざるの議を奏す
るあり朝議斷して條約訂結を許可せざるの命下る堀
田長野等の意見行はれんとして其策成らざるものは
知信亦與りて力あり四月井伊直弼（掃部頭）大老とな
り幕政を専らにし大に權力を張り内は天朝の命令を
蔑如し外は外國の聲焰に恐怖し彼の要求に従ひ六月
を以て擅に我が國權を墮せる條約を結び一片の書面
を以て之を奏上す皇上赫怒其勅旨に背くを責め三家
又は大老の一人を召す大老之を奉せざるのみならず

違勅行爲を非議するものを嫌忌する甚しく大將軍家
定薨するも其喪を發せず政事を専行し卒爾に府命を
下して烈公及諸侯伯を罪し正議を鉗制す是より先き
知信陰かに近衛鷹司三條及中山（忠能）萬里小路（正
房）等諸卿に謁し又宮家公家の臣伊丹（藏人）小林（民
部權大輔）高橋（兵部權大輔）薩摩の西郷（吉之助）日
下部（伊三次）尾張の尾崎（八右衛門）越前の橋本（左
内）僧成就院忍向處士梅田（源次郎）頼（三樹三郎）等
と相往來し其論說する所は外冠を掃蕩し以て神州の
威武を示すに非ずんば後遂に不測の國辱を取るに至
んと云ふに在り諸卿其氣概を稱して深く之を容納し
諸有志皆奮然として心力を協戮し謀ること少ながら
ず近衛卿の老女村岡も亦力を添ふ知信時事に顧みる
事あり男知明等を訓誨せる要旨左の如し

措紳諸卿は天資柔和にして人の説を容るゝに各か
ならされとも哀哉武士と異り大事に莅み畏懼狼狽
する人鮮しとせず必ず其人となりに注意せざるべ
からず又草莽有志の徒は其議論過激に涉り動もす

れば無謀の倒幕論に走るもの多し此の行たる事敗れ易くして内憂外患一時に起り天下麻の如く亂れ却て宸襟を惱し奉り焦眉の急なる攘夷の策を決し難し且我々は徳川家支流の臣として輒すく倒幕論に左袒するか如きは老公(齊昭卿)の誠意に背き上は天朝の御爲とならず降つて君家の將來を慮り策の得たるものに非ず期する所今日の急務は幕府要路の汚吏にして陽に無事泰平公武合體を口實に藉り陰に諸外國の恫喝に畏懼して爲す所を知らず勿體なくも朝議を遵奉する能はざる俗吏を斥け徳川氏をして尊王攘夷の主導者たらしめざるべからず我々同志の士は此の心を體し國家に竭すの外なし若し幕府にして反省せざる時は斃れて而して已むの一あるのみ

其條約訂結と諸侯伯羅織のことあるや藩士處士慷慨悲憤京都に入りて尊攘の策を講ずるもの益多く且大將軍の儲嗣に賢且長の人を選びべき説を唱ふるものあり志士の聲勢亦盛なり知信江戸に在る安島信立

(帶刀)茅根泰(伊豫之介)等と東西相謀り東は幕府及外間の事情を通し西は摺紳諸大夫士庶の意見を報し力を致して大慾を黜け幕政を匡さんとす鹿兒島侯(島津齊彬)嘗て内政日に非なるを憂へ策を樹て藩内に誠告し内害外患を排除せんとするに由り志士大に望を屬し其機會に同く死力を出たし盡瘁せんとする日あり候之が實行を期し既に東上せんとするに際し遽かに病んで卒し(七月十六日)事成らず此に於て少壯の士皆曰く宜く幕府の違勅を聲言し問罪の師を起すべしと知信竊かに近衛卿に謁して曰く壯士の氣焰彼が如く然り然れども今は先づ幕府に對して大に反省を促し親藩其他の諸侯之を輔け以て共に勅旨を奉するの時なり未だ師を出すの時にあらずと而して其出入は幕吏に物色せらるゝに由り屢伺候するを避け忍向を介し村岡を介し意見を開陳せることあり八月八日皇上修攘の勅詔を幕府及順公に下し特に別勅を順公に賜ひ之が廻達を命ず其要は諸侯伯をして大將

軍を輔佐し以て修攘の効を奏せしめんとするに外ならず是の日傳奏萬里小路大納言知信を召して順公に賜ふ勅詔及別勅を下付し之を江戸に達せしむ勅書若し幕府を経由し交付せんか幕府必ず壅蔽して達せざるの虞あり爲に知信に斯の命ありたりと云ふ知信感戴管ならず偶ま病あり大納言の許可を得長男知明に命じ即日東下せしむ日下部奮起し同行して之か擁護を力む十七日知明江戸に至り謹んで之を磯川邸に捧く順公奉承して直ちに之を列藩に廻達せんとするも井伊大老の爲に阻遏せられ荏苒日子を送る知信勅旨奉行の遅緩に涉るを苦慮すること暫ならず片時も早く大老の暴威を挫折し勅詔廻達の効を奏せんと寢食を忘れて力を盡す實に虚日なし九月五日を以て京都の事情を述へ茅根及鴨志田重明(傳五郎)に寄せたる書面并に添付せる別紙四通左の如し

謹而拜啓兩三日は暴冷と申程に御坐候處一昨日來時候相應に罷成候貴地如何御坐候哉先以被レ爲レ揃彌御安健被レ成ニ御奉職ニ奉ニ恭賀ニ候然は閣老衆、兩

傳より添書の儀は先便申上候通に御坐候處右一條且若州上京の上は内藤豊州と申合京師御取締と申廉有志の御方々如何にも御配慮被レ爲レ在殊に若州先年在京中九様へ恩義を掛置候譯有レ之候に付殿下へ御絶り申候へば如何様の事も出来可レ申との料簡にて御請合申上候事歟と推考仕候其譯は若州在職中女御入内の儀被レ仰出ニ九様に御治定の所鷹司殿下より左府には筒様筒様の失有レ之に付九の姫君入内は不可レ然旨從ニ關東ニ被レ仰進ニ候様にと御書取にて所司代へ御達に相成候由の處若州含みて御書取を懐に仕置御入内無レ滞被レ爲レ濟候由其後若州罷下候節拜謁を願云々の趣申上候節右御書取入ニ御覽ニ候處何れも思召當有レ之事に付甚御赤面にて若州へ厚御挨拶被レ爲レ在候由其砌以後何成共用向有レ之節必恩を報じ可レ申との御約束有レ之趣此度上京仕候は必殿下を御便りに存上京に可レ有レ之との説出候に付夫ては御一大事との御事にて先間部一條兩傳表向の御糺明去月二十九日左府

公右府公御列坐にて御糺に相成候處誠に恐入候旨にて其日より御引込に相成申候右の御儀に付殊の外御逆鱗強く是非殿下も相糺候様にとの勅諭に付別紙二日の御書寫の通の御運合に相成候處夫迄には種々の御評論にて中山卿等は殊の外御拒の由に御座候へ共何分寂慮烈敷故右の所へ御評決に相成當月二日の夜殿下御辭職の表御指出に相成三日に内覽被_レ聞召_レ關白職の儀は關東へ一應御内慮被_レ爲_レ在候旨御辭職の儀被_レ聞召_レ候御先例の由に付内覽は三日夜近様へ御内意被_レ仰出_レ昨四日内覽宣下被_レ爲_レ在候趣に御座候傳奏代役は徳大寺殿中山殿へ被_レ仰付_レ候由に御座候若州も杖柱と奉_レ頼罷登候處殿下御辭職にては定て當惑被_レ致候半扱内藤豊州より一兩日以前京師市尹の使指越京都御取締の蒙_レ内命_レ罷登候に付ては其内罷出及_レ御相談可_レ申旨申來候由の處市尹の返答には京地には所司代にて惣御取締被_レ致御所の儀御附にて取締致し町の儀は拙者共にて取締致し候間伏見より取締

の助成を受候等は無_レ之前々より伏見は一人役の事に付却て當地より致_レ助成_レ候事は見合も有_レ之候得共伏見より京師の取締り受候例は無_レ之旨及_レ返答_レ候旨承申候件の通指紳家にては是迄例無_レ之事に付過日傳奏乘へ面會申込候へ共所司代着の上承り可_レ致_レ面會_レとの返答に相成候由旁に付豊州も餘り敢果々々敷事には參間敷歟と推考仕候扱先月十九日後の御地の模様定て二十六日正六にて御運も可_レ被_レ下歟と相待居候處無_レ其儀誠に不都合に御座候當月朔日方より近三御兩家様より日々東信は無_レ之哉と申事御尋に御座候間如何にも御返答に差支申候並に六日限昨今には着可_レ仕と相待居候處別紙の通守口と申は勢州世子格太郎の隱名に御座候是も先日來上京仕殊の外周旋仕此度の御辭職の儀も餘程盡力仕候處先程克參候に付一先勢州へ引取又當月下旬頃上京の積にて今朝發途の由昨日暇乞に參候處三公より東信無_レ之ては不_レ致_レ安心_レ候間今日致_レ逗留_レ候て東信を爲_レ聞よとの御

事に付今日晝頃迄出立見合候旨別紙の通申越候斯様の譯柄に御座候間何卒御音信は繁々被_レ成下_レ候様仕度奉_レ願候今午刻二十六日出並に六日限着の處御狀無_レ之甚當惑仕候若哉大阪の方へ御廻に相成候歟とも存候へ共何分近三御兩方様より追々の御尋に御座候間吳々も此後御地の御模様委敷相同道奉_レ存候是は私事には無_レ之國家の御爲に御座候間爰の所不_レ惡御承引可_レ被_レ下_レ候

一只今(午刻)承候昨日内覽被_レ聞召_レ候に付准后様への御通路の御廊下御べ切に相成候由是は兼て此事御發前に左府様より若哉右御辭職の邊に至候得ば准后殿より御歎願等出可_レ申其節御馳被_レ遊候様にては此事行ひ候には不_レ相成_レ候間此所駈と相伺度との言上の由決て左様の儀無_レ之との勅諭の由に付右嫌疑御避の爲當分右の通の御行に相成候御事歟と奉_レ推考_レ誠_レ以奉_レ恐入_レ候御儀に奉_レ存上_レ候全く奸臣増長故誠に御睦敷被_レ爲_レ在候御中斯様に奉_レ裂と申は實に恐入候御儀奉_レ存候尤御父君の

御不心得より事發候へ共其本は奸臣共に御座候可_レ惡事に御座候

右の外色々申上度儀御座候へ共少々混雜に御座候間當地の事情荒々申上候安島様へ別段に不_レ申上_レ候間此趣宜被_レ仰上_レ可_レ被_レ下_レ様奉_レ願候_レ追々來人も有_レ之に付草略御免可_レ被_レ下_レ候頓首
尙々只今又彼御方より被_レ仰下_レ候には間部等二日御地出立罷登候由右は過日の勅諭を兩傳の副書に依て拵物と申振に取計候積に可_レ有_レ之との御事夫に付近様にて御配慮被_レ遊_レ候は鷄澤彼是周旋仕候事三より萬里承知の事に付萬里より其事間部の方へ洩候様の事有_レ之候ては彌拵もの、扱に致積と相見申候然る所列候へは是迄度々台命にて爲_レ致_レ建白_レ候事に付此度の勅諭は列候へ觸不_レ申趣申出候間公邊より觸不_レ申候は、水戸様より諸侯へ早々御觸に相成候様にと被_レ仰下_レ候間何卒急に右の邊御取計に相成候様仕度候内實は此度の勅諭にて當公は勿論駒込様にも御登城被_レ遊_レ迷に奸物共

の御處置被_レ爲_レ在候御事と思召候處實は餘り御緩急の御事との御噂も被_レ爲_レ在候間此書狀着次第列候への御通達被_レ遊候様仕度奉_二至願候阿州へは右の御寫御縁邊の廉にて右府様より被_レ遣候處留守居國許へ持參仕差上候處御返書は無_レ之御傳言にて此度の勅諭誠に以身に取難_レ有仕合奉_レ存私も養子には出候へ共元は徳川家に生れ候者に御座候處格迄徳川家を被_二思食_一候ての勅諭無_二此上_一御儀に付萬一御通達無_レ之共若哉御變被_レ爲_レ在候は_レ此寫を證據に早速驅登候旨御請被_二申上_一候由且土州も勅諭の御通達かたづを吞で相待被_レ居候由其外有志の諸侯何れも手に汗を握り居候趣近様より參り候人の咄に御座候間是非共前件申上候通早速列候へ御通達被_レ爲_レ在候様奉_二懇願_一候乍_レ恐近三公も少々もとかしき様にも思召候歎に參り候人の口氣に相顯れ申候依て此段申進候頓首

(別紙) 又申上候只今御使の口氣にて承候へは近三様へ御

傳言申上候御直に蒙_二勅諭_一候は誠に先祖以來無_レ之儀に付此上は身命を抛候ても奉_レ報_二勅諭_一と被_レ仰候處とは大に相違に有_レ之と申さぬ計の事共も有_レ之於_二我々共_一誠に心配仕候簡様御緩急に被_レ遊候ては追々被_二仰立_一候御儀御立ち不_レ被_レ遊候様に縉紳家にて被_レ存候様にては何共心外千萬に御座候間是非非御憤發被_レ遊公邊を御輔翼被_レ遊候様仕度乍_レ恐奉_二懇願_一候恐惶頓首

(別紙)

彌御安康珍重候扱今日の御次第二條亞相昨夕行向の趣義言一條段々尋向の處不_二存寄_一風聞にて御不審の段何共恐入候決して左様の儀一も覺は無_レ之候得共風説甚敷御不審と相成候ては申上様も無_レ之旨且間部書狀一件は實に心得違重職輕卒の段申上譯も無_レ之次第と被_レ申候趣に候巨細の儀難_二認取_一候へ共右の次第に付御評議の處以_二勅書_一右府以下へ被_二仰下_一候て二條行向所勞を被_レ稱辭退の様にと右府始より被_二申入_一候に相成二條被_二行向_一候迄

に相成候明日には辭退出候て直に内覽は被_二聞召_一關白職の處は關東御内慮に相成候趣に今日相伺退出候事に候議奏には辭職の處ども不承知の様子に相見候事に候早々右申入度密々申入候滋野井へも心配の事何卒御通置の様御頼申入候右に付若御出給候は、明早朝天に人々不_レ來内御出逢に不_二相成_一頃に出出可_レ給右は少々子細有_レ之申入候大に亂書御推覽可_レ給候也

九月二日夜不_二目立_一候様に側の者を以密々申入候なり

(別紙)

昨夜は御細書被_レ下難_レ有奉_二拜讀_一候扱野生義今朝發足可_レ仕處何分東信有_レ之候は、明朝にも可_二申上_一様又候被_二仰下_一候段も御座候間午時まで見合申候に付奉_レ何候昨夜東信參り不_レ申候哉若し參り有_レ之候は、委曲御書取被_レ下候様奉_二願上_一候今度東信相分り候迄は先御安心不_二相成_一との御儀乍_レ恐御尤に奉_レ窺候御事に御座候あまり度々御尋申

上候も恐入候ても右の次第に御座候間一應奉_二伺上_一候草々頓首

九月五日

昨夜深更に退出いたし候間口口執筆申上候差急

ぎ亂筆宜御推覽可_レ被_レ下候

于海様御直覽

守口生

(別紙)

拜復

華書拜讀扱東信參り云々早々御爲_レ知被_レ下候段奉_二深謝_一候先々彦根兩閣の様子にては好勢大に弱り申候事と被_レ存候しかし隱謀は難_レ計奉_二存候先_一づ早々右の通可_二申上_一候へども要路の御便大阪より今夕にも相分申候はば何卒又々御爲_レ知被_レ下候様奉_二願上_一候野生義も午後發足可_レ仕存候處大阪へは定て要路より委曲の儀相廻り可_レ有_レ之奉_二推察_一候間今日發足見合可_レ申候先不_二取敢_一草々以上

九月五日

于海様御直覽

守口生

知信勅書廻達の漸く遅延するを憤慨し又時事の日に非なるを慨歎し意見を述べて茅根に贈り又僧月照に贈りたる書信左の如し(月照は忍向の別號)

謹而拜啓仕候秋冷の節御座候得共被_レ爲_レ揃彌御安泰被_レ成_二御奉職_一奉_二恭賀_一候去る朔日より四日切御狀無_二相違_一到着拜見仕候扱太田間部兩人去十九日參上候節申上候は至極恐入感服仕候趣申上引取候趣被_二仰下_一候間御都合も御宜敷と存早速夫々へ入説仕置候處去二十八日二十九日兩人參上仕御應接の振合にては去十九日とは表裡の御請け申上候由扱々可_レ惡事に御座候然る所當地にて去十九日の御模様にて御安心被_レ遊候趣 近公并三公よりも被_二仰下_一候に付早速朔日の御狀の趣も入説仕候處内實は當節副の御催しも被_レ爲_レ在候歟の處太田間部の抑留にて今以列候へ御通達も不被_レ爲_レ在と申處近三公共に殊の外御立腹被_レ爲_レ在候由仰には勅諭が重きや太田間部の申事が重きや此辨別不_二出來_一事は有_レ之間敷餘りあきれ候との御事の由右

の風聞御所内速に相廻り有志の縉紳家にて扱々苦々敷事誠に不_二容易_一勅諭御下げに相成候ても列候へも不_二達_一遵奉致す事も不_レ知は何と申事に候や水戸は是迄頼母敷思居候に案外の腰拔なりと頻りに致_二風聞_一候よし誠に承度毎に殘念とも何とも申様無_レ之心外千萬に御座候何故御家來同様の御老中位に左迄御恐れ被_レ遊候御儀に御座候哉將軍様は不被_レ爲_レ在全く御老中大老の爲に御主人家に被_レ爲_レ在ながら筒様の御事と申は實に恐入候御儀に奉_レ存候以前は水戸は頼母敷者と毎度叙感被_レ爲_レ在候趣追々相同居候處此節は右勅諭の御儀も達_二叡聞_一候歟其上好策にや御家御家老衆の小傳の如きもの認差出し御所内あれこれと廻居候趣其始の所に老公の御行事不_レ宜と申事を認め其次へ鈴木石見守は極忠臣に有_レ之候處國元へ押込置此者は云々のもの太田丹波守等も同斷云々の極忠臣に有_レ之處云々申付置岡田信濃守は云々にて大不忠の者大場彌右衛門も云々にて大不忠者武田修理も同

斷其外君側も家老も右の通不忠のものに付同志の不忠奸物計を入置候間當中納言殿も所業不_レ宜杯申振に認半紙五六枚有_レ之との趣承り候間借度旨頼置候得共未だ手に入り不_レ申是は中山殿へ御旗本の隠居にて宮初次郎とか申もの入込居候由若し此者持來候には無_レ之哉此者初は蓮王か近三の内へ御奉公申度趣申居候由の處何れも御抱不被_レ出候間無_レ據中山殿へ入込候と申_二に御座候必此者隱密にて有_レ之と奉_レ存候扱右小傳等流布仕候に付是も自然と叡聞にも入り可_レ申何分御所内にて好に屬候縉紳家も澤山に有_レ之候に付浮説流行一犬虚吼萬犬實を傳ふ氣味にて叡慮も如何と被_レ爲_レ存候處へ前件の勅諭列候へ御傳へ無_レ之と申所にて甚御逆鱗被_レ爲_レ在候様の趣薄々伺誠に恐入候御儀に御座候前件の通閣老押候處破るには副には不_レ如と申世子頻に三公へ右の所言上仕候に付三にても□□も不被_レ爲_レ在候處世子申は實に國家の御爲御座候間此儘御拾置に相成候得ばあたら精忠の水尾越

とも御捨殺と申ものに相成申候左候得ば此後有志の者有_レ之とても塾候様に相成可_レ申と實に涕泣仕申上候由に付三公も些御困り位に御座候趣世子直話に御座候右に付三より近へ御咄に相成近より叡慮御伺被_レ遊候處叡慮も被_レ爲_レ變候や更に何等の勅答も不被_レ爲_レ在候に付近公にても實に御困り被_レ遊候趣極密伺候間誠に浩歎仕候へ共又至極宜釣合に御座候處此砌少々御間に御座候に付何卒御憤激被_レ遊列候へ御通達被_レ遊押て兩公尾公越公御登營被_レ遊大老閣老御糺明の工夫に御所置被_レ遊其趣に被_レ達_二叡聞_一候は、又思召被_レ爲_レ返候御場合にも至可_レ申只今の御釣合にては公邊御同様御違勅の罪御通不被_レ遊との御振合に御座候扱御同歎御座候何卒御憤激の處極々御周旋可_レ被_レ下尤今日杯御催促の勅諭歟又は三公よりも御催促の御書御下げに相成候歟の御内沙汰も相同居候扱先便申上候通九兩殿下御辭職近へ内覽宣下被_レ爲_レ在殿下の所は關東へ御内慮被_レ爲_レ在候處所司代より二三日返答

申上候は御内慮の趣は早速關東へ相運候得共此御の儀に付關東より御返答無之の内萬一御辭職被_レ聞食_一様の御事御座候得ば公武の御間も如何被_レ爲_レ在候哉も難_レ計候に付關東より御返答有_レ之迄は被_レ聞食_一候御儀不_レ被_レ爲_レ在候様仕度旨申上候よし扱傳奏の所も當官は御取上にて前大納言被_レ遊當時御無人の折柄に付御免に可_レ相成_一歟の趣に御座候又一説には廣橋殿は春以來の次第有_レ之に付被_レ轉候歟杯の沙汰も有_レ之候扱薩より内々近へ申上候には水戸家より勅諭御回達無_レ之に付別紙の通京師へ勅諭御寫並御催促の御書を願に參候に付萬一列藩より憤發に相成候様にては前様是迄の御建白も虚に相成如何にも列侯へ御對被_レ遊當公も御顔向も難_レ被_レ遊御次第には無_レ之哉猶勅諭御返上に相成候やの旨薩藩より近へ申上候由萬一左様に相成り候節には初當公簡様の儀當家始り無_レ之事に付此上は身命を抛水戸家は如何様に相成候共是は勅諭御遵奉被_レ遊候趣に仰出候所へ相當不_レ仕よ

もや御返上と申様の御事は被_レ爲_レ在間敷候得共最早他藩にては右様の事申出候様に相成京地は前件の通關東迄も腰拔と申さぬばかりの事京地迄運候様相成何共歎け敷次第威義二公以來是迄統々たる御名家にて乍_レ被_レ爲_レ在奸臣の舌頭に御迷被_レ遊萬一御返上にも相成候様の御事被_レ爲_レ在候ては御祖先公へ被_レ遊_一御對_一不_レ被_レ遊_一御濟_一尤簡様の儀如_レ私者より不_レ申上_一候とも御承知被_レ遊_一遊候御儀には御座候へ其他藩の嘲を受候段心外千萬に御座候間不_レ得_一已事_一申上候何卒此儀御存分に御申上可_レ被_レ下候様奉_レ願候薩藩申立の通勅諭書の御寫四通御渡に相成西國の方へ薩藩觸步行候由越前へも土州より相廻候様是は三より被_レ遣候趣若し又間部若州内藤等上京候上如何様の暴發致間敷ものにも無_レ之に付薩州の人数御繰込に相成候様にも可_レ被_レ遊との近公御内沙汰も被_レ爲_レ在候左様相成候節には實に御家腰拔と申され候ても致し方無_レ之様に奉_レ存候間先する時は人を制すとの確言も御座候ゆゑ

何卒吳々も御憤發被_レ遊候様奉_一厚願_一候此趣乍_レ恐兩君様へ被_レ仰上_一候様仕度餘り残念に奉_レ存候に付四日限を以此段申上候謹言頓首

九月十日

知 信

泰公玉案下

又申上候御處置振猶又早便に被_レ仰下_一候様仕度奉_レ祈候

副啓此度の勅諭御遵奉に相成列侯へ速に御通達被_レ遊大老閣老夫々御所置被_レ爲_レ渡候得は老公副將軍一橋公云々の處は粗約合宜敷近三兩公とも御吞込にて内實は九殿御動しも右の御妨に相成候に付彼是と御苦心尤夫而已には無く公邊好家へ御引通の所主上にも極御含み被_レ遊候旁にて種々御探索に相成候處公然たる御行事の顯れざるに云々とも難_レ被_レ遊候所勅諭書御添書并間部來書御埋め置の廉にては屈伏に相成候て御辭退被_レ仰出_一候夫に付跡は如何様共運合可_レ申振に有_レ之候處簡様御通達御遷延に相成候ては如何にも残念に奉_レ存候また

只今にても御憤發被_レ遊大老閣老御取ひしきに相成御奏功被_レ遊候得は大に被_レ歸_一思召_一候御事も可_レ有_レ之候間何卒々々御憤發の所吳々も奉_レ至願_一候此段極密駒込様へ竊に被_レ仰上_一可_レ被_レ下候様奉_レ伏願_一候謹言再拜

九月十日

又申上候武田公安島公へも本文の趣別段呈書不_レ仕候間宜敷奉_レ願候如何浩歎至極に奉_レ存候頓首々々

薩藩より去四日出到來の由書狀未_レ見傳聞を認る
水府四家老儀相退候様相成候旨扱又勅諭書返上に相成候様の趣夫は桑原治兵衛の異説にて閣老と熟和に無_レ之ては不_レ相成_一熱和に相成候には勅諭書返上の方_レ然との趣簡様に他藩の者より嘲を受候は如何候事や安島公は必死の御覺悟の趣原田公も同斷の由本文に有_レ之候處桑原一人の異論にて統々たる名家を奉_レ穢而已ならず明君の御聞え有_レ

之老公を言行不_レ致_二一致_一腰折武士と爲_レ唱候は不忠には無_レ之哉不義には無_レ之哉餘り歎け敷事に付又候歎願仕候何卒幾重にも急に御憤激の所奉_レ仰候頓首謹言_一

謹て拜啓仕候時下秋冷之候に候へ共彌御安靜被_レ成_二御座_一奉_レ敬賀_二候扱不慮の儀に付御旅行嘸々御心配の儀奉_レ恐察_二候浪華へ御安着の旨昨夜西郷より承り安心仕候扱又御噂御座候列候へ御寫長州越前宇和島への分は一昨夜陽明様より御下け相成直に其夜出立仕候因州等への四通は昨日阿公より當方へ御渡に相成候に付昨夜西郷へ相渡申候間御安心可_レ被_レ下候陽明様も一昨日は甚だ御弱り被_レ遊不_レ得_二已事_一候間間部上京候上は將軍宣下願の通相濟し萬事關東へ爲_二御任_一と申様に可_レ致歎_レ被_レ仰候由然る所御指圖通り倅小林へ遣はし候所至極都合宜しく右にて右府公大御張込にて一昨日の所にては右府様の御正論にて右可_レ成は御取留にも可_二相成_一歎に御座候右に付又又一昨夜小林へ入説仕

候所先刻手紙到來一昨夜の談事夫々話に相成候委細の儀は今夕暮早く参り候様にと申來候間又相分り次第可_二申上_一候扱又御住居の所住吉龜林寺とかは水戸表私菩提所の末寺に御坐候間此方より申遣はし候へば如何様にも相成候間則大久保へも相談申遣候御治定に相成候へば大久保より家内へ沙汰次第にて取計申候様申付置候依て此段旁申上候不備頓首

九月十四日

登母信拜

月照和尚玉机下

尋て知信西郷頼及忍向等と謀り男知明をして小林を訪ひ近衛卿の斡旋に由り勅諭回達を督促する公達を發せられ尙尾水越三候に對する幽禁解除の朝命あらんことを請はしむ此の時「朝命は容易に出づるものにあらず尙し赤鬼に一撃を試むる如きものあらば時勢の然らしむる所綸旨或は下付あらん」の答を得因て今日の急勢は除姦か第一義なりとの密議をなし十五十六の兩日安島に贈りたる書信の概要左の如し其

文中小輪は小林赤鬼は井伊林志は繪旨カンボウは間部の隠語なり

扱小輪云々の事入説したる所如何にも六箇敷併赤鬼の方へ致_二一發_一切込もの有_レ之候へば直に林志の出る事は安きとの内話も御坐候御勘考可_レ被_レ下云々

九月十六日夜薩藩西郷吉之助参り物語は弊藩の人数大坂表へ明日明後日の内二百五十騎相備へ大銃(五百目)四挺引付置候カンボウ萬一暴發の模様相見候へば伏見引上げ置暴發に及候は_レ早速起り立御手當出來仕候又土州も大坂迄人数爲_二指登_一置候筈長州も兵庫迄人数百五十騎計爲_二指登_一置候筈に付暴發仕候へばカンボウ位は一時に澤山城に押掛け一討に踏潰可_レ申云々

是の月十七日閣老間部詮勝(下總守)大老の意を承け西上して大津驛に駐在し京都町奉行小笠原長常(長門守)を招き志士四捕の策を授く十八日知信に對し京都町奉行所の召喚狀來る知信微恙あり長男知明を

して代つて出頭せしむ知明留置せられて歸らず知信又必ず召喚せらるゝことを察し累の同盟に及ばんことを慮り秘密に係る往復書類を燒棄し衣服を改め後事を妻子に誠む果して召喚狀來る因て知信町奉行所に至るに又拘留せらるる是より漸次囚はれたるもの小林梅田等の諸士二十餘人なり西郷忍向の二人は逃る十二月知信江戸に護送となり松平利豊(飛騨守)の邸に幽屏せられ評定所に於て寺社奉行松平宗秀(伯耆守)町奉行池田頼方(播磨守)等數名席を列わ訊問する要旨は烈公の内命を受け外人取扱に關する幕府の政事を非難せる書面を宮家公家に提出し加之一橋刑部卿を大將軍の儲嗣に擧ぐるの畫策をなし且勅諭別勅降下の事を周旋せりと云ふに在り其烈公を誣罔する甚しきを以て一意辨疏して服せず知信池内大學と囚室を共にし池内は屢訊問せらる知信は中症を發し病瘳に在ること多きに由り召喚を受くること稀なり六年己未八月二十六日夜俄然評定所へ召喚せらる池内知信に向つて曰く夜陰の召喚は甚だ驚怪なりと知信

毫も驚かず幕吏は夜陰にも關せざる暗中の奴輩なりと答へ俱に出頭し其夜は訊問なくして歸り翌二十七日評定所に於て斬罪の宣告を受け傳馬町獄舎に於て處刑せらる知信刑に臨んで曰く吾死するも一事心に關するものなし唯主公の安危如何を憂ふるのみと有司皆曰く君侯恙なしと之を聞いて坦然死に就く年六十二親戚故舊私かに其屍を小塚原回向院域内に厝く其宣告文は左の如し

水戸殿家來

鵜飼 吉左衛門

其方儀外夷御取扱の儀に付前中納言殿思召の趣御認有之御直書度々同藩茅根伊豫之介より指越右御直書は烏丸下長者町芳兵衛店儒醫池内大學を以て青蓮院宮三條家へ指出候様前中納言殿御内命の由をも伊豫之介より申越右は國家の御爲筋と相心得候ても御政事向に拘り重大の儀に付一概に宮堂上方へ書面差出候儀は對公儀御斟酌も可有之筋に付取計方も可有之候處度々大學を以て右向

々へ入内覽殊に去年午正月比御養君の儀に付世上區々の風聞有之折柄一橋刑部卿殿年長賢明の御方に付御同人へ御治定相成らば天下の御爲水府の御爲とも可相成勘辨可致旨猶伊豫之介書狀を以申越右は其比同藩側用人相勤候安島帶刀より刑部卿御養君に可被爲の儀路傍の風聞有之難有旨申越候儀も有之右御運命にも相成候は前中納言殿御満足にも可被思召哉と存居候段一藩同意に付密かに推量り倅幸吉申合是又池内大學を以て青蓮院宮三條家へ右書狀指出又は前中納言殿御慎被仰出候に付御慎解に相成候様其外御同人御罪狀御所向より關東へ御尋有之度旨是又大學を以て三條家へ内願致し或は松平薩摩守家來日下部伊三次も同様爲内願上京同人儀は前中納言殿御内命を受け御所向致手入候由申聞候儀も有之一同彌決心尙伊三次申合頻に周旋致候故既に水戸殿へ重き勅諭御指出其方へ御渡に相成候上猶幸吉申合候て右勅諭は同人并伊三次へ相渡兩人爲

レ致出府候段不恐公儀一致方始末不届に付死罪申付る

知信性惇朴にして端正専ら式典を講究せり居常酒を嗜ます又煙草を喫せず謠曲を以て樂となす唱義聞見録に知信の性行を記する左の如し

知信人と爲り篤實にして言寡く謹慎にして禮義正しく客に對する時は病床にあるにも必ず袴を着けされば言を交へざる人なりき身體肥滿して平生病身にて痲疾を憂へけり

志忠誠にして慷慨氣節を喜び議論をする時には諄々として談話し事國家の談に涉り或は君公忠誠の事に及ぶ時は感激して落涙數行に及ぶ事屢なり此の人烈公に信用せられける程の人物なれば國政に關する所の美事も有へけれども關東にありし時の事跡は詳かにするを得ず

此人を選んで京師に置れたる故は方今の時事あるによりて烈公の深意にて帝都におかれたるなりといへり予か知己になりける始は安政丁巳の四月京

師より浪華に趣ける時平塚瓢齋の紹介ありてまた大久保要の添書を得て一日中の島水邸に往き面會しけるに一見如舊談話時を移しけり此日外夷の談に及びけるに烈公深く京師の警衛薄き事を憂へ給ふ事を語り其外公の御志尊王攘夷にある事をさまざま話し公の御忠誠なるを幕府にて忌嫌ひ公の御策庸ひられざる事を甚歎息して語れりまた此の秋八月予南紀に趨きける歸路住吉の社前を通りけるに風と此人塚に趣くに行逢ひ浪華に予滞留の間必ず訪ふべしと約して後日邸に往て長く對話しけり此頃は京師には男幸吉を置此人は時々上京すといへり此日予旅舎に歸りけるに直に侍をして今日來訪を謝し菓子を贈りたり安政戊午の春より京邸に登りたり常に烈公の御内命を受京師に於て大に力を盡したる事件は委敷銘肝録に記せり故に贅せず應司公は元より陽明公梨本公へも出入せしかとも烈公御慎後は憚りて門外にいでず男幸吉をして事をはからしむ戊午八月に羽豊州の話に先頃窺か

に町屋を借り吉左衛門に面談せしに其家の近邊に乞丐居りければ怪しき者なりとて心を置き常にも嫌疑嫌疑と云ふて大に憤む人物なれどあのやうに云ふては如何ともしがたし正義をするに何の嫌疑があらむと語りし事ありこれを以てその爲人の謹密なるを知るべし

萬延元年庚申三月三男知彰(喜三郎)五男信敏(貞之進)京都の獄舎に拘囚せられ(次男四男は早世)尋て遠流に處するの命あり未だ航送せず文久二年壬戌十二月幕府朝旨を傳へ知彰信敏を宥免し知信の後を録し歸葬する事を許す是に於て遺骸を收め水戸常磐原に歸葬す三年癸亥三月知彰家を繼ぎ俸稟を給はる知彰歿し信敏家を繼ぎ後幸吉と稱す明治二十二年五月二日朝旨に由り知信靖國神社に合祀せられ二十四年十二月十七日朝廷更に知信の舊勳を録し從四位を贈らる知信平時好んで國歌を詠し措紳諸卿の雌黄を受け又唱酬したるもの多し歌集あり「雪のほそ道」蛙の聲」と云ふ其の國歌數首を左に摘録す

松添(榮色)

ふかみとり、榮へあるいろを、そへてけり、高根に千代を、しめし松か根、
観心寺楠公首墳を拜して
忠やかな、そのいさほしは、萬代も、朽せぬ楠の、残るいしふみ、

湊川楠公墓前にて

湊川、名に立花の、薫りにて、枕もぬる、袖のあかつき、

赤穂義士の百五十年忌に

古郷に、つらねて雁の、歸るかな、いつくに人の、影も見ゆらん、

大石良雄か手植の櫻花を友より贈られて

願はくは、この木のもとに、旅寝して、花のあるしに、まみへてしかな、

贈從四位鶴飼知明傳

鶴飼知明幸吉と稱す吉左衛門知信の第一子なり幼にして京都の儒者石川某に學ぶ資性活潑にして英氣あり通學の途次野犬の吼へて接近するあれば忽ち抜刀して之を斬る知明往々此の如きの舉動あり父知信之を聞き其或は疎暴の行あらんとを恐れ嘗て師事し禪學を聽ける相國寺の僧大拙に託せらる因て知明其寺内に留學して漢學を修ること三年弘化中知信水戸に貶せらるゝに及び知明從つて東下し福地廣延(政次郎)の門に入り神發流の砲術を學び技藝大に進む安政二年乙卯九月藩主武藝勉勵を賞し白銀を賜ふ知明益刻苦研究し竟に指南免許を受く是より先き藩政回復父の官職舊に復し京都に祇役す四年丁巳二月知明遊倅より擧げられ小十人組に列し京都藩邸留主居助役となり父の職務を助く時に外患荐りに至るを以て皇上軫憂せられ之か防遏の朝旨を傳ふ征夷府因循之を奉せず知明尊攘の議を主張し竊かに措紳諸卿に謁して意見を陳し諸有志と來往して時事を謀議し周旋

甚だ勉む五年戊午四月井伊直弼(掃部頭)大老となり大政を顛らにし内は威力を朝野に振ひ至重の朝旨を蔑にし外は外國の恫喝を恐れ擅に我が國權を失墜せる條約を訂結し之を非難し勅旨を奉ずるものを嫉み正議を抑壓す知明痛憤措く能はず屢阿野(中將)滋野井(中將)等の諸卿及小林(民部權大輔)高橋(兵部權大輔)丹羽(農前守)頼(三樹三郎)等其他の志士と密會し共に尊攘の手段方法を講し以て幕政を匡正せん事を圖る是の時幕吏の探偵頗る嚴なるに由り知明之を避け晝は高野川鴨川に釣するもの、如く弊衣を着し釣竿を携へ夜は商賈の市街徘徊に扮装し双刀を脱して往復す八月八日朝廷修攘の勅諭を幕府及順公に賜ひ且順公に對し之を列藩に廻達し共に幕府を輔け効を奏すへき別勅を賜ふ其順公に下せる勅諭及別勅は傳奏衆の特命あり父知信をして之を江戸磯川邸に達せしむ父病あり爲に知明父の意を受け即夜勅諭及別勅を奉戴して京師を發す時に説あり曰く、彦根藩客臣永野義言(主膳)洛中に在り九條卿の臣島田龍章(左

兵衛尉)より勅詔降下の事を聞き驚愕して曰く是大老の安危に關するものなりと之を大老に報し指揮を乞はんとするも違あらず足を重ねて立ち急を彦根藩に告げ壯士を出し勅書捧持者を途に要し之を奪取せん」と知明之を聞き慮る所あり鶴飼幸吉明九日卯刻勅詔捧持中山道を東下するの吹聴をなし竊かに使を馳せて伏見驛に遣り大阪藏屋敷の藩吏小瀬傳左衛門東海道を通過するの先觸人足帳を發し之を各驛に遞送せしめ知明陽つて小瀬傳左衛門と呼び身を小吏に擬し夜間大津驛に至り先觸人足帳に依り輿を雇ひ薩人日下部信政(伊三次)と共に晝夜兼程東海道を下る壯士果して中山道の愛知川附近に至り勅詔捧持者即ち知明を要撃せんとするも知明東海道を下るを以て及ばすと云ふ知明早く永野等の計略を知り故さらには中山道通過を聲言し俄然氏名を變じ道を東海道に取り東行して其奪取の危難を免れたるは全く智略機宜に適するなり十七日の夜知明江戸に着し勅詔及別勅を磯川邸に捧呈す順公敬畏之を遵奉し而して知明等の

勞を慰し徽章ある帷子を賜ふ翌日順公の交付せる奉答書を拜受し西上して京都に歸る後又諸有志と往復し大に勅旨奉行の事を斡旋す適ま流言あり水戸に賜ふ所の勅書は偽勅なりと知明之を聞いて憤怒營ならず其流言者を糺明し之を處罰せんと計畫すること尤も切なり時に大老又甚だ勢威を張り老中を西上せしめ東西謀を通じ勅旨を奉行するものを逮捕し正義を制壓す九月十八日知明父知信均しく抑留せられ京都町奉行の官邸に在る累月十二月江戸に檻致して榊原政恒(式部大輔)の邸に移され尋て傳馬街の獄に下さる勅吏屢知明に對して曰く外人取扱に關する幕府の處置を非難せる書面を宮堂上方に出し大將軍の儲嗣に一橋刑部卿を擧ぐるの策を達らし尙偽名を唱へ勅詔を捧持し東下せるのみならず重ねて勅書を請はんと謀議したるは烈公の内旨に出でたるならんと誣罔の糺問をなす甚だ嚴酷なり知明大に辨明する所あるも幕吏聽かずして鞫訊を結了す六年己未八月二十七日評定所に於て斬刑梟首の宣告を受け傳馬街獄舎に

於て處刑せらる年三十三其宣告文左の如し

水戸殿家來吉左衛門伴

鶴飼 幸吉

右之者儀外夷御取扱向の儀に付前中納言殿思召の趣有之候御直書等度々同藩茅根伊豫之介より指越し候故右御直書は烏丸下長者町上る町芳兵衛借家儒醫池内大學を以て青蓮院宮三條家へ指出候様前中納言殿御内命の由をも伊豫之介より申越右は國家の御爲筋と相心得候ても御政事向へ拘り候重大の儀に付一概に宮室上方へ書面指出候儀は被對公儀御斟酌も可有之筋に付取計方も可有之處其度々大學を以右向々へ入内見殊に去年正月比御養君の儀に付世上區々風聞有之折柄一橋刑部卿殿年長賢明の御方に付御同人に御治定相成候は天下の御爲水府の御爲にも可相成勘辨可致旨等猶伊豫之介より書狀を以て申越又は其比同藩側用人相勤候安島帶刀よりも刑部卿殿御養君に可破爲成哉と路傍の風聞も有之難有旨等申

越候儀も有之右御運命にも相成候は前中納言殿御満足にも可被思召哉と存居候段は一番同意に付密に御意内を推量此者共申合是又池内大學を以て青蓮院宮三條家へ右書狀指出又は前中納言殿御慎被仰付候に付御慎解相成候様其外御同人御罪狀御所向より關東へ御尋有之度旨是又大學を以て三條家へ内願致し或は松平薩摩守家來日下部伊三次も同様内願として上京致し同人儀は前中納言殿御内命を受け御所向手入致し候事の由申聞候儀も有之候よし此者共に於ても彌決心猶伊三次申合頻に周旋致し候故水戸殿へ重き勅詔御指出吉左衛門へ御渡に相成候次第に至り殊に幸吉は右勅詔伊三次一同守護致し候節小瀬傳左衛門と申變名相名乘罷下り其上重き御品柄に付着の上は直様御館へ可指出の處小石川春日町旅人宿長右衛門方へ一旦着追て安島帶刀宅へ密に持參同人へ相渡候段御品柄へ對し不敬の至り剩へ幸吉は水戸殿に於て右勅詔諸家へ回達は勿論遵奉杯も無之よし

を以て御所向より右御催促有之候様又繪御指下し相成候様周旋方の儀伊三次より申越或は紀伊殿用達町人世古格太郎よりの書狀の趣にも先達て御指出有之候勅諭は偽書に有之杯と申越候逆右書面持參鷹司殿家來小林民部權大輔方へ罷越繪旨御指出方の儀頻に相望み候節只管願意を可_レ遂爲め世上の浮説等取交重き御役人の身分等の儀不_レ輕譬を以て同人へ論談致し或は恐多き事共をも民部權大輔に申聞相頼み剩へ右體不_レ容易_一繪旨の儀相望候は主命故歎自己の周旋に候哉と同人より尋受候節主命に有_レ之旨取繕及_レ答候段假令右繪旨の儀は事を不_レ遂候共不_レ恐_二公儀_一致方右始末不届至極に付獄門申付る

其宣告の時父願て曰く父は斬罪子は獄門父に勝る子なりと知明の首級は小塚原に曝さる拾札左の如し

武家方家來

吉左衛門倅

鶴 飼 幸 吉

未三十二

右之者儀不_レ輕儀取巧み不_レ容易_一所業に及候段不_レ恐_二公儀_一致方不届至極に付獄門に行ふもの也其拾札の傍に左の建札を爲せるものあり

大日本忠臣首級

親戚故舊私かに其屍を小塚原回向院域内に厝く文久二年壬戌十二月幕府朝旨を傳へ歸葬を許す因て遺骸を水戸常磐原に歸葬す知明江戸の獄に在りて推訊せらるゝの際同囚某が陳述する所其實を失ひ且人を售つて自ら罪を通れんとするものゝ如し知明條理を盡し之を辨駁すと雖幕吏聽かず某の陳述頗る鞠吏の意中に適するを以て遂に之を事實として訊問せられたるに由り知明切齒憤懣し囚室に於て大に某を罵り辱めて止まざりしと云ふ明治二十二年五月二日朝旨に由り知明靖國神社に合祀せられ二十四年十二月十七日朝廷更に知明の舊勳を録し從四位を贈らる知明の國歌二首を左に摘記す

櫻川の花

櫻川、ちりて流るゝ、水底に、また盛りなる、花の見えけり、

所 感

世にありて、數ならぬ身も、國の爲、つくす心は、人に譲らし、

勤王 水戸烈士傳上編 卷五
實記

贈從四位櫻眞金傳

櫻眞金任藏と稱す原小松崎氏父を玄達と曰ふ常陸眞壁郡眞壁の人後水戸侯に仕へ藩士となる玄達曾て醫を業とし遠邇に名あり眞金幼より卓犖不羈にして大志あり方伎の士たるを甘んぜず好んで史を繙き章句を攻めずして經濟を研究し熊澤蕃山の著書を受讀す常に王室の式微を傷み慷慨管ならず高山正之(彦九郎)蒲生秀實(君平)の性行を慕ひ自ら相良六郎名は一雄字は飛卿と稱し又村越芳太郎と呼び竟に改めて櫻を氏任藏を通稱眞金を名となし鳴鶴と號し又月波山人と號す眞金年十六七慨然意を決して水戸に抵り藤田彪(虎之介後誠之進)の門に入り學を講ず眞金酒を嗜み偶々氣を使ひ人を凌轢す藤田も亦責るに小過を以てせず其氣概を愛す其入學せる年の十二月藤田

が父玄達に贈りたる書面左の如し

未だ不_レ得_二面晤_一候へ共一書致_二啓述_一候窮陰互寒彌御壯健被_レ成_二御起居_一珍重御事に御座候然者賢息任藏殿當秋より拙塾へ御出の處淺學不才は勿論若年の小子一向御教誨も行届不_レ申扱々恥入申候扱小子不才には御座候へ共幼年より頼人塾生をも見候處大抵間違不_レ申候處優齋殿如き人物は百人に一人も無_レ之實に當世にめづらしき奇士に有_レ之候仍ては何卒一兩年も乍_レ不_レ及御世話いたし見申度奉_レ存候尤當人の存意次第に御座候間是非々々御とめ申度と申次第にも無_レ之候へ共相成候は右之通御世話申度奉_レ存候乍_レ去小生誠に貧家にて萬事行届不_レ申候へ共其内にて御世話可_レ申とはりこみ候事に御座候一ト通りのはりこみには無_二御

座候何卒優齋殿へもよく御申ふくめ一兩年も水戸へ御留學候様可被成此外相認度事も有之候へ共筆紙に及兼候間萬縷期面晤候以上

十二月二十七日

藤田虎之介

小松崎玄達様梧下

再啓賢息御事は當分はいまだ何共申兼候へ共此上修行次第如何程上達可致も不_レ相分_二實に感服いたし候事に御座候其精神中々尋常には無_レ之其間定めて御如才は有_レ之間敷候へ共尋常の御取扱は被_レ成間敷候以上

真金豪俠を以て自ら許し苦學勉勵も亦衆に超え塾生中遊惰なる者あるときは忠告して毫も假借せず塾生集り議して曰く彼農家の子なり動もすれば士人を辱む無禮も亦甚し彼の真金を刺さんと莊司謙齋なる者之を聞き陰かに真金を招き櫃中に匿し難を免れしむ幾ばくもなく真金潮來村(常陸行方郡)宮本茶村の塾に遊ぶ宮本の塾生頗る多し真金塾長となり磨礪するに尊王の大義を以てす爲に塾風一變し人々義氣を尙

ぶに至れり宮本真金が高山蒲生を欽慕するを知り謂て曰く吾嘗て君平の書を藏む今之を失ふ恐くは屏風の下張りとせしならんと一日真金擅に屏風を破り其中を搜索す宮本外より歸り屏風の破れたるを見怪み問ふて真金の所爲たるを知る然れども之を詰責せず却て己が輕忽に言を發せしを悔ひたりと云ふ真金塾に在りて書を繕く一夜寒氣甚し按摩の襦袢を着し窓前を過ぐるを見て衣を解き之を與へて曰く余重襲尙寒を覺ゆ汝の薄衣を見るに忍びず之を與ふと按摩大に喜び乃ち藏する所の金を以て真金に托せんことを請ふ真金問ふ能く幾錢かある曰く一分二朱なり真金驚いて曰く余は一錢の貯なし汝が富能く斯の如きかと後真金出で下總に遊び途上満開なる櫻花を觀頗る感ずることありて去る能はず日將に沒せんとするに關せず悠然樹下の落花を拾ひ袖に收め竟に椎崎村一富農の家に宿し先づ席に着き櫻花を出し之を撒して樂む小婢驚き之を主人に告ぐ真金主人の來るを見俄かに之を拾ひ又袖に收む主人の妻女之を目し狂人

となせりと云ふ潮來を距る二里の松林中に大池あり大膳池と呼ぶ仲屋傳七なる者此に多くの鰻を養ひ監視者を求むること久うして應ずるものなし里俗嘗て相傳ふ大膳池に怪物の棲むありと之を怖れて守る者あらざるなり仲屋之を憂へ真金に依囑して守衛を乞ふ真金之を諾し日夜池頭の小屋に在り書籍を繕讀し又池邊を徘徊して偷生の捕獲狐狸の盜食を防禦し居ること二年許詩あり

不_レ厭_レ山幽居

春花秋月寄_二閑身_一、雨笠風簑日日親、採_レ薇何擬首陽頂、自秘_二姓氏_一稱_二溪民_一、

天保六年乙未某月真金兩毛に遊び新田郡細谷村に至りて高山の故舊に頼り遺物を搜索し日記數卷及他の數品を獲て歸る途上詩歌あり

途中糧盡身病不_レ能_二行步_一、寓_二食行道山寺_一

(在下野足利郡)

投宿寒村又山寺、斷蓬偏似_二任_一風吹、佛顏若笑_二人飄零_一、五尺一身不_レ救_レ飢

病客露々志未_レ灰、聊依_二梵刹_一避_二飢災_一、壯心徒結行軍夢、洒掃伴_レ童般若臺、

七月上毛澤渡客舍臥_レ病

篤病深知與_レ死隣、郷書裁了託_二何人_一、殘燈明滅家千里、幽夢時歸拜_二老親_一、

今は、たのみなりけれ、

真金平生忠節孝義の事を聴く毎に欽慕激賞して止まず之を談論するに當りては往々感涙を垂るゝに至る南朝の忠臣赤穂の義士に係るものゝ如き苟も遺聞逸事あれば思慮を盡し輯録して遺漏あることなし就_レ中兒島高德を稱揚して常に曰く楠新田諸公の勳業轉すく企及する所にあらず備後三郎の關流離百折撓ます死して後已む者吾之を庶幾せんと真金固より功名を以て自立するの志あり八年丁酉九年戊戌の間江戸に入り幕府の儒者尾藤積高(高藏)會津藩人松本重信(來藏)土浦藩人藤森大雅(恭輔)の諸士に寄食し先づ備書按摩等を以て自給す敝衣敗履蓬頭垢面人皆之

を嗤笑するも意とせず其交る所は豪俠俊偉有名の士を求むるに在り已にして幕府の家人となり奔走負擔其使役に供せり眞金蚤歳家を出で父を喪ひ遺憾已むなくその志祿食を得以て閭極の恩を慈母に報いんとするにあり十二年辛丑の冬小普請奉行川路聖謨（三左後左衛門尉）の爲に擧げられ龍ノ口の門衛となり幾ばくもなく小普請方物書役となる初眞金の川路に遇ふや川路誠めて曰く仕官する者は財に汚るゝなきを以て要となすと眞金唯々として退き一絶を賦して贈る

此頭縦應隕、鐵心不レ可レ回、飽知清白字、何敢言汚財、

川路之を見て大に驚歎す故に益知遇を得たり弘化元年甲辰五月水戸烈公妻斐の禍に罹り致仕して駒込別邸に屏居し順公封を襲ぎ戸田忠敬（銀次郎後忠大夫）以下要路の士禁錮又は黜斥せられ結城朝道（寅壽）の黨政事を擅にし一藩淆亂す眞金曰く烈公の進退豈管一藩の禍のみならんや天下泰否の關する所傍觀坐視

するの時にあらずと慷慨悲憤寢食を安んせず關老阿部正弘（伊勢守）の臣石川章（和介）幕府の麾下諸藩の士庶に至るまで苟も言論文書の交通し得べき者を求め百方心を竭し能く説き能く論じ恢復を圖り日夜奔走至らざる所なし時に水戸の有司幕吏と内通し偵探甚だ嚴にして士民の捕囚に就く者多し適ま眞金眼を患ひ明を失するに垂んとす因て官を棄て、潜居し周旋益力む後嘉永二年己酉の春に至り烈公の冤枉氷解し藩政回復するに至るものは眞金他に在りて斡旋せるの功多きに居る是の年十二月眞金に贈りたる會澤安（恒藏）の書狀に曰く

短簡致啓上候嚴寒の時候に御座候處愈々御清健可レ被レ成御起居奉遙壽候丙午以後幽錮當度歸家仕候得共引續相慎居候に付當地親戚中へも絶書通罷在候間御無音仕候段何分御寛恕可レ被レ下候甲辰以來最初より始終如一御精力御竭盡被レ下候段筆舌に難寫奉存候當春は全青天白日猶又九月十月の寵光闔境臣民并躍不レ當候隨て野拙扱も

去月二十九日蒙赦容且他の罪譴を得候者も不レ殘得赦除何れも人間世に再生仕候只戸藤兩田而已未レ雷恩露候是而已苦心仕候此地の儀定て御承知御座候半寒風未レ息堅氷凝結何卒往遇雨之吉を得申度半死白頭無益の事には候得共朝暮相祈申候右容罪後早速可レ呈一書候處日々客來應接衰憊にて大に疲勞仕書狀も認兼延引仕候續々得貴意一度江海難盡候得共毫端に及兼候間右御謝辭且延引の御申譯旁勿々如此御座候頓首謹言

十二月二十三日

憇齊安拜

村芳大兄

尙々時下窮陰折角御自重可レ被レ成候老拙劣々消日乍レ憚御省念可レ被レ下候追々得春暄候は引杖探芳久々にて舒雅懷可レ申相樂居候乍レ去海外の模様御同意杞憂難レ忘陋室中空く扼腕仕候萬縷期後信草々如此に御座候以上

五年壬子十一月二十九日高橋愛諸（多一郎）荻君寛（吉次郎）の兩名連署眞金に贈りたる書に曰く

是一書候時下寒威相加候處愈御御安健可レ被レ成御起居奉賀候扱は御承知も被レ成候はん去る二十二日老寡君不時の登營御對顔被レ爲濟殊に御懇の上意被レ爲在候儀爰許一同九年來の心願今日相達誠以難有仕合に奉存候爾來歡喜の情實乍レ憚御想像可レ被レ下候寡君生前の中斯迄御恩命被レ仰出候御儀畢竟明時の所使然と君臣一統の面目無此上事に御座候弊國一條に付て多年の御心配御盡力被レ成下候御事故此段不取敢御禮申上候萬後便と早々如此御座候頓首

再白嚴寒折角御自愛專一に奉存候扱其後は打絶御様子も不伺背本懷申候御海容可レ被レ下候本文御禮爰許一同より宜敷申上候様申聞に御座候他は期後信候以上

六年癸丑六月米國の兵艦浦賀に入港す時に舛平日久しく幕府助勤失措人心恟々たり眞金之を憂へ石川及幕府切手同心中西邦基（忠藏）を招き根津社内幽僻無人の地に會し當世の急務を論じて曰く水老公（烈公

を指す)をして再出賛議せしむるに非ずんば國家の大事復救ふべからずと石川も亦之を然りとし大に力を竭す石川は阿部閣老に信任せらるゝを以て議能く行はると云ふ是の年七月大將軍烈公を起し邊警の廟議に參畫せしむ眞金欣躍益力を致して外患を防ぎ國權を伸べんとするもの最も切實なり安政二年乙卯十月江戸の地大に震ふ堂宇家屋潰裂し火災も亦起り壓死傷損する者勝げて數ふべからず眞金藏する所の書籍を賣鬻し若干金を得之を比隣罹災者に與へ救助して一錢を留めず會ま烈公粉百五十苞を眞金に賜ふ眞金又之を窮民に頒與し升斗を餘さず烈公又吉野行宮故棟の竹を以て製したる目貫即ち村上天皇の御製「行末の代々を忘るな蘆柄や箱根の雪を分けし心を」を雕刻したるものを賜ふ三年丙午正月眞金順公に召され俸祿を賜はり藩士に列し日本史編修に關する事を掌理す四年丁巳の冬幕吏林諱(大學頭)津田正路(半三郎)等江戸を發し上京して外國の事情を奏上し尋で五年戊午正月閣老堀田正睦(備中守)上京し互市

貿易の勅許を乞ふ眞金嘗て尊攘の義を唱へ東西奔走し其交はる所は薩の西郷隆盛(吉之助)長の吉田矩方(寅次郎)肥の長岡是容(監物)宮部某(鼎藏)越の橋本綱紀(左内)尾の田宮篤輝(彌太郎)等にして西郷と交る尤も親密なり鹿兒島侯(島津中將齊彬)其志を歎賞し贈るに其藩鍛工所作即ち波平行安の刀を以てせり堀田の上京するや眞金偶々京都にあり以謂らく彼の要求を排除し皇威を發揚して洋夷を掃攘するは斯の時に在り機失ふべからずと先づ中西の西上を促し中西をして在京の木下平八郎(金澤藩人)に就き關東の事情を通告し畿内の形勢を聞知せしめ以て密かに計畫する所ありたり既にして堀田東下し井伊直弼(掃部頭)大老たるに及んで勅旨に背き我が國權を失墜せる外交條約を結び大に威柄を弄し朝野の正義を壓抑す六月二十四日一橋卿(慶喜)等柳營に詣り井伊に對し其條約訂結の勅旨に背きたる事を詰責せる後數日眞金が豊田亮(彦次郎)に贈りたる書面左の如し
長野主馬と云ふ愚國學者此は松平主税之介と申者

別懇主税は私別懇にて追々説の分候事有之申候亦鬼も此迄には仕負せ候得共此先の目當不付當惑の様子に御座候赤鬼片意地張候て一見識立居り先々京師御尊崇の心得に御座候と所謂似て非なる者に御座候二十四日獨木橋公の御論には感服大に恐れ居候休長野杯も御譽居候事に御座候

す眞金歎じて曰く今幕吏の逆焰此の如し江戸に在り事を爲すは甚だ難し寧ろ近畿に移り時を察し機に投じ回天の偉業を起さんと暗に訣別の意を知友に表し妻春子長子春雄を常陸鹿島郡勝下村小沼秀實に托し(小沼之を家に保護し長倉村に移す)是の歳の十月眞金中山道を経て西上す途上幕吏の偵探甚だ嚴にして道路目を以てするが如く屢危殆に瀕す眞金或は諧謔或は詭辭以て之を免れ伏見に至ることを得其逆旅に投ずるや又忽ち捕吏の指目する所となり今誰何せられんとす眞金之を覺り更に數妓を招き劇飲放歌衣を脱して亂舞す爲に吏一遊客と見做し圍を解きたりと云ふ然れども探偵嚴密なるを以て直ちに京都に入るを得ず是より中國を歴遊し謀る所あらんと志を得ず丹波より間道を経京都に入り播紳に就き建策する所あり十二月伊丹に往き木村紋十郎を訪ひ暫く其家に潛匿せり途中吟過したる詩歌左の如し

是より先き鹿兒島侯聖上の内憂外患を軫念せらるる事を知り多數の兵を藩地に養ひ之を率ゐる京都に上り皇威を戴き以て大怒を排擠し幕政を匡正するの計畫を立てること日あり此に於て西郷旨を受け東上し奔走周旋す因て眞金相俱に計策を講ずるもの甚だ多し鹿兒島侯七月を以て上京せんとするに臨み病んで暴かに卒し藩論二派に分れ局面一變事蹉跌す八月修攘の勅諭幕府及順公に降る時に眞金江戸に在り之が奉行を圖る最も切なり大老勅旨を奉せざるのみならず益勢威を張り苟も勅旨を奉行せんとするものは列侯諸大夫士庶婦女を問はず之を罪し之を幽し或は之を捕へ將に朝廷に迫り承久の故事を讓すことあらんと

念、到處好吾安樂郷、

故里の、夢はあられに、碎かれて、枕にのこる、
松風の音、

後大和の吉野に入り延元帝の陵を拜し南朝の遺蹟を
探討し十津川の險を越え紀伊に入り家老水野忠央
(土佐守)の政事に關する行爲を調査し大阪に到り佐
久良東雄萩原廣道等と謀り市中一小店の雇人となり
氏名を變じ渡邊純藏と稱し辛楚艱難些も屈撓せず諸
藩同志の士と力を協せ奮つて勤王唱義以て外患防遏
の素志を達せんとして縦横の畫策を運らせり六年己
未七月六日俄かに暴瀉に罹り死す年四十八同志の士
陰かに遺骸を西郊福島的光智院に歛む眞金畢生力を
國事に盡すを以て其報効の功少なからず文久年間順
公其後を録して俸祿を給し長子春雄をして家を繼が
しむ三年癸亥の春遺柩を水戸城西江林寺域内に改葬
す眞金初江戸に出たる時友人某其朴野なるを見て一
夜吉原の娼家に誘ふ酒酣にして眞金尙袴を脱せず友
人強ひて之を解けば襦袢の纒かに半身を掩ひあるの
み一座爲に啞然たり然るに眞金坦然として毫も意に

介することなし眞金嘗て人に語りて曰く天下の英
雄實に其人なし吾多年有名の士人を訪ふに其儀容尊
大然らざれば伶俐油滑にして應對頗る常人にあらざ
る者の如し一事を問ふに及び忽ち左右を顧み他を云
ふものあり率ね邊幅を修むるの小人のみと藤田名を
誠之進と賜はりしとき執政以下座右の雜事に使用す
る坊主を招き祝宴を開き眞金も亦宴に與る藤田戲言
圓滑一座歡笑す眞金默座して言なし酒酣にして興熟
し藤田倍談笑して止まず眞金憤然として曰く今や皇
室衰頽言ふべからざるの時に當り坊主輩と酣飲嬉戲
す夫之を何とか言はんや曾て推尊せし先生すら此の
如し今後先生と稱せず東湖と呼んで可なりと藤田慰
諭すれども聞かず益之を罵る諸生集りて眞金の手を
執り之を外に出せり眞金曰く坊主等の如きは城狐吐
鼠の類なり東湖と雖其歡を買はざるを得ざるものあ
るは是當時の状態なり然らざれば正義も遂に達する
を得ざる憂あるか噫と眞金の至誠隨處に發揮し避く
る所なきは此の如し眞金又畸人寒士を見るや己を忘

九天、

思慈母

家山歸未得、功名歎蹉跎、極目送歸鴈、萱堂今奈
何、

有感

萍蓬幾歲別家山、東泊西漂猶未還、男子功名立何
日、慨然拔劍月中看、

偶成

遊無方歸無室、訪花南北西東、解篋衣一買一
醉、借被吹醒微風、

客愁

天外斷蓬度幾春、年々更覺客愁新、敵袍嘗是慈親
賜、手冷燈前自補紉、

讀史

拜泣香聲行殿寂、半宵風雨落花寒、丹心留得兩行
字、獨有君王含笑看、

弘化丁未弔楠公忌日

南枝忽入君王夢、一木足支大厦傾、偉略優爲管

れて之を眷顧する者少なからず眞金一夜茶溪を過ぐ
一少女の彷徨するを見甚だ怪み尾して之を窺ふに今
將に水に投せんとす馳せて之を抑止し其故を詰る少
女泣いて曰く兄氏無頼妾を花街に投せんとす約已に
成れり妾汚辱を受くるに忍びず事此に及ぶと少女は
小藩某の女なり眞金之を慰め携へて家に歸り後妻の
妹となし之を士人某に嫁せり藤田の禁錮せらるる
や眞金警吏の隙を窺ひ陰かに酒肉を贈り之を慰藉す
ること屢なり以て其性行の卓犖にして又恤救に篤き
を知るに足れり藤田曾て評せることあり眞金の相貌
は冬の肅々たるが如しと眞金常に菊池容齋と親み
善し菊池の寫す所の肖像は能く其眞影を描けりと云
ふ明治二十四年九月十七日朝旨に由り眞金靖國神社
に合祀せられ十二月二十七日朝廷更に眞金の舊勳を
録し従四位を贈らる眞金詩歌若干あり左に摘録す

丁酉暮春朔日、早發眞鍋赴于眞壁、途中

有感賦小詩、

腰間三尺劍、壯志有誰憐、落魄長如此、回頭問

樂業、胸間自有孫吳兵、芳魂不返湊河水、威烈猶存千早城、敢唱蕪詩、空弔古、閑庭書閣杜鵑鳴、

戊午初秋書感

一身似燭在風前、萬死何曾求瓦全、稚子不知阿爺意、欣欣傍膝說來年、

楠公をよめる

五百年の昔を更に、思ひ出て、衣手寒し、武庫の川風、

贈從四位齋藤叢傳

齋藤叢留次郎と稱す水戸藩歩士市衛門利致の第二子なり其先は左源太某徳川家に奉仕し二千三百石を食む其第二子市衛門利正元和元年大阪の役に在り命を以て徳川頼房に仕へ駿府に於て三百石を給せられ大番組となり駿府城を留守す後子孫水戸に移る利正は叢が七世の祖なり叢幼より文學を根本五六郎(敬義)に劍術を長尾理平太に砲術を福地政次郎(廣延)に學び技藝大に進む安政五年戊午正月老中堀田備中守(正睦)京都に至り諸摺紳に説くに通商貿易の便宜

を以てし開港の勅許を得んことを謀る叢之を聞き憤慨措かず其勢焰を挫かんとして密かに謀議すること多し堀田遂に志を得ずして江戸に下る六月大老井伊掃部頭(直弼)幕政を専断し擅に外國に對し我が國權を墜せる條約を結び尋て烈公及諸侯伯を羅織し之を幽閉し以て正議を鉗制す八月朝廷修攘の勅諭を幕府及順公に下し外寇掃攘を命ず順公直ちに之を奉行し列藩に廻達せん事を謀る大老の阻抑する所となり藩の有司も亦依違因循敷衍に涉る叢憤慨して曰く誓つて勅旨を奉行せざる可からずと乃ち同志と共に周旋努力し南上して下總小金驛に至る適ま太田誠左衛門(資誠)中山與三左衛門久木直次郎(久敬)青山量太郎(延光)四名の有司此の驛に來り叢及同志十餘人に面し諭すに鎮靜退散を以てす叢等奉勅の事片時も忽かにすべからずと侃々論駁して止まず太田等語塞りて遂巡席を避けんとす獨久木は事の容易に行はれざる事情を談じ之を慰諭す叢曰く有司諸君我輩の言を聽かざれば余決するところあらんと俄かに立つて別

室に至り短劍を提く(重役に面接する時は劍を携へざるを例とす)叢の姿勢猛烈にして宛然太田等に迫るもの、如し兄市衛門(利貞)其傍に在り之を制止す因て太田等機を得て去れり九月老中間部下總守(詮勝)大老の意を受け京都に至り正議の諸大夫及士庶二十餘名を逮捕す爲に叢死力を出だし一撃以て之を防遏することあらんと挺身西上の途に就く時に物色頗る密なるにより之を避け奥州より二越を経て京都に入り居ること數日譏察又甚だ嚴なるを以て長く淹留して事を起し志を遂ぐる能はず竟に潛行し大坂に入り伊勢へ過ぎ東行して江戸に駐り銳意熱心勅諭廻達を圖り殆ど寢食を忘れ斡旋す十二月叢密かに一封事を烈公に呈す其意趣頗る剴切なり其文に曰く
乍恐謹て奉申上候臣叢微賤且御役義をも不_レ相勤_二身分にて等を超え言上仕候は奉_二恐入_一候儀には御坐候得共當今の形勢神州の大患不_二容易_一儀と奉_レ存候處賤臣淺知の身分は其分を盡と被_レ仰候儀兼て御著述奉_二拜見_一候御卓論にも被_レ爲_レ在候百練

の君をも御苦勞申上候は臣下の情實心付の儀も不_二申上_一候ては却て不忠の儀と固陋一圖に存詰不_レ憚_レ上の罪恐多事をも不_レ顧味死して奉_二申上_一候抑東照宮御三家を御立被_レ遊候御儀天朝の御藩屏公邊の御羽翼に御据え被_レ遊候御儀を威公様義公様厚被_二思召_一御世話被_レ爲_レ在候故御徳化に奉_レ浴御國中の儀は末々に至る迄別て節義之風を重來候事に御座候て御相續以來御兩君様の御事業を繼述被_レ遊日夜種々御丹精を被_レ爲_レ盡厚御世話被_レ遊御著述等を以て御教諭被_レ爲_レ在且又學校等御造營被_レ遊御碑文を天下萬世に御示し被_レ遊候に付舊弊士風相改士民共忠孝廉恥の風益厚く罷成加之天下有志の士御卓見の御論を奉_レ伺御事業の程を奉_レ瞻仰_二罷在候處不_レ計も甲辰の御災難御逢被_レ遊御思召も中途にて不_レ被_レ爲_レ遂候御次第は可_二申上_一様も無_レ之痛恨の至り御座候處中納言様御英明に被_レ爲_レ入厚天朝公邊を御尊敬被_レ遊候御儀如何計歎御滿悅被_レ爲_レ在候御儀と奉_二恐察_一候御先代様以

來御代々様御忠孝被_レ爲_レ盡且中納言様御英明奉_レ達_ニ叙聞_ニ先達て公邊の御爲難_レ有寛大の厚き叙慮御勅諭を御蒙被_レ遊候御儀奉_ニ恐入_ニ候御次第申上様も無_ニ御座_ニ候扱公邊の御懐合は如何成御次第歎は不_レ奉_レ辨候得共將軍様未御幼年に被_レ爲_レ入候へば御三家様は勿論御家門様方にて御輔佐不_レ被_レ爲_レ在候ては乍_レ恐更照宮の御思召にも不_レ被_レ爲_レ叶候御儀奉_レ存候處時移り世變るに隨て遂に三藩の御親族をも全く諸有司の取扱を以て御離間仕候儀は東照宮御代々様の尊慮に違背仕候儀御座候右尊慮に不_レ應の取扱を以て御登城御指留御儀等被_レ仰出_ニ候儀御座候得ば譬公邊を御重_レ被_レ遊候も少く御斟酌不_レ被_レ遊候ては天朝へ御對被_レ遊候ては乍_レ恐如何奉_レ存候畢竟右故の御廉を以於_ニ天朝_ニは深く被_レ惱_ニ叙慮_ニ寛大の御勅諭をも御下けに罷成候御儀に御座候へば御家の御規模後世迄の御光輝に御成被_レ遊候間速に諸方へも御廻達に可_ニ罷成_ニ御儀と奉_レ存候處公邊へのみ被_レ仰立_ニに相成候處

於_ニ公邊_ニは有司の内には奉_レ對_ニ天朝_ニ不_ニ相濟_ニ儀有_レ之候に付大老始め閣老衆謀計を運し御連枝様方を以て浮説流言を申上中納言様を奉_レ欺御疑惑被_レ遊候様手段相施し御勅諭に被_レ爲_レ背候様相計候段悖逆不道の始末可_ニ申上_ニ様も無_ニ御座_ニ候乍_レ恐中納言様には少敷御惑被_レ遊候をも其儘御指留被_レ遊候ては御情なき御事の様奉_レ存候右謀計に御泥惑被_レ遊遂御勅諭も御遅延罷成候間恐多も奉_レ輕_ニ叙慮_ニ候様にて御逆鱗の御程も如何と苦心仕候萬々一御逆鱗も被_レ爲_レ在奉_レ惱_ニ天朝宸襟_ニ候様にては乍_レ恐御父子様の御中にては御濟被_レ遊間敷候様奉_レ存候譬中納言様へ御下け罷成候御勅諭に御座候ても御父子様御一體の御儀御座候へば順逆御名代々に御成被_レ遊奉_レ安_ニ天朝宸襟_ニ候御儀何少も御憚御座有間敷御儀奉_レ存候語曰_ニ父爲_レ子隱子爲_レ父隱_ニと有_レ之候へば聖賢の道にも相當り可_レ申哉と奉_レ存候御慎中御嫌疑の御配慮被_レ爲_レ在御慎被_レ爲_レ解候上は速に奉_レ安_ニ天朝宸襟_ニ候様御執行可_レ

被_レ遊御儀とは奉_ニ恐察_ニ候へ共前條申上候通り一體御慎の御儀は有司奸惡人の所爲より事起り候をも御承知も被_レ爲_レ在深く御慎被_レ遊公邊を御重_レ被_レ遊候御儀も至極御尤の御儀には御座候へ共小義を憚り大義を取失候様にては乍_レ恐天朝への御忠節東照宮并御代々様へ御對被_レ遊御孝道も如何と奉_レ存候過則勿_レ憚_レ改_ニと有_レ之候間何卒非常に御英斷被_レ遊御代々様の御忠孝を不_レ奉_レ辱安_ニ天朝宸襟_ニ候様伏て奉_レ希度奉_レ存候は勿論於_ニ御勅諭_ニ儀_ニ毫釐も御鹿略被_レ遊候思召は毛頭不_レ被_レ爲_レ在候御儀とは奉_レ存候得共唯々幕奸の盛んなる故時宜を御計被_レ遊候御儀と奉_ニ恐察_ニ候乍_レ然人生死生は難_レ計候萬一御不慮の御事も御出來乍_レ恐御不例等にも被_レ爲_レ成候節は如何か彌猛に思召御世話被_レ爲_レ在何程御辯解被_レ遊候ても馴も不_レ及_レ舌と申次第にて臍を噛み候ても詮方盡果可_レ申候得ば其節の御見留は御立被_レ爲_レ置如何御下知御深意の程は在下の者は不_レ奉_ニ承知_ニ候へ共謹で奉_ニ愚案_ニ候

に天朝への御申譯は被_レ爲_レ立御請被_レ遊候御儀歎其流涕悲歎の餘り乍_レ恐奉_ニ恐察_ニ候右等の御事は決て有_レ之間敷候得共萬々一左も被_レ爲_レ在候節は御國中は不_レ及_ニ申上_ニ天下の勢も瓦解可_レ仕は勿論天下の勢計を御覽被_レ遊候御譯は無_ニ御座_ニ候へ共左候は_ニ幕奸は彌増盛に微力の諸候は畏縮可_レ仕は指見に御座候此上増長仕雖_レ逞_ニ猛威_ニ只今の御姿に被_レ爲_レ在候ては矢張御畏縮の様に相見御碑文御著述等の御意味合と御所業とは大に御相違仕是迄御高論を御立被_レ遊候は全く御虚文にて御内實の所は御心肝より天下の重きを御任被_レ遊候には有_レ之間敷杯と天下後世の人に御嘲りを御受被_レ遊候様の儀も可_レ有_レ之様にては人臣なる者聞に不_レ忍涕泣悲嘆の至りに不_レ堪次第に御座候何卒是彼の所厚御賢察被_レ遊非常の御英斷を以て御決策被_レ遊候は_ニ天下の萬民如_レ日難_レ有_レ可_レ奉_レ仰候御決策にも罷成候は_ニ幕奸より暴兵を起し候も難_レ計候其節は此方にては只暴威を相支居候は_ニ天下の諸候

誰も御危難を御見捨不_レ申上_二候如し萬一御救申上候諸侯無_レ之時は御先代様より御誠忠の御家天運の御末歟と奉_レ存勤王の御廉御立被_レ遊候は、其節には乍_レ恐御一身を御請被_レ遊候ても不_レ得_レ已奉_レ存候一廉天朝への御忠節も不_レ被_レ爲_レ盡乍_レ居敗亡に陥り候も餘りの残念至極に奉_レ存候見_レ義不_レ爲_レ無勇也」とは此節歟とも奉_レ存候只今の姿にては實に死て有_レ餘罪と奉_レ存候再三申上_二奉_レ恐入_一候へ共一日も早く御決策被_レ遊尾張様御初御親族様方其他有志の諸侯を御家へ御呼寄被_レ遊候て公邊の御爲に御評議被_レ爲_レ在御役人方の臧否を御糾明にて正路へ御黜陟被_レ遊且又天下有名の人傑を御召被_レ遊爲_レ神州大御評議被_レ爲_レ在候て是迄の恥辱を改め變夷を四表に逐退赫々たる神州の奮武の様御指揮有_レ之候は、第一奉_レ安_二天朝宸襟_一東照宮の思召にも被_レ爲_レ叶_二御宗家の御任も御立被_レ遊御先代の御忠節をも不_レ辱_二御藩屏御羽翼の御任も御立被_レ遊候間御忠孝莫_レ大焉と奉_レ存候私儀微賤不肖の

身分をも不_レ憚過分の狂言を申上_二奉_レ恐入_一候段如何様の罪科に被_レ仰付_一候共毛頭御恨不_レ奉_レ申上_一候只國家の御爲と存詰賜死の罪をも不_レ願謹て是段奉_レ申上_二候誠惶誠恐百拜頓首頓首

十二月

死罪死罪百拜頓首頓首謹言
齋藤留次郎叢

六年己未の春井伊大老益勢煽を張りて朝野を壓制し三公以下諸卿をして落飾又は辭官に至らしめ四月志士數十名の捕獲を續行し甚だ朝旨を壅塞す藩の有司も漸次勅諭廻達の停止を論出する者あり遂に藩論二派に分れ相争ふ叢切齒扼腕宿望を達せずんば止まずと努力すること終始一貫なり八月幕府又烈公を責め水戸城に永蟄居を命ず爲に烈公北下す叢勅旨を發揚し得ずして扈從するに堪へず憤を呑んで水戸に下る是の時に當り順公勅諭を水戸の祖厓に納れ之を保管す十二月幕府參政安藤對馬守(信睦)を磯川邸に遣はし順公に面して朝旨と稱し勅諭を幕府に返還すべき命を下し其督促甚だ迫る順公之を有司に諮る有司幕

旨に反し禍の至らんことを恐れ府命に従はんとす士民多く之を非議し一は一非月を亘る叢斷乎として返還すべからざるの議を執り有司に對して曰く今幕吏の逼るものは是朝旨を矯め我を恐嚇するなり如何んぞ彼の幕吏の兇威を懼れ我が君をして不忠不義に陥らしむべけんやと言辭を盡し事理を明かにし肝膽を披瀝して餘蘊なく論辯するも竟に聽かれず還勅の期日既に定る叢自ら決する所あり以謂らく事此に至る豈言論を以て争ふべけんや吾唯一死以て精神を發揮し之を諫めんのみと乃ち嚮に烈公に呈する所の書を再記して之を懷にし絶命の詞を詠じ水戸城に登り其一室に於て自殺す年三十一實に萬延元年二月二十四日なり其遺骸は水戸常磐原に葬る辭世の國歌左の如し

大刀とりて、君か守りと、ならん身の、今いたつらに、くちはつるかな、
いたつらに、死ぬる命も、君か爲、心のおくそ、
しる人ぞ知れ、

叢の變事を聞くや城中の人有司と否とを問はず錯愕狼狽すること甚しく還勅の不可を論ずる者俄かに多きを加へ勅書若し水戸を發せば之を途に要し奪ふものあらん還勅を止むるに如かずと一談百說皆然らざるなし此に於て有司叢の死狀を幕府に具申して還勅の期を拖延し還勅の幕命も亦竟に罷む叢性沈鬱寡黙人と争はず常に能く事理を明かにし大節に臨んでは必ず自ら之に當る今方に還勅せられんとする危機一髪の時身を殺して大勢を挽回す入其忠烈を稱揚せざる者なし幕吏の朝旨と稱せしものは大老に於て所司代酒井若狹守(忠義)を介し傳奏廣橋大納言(光成)に依囑し乞ひ得たる一書翰にして其署名は官氏なく單に光成と記し酒井若狹守に宛てたるものに過ぎず即ち左の如し

昨年八月八日水戸中納言へ被_レ下候勅諭御書付并添書共速に返納有_レ之様水戸中納言へ可_レ被_レ相達_一候此段申入候事

光成

酒井若狹守殿

原熊之介忠愛謂へる事あり「叢屠腹せしとき兄市衛門予と行く城中にあり其凶計を聞き俱に其屍を收めて家に還る時已に夜半なり市衛門予に囑して曰く今弟の屍を昇て俄かに家に還るときは吾が母年既に老て必ず悲哀に堪へざるべし願くに君先きに行き母に面し宜きに從て凶計を告げ以て少しく其哀情を緩ふせしめよと乃ち予之に赴き徐々其變を告げ且之を慰藉す母氏之を聞き顔色變せずして曰く今や國家非常の秋に際し兒の屠腹する固より其分なり妾何を哀むことか之あらん只殿中を汚せしは恐懼に堪へず願くは子直ちに行いて市衛門に助手し不體裁の措置無らんことを乞ふ是妾が今願ふ處なりと言容自若たりし母氏年未だ三十ならずして夫を失ひ寡居貧窶纒かに衣食を給するの際能く義方を以て二子を教誨する多年兄弟之に頼りて成立し身を國事に致す此の母にして此の子あるものに非らずや」と文久二年壬戌十二月幕政大に革りて朝旨を奉するに至り是の月十七日

幕府令を發し順公をして勅諭を諸藩に回達せしむ其達文左の通にて曩に安藤が廣橋光成の書面を示し朝旨なりと云ひたるは叢の駁論したる如く果して叢旨を矯め藩の有司を脅迫したるものなること判然せり先年御渡の勅諭其砌諸家へ御觸示可被成の處井伊故掃部頭不都合の取計致置候に付此度御承奉相成候様被仰出候就ては源烈殿遺志被爲繼御精勵被爲在候様被仰出候

三年癸亥の春朝廷特に大將軍及諸侯伯を京師に召し責むるに修攘の實効を奏すべきを以て是に於て叢の志始て朝野に貫徹せり中川宮(青蓮院宮)尊融親王「一死報國」の四字を統本に書して之を賜ふ人以て異常の光榮とす明治の初順公特に命じて叢の爲別に一家を起し俸祿を給與す叢未婚にして子なし因て國松清兵衛(正明)の次男利政を以て嗣とす二十二年五月二日朝旨に由り叢靖國神社に合祀せられ二十四年十二月十七日朝廷更に叢の奮勵を録し從四位を贈らる

贈從四位勝野正道傳

勝野正道豊作と稱し臺山と號す江戸の人六大夫正弘の男なり後水戸藩の士籍に列し俸票を子保三郎(正滿)に給與せらる其先は信濃仁科氏より出づ仁科氏は承久建武の交官軍に屬し屢軍功あり後故ありて勝野氏を稱す數代の祖を正清と云ふ剛強義を好み寛永中に名顯はる幕府麾下の士阿部四郎五郎豪俠にして士を愛し處士多く歸す世之を白柄組と稱す正清其一人にして上客たり阿部其家祿の内二百石を預ち正清に與ふ子孫世々相承け正道に至る正道人と爲り俊爽にして氣概あり好んで書を讀み文雅を嗜み又武技を善くし最も槍劔に長じ古俠者の風あり然れども謙退にして圭角を露はさず神田小川町に住して常に賓客を好み四方の人を延見し屢人の困厄を救ふ當事者間の紛難を解くに當りては冥々の中に計畫し斡旋するを以て事能く其肯綮に中る又出で、名流に交り凡そ都下に在り文武を以て名ある者は其面を知らざる者なく力士俳優雜伎の徒に至るまで相往來して交際頗

る廣し鴻儒尾藤高藏(積意)の如き又能く交誼を厚うす尾藤は名流碩學書生を問はず一概に皆朋友を以て待ち酒々落々として客を引き酒を酌み殆ど虚日なし其從容優遊の間に憂時慨世の意を寓し議論甚だ正道と合へり正道春花秋月の賞遊に尾藤を伴ふ尾藤は赤貧洗ふが如く常に衣物を典賣し外出に障礙あるを以て正道之を憤復し相携へて遊ぶを例とす又藤田虎之介(後誠之進彪)安嶋彌次郎(後帶刀信立)高橋多一郎(愛諸)大野謙介等と親み就中大野と刎頸の交をなせり弘化元年甲辰五月水戸烈公畫語に中り駒籠邸に幽屏せられ順公封を襲ぎ結城實壽(朝道)等威柄を弄し藩政亂るるや藩士主冤を訴へ政事を復せんとして潜行江戸に到り盡力する者多くは正道の家に寓し事を謀る正道も亦素より烈公の幽屏を宛とし之が洗雪に周旋尤も力め陰然幕府の内容を偵知し之を水戸の有志に報じ躬自ら蚤縁を幕吏に求め讒の讒たる所以を説き能く其誣罔を辨じ盡瘞すること數年嘉永二年己酉の春に至り烈公の冤枉氷解し藩政回復するものは正

道與りて力あり六年癸丑六月外艦入港の事あるや正道國威を張り外患を攘ふを要務とし力を國事に致す烈公其志を嘉し「盡忠報國」の四大字を書し之を賜ふ安政の初外患益迫るを以て正道痛く之を憂へ高橋其他の志士と邊蠻の策を講ずるもの少なからず五年戊午六月大老井伊掃部頭(直弼)幕政を司り朝旨に背き我が國權を失墜せる外交條約を結びたるに由り朝野之を非議し物議甚だ沸騰せり正道慨然として曰く幕府專横朝野の正義を蔑にし恣に外國と條約を結ぶは是違勅にして幕府自ら亡滅を速くに至るなり吾も亦世々幕府の餘恩に浴する者座視して匡正の道を盡さざるは義にあらざるなり只力微にして容易に之を爲すことは能はず今親藩中此の事を議すべき者は唯水戸君臣忠良相逢ふあり其力に頼つて幕政を匡濟するは策の最も得たるものならん然れども水戸も亦朝廷の力に藉るに非ずんば必ず此の大事を爲すこと能はざるべしと心竊かに慮る所あり七月薩人日下部伊三次(信政)と共に潛行し木曾路を經大阪に至り大久保

要(親春)の家に寓し謀る所あり尋で京都に抵り伊丹藏人(重賢)の紹介に由り八月二日青蓮院宮尊融親王に内謁し意見を陳じ書を呈して修攘の勅を關東に下さんことを内願す其書に曰く

乍恐以書取愚意奉申上候

當將軍家多病より政事總て老中にて取扱威權日々盛に相成漫に時勢變革無之候ては御國威難持張様に唱候て有志の宗室諸侯の説を一切不取用遂に勅に違ひ評議にも不及墨夷へ條約調印相渡候迄に至候尾水越前の三家井田安一橋家勅を重じ嚴敷申立有之其上登城(三家は二十四日兩卿は二十三四兩日)調判違勅の旨詰問有之候得共最早事去候儀にて無據即日閣部下總守上京に決し通達出候に御座候然る處將軍家六月初より脚氣水腫にて七月二日御大禮後に俄に差込人事を辨せず不_レ容易大病に付萬一の節は幼君の儀威權宗室に歸し候には指見候に付大老初一同密談に付惡意を企て擅に右故上意と稱し七月五日夜三家を押込當

水戸家一事家を當分登城差留上下の膽を奪ひ候に付一人言を發する者無之翌六日夜は將軍大切に相成候平生にても御承知被_レ爲_レ在候通りの氣質病大切の前日右様の儀可有_レ之謂無_レ之爲_レ奸計事明白にて最早奸臣忌憚の心は無_レ御座候間下總守上京とても必朝家の御爲とは不_レ奉_レ存候且又此節外夷國々江戸海へ入津候處惣て上陸を免し應接條約等墨夷同様の儀は勿論と奉_レ存候奸臣共右様夷狄を信じ宗室を倒し幼主を挾て權を擅にし言路を塞ぎ上下隔絶徳川家の危難如此は未有_レ之候乍不_レ及三家共天朝を崇敬候至誠より罪を得ると陪臣國命を執り將軍家を違勅に陥れ尙其欲を逞し候と曲直申上候迄は無_レ之候右奸臣共御糺明御手延に相成候ては追々黨を結び不良の計策を企て候も難_レ計有志の者は切齒に堪へず必ず内亂を引出し候様可_レ相成一度亂緒を開候得ば再本へ歸しかたく燃眉の場合深く恐懼仕候儀に御座候朝廷の御威光に無_レ之候ては宗室の厄を解事能はず宗室の將軍を

羽翼無_レ之候ては奸臣を退け勅を重じ候儀はとても行届申間敷候乍去宗室とても當時無人微力に付外藩を加へ早々勅を以被_レ召呼_レ違勅の奸臣共相除先づ國家の大害を去り候て幼君輔佐の御撰被_レ爲_レ在候は東西一致上下共に天朝御崇敬必然の儀と奉_レ存候右宗室外藩被_レ召呼_レ候儀尾州中納言水戸前中納言松平越前守等は何れも其任に候得共此節慎中如何可有_レ之候哉一橋家は乍若年才徳兼備方今無比名將の器に候得共奸臣共深く憚り候より其節に至り不測の災を醸し候も難_レ計當尾水兩家の内に候は差向故障も有_レ之間敷奉_レ存候外藩松平薩摩守を以て第一と仕候得共此節大病と承り候左候は松平阿波守は尤も將軍家の親戚に候へば有志に付此者の外無_レ之候松平土佐守松平美濃守松平肥前守伊達大膳大夫等は何れも忠臣無_レ二の者には右の内一兩人も阿州へ御添に相成候は宗室の不足を補ひ取計十分に行届可_レ申奸臣驅除に至り補佐の御撰には一橋家の外に無_レ之候是は先

んじ候ては、大に害を生じ可し申奸臣の憚る故に候
 只今關東の危急叡慮より自然持張相成候は、皇威
 彌増し永世の御基に可し被_レ爲_レ在違勅の奸臣嚴重
 御除の上は外夷の御所置は如何様にも叡慮被_レ安
 候様可_レ相成_一第一に關東に勅命を重し御威權の
 無_レ之候ては幾度被_レ仰出_一有_レ之候共只々奸臣同意
 の者黨を結命を拒候より外千非後悔の者は有_レ之
 間敷度々に及候は、自然朝威も輕く相成混雜のみ
 にて國家の御爲と難_レ申左様とて朝威少しも御挫
 け御座候ては千載御引戻しの時は有_レ之間敷天下
 の安危徳川家の盛衰此時に迫り候間何卒右の者共
 速に被_レ召呼_一違勅の奸臣御糺明深く奉_レ願候徳川家
 累代朝廷を奉_レ崇敬_一候忠誠を被_レ思召_一厚く御評議
 にも相成候は、豈唯徳川家而已哉天下萬民の幸福
 と奉_レ存候卑賤を不_レ憚存込候儘奉_レ申上_一候不敬の
 段は幾重にも奉_レ恐入_一候恐惶謹言

門(知信)鶴飼幸吉(知明)梅田源次郎(定明)頼三樹三
 郎(醇)等と交り請願の趣旨を貫かんとし拮据奔走殆
 と虚日なし其勞空しからずして事廷議に上るものあ
 りしと云ふ八月八日朝廷勅諭を幕府及水戸侯に下し
 外寇掃攘を命ず幕府勅を奉せずして多方策を設け却
 て天下の正義を歴し勅旨發揚を謀る鶴飼父子日下部
 梅田頼等二十餘人を捕ふ正道既に東下し在りて之を
 聞き速吏の必ず至るを慮り其手記文書を集め之を焚
 棄し家を出づ吏果して至る此の時早く彼の時遅し正
 道既に脱して水戸藩邸に入り大野又は尼子長三郎(恒
 久)の家に入匿る故に幕吏搜索し得ず乃ち妻松井氏
 シ子及二子森之介(正倫)保三郎を收め獄に下し正道
 の居所を訊鞫す皆知らざるを以て答ふ幕吏森之介を
 拷問して言はしめんと欲し甚だ慘楚を極む森之介死
 を決して言はず正道隠見出沒密かに遠近同志の士庶
 と畫策する所あり勤王唱義以て外寇防遏の宿望を遂
 げんとすること日あり六年己未十月十九日病んで大
 野の家に歿す年五十一大野陰かに其屍を掩護し水戸

城南大戸村大野内藏太に託し之を其地に葬る正道櫻
 真金各國事に盡瘁し尊攘の大義を全うせんとして幕
 吏に物色せられ志未だ伸びず正道は江戸に櫻は大坂
 に潜居し東西策を講じ在りて死す人之を痛惜し臺山
 鳴鶴の物故は國家の不幸なりと云へり臺山は正道鳴
 鶴は櫻の號なり幕府森之介を三宅島に流す餘は皆釋
 さる後數年森之介赦に逢ひ江戸に歸り竟に病死す明
 治元年三月順公正道の功を追賞し保三郎を召して士
 籍に列す因て水戸侯に仕へ祿を給はる尋て保三郎大
 戸の墓上に碑碣を建つ小野愿(湖山)撰ぶ所の銘に曰
 く
 嗚呼臺山豈空與_一草木_一同朽而止者也哉、其必爲_一忠
 義鬼_一存_レ乎_一天壤間_一也、十七士之舉_一事於_一櫻田_一也
 其鬼必出沒隱見以濟_一其艱難_一矣乎、王師之東也其
 鬼必在_一先鋒隊中_一盡_一其心力_一以奮揚激勵矣乎、而
 其在_一今日_一其鬼必冥冥擁_一衛王宮_一夙夜無_レ懈矣乎、
 嗚呼臺山豈空與_一草木_一同朽而止者也哉、
 保三郎名を正滿と改む後死し嗣子正魚家を繼ぐ二十

四年九月十七日朝旨に由り正道靖國神社に合祀せら
 れ十二月十七日朝廷更に正道の舊勳を録し從四位を
 贈らる正道嘗て賦する所の詩若干首あり左に摘録す
 戊午冬偶感
 安居元是非_一吾願_一萬里風濤見_一虜舟_一不_レ奈浮雲蔽_一
 白日_一海蒼山碧使_一人愁_一
 彌_一天妖教何壯大_一拂_一地聖經道欲_一窮_一別有_一扶持造
 化力_一神光長照碧雲中_一
 記事
 狂風卷_レ地勢振振、急使_一吾生_一失_一所親_一、收取三軍
 檣_レ帥手、來成丈室寄_レ跡人、夕陽當_レ戶紅侵_レ座、夜
 月臨_レ軒淨絕_レ塵、千古英雄屈伸在、寧論災厄集_一斯
 身_一、
 己未春偶成
 白髮生來事事窮、一身榮辱付_一蒼穹_一、思_一家雙淚流
 無_レ盡_一憂_一國丹心老益雄、雪解西湖波拍_レ岸、雲晴山
 嶽翠浮_レ空、誰知造物扶持力、長掃_一胡塵_一鎮_一海東_一、
 記事

食無_レ魚矣以無_レ氈 飽歷_二艱難_一 獨自憐、隔_レ壁有_レ時
鐘刻轉、戴_レ霜何處雁聲連、月昇枯木光初映、窓向_二
北風_一孔數穿、幾度回_レ頭眠不_レ得、寒威頻迫客愁邊、

醉後漫書

醉則放_レ歌醒則哭、堪_レ看夷虜漫橫行、如今海內無_二
豪傑、狂若_二吾曹_一未_レ可_レ輕、

勤王 水戸烈士傳上編 卷六

贈正四位金子教孝傳

金子教孝小字子之次郎後孫三郎と稱し又孫二郎と改
め琴樽と號す川瀬教徳(七郎衛門)の第二子其系は高
井藏人より出つ藏人今川義元に屬し桶狭間の役力闘
して死す其子次郎衛門水戸威公に事へ千五百石を食
む實に教孝八世の祖なり教孝幼にして穎悟句讀を石
川久敬(嘉大夫)に受け拔刀術を大野定記(太兵衛)に
薙刀術を天野景命(繁衛門)に乗馬術を岡見彦五郎に
學び拔刀薙刀の二術は頗る熟し印可を受く教孝年甫
めて十六金子能久(孫三郎)の後を繼ぎ其氏を冒す文
政十二年辛丑九月水戸哀公疾革り儲嗣未だ定まらず
哀公元より介弟敬三郎を立つるの意あり群臣も亦望
を之に屬す執政以下其英明を忌憚り三卿の清水齊
彊を以て嗣となさんとするものあり物議沸騰し人心

贈正四位金子教孝傳

一三七

洵々たり教孝同志と共に誓つて曰く正義以て有司の
意思を矯正せざるべからずと江戸磯川邸に詣り周旋
最も勉む幾ばくもなくして介弟封を襲く即ち烈公な
り天保元年庚寅九月教孝少監察となる二年辛卯十月
朋黨の論起り要路に在る會澤安(恒藏)原田成祐(善
右衛門後兵介)荻君充(次郎兵衛)鈴木宜尊(庄藏)の
四名貶せられ事頗る藩政の針路に關するを以て異議
百出訛言從つて行はる教孝之を憂慮し監察武田正生
(彦九郎後耕雲齋伊賀守)山國共昌(喜八郎後兵部)少
監察高久信次(源吾)と共に意見を定め十一月四日九
日の兩日數百言の封事を烈公に呈し忠直の臣を捐て
す之に要職を授け以て物議を制し廓清の業を全うせ
ん事を請ふ三年壬辰七月教孝吟味役に遷る十二月父
川瀬京都に祇役せるに由り五年甲午正月西上して父

に面す途上東海道を過ぎ橋狭間に於て遠祖を追慕し
國歌一首を詠す

遠つみをや、屍をこゝに、さらしてん、臣の道し
は、ふみならしつ、

教孝京都に在る數旬湊川及芳野の舊跡を訪ひ路を轉
じて伊勢大神宮を拜す五十鈴川にて左の國歌を詠す
五十鈴川、清き流れの、音牙へて、神の御前の、
た、まくもをし、

又有馬の温泉に浴し中山道を経て水戸に歸る九年戊
戌四月教孝奥右筆を命せられ十一月擢んでられて郡
奉行となり西部を管し梅香の西官舎に移る烈公業に
既に川瀬の議を探りて水戸封内七郡の制を改正し東
西南北の四郡となす西部は則ち其一なり教孝屢部下
の農況を巡視し夏日炎蒸の候に渉る適ま國歌を詠じ
之を里正に示す其詞に曰く

耕やさぬ、人に見せばや、夏の日の、汗にそほつ
る、賤か袂を、

教孝能く烈公の意を體し第一に孝悌力田を奨め醫學

館を改構し之を増設して郷校と稱へ農民をして文學
武技及醫學を講究せしめ以て人材を養成す民心悅服
し皆良奉行と稱す又部下に小場江堰(那珂郡)あり即
ち千三百餘町の田地に灌漑する用水堰にして其修理
の費用年々多額を要し村民其負擔に苦む教孝之を查
察し建議して藩費補助の制を設く人皆之を徳とす教
孝烈公の旨を奉じ耕地檢定の方法順序を精査し十一
年庚子七月二十日を以て西部の成澤村(茨城郡)に於
て第一着の耕地丈量を爲し之を模範とす烈公親ら臨
み之を奨勵す世以て成澤の御繩初と呼ぶ教孝屬僚を
督勵し村毎に檢し字毎に査し其經界を正し貢租の増
しあるものは之を減じ減じあるものは之を増し隱田
切開の積弊を一洗し以て正租を定る、の徳俸なく苛
税を納るゝの不幸ならしむ是の時烈公教孝を召し
て檢地の成績を諮問するのみならず教孝の官舎に臨
み親しく其事務を視察する事屢なり南東北の三部皆
均しく檢地の功を奏するも其効績の著明なるは人西
部を推して第一とせり十二年辛丑正月世祿百石を賜

はり弘化元年甲辰正月又五十石を増賜せらる五月幕
府蜚語を信し俄かに烈公に譴責を加へ致仕を命じて
駒籠別邸に屏居せしむ順公年十三にして封を襲き支
封松平頼胤(讃岐守)松平頼繩(播磨守)松平頼誠(大
學頭)本藩の政事を攝行す執政戸田忠敏(銀次郎後
忠大夫)側用人藤田彪(虎之介後誠之進)寺社奉行今
井惟典(金衛門)等黜斥又は鎖錮せられ執政結城朝道
(寅壽)獨威福を擅にし黨を結び以て烈公の盛業即ち
大砲鑄造其他諸般の業を廢棄す是に由りて政務一變
藩内大に亂る教孝曾澤及安島信立(彌次郎後帶刀)等
同志の士と力を主宛洗雪藩政回復に致し日夜盡瘁す
る周到なり二年己巳正月教孝黜けられて大番組とな
る三月教孝高橋愛諸(多一郎)と共に密行して江戸赤
坂の和歌山藩邸に至り家老山中筑後守に頼りて和歌
山侯(徳川大納言治實)に主宛を訴ふ其書に曰く
去る五月中中納言様御慎御隱居被_レ仰出_レ候に付水
戸表一統悲歎仕追々出府越訴仕候者も許多有_レ之
人心搖動仕元來無實の御疑より右の通被_レ仰出_レ御

慎の儀は既に御宥免に相成候得共御政事御携はり
無_レ之様御達有_レ之只今以て御連枝方御政事御世話
御坐候儀不_レ容易_レ兎角下情不_レ上通_レ勢にて事々人
心に相違ひ第一中納言様御用ひ被_レ遊候諸有司盡
く入替り奸智邪才にて是迄廢居候もの取用ひに相
成真心より憂_レ國侯者にては議論等正直に仕候者
は相退け士林郷民によらず無理押付にいたし追々
郷民共越訴仕候者は牢舎申付候上罪人同様の扱に
て疫疾等相煩ひ死亡いたし候者も有_レ之總て民情
を不_レ察一同嚴重に取締實に暴政とも可_レ申候依_レ
之却て人氣相立候哉にて騒々敷罷成候折柄奸僧共
は勿論其外にも佞奸邪智の者共段々得_レ時候勢に
て種々讒間等相行ひ折角義公様御遺志被_レ廣候儒
葬祭の儀も甚だ危く罷成隨て學館も相衰へ紀綱も
相弛み次第に是迄の御事業相崩れ候勢に罷成申候
右の通り相成候も畢竟中納言様御政事御携はり無_レ
之候より事起り候儀にて一統残念至極に奉_レ存候
申迄も無_レ御坐_レ候得共御三家様御儀は公邊御輔翼

に被_レ爲_レ成候思召にて被_レ遊候得ば御三家様御一體にて譬へば御一家様御不首尾被_レ遊候へば外御兩家様へも相拘はり候事にて此度の儀水戸御一家の御瑕瑾と申而已には有_レ之間敷奉_レ存候且天下の目當に被_レ成候御三家様右の通り無實に御疑一ヶ年に相成候ても不_レ被_レ爲_レ晴候様にては天下の聞えも如何敷實に公邊御徳化にも相拘はり可_レ申奉_レ存候追々相伺候へば大納言様御英明に被_レ爲_レ在此度御出府御坐候て水戸表の儀に付萬端御盡力被_レ遊候様奉_レ承知_レ誠_レに以て難_レ有仕合に奉_レ存候何卒少將様御政事被_レ爲_レ執中納言様御心添御坐候様罷成候はば御領中一統無_レ此上_レ難_レ有仕合に可_レ奉_レ存候若是迄の通りにて何等の御振合相易り不_レ申候はば最早人々覺悟仕居候間如何成る變事にも可_レ罷成_レ哉と奉_レ存候萬一御家の安危に拘はり候儀御坐候ては尾紀様御儀は勿論公邊の御瑕瑾に可_レ相成_レ實に不_レ容易_レ勢と奉_レ存候大納言様には御三家御一體被_レ思召_レ此上益々御盡力被_レ遊候御

事とは奉_レ察候へ共尙更執事にては水戸表の事情委細御承知御坐候て幾重にも御助成の儀御任し被_レ下候はば一般の御補益にも可_レ罷成_レ奉_レ存候當表にも一統日夜碎_レ肝膽_レ盡_レ微_レ刀_レ候儀には御坐候得共前文の儀は御賢察奉_レ仰候實に大納言様御盡力より外無_レ御坐_レ候何卒可_レ然御程合も御坐候はば宜敷御取成被_レ下置_レ候様偏に奉_レ願上_レ候百拜頓首敷孝又屢江戸に至り和歌山藩人遠藤勝介外有志の士に交り雪冤復政を謀る最も切なり水戸の巨室松平頼讓(將監)も亦南上し和歌山侯に主冤を訴ふ有司此の訴は敷孝等之を誘致するなりと聲言し敷孝等を嫌忌し三年丙午正月敷孝安島會澤山國等九名俱に職祿を褫はれ仲町(水戸上町)の廢舎に拘禁せらる敷孝若干の國詩を吟ず其二首左の如し

もみち葉の、幾重か下に、埋むとも、染めにし色は、えこそかはらね、
 たらちねの、母の心は、如何ならん、吾か子を思ふ身にぞ知らるゝ、

烈公敷孝等九名の鬱悒疾をなすを慮り躬親ら良藥を調劑し又獨按摩の圖を調製し高橋をして密かに之を交附し攝養せしむ敷孝幽窓に感泣し靜養すること累年常に國歌を嗜み詠するもの數百篇あり囚中白紙に乏し爲に塵紙に書して一冊となし名けて囚室集と云ふ左に長歌並に短歌を摘記す(囚室集は明治十九年水戸市祝融の災に罹りたる時家の類焼と均しく焼失す)

玉鋒の、道は多くと、臣の子の、臣たる道と、人の子の、子たる道とを、わきてしも、踏迷はしと一筋に、たとりしものを、八重霞、たちかこめつる、白雪の、降りか埋むる、あやなくも、雲の戸さしの、幾重にか、入りにけらしも、哀れわれ、囚れとしも、なりしかは、世になき身そと、思ひつゝ、折節ことに、堪かたき、事をしもたへ、しぬはへぬ、事をも忍び、古の、ふみを朝暮、ともとして、心靜に、天地の、なしのまにまに、新玉の、歳のみとせを、憂氣くのみ、過くしつるかも、

禍津日の、神のきせけむ、我が君の、濡衣いかてほしてむと、思ひふかめて、むら肝の、心を盡す世の人も、たかき賤き、さはなれば、いつはあれとも、梓弓、此の春こそは、朝つく日、向か岡の、常葉なる、松の梢の、雲霧れて、緑の色も、益らめと、たのしみし事も、甲斐そなき、いかにかせまし、いたつらに、我身は老ぬ、いつしかと、頭の霜は、置そはり、鬚おひしたり、眞曾鏡、面かけこそは、變りけれ、老にけるかも、劔太刀、とさし心に、ちりもすえぬぞ、
 いたつらに、ふくる我世を、なけきつゝ、はれぬ雲井の、月をしそ思ふ、
 嘉永二年己酉三月烈公の幽寃始めて氷解し幕府の命ありて藩政に干與せらる四月敷孝も亦宅塾居を命せられ松小路の家に歸ることを得十一月に至り幕府の内旨に由り赦されて小普請組となる六年癸丑六月米國水師提督陂理兵艦を率ゐ浦賀に來り幕府に對して通商貿易を要求し異議あれば兵を以て征壓する聲勢

を示し其態度甚だ傲慢に渉る幕府劬々之を制する能はず成策なくして偷安日を亘る七月幕府烈公を起し防海の機務を聴かしむ教孝夙に外寇を思ひ寧日あらず奮つて力を膺懲の事に盡す九月教孝郡奉行に復職し南部を管す秩祿舊の如く賜はり又梅香の南官舎に移る常に時弊を一洗し正を奨め不正を懲らし農兵を編制し大に武勇を勵ます爲に部下靡然として感化し皆忠君愛國の方向を知るに至る安政の初陂理の要求益強梁なるに方り幕吏勢に迫り假條約を以て下田箱館の二港を開く其措置又姑息に流るに由り教孝痛論して之が挽回の策を講ずること少なからず烈公益外患を慮り二年乙卯四月を以て時事に關する良策及銃砲製造の事を諮問せらる教孝一書を呈して曰く

御親書賜はり謹で奉_レ拜見_ニ候墨夷今以て下田に居るのみならず横行の振舞に有_レ之猶又魯夷三隻長崎へ再渡仕候由墨夷の御扱ひ右の通に候へば魯夷とても江戸近海へ參り候やう可_レ相成_ニ夫を聞及候は_レ諸夷追々近海へ來り候半其節に到り御斷り相

成候は_レ諸夷を不_レ殘敵に引受候姿に相成甚だ不_レ容易_ニ被_レ思召_ニ候旨御配慮何共恐入候儀に奉_レ存候葬地並に石炭被_レ下七里四方見分の事も大學頭一己の了簡にて相濟せ候段不_レ相濟_ニ事に候處其儘に罷在候は畢竟重役方に尻持いたし候人も可_レ有_レ之哉と御疑惑被_レ遊候旨御尤の御儀奉_レ存候墨夷江戸へ先入仕候に付ては魯夷は大坂を好候も難_レ計京師御警衛の儀度々御建白被_レ遊候へ共御採用に不_レ相成_ニとの御儀縷々御意の趣扱々不_レ及_ニ是非_ニ當今の形勢にて御座候へば何か良策も候は_レ申上候様可_レ仕旨奉_レ畏候天下の形勢右の通に御座候へば何程の御良策も行はれ不_レ申儀と奉_レ存候天下の根本たる西城公の位地磐石の御固めも在らせられず候ては所謂國是も立不_レ申縦令一旦打拂なと仰出され候ても一敗の後和議の説など行はれ候やうにては却て後害を増し候事に成行可_レ申奉_レ存候間兎角天下の大本磐石に御固め被_レ遊候儀第一の海防策に有_レ之段申上迄も無_レ之候へ共此儀水國よりは總て

嫌疑に涉り候間口外も相成兼候事に候間天意と神慮とに御任せ被_レ遊閑老初諸方の御釣合御引纏め被_レ遊さて一國の武備文教御修正被_レ遊天下の形勢御覽被_レ遊時々待て幕府を御輔佐被_レ遊神州を維持被_レ遊候御遠慮御深謀の外御座あるまじく奉_レ存候天下の御名望と一國の御政體とを御持張り不_レ被_レ遊候ては應變の御處置天下の御大業は御間に合兼可_レ申奉_レ存候

一此度鐵鑄筒御製造被_レ遊候に付金子御拜借にて反射爐御取建可_レ被_レ遊候處第一場所の見立肝要と思召され候旨御尤の御儀奉_レ存候過日福地政次郎方にて雛形拜見仕候不案内にては吞込兼候へ共莫大の鐵をとかし候へば火勢猛烈と相見へ竈の製造悉く手厚に無_レ之ては保ち兼候はんと奉_レ存候湊高野臺可_レ然との御儀御尤に奉_レ存候へ共政次郎申聞に大砲へ錐を入候には水車仕懸にて仕候由の處右地所那珂川の水上げ候やうには出來兼外に流水の便無_レ之此儀如何と奉_レ存候

一竈に用ひ候瓦は小砂土入り御座候素焼を半交せ角瓦に製し又は素焼にいたし組立可_レ然委細は南部人等へかけ合可_レ申兩田よりも申遣し候はん成たけ手回しよく大砲多く出來候やう可_レ仕旨奉_レ畏候

一南部人罷出候は_レ國許より柔鐵並鋼鐵等出候所も可_レ有_レ之哉談合可_レ申旨奉_レ畏候

一御在國鑄筒を拵候鑄形を製し鉛玉を鑄候如くいたし候方可_レ然と御工夫の圖善四郎へ御下げ被_レ遊候へき西洋にてもやはり筒鑄形にて鑄候由御工夫と符合仕り候處右鑄形出來候ならば善四郎可_レ然と思召され候旨奉_レ畏候大砲の儀不案内の儀には候へ共要用の武器當今海防の急務にも御座候處不_レ及ながら工夫も盡し實用の利器御製造に相成候様取扱可_レ申奉_レ存候依て此段御受奉_ニ申上_レ候以上

是に於て烈公那珂湊に反射爐を造築す之が爲泰西の學を修め最も工事に長せる竹下清石衛門を鹿兒島よ

り大島惣左衛門を南部より招聘して此の事を擔任せしめ三春の熊田門も亦召に應じて來り其間に周旋す教孝命を蒙り福地廣延(政次郎)等と其監督を掌り之に赴くもの數次教孝竹下大島等を獎勵し一首の歌を詠じ之を付與す

夷狄等を、打つのは、西のはて、東の奥の人まちてこそ、

尋て教孝歸雁を見吟じたる國詩左の如し

又來なは、吾か爲告げよ、歸る雁、北のえひすのそこの心を、

其工事を竣りて又大に砲銃彈丸を鑄造し得るに至る十月教孝資格を先手同心頭に班し特に祿五十石を加賜せらる是の歳鷺沼(茨城郡)伏沼(同上)と呼ぶ卑濕なる荒蕪地の開墾を企圖する者あり教孝之を聽き其地形地質及土功の成否如何を調査し以て其成就すべきを知察し屬吏をして之を監督せしめ溜池を設けて灌漑の用に供し畔溝を書し水田を開くこと八十餘町忽ち之に移住する者二十五戸となり漸次戸口増加

し鷺沼新田伏沼新田の二部落をなせり三年丙辰九月藩内大に風災水害あり烈公順公江戸に在り之を憂へ教孝を磯川邸に召し其狀を問ふ教孝救荒の策を具陳し大に旨に稱ふ烈公順公經費を節約し邸中各室の修繕を中止し其金圓を窮民の救済に充つるもの多額に昇る教孝感奮し國歌を賦して之を呈す

たゝならぬ、恵みの露は、民草の、末葉までこそあまねかるべき、

烈公直ちに返歌を賜ふ其詞に曰く
民草に、恵みの露を、及ほすも、卿なかりせば、誰か傳へまし、

烈公順公特に親筆紋服を下賜す教孝江戸を去るに當り茅根泰(伊豫之介)國詩を贈る其詞に曰く
民草の、恵みの露を、身におひて、歸る山路は、にしきなりけり、

教孝水戸に歸り益救荒の策を講じ機に臨み倉庫を開き貧民を賑恤するを以て藩内一人の流氓となるものなし幕府竟に烈公の對外策を採用する能はず四年丁

巳七月其職を罷め十二月又下田箱館の如く假りに江戸大阪外五港の互市を許し而して大學頭林緯閣老堀田正睦(備中守)相踵で京都に上り外國の事情を奏上し開港貿易の勅許を乞ふ朝廷斷じて允さず堀田志を得ず五年戊午四月を以て東下す是の月井伊直弼(掃部頭)大老職に任じ幕政を掌り内には權臣の威福を弄し日に勢力を張り外には強國の威嚇を恐れ月に輕侮を受く故に教孝内憂外患漸々迫るを思惟し兵備の急なるを慮り江戸に在る茅根に一書を贈りて曰く
拜啓不順の候彌御安健奉_レ敬賀候此間中折角暑氣に相成候へ共又冷氣彼是致候内もはや秋風も立申候間殘暑の様子何共安心不_レ仕候申年とは空合も違ひ候へ共洪水などの變は如何にも難_レ測年柄に御座候凶荒並非常の手當幾重にも御手厚に仕度時節に御座候處御窮迫にて何も出來不_レ申残念に御座候外夷の事情も甚不_レ容易候よしに承知仕候處平穩の御取扱にて至極陰症のよしに御座候へば不_レ可_レ奈_レ何_レ之_レ時に至不_レ申候ては表發仕間敷表

發の時は矢張り不_レ可_レ奈何相成可_レ申候末世の有様古今如_レ此ものと痛憤の至に御座候意外に兵端開候儀も可_レ有_レ之其節うたへ候様にては何共不_レ相濟候間銃砲等西洋便利の器械全備に參り兼候へ共人馬兵糧玉藥共急速に應候様實用の御手當有_レ之儀急務中の急務に可_レ有_レ之御軍制御改正の儀は甚不_レ容易儀と被_レ存候へ共唯今迄の通の御軍制にては御備の人馬小荷駄兵糧等の儀實地實用に適不_レ申急變に應じ兼候儀と被_レ存候間とにかく急變に應候だけの御手當有_レ之様仕度被_レ存候泰平世界の姿にて候へば冗費を省き候儀も御六ヶ敷儀とは奉_レ存候へ共危急存亡の秋には候へば一御工夫御座候様にと奉_レ存候過日得_レ貴意候御就藩の儀御評議御六ヶ敷儀勿論とは被_レ存候へ共御縁組も被_レ爲_レ極候は、半年位の所は御在國にて民間の疾苦等親敷御覽被_レ遊且非常の御省略の御入國も御國政御修行御はまり合の第一に可_レ相成_レ哉と奉_レ存候別便の序に付草々呈_レ一書候以上

六月十九日井伊大老朝旨に違反し擅に米國に對して我が國威を失墜せる外交條約を訂結し之を非議するものを嫉む蛇蝎の如し而して其訂約を奏上するは屆書に等しきものなり皇上逆鱗其勅允を経ず條約を結びたることを詰責し三家大老の一人を召す大老拒んで奉せず七月四日大將軍家定薨するも其喪を秘して發せず政事を專斷して無辜を網羅し六日黎明府命を發し台慮と唱ひ烈公を駒籠邸屏居に名古屋侯(徳川中納言慶恕)福井侯(松平越前守慶永)を退隱謹慎に處し順公及一橋刑部卿(徳川慶喜)の登城を停め以て正義を鉗す武田安島岡田徳至(信濃守)大場景淑(一眞齋後主膳正)及有志の士民皆幕政反正正義作振を圖り教孝之を幹旋す是より先き鹿兒島侯(島津中將齊彬)皇上の軫念内憂外患に在るに感じ三千の兵を藩内櫻島に養ひ之を引率し畿甸に至り皇威を戴き大に府政の釐革を圖らんと將に東上の途に就んとす俄かに病を得是の月十六日を以て卒し事行はれず教孝痛歎し又奮勵して曰く幕府外國使艦の貿易要求に對

し深遠の策あるにあらずして屈辱の條約をなせる失態は誓つて匡正せざるべからずと之が籌策を按し殆ど寢食を忘る而して大老が烈公を嫉む日に甚しく二十八日目付山口丹波守名古屋藩家老竹腰兵部少輔及支封松平頼胤等に内命し烈公を嚴酷に羈束せしめんとす藩士之を知り正理を以て對抗し八月朔纔かに事罷むを得是の時に當り教孝江戸及其他の人と文書を往復し又論議を交換し國事に關する公武の事情幕府の内容を聞知せるもの多し九日を以て礪川邸に在る高橋に書翰を贈り高橋朱書記入し之に答へたるもの左の如し其朱書は「』を付し之を分つ
今井監察登り候に付呈し一書候殘炎の節彌御勇健被成御奉職珍寶の至りに奉存候
一念八の幕令驚入候處翌朝の進退御書取無殘所「
「辭職の心得にて第一に同執を論付申候猶武大夫御差出の意氣如見相覺八朔御城付に響きにて「間不_レ容_レ髮御危難此時の情難_レ盡_レ筆紙_レ御察可_レ被_レ下候」必死の御覺悟二日早打着にて此地奮發の意

氣「如_レ見御座候」二度目の早打にて静り候へ共餘響遠郷迄に及四日五日に至迄追々馳付参り「尤の事に候へ共何分御取鎮め奉_レ願候」郡にて御模様申諭歸村に相成農民にてはもれ出候ものは先づ不_レ聞候へ共士林にて崩立候へば「痛心至極に御座候」郷中も防兼申候畢竟兩邸甚御手薄の儀苦心罷在候事故「御尤千萬御同論に御座候御書取も拜見未だ表發無_レ之_レ扱々に御座候」風説にも驚候事に候間御床机廻等目立不_レ申様爲_レ御登_レ人心安堵の様被_レ成候儀鎮靜の第一と被_レ存_レ兩公共幕の嫌疑御恐れ萬一姦説の反逆云々有_レ之_レは臍をかむとも不_レ及忠輝卿も一使下りにては瓦解致申候暴には驚人實地にては掛引大切と奉_レ存候内談人數以の外に御座候未決議不_レ相成_レ候」過日建白仕候へ共今朝御評議相成候事と奉_レ存候朔日江水の動搖彼是説も有_レ之幕にては如何御座候哉難_レ測候へ共「肩衣にて大臣無_レ僕馳付候は臣下の人情感動の由要路の人も尤と存候へ共先つ念八の令は相休み居申至誠にて

感動爲_レ致候外無_レ之と石和懇々心付感服仕候政府にても御取用御座候武も近く呼申候由新半へ御尋可_レ被_レ下候」君公の御爲御苦勞申上居候御意外の説にて奮發仕候段臣子の情義不_レ得_レ己儀に奉_レ存候右御運の面兩執政は一同於_レ御前_レ御評議の上御下知と有_レ之候へば御兩名の御運にて異論無_レ之候得共多人數押出候儀は實に國家の大決斷にて御運不_レ相成_レ候ては一途に容易に決心仕兼候様の心地仕候間以後萬一右様の儀候は、御連狀御運可_レ然奉_レ存候「輕卒に出失策に御座候へ共早々との御下知此日の評定生涯に無_レ之_レ字愉快に御座候御父様の御難故君上駒へ被_レ爲_レ入候様例の出過ぎ拙申上候處奥へ被_レ爲_レ入御單騎にて御乗出しの尊慮夫より奥大騒ぎ防ぎ兼申候間御廣式へ人差出し文通差留申候某は駒の御門にて防可_レ申哉申上候處大夫は御立關々々と指圖被_レ致申候岡大夫は老公を御引取り臺にて御防戦と申上候所飛道具有_レ之おあふなしおあふなしにて止申候」

二日の御挨拶まけおしみ文言には候へ共何歟御含も有之様相聞再度の御沙汰御押返しに相成候へば赤鬼等如何計歟残念に存候はん『三日引込昨日出勤三連竹水營中對話數々御座候』依ては此上君公御隠居鐵君御相續讚候等御後見杯と出可申も難測とかく危く見候て軽く相濟候へば宜候間手重に御見込に諸事御ふまへ可然段勿論の儀御過憂御尤には候へ共林伊并奥右の説に水戸へめつたに手を付候儀は不_二相成_一大藩陰に合體故如何様の儀に及候も難計と申候林曰もはや暴も重疊此上は出申間敷と歟口へ申候よし林杯恐れ水戸の咄所にも無之憫笑々々萬一右様横暴に出候は執政衆にて御引受御罪狀も無之を云々被_二仰出_一候儀御指支に付御糺明を蒙度段幾重にも申立死を以てさへ候ても『御同議に御座候大夫其心得に御座候』防兼候勢に候は老公御始御方々様御國へ御潜行にて幕の奸臣を誅し幼君を御輔け宗室をして『とても出来不_レ申御論に御座候』勅命を奉じ

夷狄を攘ひ候様握り候上はと角もに御座候其御決斷如何に候哉『京都も輕舉に出候ては大變に御座候九條と赤鬼は時々文通九條奸に染付申候三條より井へ三度御親書御下しの所返答なしと申事尤も私文通と申候薩侯近衛公へ密謀御三名天降り申候所尾にて火中是も時勢不_レ得_レ已勢に御座候殘念々々去月八日より天子斷食御祈の由朕が代に神州を穢し候ては生甲斐なしとの御逆鱗奉_二恐入_一候仙臺臣林大夫へ咄御座候感泣々々夫れは繪旨無_レ之候ては名義相立不_レ申候一旦叛名を取可_レ申候間兼て其御心組無_レ之候ては機會に後れ可_レ申奉_レ存候もし又どこ迄も幕命を敬承被_レ遊『敬上の念不_レ失鳥山重忠討死より外有_レ之間敷奉_レ存候如何叛名を恐れ申候』律義に御受被_レ遊候なれば臣下にても其心得にて處置周旋可_レ仕とかく兩君公の御決心次第に御座候間大變難に處し候節の『大義の進退御大切に御座候』御ふまへ豫め御定議有_レ之應變の御手當も有_レ之『大夫初五三人の決議に御座候間今

より申兼候へ共朔日一條肩衣にて云々御國よりも人を呼候儀未だ決斷不_二相成_一扱々御座候實地にては嫌疑多端萬一の節一騎か十騎の積りにて反名を取不_レ申方とも愚慮も仕候處痛し瘳し近日決斷の事と奉_レ存候兩公の御配慮此上御病氣も出ては大變に御座候』臨時周章不_レ申各神妙に處分仕候様有_レ之度事と奉_レ存候尤是等の儀在上の御立場の任にて至て深密に御定議有_レ之可_レ然御儀と奉_レ存候御如才も無_レ之儀とは被_レ存候へ共宜御ふまへに相成居候様仕度奉_レ存候律義に御受の思召に候へば臣下にては血誠を顯はし赤心を達し君冤を訴へ候外無_レ之候處又深遠の『機會も可_レ有_レ之奉_レ存候』思召も候は政所様御付の儀は可_レ惜人物御撰の上御引替『天トの人望有る者流行病又は頓死等有_レ之儀は天の衰運滅亡の兆と奉_レ存候』被_レ遣候儀至て急務肝要と奉_レ存候上國の御手當も夫々御工夫御座候事とは被_レ存候へ其他藩の人物遊學生位にては如何可_レ有_レ之哉ちと不安心と奉_レ存候

一勅使出途又は大老三家の内上洛又は尾へ天書到來『無_レ相違』事に御座候可_レ恐々々など退々御書中の趣のみ御座候處實如何可_レ有_レ之哉勅使傳奏衆近々下向と申事被_二仰越_一候處右は定例三月勅使延居候分に被_レ存候尤幸便に付付たりも可_レ有_レ之哉如何『是も眞説はかり兼申候内登り後の模様未だ分り不_レ申候』三條公等勅使にて赤鬼退治等の議連候へ閣より云々は何歟とひき有_レ之事の様被_レ存候何れ天朝は御盛の由に候へ共何ほど赫々たる勅命にても大老閣老等備を立居候所へ下向にては決て事行はれ申まじく『痛心々々』朝廷へ召され不_レ申候は各藩へ繪旨御下しの外有_レ之間敷奉_レ存候右件々々容易儀に候口外仕間敷事共況や書面に認候儀如何に候へ共國家危急存亡の秋にて御座候間大監察の確使に付心底を盡し申候宜御諒察可_レ被_レ下此間中多客執筆の間も無_レ之今日は他行と稱しせんさく場にて相認得_二貴意_一候事に御座候

八月九日夕

尙々金の儀追々御文通の趣も有之候所御武用五千は皆々かし出置候ゆゑ此上引立候事には出来不申候駒邸御ふしん金五百是は政府より當公に差上にて『大御満悦に御座候妙計御褒美を臣下より差上候也と申候へき』當公より御指上の振可然との政府御評議の由過日三百會計へ相連今日二百政府へ相納候間爲御登に相成候事と奉存候『政府定論ひたし』内取掛り申候水の手乏しく痛心々々』當節の御手當千兩口より二百兩是も政府へさし出申候今日爲御登の振りに候千兩口も最早七百金出申候『只今櫻任熱田參り御中陰中内策へ取掛り申候處黄白乏しく扱々困るとの物語に御座候追々爲御登も大夫方よりの泣付夫々へ配り候へば空囊扱々御座候一々帳へ印置申候御工風可被下候大夫の手元にては他所人も申出發機をばづし申候間等へ御廻も可被下候新半に御相談可被下』

去月念九并本月朔四の御狀もたしかに入手拜見仕候

柚門君

能りたか

『寸暇なし大略御免可被下候八月十四日晝愛諸』其文中執は執政武大夫は武川執政石和は石川和介新半は新家半之允大大夫は大場執政岡大夫は岡田執政赤鬼は井伊掃部頭鐵君は順公の長子鐵之丞林伊は林伊太郎三連は三支封竹水は竹腰兵部少輔水野土佐守櫻任は櫻任藏の事にして柚門は高橋の號能りたかは教孝の假名文字なり是の月皇上修攘の勅諭を順公に賜ひ特に別勅を添へらる其別勅は勅諭を諸侯に回示し以て共に外寇防遏を謀らしむる教旨なり順公敬畏遵奉直ちに之を列藩に廻達せんとす大老既に將軍の喪を發し更に幼主を擁し策を設けて極力之を沮遏し其勢焰を張る底止する所を知らず此に於て教孝執政杉浦政安(美次郎)と共に江戸に至り岡田大場武田安島高橋茅根等と勅諭開示の事を周旋し内憂外患を祛らんとす時に列藩の士林にあれ處士にあれ王事に勤

むるものは國事日に非なるを憤り性命を犠牲に供して悖戻なる幕政を匡止し以て皇權を宣揚せんことを圖り鶴飼知信(吉左衛門)父子梅田定明(源次郎)等は京都に大久保利通(正助後市藏)等は鹿兒島に吉田矩方(寅次郎)は萩に在り西郷隆盛(吉之助)橋本綱紀(左内)櫻眞金(任藏)等は京阪各地に周旋し教孝安島高橋茅根野村鼎實(彝之介)鮎澤國維(伊大夫)岩下方平(佐次衛門)高崎友愛(猪太郎後五六)樺山資之(三圓)有村兼清(次左衛門)等は江戸又は水戸に在り各拮据盡瘁し有志の縉紳諸大夫僧成就院忍向近衛卿の老女村岡等も力を此に致す東西の聲勢亦熾なり其勅諭到達の數日前西郷江戸に來り京都の事情を安島に告ぐる所あり教孝南上するに及び互相の消息を通じ其密議する所の要旨は今勅旨を發揚するは大慾を除き幕政を一匡するに外ならずと云ふに在り一夜教孝西郷岩下有馬新七高橋鮎澤等一酒樓に會飲し除姦匡政の議漸く進捗す酒三行互に和協し西郷は醉吟して裸體の踊をなし燭を執りて陰毛を焼き興を盡したり

驛に集り勅書を開示し並に主冤を洗雪せんと周旋する者數千人有司之を鎮撫するも肯んせず順公教孝及高橋に命じて士民を鎮撫せしむ教孝曾て高橋と提携し力を國事に盡すを以て名望を得士民歸服し敢て名はす金高と稱し二人の指麾に由り進退する者尤も多し是を以て蓋し順公二人に命じて屯聚の士民を慰撫せしめたるなり因て二人均しく士民の論旨を敲き其奉勅雪冤の如きは固より意見同一なるに由り教孝等之を擔當し衆に代つて畢生の力を致すことを諭告し士民をして北下し業に就かしむ十月教孝高橋相謀り關及住谷信順(寅之介)矢野長道(長九郎)大胡資敬(聿藏)等をして山陰山陽南海西海の諸藩に至り忠愛の大義を遊説し以て節義を奮起せしむ爲に頑夫も亦廉となるに至れり云ふ六年乙未の春に至り大老益勢威を逞うし三公以下諸摺紳をして辭官落飾に至らしめ青蓮院宮尊融親王を幽閉し四月安島橋本等多數の人士を勾引し茅根鮎澤を喚問す順公又水戸士民の激動せん事を慮り家老に命じて多方鎮靜せしむ教

孝以爲らく今安島等の拘執茅根鮎澤の喚問に際して動搖せば其形迹恐らくは私情に陥り無名の擧とならん苟くも大に爲す所あらんとせば名分を正うし進退せざる可らずと水戸に在る高橋野村及豊田亮(彦次郎)太田政徳(甚大夫)に贈りたる書に曰く
 扱安茅等呼出の上安拘留茅竹歸宅相成候得共何も縲囚の姿茅此上留られ候も難測鮎兄は何共申兼候へ共二日には御歸邸何共安心不仕候猶此上呼出の者も可有之總て骨抜の策成就の上には勅詔取戻の策に出可申奉存候依ては勅取戻の機會と申ては骨抜縮こたごたに相成候後ならでは有之之間敷其外擧義の名有之程の暴は當今は出申間敷被存候扱此度呼出一條にて動搖いたし候ては私黨に相成殘念に存候せめて泉下に芳名を存し申度候併最上の名をのみ志候ては其中には骨抜縮に可相成私黨を離れ名義の廉さへ相立候は可有然但他をたのます多をこのます候て先生方にて御決斷大義を御ふまへの外有之之間敷委細弓氏口頭

に話申候くれくも名義相立候て國家を維持致度危急存亡の機宜敷御熟議否可被仰下候頓首

四月念九

教 孝

茅甸柚門

様

(茅甸は豊田柚門は高橋西北は太田北は野村を指す)

幕よりも勅詔御取戻しほんこ不致候ては不_二相成_一見込勿論には可有之候へ共當節取戻にては水國の人氣を激し可申候へば先づ指置諸役所にて申出ものなどを沈め置候と同様の取計可然と申意味の儀と推考仕候此儀推考のみには無_レ之閣老も當分先づ何なしに棚へ上げ置候方勝手振は儘に探得候廉も有_レ之候先日勅詔の儀御手調にて間閣へ御催促被_二仰遣_一間閣御挨拶の趣も有_レ之久侍中竊に拜見仕候由是も甚奇々怪々の事情可有_レ之と此ば全く推考に御座候とかく名義さへ相立候へば三位重盛が清盛を諫候趣純粹の有志にて決心の外無_レ之様他と多をたのみ不_レ申儀肝要と被_レ存候名義を以て決心さへ致候は_レ他多の應援其中に

可有之被_レ存颯の高崎生昨日來訪面會の所議論の大意は貴地にて申述候通に有_レ之先達て岩下等の論とは相違に付其段問返候上にも彼是申廻し候へ共廉々を以申談候へば先達ては事情切迫只今にては模様も違候間隨て論も替り候氣味に候へ共水國にて擧義いたし候へば隨て盡力可仕との申聞に有_レ之一體岩下等に比候ては文事有_レ之遊學生の口氣にて實意決心は遙に下り候様被_レ存候畢竟論が替り候ゆへと相見ちとひるみ候て引取申候併流石に大藩且決心も御座候へば不_レ遠邸外にて再會可_レ致と申合堀忠樺山などは今以て一段決心可有_レ之奉_レ存候
 其文中安茅は安島茅根茅竹は茅根大竹(儀兵衛)間閣は間部閣老久侍中は久木水戸藩側用人なり是の時水戸の士民江戸の事情を聴き激昂したるもの遂に鎮靜に至らず五月三日床井親徳(庄三)等十八人水戸を發して南上し踵て發程し江戸に赴くもの絡繹相繼ぎ其勢大水の決するが如く旬日ならずして幾千を以

て數ふ皆舊の如く奉勅雪冤の事に周旋す時に高橋も亦礫川邸に至る又俱に之が鎮撫の命を蒙る教孝等衆を諭して曰く奉勅雪冤の事は曩日縷述せる如く畫策懈らず凡そ事を處するに多數を要するものと多數を要せざるものとあり今南上せる數千人の内百數十名總の八幡驛に駐りて緊急の事に當るべし他の多衆は異日共に大に爲すべきの秋あるに由り北歸して報を待つべしと士民竟に之に服従す教孝等の意志は即ち鴻圖決行の豫備に出たるなり六月順公其鎮撫の勞を慰し短刀一口禮服一具を賜ふ偶有司中幕吏の旨に忤はず事を處せんと勅諭廻達の停止論をなす者あり其可否の爭議頗る紛擾す教孝毫も動かさず大義を論じ高橋と俱に依然開示説を唱ふに由り激派の巨擘と呼はる激派は停止論者を以て鎮派と爲す是鎮派二派の岐れたる初なり而して大老正義を忌む益甚しく八月二十七日又命を下し烈公をして水戸城に塾居せしめ是の日より後數旬の間に於て安島橋本茅根鶴飼吉田等八名を死刑に小林鮎澤等六名を遠島に處し追放押

込所拂謹慎手錠等に處せるもの實に夥多なり九月仲旬教孝高橋鴻圖を企てざるを得ずして之を決行すべき次第を九閣に上達するを必要とし又關及高崎を京都に遣り青蓮院宮及近衛卿(前左大臣忠照)に詣りて鴻圖の要旨を告げ其内奏を請ふ蓋し陰然内奏ありたりと云ふは大老を撃つは刺客の行爲に非ず正々堂々違勅の罪を責め之を誅するの事由を表するに在り十月執政以下數名幕府の内旨により譴責せられ教孝も亦譴を蒙り即ち逼塞を命せられ歸藩す其江戸を發するに當り有村兼氏(雄介)及堀貞馨(仲左衛門)等來りて鴻圖の決行を促すこと洵に切なり教孝曰く設備未だ全からず今急速に決行せば事或は誤らん能く謀り違算なきに至り他日を以て事を處せんと乃ち水戸に歸る其途上女男川の下流即ち櫻川を渡り土浦に宿し左の國歌を詠す

女男の川、また渡るかも、なす事も、ならてうつろふ、影もはつかし、

十一月教孝累ねて有司の忌む所となり職祿を褫はれ

塾居の命を蒙り中ノ町(下町)の邸に屏居す教孝郡奉行の職にある前後十五年常に曰く仁政は必ず經界より始まる吾曩に耕地の檢測を遂ぐるも未だ山林原野の丈量をなすに至らず故に暇あれば地籍を製し實費を算し以て之が實行を圖りたるに國家多事之を果すこと能はざるは甚だ遺憾なりと烈公曾て近臣に告ぐるに檢地の事は孫二郎ありて成る孫二郎あらざれば復能く爲す者あらずとの歎ありと云ふ十二月幕府の參政安藤信睦(對馬守)順公に謁し懷中より傳奏衆の尺牘を出して曰く是は勅書奉還の朝旨なり勅諭及別勅を幕府に返納あるべしと威迫交も至る順公之を有司に詢る有司概ね府命に抗するを不利とし返納するを可とす士民之を聞き悲憤止まず返納すべからざるの理由を開陳し甲是乙非議論二派に分れ一藩愈軋轢す其不可返納論者二百餘人水戸城南長岡驛に集合し聲勢を張り以て返納論を駁撃す世之を長岡勢と呼ぶ加之不可返納論數千言を綴り烈公順公に提供せるものあり其返納を非とする論旨は教孝等の主張する所

なり而して佐野光明(竹之介)黒澤勝算(忠三郎)等も亦窃かに大老を殫し勅旨を暢ふるの義舉必ず遂げずんばあるべからずと斷言し其要撃の任に當らんことを望み齋藤木村等と策を講ず尋で大關増美(和七郎)山口正(辰之介)稻田正辰(重藏)鯉淵珍陣(要人)岡部忠吉(三十郎)杉山當人(彌一郎)海後宗親(礎礎之介)等の如き奮躍して要撃員たらんことを要求するもの濟々輩出し殆ど三十名に至る又西上すべき兵士は豫期せる士民數千人のあるあり九州の兵士東上の機に臨んでは下野速かに之を士民に報じ大舉大阪に集合することとし其畫策漸く熟す因て教孝高橋と相謀り木村をして江戸鹿兒島藩邸に入り堀有村高崎田中直之進等に告げしめて曰く明春を期し協戮以て鴻圖を決行すべしと會ま鹿兒島人多く西下せるを以て堀等之か延期を求む教孝又告ぐるに返勅の府命甚だ急なり故に期を延ばすべからず大老要撃は吾が藩の壯士之を擔任するなり九州より義兵を出すは尤も之を駛急にし水人又呼應せん云々を以て堀等之ヲ諾し是

の月十七日堀及高崎の二士江戸を發し鹿兒島に行い
て出兵を促す教孝高橋益密議を重ね萬延元年庚申正
月に至り協定して曰く井伊大老必ず祝日に登營すべ
し之を途に要し誅戮を加へ其機に乗じて東西相應じ
義兵を大坂に擧げんと爲に教孝最初に江戸に赴き其
要撃の事を總括し之を遂げて後西上するものとし高
橋は直ちに大坂に抵り義兵に關する事を掌理せんと
是の月下旬又木村佐野黒澤をして具さに之を有村田
中等に報せしむ故に田中之を齎らし急行西下し重ね
て兵士の東上を促す其出立に臨み有村が之に依托し
大久保堀及有村武次(後海江田信義)に贈りたる一書
左の如し其斬姦の決心を示し義兵を要求する頗る割
切なり

去る十九日山口急速出立逐一御開取被下候等然
る處一昨日木村外に佐野竹之介黒澤忠三郎といふ
人出府別紙の通結果の條々承り候に付今日尙又三
傑へ出會篤と議論の上今晚明朝へかけ田直發足の
議定に御座候申迄も無之候得共急速京都御護の

ところ專要と奉存候尤此方は愚弟と兩人評定の
上水有志合腑斬姦の決心に御座候其他成丈けの處
盡し可申候間御納得被下度候(後略)

正月二十九日

有村 雄助

大久保正助様 堀仲左衛門様 有村武次様

其書中三傑とあるは木村佐野黒澤三名を指し京都御
護云々とあるは京都御守護を名とし出兵する事にて
從來の計畫なり又別紙條々は即ち

一斬姦期日は來月二十日前後

一雪人數諫争名義にて邸中繰込

一星月夜より三千人は直様花御守護の事

一斬云々濟候上は一物南品迄馬上にて速かに相廻

し右より船路

右の條項及其他の數件にて斬姦期日又は唱義大擧の
豫定及密議の概要を通知したるものなり教孝等謀議
する所のものは都て秘密を主とし同盟相約し信書往
復に隱語を用ゆるを常とす花は朝廷月は幕府雪は水
戸星月夜は薩摩浦浪は井伊掃部兩馬は安藤對馬沖石

は松平讃岐西存(或は西遜に作る)は金子清狂は高橋
を云ふが如し前文斬云々は太老斬戮の上は其首級を
馬上にて品川に廻し船に移し京都に運輸し義を唱ふ
と同時に之を三條磔に梟示の意なり此に於て教孝野
村關下野等をして要撃諸士が閣老に提出すべき自首
狀及携帶すべき懷中書を作成せしむ又嘗て諸士が此
の事件に要せる金圓は教孝之を辨し尙準備しあり諸
士をして費用に障碍なからしむ而して教孝日毎に庭
砌の修理花卉の培養を爲し悠然閑日月を樂み餘念な
きもの、如くなるを以て人絶えて密策あるを疑ふ者
なし二月十七日一首の國歌を詠す

今日もまた、宿の梅か香、めつるか、思ひは嬉
し、あけほの、空、

是の時要撃員諸士江戸に赴く岡部杉山等既に先發し
潜匿所及要件を準備す十八日の夜教孝家子久維(勇
二郎)稲田佐藤寛(哲三郎)飯村時敏(誠介)を従へ家を
去る其さらんとするや家族を誡めて曰く吾が此行尊
攘の大義を唱導して皇威を發揚し並に主冤を洗雪す

るにあり固より再歸を期せざるなり子孫必ず忠孝又
武の道を怠るべからずと左の國歌二首を襖に大書す
萬曾鏡、清き心は、玉の緒の、絶えてし後そ、世
にしらるへき、
君の爲、世の爲つくす、真心は、二荒の神も、み
そなはすらん、

時に白雪霏々として降るを見又舊製即ち弘化中仲町
廢舎に禁錮せらるゝ時の國歌を短冊に書す
歸るさの、路やたえなん、しら雪の、故里をかく
出て行く身は、

教孝尙一書を筆し之を有司に贈る其文左の如し
嚴重御咎を蒙り候身分恐入候得共外夷の傲慢此上
なく如何計りか叡慮を惱せられ候御儀と恐察奉り

前中納言様長々御冤罪に沈ませられ國家の至難に
付右御冤罪洗雪仕り中納言様にては勅意御奉行遊

され候様周旋盡力仕度志願にて罪萬死を顧みず倅
勇二郎召連れ出發仕候此段宜しく仰立られ下さる

べく候以上

教孝久維及稻田佐藤飯村等と共に潛行して那珂川を渡り那珂郡田谷村田尻知好(新介)及其隣村下國井村渡邊長左衛門の家に憩ひ又小場村安藤則賢(幾平)の宅に移る是の日有司教孝及高橋を捕縛するの説あり長岡勢之を聞き憤激當ならず金高を助け之を擁し去らんと直ちに衆議を決し二十餘名一舉して水戸に赴き成牌中の町なる教孝の家宅に至る衆乃ち教孝の既に在らざるを知り併せて高橋の去りたるを聴き(高橋此の日の朝家を去る)雀躍し門外に出て鬨聲を發し長岡に歸る有司既に長岡勢を征伏せんと兵士を率ゐる南行し途に吉田村の藥王院に憩ふ頃刻にして長岡勢其門外を過ぎ北行したりと聞き兵士を班し隊をなして歸城するに際し市街の南端なる紺屋町に於て歸途に係る長岡勢に衝突し互に劔戟を揮つて争闘し藩兵敗走すと云ふ教孝安藤の宅を辭せんとするに臨み數人の同行は必ず物色を速く慮り久維及飯村に對し一日の後路を異にし出發すべき事を示諭し教孝は氏名を變じ西村東右衛門と稱し稻田佐藤を拉け石井

岩之進(下國井村の人)を嚮導とし二十日拂曉出發し路を笠間雨引に取り二十一日夜眞壁郡關本下町塚田清兵衛の家に宿す(塚田清兵衛の先代を彌兵衛と云ひ義俠心あり安政三年の春石井岩之進が拔刀術の師にして且養父たる先代石井岩之進の仇敵氏未詳の米松を箱根驛近傍鰯ヶ島村に討ち讎を復する時之が援助をなし事を遂げしめたるものにて教孝在職の時彌兵衛の功を藩に申告する所あり其賞與ありたる者なり清兵衛は其後繼者にて同く義に厚し)時に近村に強盜出沒し八州巡察吏金子直藏二十餘名の捕卒を使用し犯人を搜索しあり甚だ教孝の一行に嫌疑を致し二十二日塚田を呼び詰問す塚田は彼等水戸人にして知己なる旨を告ぐるも未だ之を信せず捕手を遣はし塚田の家を圍まんとす稻田直ちに一策を按じ教孝に謀る所あり陽りて教孝を高田與十郎稻田を鈴木太介佐藤を佐藤龜之介と稱し鈴木を稲田吏員に面接して曰く高田の親戚に亡命の人あり藩命を奉じて其搜索に勉むるなり尙疑あらば高田自ら面陳せん云々稻田

能く之を辯明す其面陳の一言彼始めて疑惑を解き捕手を退く頃刻にして久維飯村至る教孝曰く吾が行既に嫌疑を受く卿等來會せば又必ず疑を累ねん之が爲或は抑留せらるゝことあらんか吾大事を誤るに至らん卿直ちに北行して嫌疑を祛り野隼(下野隼次郎を指す)と進退を共にし志士畿甸に義を唱ふと聞かば速かに上阪すべしと久維肯かず教孝櫻井驛訣別の故典を引き之を懇諭し強ひて北去せしむ是に於て教孝携へ來りたる鮎の高彫の小柄一箇を遺物とし塚田に贈與し又左の國歌及び五十鈴川云々の國詩を書して與ふ

九重に、玉しく庭の、櫻花、神代なからの、香に
そにはへる、

二十三日教孝の一行關本下町を去り北行し又路を南に轉じ日光街道に出て古河町を經二十四日草加驛の旅店に投ず是に於て石井を郷里に歸らしむ乃ち一書を裁して之を托し實母即ち川瀬の老媪に贈り一首の歌を添ふ文中久助とあるは久維の變名なり

一筆申上參らせ候愈御機嫌よく被レ爲レ入目出度存上候私父子十九日夜小場村邊迄參り二十日同所出立仕久助はあとへ殘し候事に御座候夫より雨引山觀世音へ參詣致し翌日關本と申所まで參り候處關本に取締御役方出張之あり此節此もより物騒にて四人組にて亂暴致し歩き候由にて私も四人連故其疑にて其夜は梯子責致候手當にて大騒ぎ致候由跡にて承り申候て驚入參らせ候夫故此所出立六ヶ敷め候位に御座候所へ久助參り候に付直様一先づ引取候様申聞けかへし置申候さて漸々の事にて譯もわかり昨朝關本出立結城小山通にて栗橋の御關所も裏渡しを通り今朝草加と申す所まで參申候是よりは江戸へ五六里の所駕籠にて飛きり江戸にては慥かなる所も御座候間先々今日までの所も此上の事も御安心可レ被レ下候誠に六ヶ敷既に短刀の鯉口を切り置き候位の次第に御座候處今日と相成ては大安心に御座候昨日難所を這れ出候處何かと都合

もよろしく雪交り雨降り却て忍びによろしく御座候扱又難し有事には私例の右の足の膝痛み候處久々居すくみ居候ても至極達者にて少しも痛みも致し不申候(中略)此上共心強く旅行致し参らせ候目出度かしく

國の爲、ひそみ行身の、旅衣、ぬるゝもうれし、春の淡雪、

二月二十四日

西村東右衛門

御母上様

二十五日教孝又間道を取り王子を経て江戸に入り稲田佐藤と共に神田佐久間町岡田屋まんの家に宿し二十六日教孝一人三田の鹿兒島藩邸有村の宅に移り諸士と消息を通せり有村曰く堀高崎田中等相踵で歸藩し具さに關東の事情を告ぐるに由り藩主に請ひ士卒を率ゐ東上するは羨し近きにあらん今爰に事を共にするもの唯余と弟兼清と二人のみ故に兄弟共に大老要撃の任に當らんと教孝遮り曰く要撃の如きは水戸の志士之に當るべし大阪の義旗は高橋既に西上する

も鹿兒島藩の卒先を望まざるを得ず豫て協議せる如く宜く共に俱に京攝の間に馳せて大義を唱導すべしと因て有村(兼武)西上の意を決し弟兼清を要撃員とせり三月朔教孝關齋藤野村佐野黒澤稲田有村大關廣岡佐藤等十數名を日本橋西河岸の山崎樓に會し要撃の事を諮る衆或は曰く同盟未だ悉く來らず其面上を待つて事を爲さん或は曰く在礪川邸の者を呼び人員を増かせんと稲田獨奮つて曰く一元兇を撃つは衆寡に依るものにあらず精神一到せば何事か成らざらん期早くすべし緩うすべからずと議未だ決せず教孝毅然として曰く凡そ大事を爲すは志を定め機に投ずるにあり今機會目前に現はる進んで爲すべきの秋にて脚躡すべきの時にあらず即ち「君子見幾而作不俟」終日「」なり此の舉萬一にも事を誤らば雄圖の瓦解となるのみならず累を本藩に及ばすや必ず大なり成敗一に諸子の精神に在り諸子倘し人の寡少を以て遲疑せば吾老いたりと雖一臂を加へ以て之に當らんと衆驚き止めて曰く洵に然り要撃は固より僕等の任なり

豈決して先生を煩はさんや必ず誓て努力し目的を達せんと議立ところ決す教孝泰然として齋藤佐野黒澤有村(兼清)大關山口稲田鯉淵岡部杉山後廣岡政則(子之次郎)森直長(五六郎)増子誠(金八)蓮田正實(二五郎)森山政徳(繁之介)廣木有良(松之介)の十七士を要撃員に確定し關野村木村をして其後援豫備たらしめ上巳の日を以て之を櫻田門外に決行するものと定め特に關を以て十七士の操縦者に齋藤を以て事後自首狀提出趣旨辨明の任に充つ若し其要撃に際し障碍ある場合は豫備員直ちに抜劍して應援するものとす關が操縦を擔任する爲要撃の正員十八名となれり此に於て教孝五箇方略を指示す左の如し

- 一 各武鑑を携へ諸侯の道具見物の體をなすべし
- 二 五六人づゝ組合をなし路の兩側に立ち互に應援すべし
- 三 一人最初に先供に打掛り駕籠脇の狼狽する機を見て元兇を打取るべし
- 四 元兇を十分討留めたりと認むるも必ず首級を取

るべし

五 負傷せる者は自殺又は閨老に至て自訴し創傷なき者は皆上阪して義兵に加入すべし

是より先き木村佐野黒澤有村田中等の志士斬姦唱義の方案協議せるもの多かりしが其豫定の條項は教孝都て之を裁定し五箇方略を示したるなり其一例を擧ぐるに井伊の首級は品川より船に載せ京都に送り義を唱ふ時三條磧に鼻示する計策なりしが只其頭足を分つに止めたる如き是なり衆之を諒するや教孝酒を命じ一座快飲し詩を吟じ歌を詠す教孝筆を援き「君子見幾而作不俟」終日「」の句を唐紙の一半に揮灑し之を示す衆欣躍して唐紙二葉に詩歌或は古語の寄合書をなす教孝又萬會鏡清き心は云々君の爲世の爲云々の歌及び左の一首を揮灑す

大丈夫か、涙に袖を、しほりつゝ、迷ふ旅寝も、唯君の爲、

二日教孝幕吏の物色を避け諸士をして品川驛の妓樓相模屋に會同し要撃諸般の協議をなさしむ關野村木

村幹旋し要撃方略に由り組合を三箇とし佐野の組六人黒澤の組齋藤の組各五人とし森直長一人先驅を擾亂するの任に當る各自武鑑禪其他輕裝の準備を整へ尙教孝の配付せる金若干懷中書を携帶し諸士互に永訣を期し又快飲す是の日教孝有村の宅に在り諸士協定せる所の報知を受く時に畑以義(彌平)來る畑は嘗て教孝及高橋の意を受け内藤文七郎と共に京都に至り關東の情狀を措紳に告げ京都の事情を視察し東下して之を報告せるなり教孝之を聽き了り畑及佐藤をして要撃現狀の報導を擔當せしめ特に畑に諭すに事後速かに水戸に下り江戸の實況を下野及有志の士民に告げ大舉の準備を促すべきを以て且信書及前夜揮灑せる寄合書等の書類を下野に贈るものとし之を托す三日朝天大に雪ふる諸士芝愛宕山に集合し漸次櫻田門外に至り關の操縦に由り佐野の組は路の北即ち濠側黒澤齋藤の組は路の南即ち松平大隅守の邸前に散在し各武鑑を閲覽しあり森は獨東に離れて上杉彈正大弼郎の西北隅に佇立す辰牌を過ぐるや井伊

大老與に乘り騶從甚だ盛にして行伍揚々邸第(今の參謀本部所在地)を出て來り櫻田門に近づく森一人遽然として前驅に對し拳銃を放ち又大刀を閃かす從士騷擾多く前驅に集り部伍愈亂る佐野大關拔刀し衆相踵いて雨具を捨て鞘を拂ふ稻田第一着に敵與の左を刺し衆等しく健闘して縦横逼撃與戸を破り井伊を勾出して之を斬り之を刎ね鮮血淋漓白雪化して紅雪となる有村(兼清)直ちに其首級を刀尖に貫く衆踊躍凱歌を揚げて去る井伊の家臣は刀に柄袋を施しあるを以て容易に抜刀する能はず錯愕し狼狽する甚しく稍後れて鞘を拂ひ防戦する者あるも諸士固より之を敵視せざるにより家臣の死傷甚だ少なしと云ふ是の日教孝品川驛鯉津の川崎樓に在り佐藤畑等の報導を待つ已牌佐藤及畑其視察せる現況を報じ有村の從者も亦來り告ぐ三人の説同一なるを以て教孝愈事の成りたるを知り即時有村佐藤と共に路を東海道に取り西上して大阪に義兵の勢威を發展せんとす五日富士川を渡る時左の和歌を詠じ佐藤に示して曰く

武士の、鏡なりけり、駿河なる、するとき川の、清き流れは、

八日熱田にて又一首を詠す曰く

氏神の、ためしのために、劔もて、しこのしこ草、なき拂はにや、

九日四日市の旅店に宿す丑牌捕手十數人亂入し有村を別席に引致し教孝も亦其禍に罹る十日詰旦有村來り曰く亂入者は鹿兒島藩の目附坂口勇右衛門と云ひ藩邸の命を受けて追跡し余を藩地に護送せんとするなり余と同行しあるにより誤つて貴所に無禮を爲せるは謝するに辭なし蓋し九州の兵士今東上の途にあらん早く伏見に至り相會し爲すことあらんと尙坂口に對し教孝に無禮を加へたる事を詰る坂口悟る所あり始て教孝を寛遇す教孝一首の歌を詠じ之を示す
 潜みきし、濡るゝか上の、濡衣、たへ忍ひても、
 いなんとを思ふ、

是より晝夜兼程十二日伏見町の鹿兒島藩邸に入り京阪の動靜を伺ふ櫻田の一舉以降幕吏の警戒頗る嚴に

して搜索も亦甚しく鹿兒島人上阪せざるのみならず志士概ね四散して跡を隠し高橋も潜匿し在りて未だ義兵を起すに至らず有村竊かに曰く心算甚だ齟齬し時事も亦危急なり與に俱に大阪に至り護衛を脱出し中國に赴き下の關の知盟に頼り暫く潜居し同盟の東上を待ち後圖を爲さんと互相の意既に決す爲に有村切に坂口に對し大阪及九州に入るの途上教孝と同行せん事を請ふ坂口之を京都に在る藩邸の留主居徳田嘉兵衛に商議す徳田答ふ先づ有村を大阪に送り再び金子氏を迎ふ可しと教孝事の行はれざるを察して一書を筆し有村に謂て曰く再會し得ざるに至るも亦數なり今日唯鹿兒島藩の奮發を望むのみ冀くは斯の一書を同志に示し大守公に捧げ大英斷を仰き大舉以て素志を達せん事をと有村容を正うし之を懷にして曰く諸必ず之を決行せん余嘗て心に誓ひ貴所と死生を共にす縦令大阪に再會を爲すとするも今同行するを得ず痛憤に堪へ難しと談話未だ終らざるに護送の人士有村を促す相見て悄然斯の夜子牌相別る教孝が

有村に托したる一書左の如し

一昨年非常の叙慮を以て幕府并に水藩へ勅諭御下
げ相成り候に付兩寡君は勿論國の有志頗る盡力
候得共幕府より嚴重咎を蒙り勅諭傳達も不_二相成_一
候に付右冤罪洗雪勅意奉行の儀周旋の志願にて去
月十八日國元出發仕り候尊藩には先公の御遺志御
繼述専ら勤王の御精忠被_レ盡候段兼々欣慕候間京
攝の間に潜匿し尊藩に頼り本意相遂げ申度抑將軍
家幼年に乗じ幕府の權臣我意を專にし正義の宮公
卿を初め貴戚の方を罪し忠義の士を殺し恐多くも
天朝を奉_二蔑如_一外夷に親み交易の條約を定め國體
を辱かしめ候儀にて實に天下の大事に候間勅諭を
奉行し叙慮を奉安し國體を維持し候様英斷の御事
業奉_二至願_一候至難の世態老軀空敷死地に就くも
難_レ測候志願の趣は諸君御酌取宜敷大守公へ被_二仰
立_一猶御周旋御盡力の程奉_レ願候頓首

三月十二日

西 存

星月夜御同志様御中

其書面に星月夜西存と記したるは則ち豫て約しある
隠語を用ゐたるなり後坂口より一の音信あらず教孝
愈事の成らざるを知り早晚囚捕となるを慮り携ふる
所の密書を燒棄し佐藤に逃脱を勸誘して曰く今や高
橋は大阪に在り野村關木村等も亦上阪せん野村等に
頼りて事を圖るべしと佐藤義離るべからずと云ひ去
らず教孝又謂て曰く然らば其意に任せん抑も斬姦唱
義の要は要撃諸士の提出せる自首狀及懷中書に明記
しあるも諸士が鞫問に對する辯論或は區々に渉るも
のあらん余囚に就く時は幕吏の前に逐次之を辯明せ
ん卿は糺問に際し必ず多言する勿れと云ひ陳辯の要
旨を説示し泰然日を送る十五日朝小吏來り曰く坂口
氏大阪にあり君等を迎ふ是より同行せんと教孝其慮
妄を察し自若として邸門を出つ果して捕手蟬集し教
孝を伏見奉行林肥後守の官舎に勾引す有村は大阪に
至り再三坂口に對し早く教孝を迎へ來る事を促し坂
口も亦言を食ます之を實行せんとしたるに在伏見の
幕吏教孝が鹿島兒藩邸にあるを偵知し其隠匿せるこ

とを詰責するに由り邸吏遂に教孝を伏見奉行に交付
するに至る又鹿兒島人汾陽次郎左衛門大阪に來り藩
邸の留主居役徳尾某及徳田等に謀り有村を庇護して
他に移し大阪に於て亡命したる者となし之を幕吏に
通牒する策を立てたるも事行はれず鹿兒島に勾致せ
られ是の月廿四日を以て自裁を命せられたりと云ふ
教孝勾引せらるゝの後伏見奉行に上京の事由を訊問
せらる教孝既に違勅の大愆を誅戮し尋で外寇を遏け
國威を伸ばし且藩主の冤罪を洗雪せんとして西上し
京攝の間に周旋以て事を處するの趣旨なることを答
ふ閏三月五日教孝を江戸に檻致するの命あり警吏押
送して江戸に至る其時警護の士戸田扶太郎人に語り
て曰く
今般伏見より付添參候内金子孫二郎は平常の様子
にて言舌少しも替り候事無_レ之種々談話に及候へ
共心中落入不申儀は如何様理解申聞候とも不承知
にて逐一辨破に及候殊更桑名船中にて伏見奉行與
力兩人外に尾張様御藩爲_二警衛_一乗船其外數艘番船

本船を圍み七里の航海舟中少々油斷の折右の指を
かみ切り
兼てより、身はなきものと、おもひしを、志こそ
残りをしけれ、
と一首の和歌を詠じ其外品々認候處番の者兎角目
を付候故直ちにひきさき海中へ投候其故を問へば
我江戸へ指こし候御神奈川驛に到り候はば其元へ
あたへんと思ひしにはやく被_二見付_一恥入候に付引
さきたりと被_レ申唯々胸中感心仕候萬事の儀行届
き候警衛の士迄丈夫の士と一同物語落涙を催し候
云々
二十四日教孝江戸南町奉行の官邸に著す即日府命あ
り曰梓藩主稻葉伊豫守邸に禁錮せらる後寺社奉行松
平宗秀(伯耆守)及町奉行勘定奉行大目付列席にて屢
教孝を龍の口なる評定所に召喚し糺問す其要旨たる
や教孝の大事を企圖したるは烈公の内旨に出でたる
ならんと云ふに在りて誣罔する甚し教孝答へ曰く趣
旨は伏見以來陳述の如し天下の爲自ら奮ひ高橋愛諸

と大事を謀り壯年の者誘掖し之に従事せしめたるのみ豈他あらんや故に罪は唯首謀者に在るなり何ぞ其他を問ふを須るんやと其辨明終始一貫幕吏も亦強ゆること能はず鞠問を結了す教孝稻葉邸に屏居すること殆ど一年有半其待遇厚くして常に渝らず教孝一日吏に對し幽居以來終始優待を蒙ることを謝し且語りて曰く

余捕に就きし時割腹の時間は充分ありたりしが夫にては只一身を潔くするのみにて我が君の冤罪を晴すも出來ず國家の大志願を達するも叶はず幕府へ出でなば定めて糺明もあるべく其時存分に意中を申立たらんには大勢の中には國の大事も君の冤罪も察するものあらんとか吾が真心の通せざるべきやとオメ／＼四人となり候事にて既に鞠問を受け言ふべき事は充分に言ひ盡し又貴藩の人にも志望の次第を話したり最早毫も世に思ひ置ことなく今ぞ死すべきの時なり云々

文久元年辛酉七月二十六日教孝評定所に於て斬罪の

宣告を受け傳馬街獄舎に於て處刑せらるる顔色變せず從容刃を受く年五十有八其辭世の國歌及宣告文は左の如し

古郷の、人にもつけん、よしもかな、稻葉の露の、深き恵を、

徒らに、散る櫻とも、言ひなまし、花の心を、人は知らずに、

言葉にも、いはぬ誠は、ことさらに、吾心にぞ、思ひ知らるゝ、

水戸殿家來 金子孫二郎

右の者遂に吟味處外夷へ被爲對候御處置振等品々相唱重き御役人へ及亂妨手筈等同志の者へ及噂置其身は存念有之候迎同藩清軒四男佐藤哲三郎を召連松平修理大夫家來有村雄介俱々身分を僞り上京可致仕成候段不恐公儀仕方不届に付死罪申付

是の日佐藤は永禁錮の命を蒙り一死を免れたるものは教孝が罪首謀者に在りと云ひたる一言大に力あり

と云ふ教孝の遺骸は親族故舊私かに小塚原回向院域内に厝く川又才介氏不詳伊助と謀り長さ尺餘巾五六寸厚さ二三寸の石數枚に教孝及同盟なる鬪死傷死刑死者の氏名を各別に刻し之を遺骸に添へて埋め異日其鑑別の便に供せり後幕府朝旨を奉じて其後を録し歸葬する事を許す三年癸亥七月久維藩に歸り家を繼ぎ祿を賜はる十一月久維屍を收めて水戸常磐原に葬る久維も亦國難に死し弟俊家督を繼ぎ俊殺し其弟詔家を承ぐ教孝哀烈順三公に歴事し烈公の識拔する所となり民政を以て己が任となし嘗て一書を著し經界を正し農産を富ます方法を述べ名けて惠の露と呼ぶ身を奉ずる儉樸にして虚飾と驕奢を誡めて民力を養ふ吏を用ゆるは聲譽を以てせずして必其實を求む是に由り衆庶自然に風化を致せり又烈順二公に國家の長計を諮詢せられ其對策時事に適切にして旨に稱ふもの居多なり其歸葬するや遠近弔奠する者一千餘人皆痛惜して曰く「今より以後復良奉行金子君の如きものあらんや」と藤田は嘗て教孝を稱し「明毅幹事

の人なり」と評し後子爵品川彌二郎惠の露に序して教孝「義烈の士にして夙に經濟の才を懷けり」と稱贊せり長谷川清教孝及高橋の月旦をなして曰く「金子明毅度量、高橋忠誠敢爲、兩者相頌、擔當國事、立危疑之地、拮据盡瘁于艱難之間、遂成櫻田之大事、義旗之事半途蹉跌、高橋慷慨赴義、金子從容就死、實不可不謂俊傑之士矣、又曰く「金子最精于經濟、倘在明治之世、則宜相於大藏之人也、」と人以て適評と云へり明治二十二年三月戸塚總重長谷川治左衛門等相謀り鷺沼新田に開墾記念碑を建て教孝の徳を表彰す五月二日朝旨に由り教孝靖國神社に合祀せられ二十四年十二月十七日朝廷更に教孝の舊勳を録し正四位を贈らる開墾記念碑の全文左に録出す

水戸藩士孫二郎金子君、安政年間幸於南郡、以才幹稱焉、其事蹟可傳於世者蓋不尠云、如東茨城郡鷺沼新田、伏沼新田、亦其一也、當時荒廢不耕、有矢口甚兵衛者請開墾之、君熟按其地形、識認其必不屬徒工、遂許之、然慮沿村人民或

有託灌漑利害、喧然起妨工事者、有所解說指示、又使外元締中村三五衛門、内元締野島佐三郎、監督之、藩士田村又輔亦周旋於其間、以故得就緒、乙卯歲起業至戊午而成、然其兵衛非躬拮据之也、驚沼沼田彌三郎擔任之、伏沼石川治左衛門擔任之、大山守仁平内藏太、野田村庄屋沼田安治、同山野村宮内大衛門、組頭沼田常次、一毛政之介、小山守長谷川孫兵衛、川戸村組頭榎戸新三郎、内田莊三郎、小山守内田小十郎、小林忠三郎、亦與有力焉、得田八十町步餘、乃新造廬舍、以氓之無產者編之、其爲戸二十有五、甚兵衛又出資充鉏犂之費、明治戊辰歲、庄屋戸塚總重、組頭長谷川孫兵衛、長谷川治左衛門、新田支配人坂井與兵衛、舟見彌兵衛、相議分祀野田村鎮守鹿島神、爲氏神、四年辛未、總重與衆盟約、捐義倉、蓄米穀、時爲郡務出張所所管、局員權少屬菊池正路、史生宮本礎平、石井正邦、小貫通、中村幸三郎、館濟、大山守橋本顯之介、副小塙小衛門、小山守田村金衛門、福

田又衛門、皆贊其舉、爲周旋之賜、木材焉、於是乎、無有饑寒之患、加之其民皆能勉農、地膏產豐、井然成一村落矣、然使金子君不善謀其始、雖有諸民、無所施其力、則二新田之致今日、非君之德、而何、戸塚總重、長谷治左衛門、欲碑而遺將來、請余文、廼書以與之、小原俊充撰

教孝西部郡奉行を勤務しありて微恙に罹りし時藤田特に之を慰藉して長久保赤水（吉甫は長久保の字なり）の書せる浩浩歌一幅を贈り之に附記したる一文左の如し

吾友西部宰金兄、有幽憂之病、余頗憂焉、一日金兄登然見訪、乃把酒付之、且出長吉甫所書馬子才浩浩歌、以贈之、吉甫者余之執友、而浩浩歌者我先子之所恒朗誦也、金兄撫民餘暇、揭諸壁間、時々誦咏以養其浩浩之氣、則此幅也、勝庸醫所授之草根木皮、者萬々耳、

壬寅（天保十三年）夏日 藤田彪識

勤王水戸烈士傳上編卷七 實記

贈正四位高橋愛諸傳

高橋愛諸字は敬卿多一郎と稱し、袖門と號す、別號を水哉堂、幽竹山窓と呼ぶ、倅民諸往の長男なり、其先は内府平重盛の裔、小松大和守より出づ、小松了意諱は諸房に至り始めて水戸威公に事ふ、嗣子了三諱は房尙の次子、文藏諱は諸輔別に一家を起し、高橋氏を稱す、實に愛諸の高祖なり、愛諸幼にして敏慧、句讀を國友與五郎（尙克）に受け、記臆群兒に超越す、唯谷田部雲八（通倫）愛諸と伯仲の間にあり、友とし、善し常に衆童と遊戯するに、愛諸と谷田部は互に首領となるを以て例とす、當時の長老俳諧の會を設け、集合す、愛諸年甫めて十三、其席に臨み

白菊は、みをりの外の、なかめかな、の句を詠す、合坐驚異す、愛諸拔刀術を里見甚五郎（義

柄）に柔術を芳賀庄兵衛（重明）に劍術を宮田介太郎に兵法を佐野仁左衛門（久良）に泳水術を市川宗藏（清重）に學び、最も拔刀術を善くす、天保十年己亥三月、愛諸床机隊戦士を命せられ、烈公に扈從す、十一月庚子八月父倅民仕を致す、愛諸家督を繼ぎ、俸稟を受け、歩行士となり、尋で少監察となる、愛諸の邸宅は寺町（水戸上町）に在り、其門の左に柚樹繁茂す、因て袖門と號したるなり、十一月愛諸邸地の内數十歩を割き之を藩に献し、新道開鑿を乞ふ、初寺町は東に行路あり、西に一逕なく、所謂袋町にして便宜を缺く、久し是に於て藩其乞を聴き、接續の邸地若干を收用し、以て交通の道路を開くに至る、今の寺町下金町の通路是なり、十二年辛丑八月、愛諸奥右筆を命せらる、弘化元年甲辰五月幕府蜚語を信じ、烈公を罪して致仕を命じ、駒籠の別墅に幽屏す

順公幼にして封を襲ぐ支封高松侯(松平讀岐守頼胤)長沼侯(松平播磨守頼繩)守山侯(松平大學頭頼誠)後見をなし礪川邸に入りて本藩の政を攝行す戸田銀次郎(後忠大夫忠徹)藤田虎之介(後誠之進彪)等も亦官職を擬はれ幽閉せらる結城寅壽(朝道)尙執政の職に在り黨を結び柄を弄し政事を擅にし一藩擾亂す愛諸奮然として曰く主冤を洗雪し藩治を挽回せずんば死すとも瞑せずと日夜刻厲焦竭して他事なし十月愛諸馬廻組に外補す二年乙巳三月愛諸金子孫二郎(教孝)と潜行江戸に赴き赤坂の和歌山藩邸に至り一書を以て和歌山侯(徳川大納言治實)に愁訴し(其一書は金子の傳に載す)又同藩遠藤勝介其他有志の士に謀り洗冤復政に力を致す三年丙午正月時の有司勢煽を張り金子及安島彌次郎(後帶刀信立)會澤恒藏(安原田兵介(成祐)等九名を仲町(水戸上町)の廢舎に監禁す愛諸内は荻吉次郎(君寛)茅根伊豫之介(泰)野村彝之介(鼎實)鮎澤伊大夫(國維)關鐵之介(遠)等數十名を誘掖し外は會津侯(松平肥後守容敬)熊本侯(細川越

中守齊護)及閣老阿部伊勢守(正弘)に建言辨疏し以て益雪冤復政の策を講ず是の秋某月愛諸日光東照宮の廟を拜し一首の國歌を詠す

我が君の、なき罪晴らせ、日の光、

雲は幾重に、立おほふとも、

當時幕府の内容たるや老女に御用懸なるものあり政務に關係するを以て後庭の勢力或は政府の右に在り愛諸苟かに以爲らく事體斯の如し一は正路を蹈み力を盡すべく一は權道に依り志を伸べざるべからずと乃ち濱田平助を紹介人とし幕府の醫師にして後庭に出入する坂玄幽伊藤宗益湯川安道等に交を結び主冤を詳述して女官に入説する事を依頼す濱田は嘗て國事を憂へ氏名を變じ中村平三郎と稱し江戸水戸の間に奔走盡力し幕府の小吏内藤主馬杉浦金次郎(後弘作)も亦共に周旋する所あり愛諸又其紹介に由り女官の退隱者たる是生(老婆の名)及經定院(同上老女姉小路に文章の教授をなしたるもの)に面晤し丁寧反覆蜚語の誣妄に出でたる事を説き譬喻交も至る兩

婆頗る愛諸の忠愛に感じ後庭に出入して老女及女官を諷諭すること幾回なるを知らず故を以て老女女官も亦烈公の枉冤なることを知り其宥免を圖るものあるに至る烈公監禁諸士九名の鬱悒疾を成すを慮り良藥及獨按摩の圖を製し之を下付す其交付の如きは愛諸秘密に之を奉じ秘密に之を執行せり時に板橋源介(常祐)礪川邸に在り江戸の事情を水戸に通じ愛諸は水戸の事狀を江戸に報じ互に相須つて力を雪冤復政に致すこと少なからず烈公之を聞き十二月左の國詩一首を賜ふ

遠近に、二つの橋を、かけおきて、

危うかるへき、世を渡るとは、

後數年ならずして愛諸危難の顛末内外の事情各所に往復せる秘密書翰を編綴し遠近橋と名く是烈公の歌詞に因みたるなり愛諸の國事に盡瘁するは有司の意に忤ふ所となり四年丁未二月斥けられて小普請組となる谷田部彙に結城に黨し樞要の職に擧げられ愛諸と反對の位地に立てり而して互に舊交に由り交際を

絶たず愛諸偶々微恙に罹る野村來り訪ふ愛諸謂て曰く神氣鬱勃の日に雲八と面晤せば爲に爽豁を覺ふ今より訪問すべしと同行して谷田部の宅に至り談話に時を移す谷田部笑を含んで曰く互相兩黨の人物皆斗管の才のみ唯藤田東湖の才幹智畧は衆に超越す然れども袖門と余と兩人力を協せ對抗すれば東湖も亦辟易するや必矣と人之を聞き谷田部も亦能く東湖及袖門を知ると云へり十一月藤田心の跡と題する一書を愛諸に贈る其書は烈公の順公を教導する事を初とし時事の要件を列叙したるものにて其要旨を烈公に建言せんことを望みたるなり其前提の文に愛諸が「國難以來群陰凝結の中に凜然として良將の兵を用ゐる如く良醫の疾を治むる如く剛柔緩急其機宜に應じたる處置僕か輩の及ぶ所にあらず云々」の語あり是の月愛諸又南上して幕府の目附遠山半左衛門に一書を贈り主冤を辯明す時に不忍の堤を過ぎ烈公幽居の附近に至るも制裁ありて伺候するを得ず遙かに向ヶ岡即ち駒籠邸を拜して君門千里の歎を發し大息之に久

し是に於て愛諸陰かに一書を裁し幕府の内情及藤田の意見を觀述し之に心の跡を添へ烈公に呈す心の跡は今現に小梅徳川邸に存せりと云ふ烈公直ちに國歌を詠じ之を賜ふ其詞に曰く

名にしおは、我もひと目は、見しものを、

なとかはかくる、忍はすのかた、

嘉永元年戊申三月愛諸又江戸に至り遠藤及會津人水

野清兵衛佐賀人古賀太一郎熊本人福田源兵衛土浦人

大久保要(親春)福山人石川和介(章)等を其藩邸に訪

ひ又幕人尾藤高藏(積高)經定院是生に面して皆前説

を敷衍し辯明す是の時又向ヶ岡を拜し七絶二首を得

郡人三月事=逍遙、風起=瓊葩、万點飄、無限春愁向

誰語、潜龍高閣鎖蕭條、

何料流離五閏年、拜=膽龍閣、涙潸然、微躬戀々彷彿處、依舊幽煙遮=面前、

七月愛諸益有司の忌む所となり俸稟を概はれ蟄居を

命せらる二年己酉三月烈公の枉冤始めて氷解す幕府

烈公に對し藩政に關與すべき府命を傳ふ初愛諸雪冤

復政を以て自ら任じ險を見る夷の如く連遭困蹙の際志氣毫も屈撓せず挺身江戸水戸の間に奔走し拮据盡瘁に至る所なく是を以て内外の人士頗る感動し大に力を出して竟に烈公の枉冤を洗雪するに至る其功績人皆愛諸を推して第一とす藤田一詩を寄せて曰く

義氣從來感鬼神、嗟君報國不謀身、六年艱苦知多少、回得鸞陽三月春、

四月愛諸舌疳を患へ枕に伏すること五旬に亘る烈公

之を聞き躬親を良藥を製し用法一通を書し之を賜ふ

愛諸其恩に感じ嗚咽して一絶を吟す

不_レ料仙丹及_二罪臣、病床拭_レ涙拜_レ恩頌、世途艱險非_二山水、何比唐皇焚_レ髭辰、

是の時に當り外國の軍艦近海に出沒す幕府邊塞を警

戒し攘夷の令を發するの内議あり桑原治兵衛(信毅)

之を聞き軍艦を製し大砲を造るを以て籌海の急務と

し縷々之を説き愛諸の意見を需む愛諸六月三日を以

て之に答ふる數百言其要領は「兵艦を整へ巨砲を備

ふは籌海の急務なること同感なるも幕府の有司人物

名勝舊跡を尋ね詩篇若干あり過_二不識庵舊趾_一の詩に曰く

百戰功成營_二兔裘、風煙今古隔_二林丘、男兒志業一寸鐵、知是猿松兩國秋、

六年癸丑六月米國の軍艦浦賀に來り水師提督破理傲

然遠征の勢焰を示して脅迫し互市を求む幕府成竹な

く姑息苟安事に當るを以て人心洶々たり七月幕府烈

公を起して海防の廟議に參せしむ時に愛諸大に志を

得力を外寇免除の事に盡す八月藩政全く回復し結城

を松平采女(頼功)の采地水戸城西七里の長倉砦に禁

錮し其黨與を黜く十二月愛諸矢倉奉行に遷り専ら武

具充實を圖る安政元年甲寅十一月寺社役に轉じ二年

乙卯五月北部郡奉行に晋み俸稟の外役祿七十五石を

賜はる愛諸田見小路の官舎に移り専ら農事を奨勵し

て郷校を興し農兵を編す十一月資格を郡奉行とし奥

右筆頭取を命せられ裡五軒街の邸に轉居す三年丙辰

三月愛諸召されて礪川邸に赴く是より先き戸田藤田

兩士震災に死す結城之を聞き以謂らく事を爲すの時

に乏しく却て老女の政權を弄する弊あるや久し今急務中の急務は人傑を登庸し後庭の權柄を爰除し以て

大將軍の方針を確定し上下擧つて和の心を制し戦の

志を立て事を處せざれば廟議輒すく變じ朝に攘夷の

令をなし夕に和戎の命あるに至らん故に天下望を屬

する侯伯を擧げて籌海の大政を任じ先づ内憂を去り

以て外患を攘はざるべからず云々」議論卓越最も時

事に適切なり十一月愛諸稍寛待せられ蟄居を免され

て小普請組となる三年庚戌五月舌疳未だ癒えざるに

由り伊香保の温泉に浴し療養する數句詩賦十數篇あ

り榛名山に登るの一首左の如し

山上有_レ湖々色涼、金峯富嶽遠相望、眼中風致畫難_レ

就、飽領_二詩篇_一歸_二故郷_一、

十一月愛諸又江戸に潜行し尾藤石川伊東及林伊太郎

(長孺)等を訪ひ幕政の振興及藩政の回復を謀る尙經

定院是生の宅に赴き入説する事多し四年辛亥六月愛

諸又下野那須の温泉に遊び舊病を養ふ五年壬子五月

愛諸重ねて那須の浴場に赴き歸途信越兩國を遊歴し

來れりと藩政顛覆の計を運らし金圓を警卒に與へ之に依託し書翰を子結城伊之介及谷田部藤七郎(雲八改名)に送りて密旨を授く谷田部等の計畫も亦其指喉に符合するを以て直ちに大嶺庄左衛門(定興)加藤木左内衛門(忠恕)横山兵藏大森金八郎根本新八郎(政養)及醫師十河祐元外數名に謀り先づ烈公に後暗き(謀反の隱語)所爲あるの風説を流布し尋で其實蹟ありと誣ひ且之を筆し密訴と題し高松侯の家臣瀧川内膳秋山平藏に囑し幕府の後庭及上野凌雲院に提出し府命を以て結城を赦免し復職せしめん事を乞ひ又高松侯に告ぐるに再び藩政攝行の事を以てし其應援を求む横山大森根本は既に君側に勤務せるを以て屢順公を一室に迎へ老公に反心あり親昵して共に大害を速くべからすとの説を進め君侯父子を離間す其一室は後に人呼んで離間の間と云ふ加之十河の醫術に由り毒藥を順公の座右に捧げ侍女を利誘して之を菓子其他の食物に混和し以て結城に反對せる武田耕雲齋(後伊賀守正生)外十數名の人士に分賜し之を横死

せしめんとせり順公其密計を悟り具さに之を烈公及文明夫人に告ぐ烈公其藥を執り食物に加へ犬に與ふ犬忽ち斃る猫に與ふ猫も亦死す是に於て烈順二公吏員をして犯狀を糾治せしめ結城谷田部等の計畧悉く露顯するに至る乃ち二公愛諸に諮詢するに處刑の如何及正邪黜陟の事を以てす愛諸感激し桑原茅根等に計り能く思慮を盡して對ふ久木直次郎(久敬)其糾治を擔任し擬律の要旨を建言す二公衆説を採擇し四月二十五日を以て結城十河を死刑に處し其黨に刑罰を加ふ各差あり谷田部大嶺等遁逃潛匿し是の日の刑を免るゝも後逮捕せられ狀を白し刑に服せり二十九日二公及文明夫人列座して愛諸及原田を駒籠邸に召し其席に於て十河の提供したる毒藥を示し醫師楊進介に命じて之を庭中松樹の下に埋めしめ其袋紙を緘封し烈公親ら事由を書し之を多一郎に預け置くの命あり愛諸謹で之を奉す二公は衣服並に袴を夫人は木杯を賜ひ順公特に「賞功不論時」の五字を絹本に書し之を賜ふ五月愛諸水戸に歸る十月命を蒙り大日本史編

修の庶務に従事し十一月又命あり武備整頓用度節減の事を掌理す四年丁巳七月幕府烈公を疎んじ先づ其職を解き而して米國使節の登城を許可す諸侯伯其非を述べて建議するもの少なからず愛諸大に憤慨し幕府遠大の策なくして徒らに和議を主とするの不可なる事を論し金子等と其反正を謀り周旋尙勉む九月順公鹿島神宮を弘道館に分祀し其傍に孔子廟を建設す愛諸其事務を執行し典禮具備するを以て白銀若干を賞賜せらる五年戊午正月愛諸小姓頭取に晋み世祿百石を賜ひ奥右筆頭取を兼ね是の時幕府林大學頭(緯)を京都に遣り開港互市の勅許を請ふ聽かれず又閣老堀田備中守(正睦)を上京せしめ朝議を動かし以て勅允を得んとす朝廷又之を許さず三家以下諸侯の衆議を執り言上すべき勅旨を賜ふ幕吏依違して之を奉せず四月井伊掃部頭(直弼)大老職に昇り政權を己に收め内に威柄を弄して驕慢に事を處し外は強國を憚り危怖して事に當り竟に米國の通商要求に従はざるを得ざるに至り六月十九日大老擅に我が國權を失墜せ

る外交條約を訂結し而して此の行爲を非議するものを嫌惡す烈公の如き其最たるものなり七月四日大將軍家定薨するも其喪を秘し獨内外の國事を專斷し六日黎明府命を發して烈公を駒籠邸に幽閉し名古屋侯(徳川中納言慶恕)福井侯(松平越前守慶永)等諸侯伯を罪す愛諸七日を以て發程南上し執政岡田信濃守(徳至)大場一真齋(後主膳正景淑)武田耕雲齋(後伊賀守正生)及安島茅根其他の志士と幕政反正正議伸張に力を盡す甚だ切なり既にして藩士處士を問はず慷慨國を憂ふるもの日に月に多きを加へ鶴飼吉左衛門(知信)父子頼三樹三郎(醇)等は京都に在りて公卿諸大夫の間に入出し鎌田出雲(正純)西郷吉之助(隆盛)日下部伊三次(信政)勝野豊作(正道)等は東西各地に奔走し吉田寅次郎(矩方)長門に在り大山正圓(後格之助綱良)堀仲左衛門(貞馨)等は江戸に在り濟濟たる多士愛諸金子等と意見を闘はし皆大老以下の非行を挫折し幕政を矯正せんことを謀る小林民部權大輔良典(丹羽豊前守等共に斡旋す當時の諸侯座右

の雜事文書の往復に茶坊主即ち削髮者を使用す藩士の各藩邸に出入するは幕吏の物色を速き削髮者の往復は其嫌疑あらず故に大山樺山三圓(資之)等鹿兒島侯(島津齊彬)の命により髪を削り各藩邸に出入し交通す曩に鹿兒島侯近衛卿(左大臣忠熙)に面し天皇深く幕吏の驕傲と外人の跋扈を軫念し給ふ事を聴き窃かに謀る所あり藩内櫻島に於て三千の兵士を操練すること日あり是の月將に之を率ゐ京畿に至り皇威を仰ぎ幕吏の失政を嚴責することあらんとす遽かに病を獲て卒し其計畫成るに至らず爲に之に望を屬する志士皆落膽す愛諸慷慨の餘自ら奮勵し金子と相謀りて曰く大老の朝旨を蔑にする彼が如く正義を鉗む日に甚し大老を排除し大義を唱導し以て幕政匡正皇威發揚の事を決行せざるべからずと西郷大山堀樺山等と東西謀議を通ずる所あり茅根野村關鮎澤木村權之衛門(幸)齋藤監物(二徳)下野隼次郎(遠明)等相誓つて身を致す八月八日天皇修攘の勅諭を幕府及順公に下し外寇掃攘を命じ特に別勅を下し順公をして之を

列藩に廻達し共に大將軍を輔け以て修攘の効を奏せしむ十七日の夜順公斯の勅旨を拜し敬畏措かず速かに答書を奉り之が廻示を圖り直ちに愛諸をして勅諭別勅の寫を在水戸の有司に示し以て奉行の事を翼賛せしむ愛諸順公の意を體し晝夜兼程北下して之を執行し二十一日礪川邸に復命す順公其神速を賞し酒饌を賜ふ時に愛諸奮つて曰く報國の時機に至れりと勅諭廻達を圖ること甚だ周到なり是の月西郷江戸に來り愛諸に面接し又木村關鮎澤大山樺山有村次左衛門(兼清)等交通をなし互に密議し又相謂て曰く今國家の急務は何ぞ是則ち大慾を驅除し幕政を匡正し以て勅旨を奉行するに外ならずと西郷西上せんとするや其前夜即ち廿三日の夜愛諸岩下佐次衛門(方平)有馬新七金子鮎澤等相共に之を餞して一樓に會飲す除姦匡政の談論肯綮に中り耳熱し酒酣なる時西郷起つて裸踊をなし蠟燭の火を以て陰莖の毛を焚き興を遣れり而して大老は百方策を運らし勅旨を奉行せんとするものを陷害排擠し朝野の壓抑に力を極め九月間

老間部下總守(詮勝)を京都に遣り烈公に幕職を襲ふの非望あり既に屢將軍に毒を進めたりと誣奏するのみならず小林鶉飼父子頼飯泉喜内等諸大夫藩士處士婦女の別なく數十名を捕へて大獄を起し其甚しきは承久の故事を醸さんとするに至る愛諸悲憤措く能はず金子と相謂て曰く時事此に至る今愈彼の大老を江戸に殫し義旗を大阪に擧げ福井侯を迎へて其總裁に仰ぎ人心を一致し以て内憂外患を掃蕩せずんばあるべからずと而して西郷は既に幕府の捕吏に屬目せられて薩摩の僻地に謫せられ事に當るを得ず愛諸乃ち大山堀田中直之進其他の志士と互に策應し東西蹶起して斯の雄圖を遂げんことを謀り徐々其密計を進む會ま水戸の士民南上して江戸又は下總小金驛に至り修攘の勅諭廻達及主侯の枉寃洗雪を圖るもの數千人順公幕旨を受け有司をして南上の士民を鎮制せしむ輒すく聽かず因て愛諸及金子をして之を鎮撫せしむ愛諸皆て金子と提携して事を處し共に國事を擔任するを以て士民望を屬し名聲自ら高く人皆名いはず金

高と呼び二人の舉措に由り進退するもの夥多なり蓋し是を以て順公二人に命を下したるなり故に二人先づ衆の意見を聴き其奉勅雪冤の如きは二人固より之を擔任しありて力を盡すに由り多衆は信を之に置き北下して業に就き有爲の時を待つべきことを諭示し藩に歸らしむ其際愛諸江戸水戸に往復すること數次一詩あり

安政戊午秋祇_二役武陽_一、國事多難、數來_二往故國_一、
故句中及_レ之、九月念五、
來往武常知幾回、此心耿耿未_レ如_レ灰、江山若有_二神靈在_一、仰見頑雲不日開、

是の時愛諸金子相謀り關住谷寅之介(信順)等に指示する所あり關及矢野長九郎(長道)の二士は山陽山陰北陸諸道を住谷大胡(資敬)の二士は南海西海各道を周歴し遊説以て各藩人に忠君愛國の義氣を注入し身を王事に致さん事を激勵す之が爲儒夫も志を立るに至れりと云ふ十二月十八日愛諸高松侯の招致に由り神田小川町の第に謁見し水戸士民が時事に於け

る情狀を問はる愛諸士民皆主冤洗雪に熱中し違勅幕吏の反省を要し宿望を貫徹せすんば止まざるの情狀を縷述し相當處理せんことを望み其反覆問答四十餘回に至る高松侯大に悟る所ありと人之を稱揚して高侯高橋の應接と唱ふ高松藩の志士長谷川宗右衛門(秀驥)及子速水(秀雄)嘗て力を王事に盡せる爲藩吏幕人に物色せられ是の年の夏水戸に潜行し困頓す愛諸之を扶護し自宅に匿れしめたること數旬なり六年己未二月愛諸北下するに方り男諸徳及金子勇二郎(久維)別を行徳に送る時に一詩を賦す曰く

己未二月初七予將歸水戸金子公廉(勇二郎)字男諸徳等、送到行徳驛、臨別賦小詩示、
春風吹雨亂如絲、北雁歸飛天一涯、此是憂心猶鬱勃、郵亭絡繹報安危、

三月鹿兒島の高崎猪太郎(友愛後五六)除姦の一舉を促し愛諸に贈りたる書面に曰く

近年夷賊大に跋扈し蔑如神州一屬國同前且君臣の名義大に致混亂甚者は幕府有るを知て堂々たる

貫候御宗室の御方を致宥盛只管私斷を以て天下の大事を致處置候儀は實に不落愚意仕合大息慟哭此事に御座候乍恐天朝にも當今の形勢に付深く被惱宸襟御寢食をも被遊御忘却右等の大事を過り候姦吏を退去公武御合體長く夷狄の大患消除仕候様にと去秋恐多も將軍家へ御一通外に御藩御名頭にて御寛容勅命御一通相下り候段は御承知の前と奉存候於御藩は以前より御代々名義の國と諸藩一同奉稱慕候に付定て非常の御處置も可被爲在と奉仰居候處于今其沙汰不承就ては御一同如何の御議論に被爲涉候哉決て因循の儀は無御座深く御遠圖可有之とは奉存候得共餘り及遲引候へば井蛙の見にては彼是生疑惑候仕合於弊藩も亡君も勤王の志聊有之存命にも候は是非一度は奉繼勸意賦候處不料大變の仕合にて暗夜に失燈候次第茫茫罷在事に御座候乍去繼亡君之遺志候有志の者は至令て百敗不撓勤王の志銘心肝憤悶慨息罷在候

天朝の尊を不知に至候右等の次第に成立候も偏に幕府萬端處置を被爲失候故にて誠に歎患痛恨の至に候去年將軍家薨去の後執政の方々私斷を以て夷賊の御處置大きに當然を失ひ天朝を御輕蔑の姿に相成汚辱の上に汚辱を重ね當時忠誠貫天日候御宗室の三藩をも致宥盛何共殘憤の至實に天下の事不可言の勢に罷成世界隨一の皇威も頓と是限にて誠に以て大變の仕合今更如何の處置を以て右等の大過失を補益可仕計畧可有御座哉只管施すに術計盡果候次第歎息無申計右様の情態故賢明の諸侯は勿論天下の有志千思万慮に及候儀は不枚擧中にも於御暇藩は前中納言様不世出の御賢明にて威義二公の御遺志を被爲繼難有も勤王の尊志被爲在候事當時誰人か匹敵する者可有御座哉抑外患の一條に就ても深く彼等が情態御識察被爲在千緒萬端御上書相成候儀一同飽迄承知仕候儀にて將軍家は勿論第一皇朝の御爲御功績無類の至に御座候斯迄御忠誠天日を被爲

去秋勅命の一條奉承知候以來右有志の者は日夜寢食を忘れ此機會を以て是非大事を舉候賦に御座候へども應援無之候へば適々大事を舉候ても無謀に屬し眼前天朝へ奉重御大難候儀にて却て不忠の至と存候故御藩は勿論尾長因越の諸藩へ引合候得共勸意も御藩へ相下り居候事故兎角御藩より事を不被爲爲舉候ては一同無名の師を恐れ天下の豪傑機會を見合候勢ひにて實に痛恨千萬御座候前様御不世出に被爲在深く御遠圖可有被爲在儀をも不被奉汲受千萬奉恐入候得共今通にては萬乘至尊の思召も不立公卿方御幽囚同前奉殺御羽翼候手段言語同斷の取計爲臣子者相忍可申哉況夷狄併呑の勢も追日差迫り一日を延せば生一日之患終に百世不可救之勢に可罷成候間一日も早く勸意に被爲應候處偏に奉禱候尤此節弊藩有志中より態々急飛脚差立是迄天下の機會見合居候得共際に運び候様共不相分勸意も空に相成可申歟と苦心の餘り難默止處より

御藩へ御引合申上何分御決心次第には不日に京都へ馳登り帝都を可奉守護一必死に進退を究め候段申越實に無餘儀仕合就ては是非此節は非常の御處置御決心の處轉奉仰候尤當今の形勢得と涉一勘考一候處中々始終十全の計畧は出來兼可申歟唯憂ふる處天下の有志十全を謀り拙速の二字を不理論互に見合候勢ひに候斯申せば無謀の様に候得共全く左に候はず十全の計策は誰も飽迄懇望の事に候得共昇平久敷打續き人心怠惰動もすれば因循の方に相向日々致一遲引一候得ば前にも論候通の形勢に可罷成候一旦決然一舉楠公菊池の遺意を繼ぎ皇志を奉し大義を天下に唱へ候はゞ是に鼓舞して四方有志の諸候方應援有之は必然の事に御座候夫故此間是非非常の御處置御決心の程吳々も有御座一度弊邸詰合の有志と申せば僅々指を屈する位にて中々不足爲輕重一候得共數ならず共御勢に加はり第一艱苦の場を勤め申度國本の有志者此方事を舉候日限を刻し帝都を可奉守護一是

以有志中少人數にて百人未滿の事に候得ば永久の事は出來兼候得共各決死の者共に候得ば隨分諸藩の應候内は相支居可申尤御藩御決心期限相定候はゞ弊邸の内より尾張因越の諸藩へ馳廻り無相違一兵勢を動し可申當時の論未だ機會不測との議論も有之候へ共最早十分機會は後候哉に被存候間何卒此節は緩急の御沙汰無之是非御決心御定策の程御同腹中御吟味何分尊報奉仰候左候得ば國本へは早速相通し刻日事を舉候様可仕返す々々も此節は御武斷反復奉禱候
一前文通の御處置萬一急々運び兼候はゞ千萬奉一恐入一次第御座候得共當分前様御慎中とは乍申御國本の様御引入の御計らひは出來兼可申哉いつれ當時の勢平常の事にては形勢動搖の處千萬無覺東一前様御引入罷成候はゞ幕府よりの處置も暴卒に出且又天下一同目を醒し不日に形勢動搖仕候に相違無御座一斯申せば餘り過激の様御勘考も難計候得共いつれ當時の形勢にては不拘一小節一

非常の御決心無之候ては幕府よりの處置も及一緩急一因循の中姦勢成就遂に反正の期有御座一聞敷尤此節前様御審察の儀も全く執政の私斷に出候譯にて神君の思召は勿論第一叡慮に違背候儀にて當時内外多事危急の御時節に有之候へば乍恐明候拱手して被爲受一審察の御時節に無之御剛斷被爲在候て夷狄の大患御一掃天朝は不及奉一申將軍家をも磐石の安に御中興被對一威義二公の尊意一候社如何計の御忠節と奉一存候何分此節は右二ヶ條に御決心の處掛一生死一奉一仰候是等の儀は御一同御熟論の筈且御遠圖の程も可有之處卒爾輕妄の至千萬奉一恐入一候得共前にも度々申上候通一日を延せば百世不救の勢に可罷成一と不堪一感激之餘り懇願仕候何卒區々の盡忠御憐察被下御一同深く御吟味の上非常の御處置御決心の處偏に奉一仰候頓首々々
愛諸君遠祖小松大和守の墳墓甲府信立寺に在りて荒廢に屬するを憂へ漢文にて小松氏世系表を作り此

の月を以て之を石に勒し信立寺に樹て又其文を銅版に鐫め家に存し後昆に傳ふ其文左の如し
小松氏、内大臣重盛之苗裔也、十世之祖曰大和守諱健尙、初名右近、致仕號健松齋、其曾祖右近將監諱資實、屬武田信森、信森之卒也、子信昌甫三歲、跡部信俊、攝一軍事一有自立之志、資實討平一其難一、以功爲一無楯大將一、子孫因居一甲斐一焉、其孫諱信尙、稱一右近大夫一、武田信虎賜一其偏諱一、故名云、君其子也、食一萬三百貫一、數有軍功、爲一御旗無楯別當一、天文十九年十二月、武田晴信之削髮任一權僧正一也、君奉一命之京師一、就一左中將藤公實枝一奏一請之、時賜一貞宗短刀一以酬一其勞一矣、至今與一阿彌陀一卷一其傳一于家一、其一卷亦所賜云、子諱勝尙稱一庄左衛門一、幼名勝壽九後改一右近一、仕一武田氏一、當一其分隊爲一之秋一、君屬一武田信繁一、以備一上杉氏一、每從軍未嘗不有戰功也、信玄屢賜書賞之、所謂當時覺衆之一云、天龜三年信玄大出師攻一遠江一、時遠江兵士多種一釐毛於一胃一、燦爛可觀焉、其將本多忠勝驍勇

善戰、君即作歌美之、頗爲人所稱、君遂戰死、其子諱諸尙、襲稱庄左衛門、小字右近、君幼而孤、當是時、武田氏既滅、北條氏臣市川甚三郎者其乳母伯父也、乃往寓焉、後流落更稱榮傳、終於相模小松、其子了意稱庄左衛門諱諸房、元和九年、始仕我水戸威公、賜俸米、附屬英勝院夫人、及夫人卒、爲廣間坊主頭、天和二年壬戌十一月十六日死、其子了三諱房尙、終于廣間坊主、配高橋氏、生三男一女、長諱諸之稱元甫、以義公命業繼承家、子孫繁延、今稱右近一名延年者即是也、其第二子文藏諱諸輔、別立門戶、冒舅氏之稱、始稱高橋氏、歷諸職、遷大吟味役、寬延二年己巳四月十四日死、實於愛諸爲高祖、第三子了味諱尙政亦稱高橋氏、文藏君娶矢野氏、生二女、養元甫君第二子諱諸學爲子、以女配之、襲稱文藏、初名兵馬右衛門四郎、累遷至代官、明和元年甲申五月廿二日死、配生二男、長諱輔從初稱多一郎更莊司終大番、配秋山氏先沒、再娶矢作氏、生愛之介某早夭、矢作氏

去、亦娶寶藏院又京女、無子、初君之弟諱政方、爲武衛門諱政是所養、冒橫山氏、至是養其第二子忠次諸往爲嗣、累遷至新番、天保十一年庚子八月廿一日致仕、供奉廟庭事、即諱民君也、配淺田氏去、娶堀口氏、生二男二女、長不肖愛諸、次國維、爲伊大夫政行所養、冒鮎澤氏、愛諸稱多一郎、配久木氏去、娶茅根氏、生一男二女、長諸德稱庄左衛門、次諸敬稱勝壽、小松氏世系概如此、而祖先血胤連綿者、今存七家、所謂小松、高橋、鮎澤、栗田、橫山、廣岡、岡本是也、嗟乎人子報本之志終天豈有極乎、然則祖先以來世系事蹟其可不詳焉哉、且夫雖有世次概畧稍存者、而不勒其事於碑、則亦安保其終不湮晦也、一念及此其銜恨飲泣果何如也、愛諸嘗遊甲斐、慨然願望山川原野、往時諸將驅逐酣戰之地、歷々可徵、而觀其風物之變遷、察其世態之推移、不覺潸然淚下、因藏其遺物、以建碑謹書其由如此、嗚呼我子孫豈可不思所以追孝祖先發揚其德耶、安政六年己未三月

崩世孫愛諸表

水戸小姓頭取兼與右筆頭取

十世孫 高橋愛諸 謹撰

赤机隊戰士 男 高橋諸徳 謹書

是の春大老の威柄を弄する底止する所なく三公諸公卿をして落飾辭官するに至らしめ青蓮院宮尊融親王を幽閉し四月に至り安島茅根鮎澤橋本左内(綱紀)等數十名の逮捕を續行す五月水戸の士民再び南上し江戸に至り前議を執り衆力を以て大老の勢焰を挫き以て勅旨を奉し主冤を雪かんとする者數千人愛諸金子の二人又命を蒙り共に鎮撫す其要に曰く衆の志望は既に之を諒知す奉勅雪冤の二事は曩日論す所の如し今衆の一部を總の八幡驛に駐め衆に代つて急要の事を處せしめんとす異日多衆を以て大に爲すべき事あり歸藩して待つことあるべしと衆乃け百數十名を駐めて北下す是等の事は則ち雄圖遂行の豫備に出でたるなり六月順公其鎮撫の勞を慰し短刀一口及紋服一襲を賜ふ七月初旬愛諸偶々鹽杓を得左の國詩を添

へ烈公に呈す

我が戀は、袖しの浦の、鹽ひしやく、

汲みてこそ知れ、深き思ひを、

烈公愛諸の呈したる歌箋に紙を繼貼し返歌を賜ふ其全文に曰く

何事にか有けん、征夷の君の仰せなりとて、去年の此月より、たれこめて居りけるまにまに、國民等なげきの餘り、五月の頃よりあまたいて、我がつゝしみ解なん事を、なげくと聞くに、我が心には、國民のいたみなん事をなげき、司をもていひ論す折しも、人の汐杓といふ物に、此歌添たるを見てよめる、

國民の、思ふ袖しの、汐ひしやく、

汲分けて知れ、我心をも、

尋て愛諸門奈千之介(直忠)佐野竹之介(光明)海後磯磯之介(宗親)を八幡に遣り壯士に對し勇氣志節を鍛錬せんことを奨め又自ら之に赴き奨勵すると同時に太刀一把を八幡神社に献し國運を祈り一首の國歌を